

---

# テンポラリーラブ

CoconaKid

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テンポラリーラブ

### 【Nコード】

N2220X

### 【作者名】

CocconaKid

### 【あらすじ】

氷室コトヤ32歳。人生に挫けやる気をなくした冷血漢。そこに素直で何事にも真っ直ぐな20歳の斉藤なゆみが現れ、彼女のやることなすことに巻き込まれてしまう。

一回りも離れた年下の女の子に振り回されているうちに、32歳のおっさんはいつしか高校生に戻ったような恋を味わって行く。

しかし、一筋縄ではいかない二人の関係。

思いとは裏腹に二人は別々の方向へ進んでいく。

思いが募ればいつでも暴走まっしぐらのドキドキラブストーリーで

す。  
( ) 自サイトからの転載  
( )

## はじめに

> i32269 — 3985 <

この小説のバナー

純粹に一生懸命になってしまふ恋。

好きなものについて意地を張って強がってしまふ恋。

好きな人の前では素直になれず、憎まれ口を叩いて一人落ち込んで  
プライドが邪魔をしてどんどん悪化。

もがいて、喘いで、悩んで

でも、やっぱり諦めたくない。

とにかく奮闘の恋の物語。

俺様、氷室と鈍感、なゆみの二人の恋の行方をお楽しみ下さい。

> i32208 — 3985 <

なゆみと氷室のイメージ画像

R15となっておりますが、一部性のもので物語りの話の展開に必要な  
くらいの役割です。

気軽に楽しんでもらえると幸いです。

支店周りをした後、閉店後の本店に戻ってきた氷室コトヤが少しだけ開いているシャッターをくぐり、タイムカードを押そうと奥の控え室のドアノブに手をかけたときだった。

ふと耳にした音。アダルトビデオのあの喘ぎ声が漏れている。

控え室は従業員が休憩を取ったりする場所だが、テレビやDVDなどという設備は一切ない。

氷室は「はあー」とため息を漏らしてドア越しに声を発した。

「専務、俺のタイムカード押しておいて下さい。それじゃお先に失礼します」

「オツケー、コトヤン、お疲れ、また明日な」

意外にもあっけらかんとした受け答え。

中で何が起こってるかばれていても、この専務と呼ばれる男はたじろぐこともなかった。

そして氷室コトヤをコトヤンと親しく呼ぶのも、この二人は高校時代の友達同士だったからであった。

再び、何かに吸い付くような音と厭らしい想像を活気立てる喘ぎ声が始まった。

それは氷室に対してあてつけにからかっているのかもしれない。

どうぞ、好きにとばかりに、氷室は呆れ顔になるが、女性のあの声を生で聞けば体は素直に反応してしまう。

ネクタイを少し緩め、奥で行われている行為を尻目に再びシャッ

ターをくぐった。

この日のお相手はどの従業員だろうと思ってみたところで、誰が専務の餌食になっても不思議はなかった。

というのも、従業員の採用面接はほとんど専務が行い、専務の好みで雇っているからだ。

だから結構美人な女の子がこの店には多い。

だが、そういう女の子たちは辞めるのも早ければいい加減な輩も一杯だった。

さらに気に入られてそれなりの関係を持てば待遇がよくなるポジションでもあったため、そういうことに気がついた従業員は凶に乗り過ぎ、そういう場合はあっさりと首を切られることもしばしば。

従業員の入れ替わりが激しく、あまり碌なのがいないと、氷室はここで働く女性など見向きもしなかった。

それでも長いこと残っている真面目な従業員もいる。その子たちはごく普通でどこにでも居るような子たちで、特にそれほど美人ということもないが、まあ細工というほどでもない。

そういう子たちは専務がいないときに社長が面接に赴き雇っていたりする。

社長はそんなに悪い印象はないのだが、この専務は社長の息子の座を大いに利用し、かなりの遊び人と来ている。やり手のギトギトした雰囲気があるのでスーツを着れば立派なビジネスマンだが、中身は腹黒だ。

氷室にしても高校時代の友達だったから、その点についてはよく知っている。根は悪い奴ではないのだが、本能のままに動くというような感じだった。

誰もいなくなつた仕事場で従業員を相手にアレをするくらい、男ならチャンスがあれば当たり前と言ひ切れる奴なのである。そして、自分に妻と幼い子どもが居るのにもかかわらず。

友達だが仕事場ではビジネス。氷室はその辺をよく理解していた。

都市の中心に建ち並ぶビルの地下1階に、この店は位置していた。ショッピングエリア、飲食エリア、ビジネスエリア、エステなどのサービスエリア等、多様なものが集まっている。

氷室が働く店は、金券やチケットを買い取つてそれを再び売るといふようなものだった。ほとんど紙切ればかりの商品だが、売る人、買う人ひっきりなしに寄ってくる。

専務と呼ばれた男、谷口純貴の父親がこの商売を始めてそれが成功して今では支店も何店と出すほどに成長した。

氷室が偶然にこの店に立ち寄つたとき、谷口純貴に会い、近況報告の会話の中で失業したと言つと簡単に誘われたのがきっかけで働くこととなった。

氷室自身、本当はこんなところで働きたくなかった。

いい大学を出て、いい就職先でエリートだったのに、運悪くリストラされてプライドもスタスタでお金もなかった上でやけくそだった。

そんなこと谷口純貴には言えないが、表面上はありがたく受け取り、腹の底ではただのテンポラリー（一時的）ですぐに辞めてやると思つている。

しかし、この商売意外と儲かっているようで、正社員としてそれ

なりのお給料をくれている。

頭を働かせることもなく、ただ紙切れを売買し、あまりにの樂さにずると1年も過ぎてしまった。

氷室コトヤ、32歳。自分でもダメだと分かっているところから抜け出せない弱い人間であった。

地下街から一階へと上り外に出る。

辺りはすっかり暗く、少し冷える。

どこからか桜の花びらが飛んできた。桜が咲ききつて後は散っていくそんな季節だった。

「腹減ったな」

ビルとビルの狭間で暗い空を見上げるが、周りの明かりが強すぎて星がはつきりと見えなかった。

全ての明かりがなくなればたくさんの星が瞬いているのは分かっているが、はつきりと見えないのは、自分のやる気ない心の曇りも邪魔しているように思えた。

何か食べていこうかと考えていたとき、ビルから楽しそうに語りながら若い男女のグループが出てきた。

氷室は気にするつもりはなかったが、その語らいから英語が聞こえる。中に外国人も混じっていた。

どうやら英会話学校の生徒と先生のようにだった。

氷室も働くそのビルには英会話学校が入っているのは知っていた。自分の前をその若者たちは横切って行く。

そして一人遅れて、慌ててビルから出てきた女の子がいた。「待って！ Wait！」と日本語と英語を混ぜて、走ってくる。



薄暗くてはつきりとは見えなかったが、シルエツトからショートボブの髪型でいかにも元気な女の子という感じだった。

ああいう感じの子は職場では絶対見かけることのないタイプだと氷室は漠然的に思っていた。

鍵を持っている氷室は、朝一番に本店のシャッターを開ける役目がある。

昼過ぎにならないと専務は大体来ないし、社長は気が向いたときにだけやってくる。

そして主任と名ばかりだけの役職をもらい氷室は本店を任されていた。

控え室は、一体どんな状態なんだろうか。

前日のことを目の当たりにして少々生々しく感じてしまう。

眠たい目をこすり、欠伸をしながらまだ人もまばらな店の前に来たときだった。

シャッターの前で誰かが立っていた。

誰？　しかし従業員ではない。気の早い客か？

氷室がシャッターの鍵を取り出し、近づくと、その子はそわそわとした。とした。

「お、おはようございます」

ハキハキとした大きな声。

ぼーっとしている氷室にはそのテンションは合わなかった。

ちらりとぶつきらぼつに一瞥すると、その子の背筋が伸びた。

「あんた誰？」

愛想のない態度が怖がらせたのか、一步後退したように見えた。

それでも必死に立ち向かおうと震えるような足取りで気をつけをする。

「今日からお世話になります。斉藤なゆみと申します」  
「どうやら知らないうちに社長が雇ったらしい。これは専務の好みではない。」

短い髪、まるで少年のよう。

そして黒いジーンズに白いシャツ、上にジャケットを羽織っている。

肩には山登りにいくのかというくらいのリュックサック。

そして何より、すっぴんだった。女性としての色気など感じられない女の子だった。

それでも化粧はしてなくとも色白できめ細かい肌はきれいだった。すっぴんだけれども、不細工ではなかった。むしろ素朴なかわいさが漂う。

一通り観察してから、氷室は「ああ、よろしく」と返事した。

一番端のシャッターを半分まで開け、そこを氷室がくぐる。

なゆみはどうしていいのか分からずもじもじとしたまま突っ立っていた。

「とにかく入って」

氷室に言われてなゆみは「はい」と歯切れいい返事をして腰を屈めてくぐった。

氷室が電気をつけると、辺りはぱっと明るくなり、なゆみは不安と緊張とまぶしさでたじろぎ目を細めた。

「そんなに緊張することないよ。えっと、斉藤……さん？ だったね」

「はい！」

また元気な返事が返ってくる。

なゆみはしっかりと目を据えて氷室を見ていた。

氷室はこの子はどれだけ持つだろうかと冷めた感情を持ち合わせながら、新しいタイムカードを探していた。

店のつくりはシンプルで、20畳ほどのスペースに横側の壁を背にして周りをガラスのショーケースでカタカナの『コ』の字のように取り囲んでいるだけだった。

そのショーケースの中にはありとあらゆる、商品券やチケットが並べられている。

壁にはお品書きのように、新幹線のどこどこ行きの回数券の名前と値段や、いろんなポスターがずらりと貼られてれていた。

囲まれたショーケースの中にデスクやコンピューターがあり、銀行の中のようにそこに人が入り働く。

「あつた、あつた」

デスクの引き出しから新しいタイムカードを取り出す。

「ここに名前を書いて」

肩にかけてあつたりユックサックを床に置き、ガラスのショーケースの上でなゆみは自分の名前を書いていた。

それをじつと氷室は見ていた。

どうも初めて会った気がしない。

なゆみが書き終わるとそれを持って、控え室へ案内した。

部屋の奥をパーティションで区切ってドアを取り付けてある簡単な作りの控え室だった。

「あまりきれいなところじゃなくてごめんね」と言葉を添えてみる  
が、なゆみは謙遜しているとばかりに、手をひらひらと顔の前でさ

せて、気にしない態度を見せていた。

しかし氷室は前日の専務のアレのことも意味しており、知らぬが仏だと苦笑いになっていた。

控え室に設置されていたタイムレコードになゆみのカードを差し込んでやった。

そしてそれを壁にかけていたタイムカードのラックの中に入れた。続いて自分のを取り出し、タイムカードを押しまたそれを戻す。

「お名前は氷室さんですか」

なゆみはカードの名前を見て氷室の名前を確かめた。

「そうだったね。まだ私の自己紹介をしてなかった。氷室コトヤだ。一応ここでは主任となっている。よろしく」

「はい、こちらこそどうぞ宜しくお願ひします」とにかくなゆみの挨拶は元気だった。

氷室はその元気な声を聞いてこのとき、はっと気がついた。

(この子、もしか、昨日みたあの子?)

半信半疑だった。

「斉藤さんはどうしてここで働こうと思ったの?」

「はい、あの、私9月から留学する予定なんです。そして今このビルの2階の英会話学校に通ってまして、場所は最適で、そして社長と話したとき、8月末まででもいいからと言ってもらえて、それで働くことになりました」

英会話という言葉聞いてもう充分だった。この子は前日に見た子に間違いなかった。

なんとという偶然だろう。

そしていつまで持つかと思案したところで、すでに期限付きだっ

た。

8月末までなら最後まで働くことだろう。

約4ヶ月の付き合い。氷室の中ではなゆみはさらにどうでもいい存在になっていった。

「ふーん。留学か。どこに行くの?」

「カリフォルニアです」

「そう。よかったね。ところで君、いくつ?」

「20歳になったばかりです」

「若いね。まあ8月末までよろしくね」

「はい、こちらこそ宜しくお願ひします」

深々とお辞儀をするなゆみ。真面目腐った愚直な雰囲気面白いにかけると、氷室は適当にあしらうような態度を見せていた。

そして従業員たちが現れ、紹介だけはしてやった。

あとは女の子同士にまかせ、氷室はコンピューターの電源を入れ、仕事の準備にとりかかった。

開店と同時に店にはあつという間に客が取り囲む。

毎日来る常連もいて、そういう客はプレミアがつきそうなタレントの写真がついたテレフォンカードなどを漁りに来る。

氷室はうっとうしいといつも思いながら一日のスタートを切る。

金券やチケットはありとあらゆるものがひしめき合って、慣れているものはどこに何があるかすぐに分かるが、初めての者には戸惑うことばかり。

なゆみはどうしているのだろうかとうと氷室はちらりと様子を伺う。

店には制服を導入してるが、なゆみは入ったばかりでまだ支給されてない。

一人だけ浮いた格好で緊張した面持ちで立っていた。

古株の上野原ミナがリーダーシップを取っている。この店の女の子の中では一番の年上で25歳。

少スキつい性格なところもあるが、専務が採用した女の子よりはよっぽど仕事ができ常識はあった。

なゆみのような粗野な女の子だとなかなかミナとは合わないんじゃないだろうかとうと氷室は分析していた。

なゆみは初めてで何も分からないというのに、意気込みだけはしっかりとしている。

素直になんでも「はい、はい」と元気よく返事をしては言うことをしっかり聞いていた。

だが顔は不安げに強張っているところを見ると相当無理をしているのが読み取れた。

それでも負けないで一途に働こうとしている姿は氷室は嫌いでは

なかった。

昼に社長がひょっこり顔を見せた。

なゆみも面接を受けた知ってる顔が来たことで、慎重に挨拶を交わしていた。

「おー斉藤さん、早速がんばってるかね。制服明日には来るからね」

「はい、ありがとうございます」

深々と頭を下げている。

たかが4ヶ月なのに、そこまで律儀にならなくてももと氷室はコンピューターを前にしてキーボードをいい加減に叩く。

「氷室君、ちよつと」

社長に呼ばれ、控え室に入った。

「今度入った、斉藤なゆみ、宜しく頼むね。あの子8月一杯までなんだけど、9月から留学するんだって。話してたら、英語に対する情熱にうたれてね、どうせ1日ですぐ辞める子もいるから、期限付きで雇ってもたまにはいいかなって思ったんだ。なかなかいい子でしょ」

「は、はあ」

「話はそれだけだから、後はまたよろしく頼むわ」

簡単に話をして、社長はまた店を後にした。

相変わらず店はたくさん客が囲っている。

冷やかしの客が多いのもこの店の特徴。何か安いものが入ってないか見に来たくなるのも、いつもたくさん商品が立ち代り入れ替わるから好奇心をくすぐられる人間の性というものだった。

斉藤なゆみは少しトーンダウンしているように見受けられる。



それでも客に声を掛けられ、接客を試みるが、航空チケットのことを言われちんぷんかんぷんになっていた。

ちやうど回りの女の子たちはそれぞれの接客をして誰も助けを求められないらしい。

そして氷室のところへやってきた。

普段から女子従業員とは必要以上の会話をしない氷室は、誰の目にも話しかけにくい雰囲気のパリアーを張っているのが目で見える。なゆみも朝、シャッターの前で初めて出会った印象ですぐにそれが見えたのだろう。

かなりおどおどして氷室に声を掛けた。

「お忙しいところすみません。あの航空チケットをお求めになられたいお客様が……」

「で、行く先はどこ？東京？ 福岡？ 札幌？」

初めてで何も分かるわけがなく、自分でももっと優しくしてやれと思っているが、氷室はついいつもの調子になっていた。

「あつ、すみません。まだ詳しいこと聞いてなかったです」

なゆみは失敗して申し訳ないと縮みあがったように見えた。

氷室はコンピューターデスクからすくっと立ち上がり、客の所へといく。

そして接客用の作った声で物腰柔らかく対応し始めた。

その対応のギャップの温度差が激しく、なゆみの目には自分が役立たずと思われているように思えた。

特にこの格安航空券に関しては綴ったクーポン券の貸し出しシステムでややこしく、なゆみは泣きそうな顔になりながら、氷室の後ろでその様子を見ていた。

全てが終わり、なゆみは氷室に深々と頭を下げてお礼を言う。  
言葉少なく、氷室はまたデスクに戻り自分の仕事に取り掛かって  
いた。

なゆみはすっかりしょげたのか、少し猫背で前かがみになっていた。  
それでも客に呼ばれるとまた元気な声で返事をして、ハキハキ  
と答える。

そして笑顔は忘れなかった。

そういえば、どんなときでも必ず笑顔を見せている。

氷室は、なかなか根性のある奴かもしれないと、少しなゆみを見  
ていた。

「斉藤さん、そろそろ休憩とつてくれていいよ」

そう言ったのは上野原ミナだった。側にはミナと仲がいい敷川紀子がいた。

紀子は来年結婚が決まっている24歳の小柄な女性だった。

この子も社長に採用され、年も近いし、古株のミナと1ヶ月の違いで入ってきたこともあり、結束が固い仲であった。

本店はこの二人が中心になっていた。

そこに週に何回かくるだけの専務が選んだアルバイトが数名いる。適当にみんなそれなりに仲良くはしていたが、この二人と他のアルバイトたちは傍から見ていても水と油のように思えた。

それもそのはず、社長が採用した女の子と専務が採用した女の子は全く違った種類のタイプだった。

そんな中でなゆみはまた第三の違ったタイプであり、氷室の目にはどこにも加えてもらえそうもなくいじめられるタイプだろうなと感じていた。

なゆみが休憩に行けば、きっとこの二人はなゆみのことで何か言うのだろう。

なゆみが席を外したあと、氷室は二人の会話に耳を集中してしまった。

店は人の波が押し寄せるときと引くときがあり、暇なときはショーケースについた指紋をふき取ったり、商品をきれいに並び替えたりとこまごました作業をする。

そんな時にはおしゃべりも交えて、仕事の間のほっとする時間に

もなっている。

やはりミナと紀子は新しく入ったなゆみの事について少し話し出した。

氷室が居ることもあり、おおびろげな話し方ではなかったが、どこか心配するようであり、自分たちと合わないんじゃないかとなゆみが苦手だとも取れるような発言をする。

それみたことか。

氷室は自分の思った通りの筋書きになり、半ば自分の洞察力に感心していた。

不意に立ち上がり、彼女たちの側を通ると、何気ない顔でその話に加わってみた。

「新しく入った斉藤さん、どんな感じだい」

ショーケースの商品を確認するそぶりをして軽く聞いてみる。

ミナは本心をさらけ出すタイプではないので、用心した話し方を返してくる。

「まだ入ったばかりで分かりませんが、今までに居ないタイプですし、少し心配かもしれませんね」

側で紀子が相槌を打つように首を縦に振っていた。

「最初は必ず失敗するし、仕事覚えて貰うまで説明が面倒臭いけど、上野原さんあまりいじめないでやってくれよ」

「いやですよ、氷室さん。私そんなことしません。それより氷室さんも最初は労わってやって下さいね。いつもの調子だと絶対怖がりますよ」

ミナだけは古株ということもあり、氷室に一步突き進んだ言い方ができた。

氷室もまた女子従業員には煙たがられる存在なのである。

見かけはそう悪くない。

年は30過ぎていてもまだ20代後半程度に見られる。

スーツを着こなし、背も高く、きりりとした整った顔なのに、まず愛想がない、自分主義、きつい言い方をするせいで、外見よりも中身の悪さが先に出ていた。

そして何より専務である純貴の友達でなあなあな関係と想われて触らぬ神にたたりなしという位置づけだった。

何かあれば専務に言いつけると想われ、恐れられる嫌な主任とされていた。

氷室は鼻でふっと笑いながら、その場を交わしたが、結構ミナの言葉には気分を害していた。

氷室はここで働く女子社員と関わりたくない事からわざとそういう態度を取っていたが、実際は自分でもここで働いている誰よりもレベルが上だと思っていた。

そういうことを思って働いている以上、知らずと見下しているのだろう。

やはりいいように思われないのは仕方のないことだった。

なゆみが加わったことでこれからどのようになっていくのか見ものだと、高みの見物を決め込むように冷たい微笑を片一方の口角に乗せて上げてみる。

それにしてもくだらない毎日だと、椅子にどっしりと腰を下ろしてデスクワークに励んだ。

そして電話が鳴ると、一度目のベルが鳴り終わらないですばやくとる。

「はい、トレードチケットセンターです」

「あつ、コトヤン？ 俺、純貴。今日は支店周りしてるのでそつち  
にいくのはかなり遅くなるから、適当にやっつてね」

「はい。かしこまりました」

「おいおい、ビジネスとは言え、お前も結構律儀だね。電話くらい  
いつもの調子でいいのに。ところで、新しく入った子、来た？ 親  
父が勝手に雇ったみたいだけど、どうせ俺好みじゃない子でしょ。  
まあ短期らしいからいいけど、今度はまたかわいい子入れないと、  
つまんないね。今度はコトヤンの好みの子でも雇ってみるよ。お前  
もいい年なんだから彼女の一人くらい欲しいだろ」

「純貴いい加減にしろよ。よけいなお世話だ」

「おつ、専務に向かって口答えか。ハハハ、とにかくあと頼むよ」

いつかバチでも当たるぞというより、当たれと願いを込めて受話  
器を強く置いた。

気を静めるために、またデスクワークに専念する。

キーボードに伝票の情報を打ち込み、どれだけの売り上げがある  
か常にチェックしていた。

本当に簡単な作業だった。

氷室は過去を思い出していた。

自分で企画してプロジェクトを立ち上げそれに向けて仕事をする。  
いつかは世界でも活躍するのが氷室の夢だった。

だが、会社の派閥という組織の中でどうしようもないことに巻き  
込まれた。

積極的に行動し、己を貫くことで、それを煙たいと上司に嫌われ、  
そしてあっさりとリストラの対象のリストに加えられておさらばだ  
った。

見えない力に屈さなければならぬ侮辱。

いくら訴えても自分に味方をしてくれるような力を持つものもな

く、他のものは生き残りを掛けて自分のポジションに必死にかじりつこうとしていた。

どんなに頑張っても報われないものがあると気づいて挫折した荒れた日々。

それから氷室は冷めたいい加減な態度で物事を掘り下げて考えないようになった。

氷室のようなものも居れば、適当に親の作った土台で好き放題で生きるようなものもある。

世の中は不公平だと、キーボードを打ち込む指先にも自然に力が入っていた。

打ち間違い、ピーと強い音が流れたとき、自分の心の叫びを代弁してくれているような気分になった。

そしてなゆみが戻ってきた。

深々と頭を下げて「お先でした」と気を遣っている。

顔を上げたとき、なゆみはやはり笑顔を忘れない。

にこつと氷室にも笑いかけていた。

不満だらけの氷室の心にその笑顔が入り込む。

なぜか氷室は咄嗟に顔を背けてしまった。

初めての出勤はさぞかし疲れただろうと閉店間際に氷室はなゆみをちらりと見る。

見よう見真似で、片付けもミナと紀子に合わせて最後まで気を抜かず頑張っていた。

ミナも紀子もまだ心を許しておらず、なゆみとは会話も少なかったが、一生懸命仕事をする態度は好意的に受け入れている。

初めてにしては、積極的に接客し、客の扱いには慣れているようだったと思わざるをえない。

20歳のまだ社会経験不足の割には、なゆみはしっかりしているようだった。

閉店時刻になるとすぐに店のシャッターを下ろす。タイミングを逃すと客はすぐに入り込むため早く仕事を終わらすためにもここは一丸となってテキパキと作業をすすめる。

最後に端っただけ少し開けておく。

屈まないと入り込めないのが客は入ってくることはない。

しかし誰かがぬーっと入り込んできた。

しつこい客だと氷室は追い返そうとしたが、それはこの会社の専務こと純貴だった。

遅くなるとは言っていたが、終わったあとでは一体何をしにきたのだろうと氷室だけでなくミナも紀子もあきれ返った。

それでも会社の専務。礼儀は必要だった。

「お疲れ様です」

ミナと紀子が揃って言うと、なゆみも遅れて言った。



「ああ、君が斉藤さんだね。初めまして。専務の谷口純貴です」

「初めまして。今日から働かせて頂いた、斉藤なゆみです」

ここでもハキハキと挨拶をしていた。

「元気がいいね。気持ちいいくらいだ」

なゆみははにかんだ笑顔を返していた。

それは恥ずかしそうにしながらも素直で初々しかった。

氷室はふと釘付けになった。

ミナと紀子が着替えるからと控え室に入る。なゆみも一緒に後をつけて行った。

暫く氷室は純貴と二人つきりになった。

「コトヤン、久しぶりに飲みに行かないか」

「いや、遠慮しておく」

「どうしてさ、俺のおごりだぜ」

「ちよつと疲れた」

「何を言ってるんだ。とにかく来い。これは専務の命令だ」

純貴は思うようにならないと権力を盾にする。

氷室は駄々をこねる子どもを相手してるみたいでもやややしながらも誘いに乗った。

というより、断るのも面倒臭くなった。

着替えが終わり、控え室から三人が出てきた。

なゆみの肩には大きなリュックが背負われている。

「お疲れさん。それじゃまた明日ね」

専務らしくない軽いノリだったが、権力のあるものには逆らえな

い弱い立場の従業員たちは、馬鹿丁寧に頭を下げて挨拶する。

ミナと紀子がシャッターをくぐったとき、なゆみはくぐるのを一瞬戸惑って、そして気合を込めて振り返った。

「あの、氷室さん、今日はどうもすみませんでした」

「はっ？ 何が」

咄嗟のことに氷室は不思議さを押し出した返事をしたが、それが苛立つてるしぐさにみえたのか、なゆみは一度目を閉じてうつむきながら喋る。

「余計な仕事をさせてしまって、そのせいで疲れさせてしまったのかと思ひまして。本当にすみません。明日はご迷惑かけないように頑張ります」

氷室と純貴の会話は控え室に筒抜けだった。

それだけではなく、氷室にはいい印象をもたれていないと思ったのだろう。

「おいおい、コトヤン、やっぱり新人にきつくあたったか」

純貴は氷室の肩をばしっと一発叩いた。

「ちょっと待てよ。専務が誤解してるじゃないか。とにかくそんなの迷惑とは思ってない。初めてで失敗なくできる方が不思議なくらいだ。気にするな。斉藤は初めてにしては頑張ってたよ」

「はい。ありがとうございます。それじゃ失礼します」

なゆみは少し安心したのか頬が緩んだ。

そして一礼をしてシャッターをくぐっていった。

「へえ、健気な子だね。親父が気に入った訳だ。面接で素直さがよかったと言ってたよ。しかももう呼び捨てしてるんだな。お前にしちゃ珍しいな。いつもだれだれさんって『さん』づけなのに」「えっ、俺、呼び捨てにしてた？」  
自分でも気づいていなかった。

氷室は同じビルにある居酒屋で純貴と酒を交わす。

会社を出れば二人は友達同士だった。

忙しく調理する店員の姿をカウンター越しに見ながら、二人はジョッキを握って生ビールをぐっと飲んでいた。

氷室の息がふーと漏れる。

ビールを飲んで満足した気持ちではなく、どこかやるせなく不意に漏れた嘆きごとのように聞こえた。

「コトヤン、最近益々ふてぶてしくなったね。どうしてももっと楽しくないんだ。俺みたいに気に入った子がいたら、声かけてみたらいいじゃないか。コトヤンは高校生のときは女の子に良くモテては俺よりプレイボーイだったろ」

「そっか？ 忘れた」

「お前、大人になって性格かわったな」

「だからそういうのを大人になったって言うのさ。もうガキじゃあるまいし、粹がってみても虚しいだけさ」

氷室はまたビールを飲んだ。

純貴は料理をつまみながら、聞いているようで聞いていなかった。

「ところで、あの新しく入った子。元気で気持ちいいけど、なんか女っ気ないな。高校生みたいでガキっぽい」

女を品定めする癖のある純貴が言いそうなことだった。

氷室も適当に聞いていた。

「まあ仕事はちゃんとしてくれそうだから、いいんじゃないか。ど

うせ8月一杯までだろ。あつという間に去っていくよ。そしていずれは俺たちの記憶からも消去される」

「まあ、そうだな。それにしても本店はもう少し色っぽい入れないと、正社員の上野原と敷川は味気ないな。その点、アルバイトの美穂はなかなかだぞ」

「それが昨日の相手か」

「さあ、なんのことですか」

わざとらしくとぼけているが、ばれているのは本人も自覚していた。

そしてビールを一飲みして、その話は終わりだとリセットしたかのように見えた。

「コトヤンはずっと俺と一緒に働いてくれるのか。コトヤンが居てくれたら俺も心強いからな。なんせ頭はずば抜けて切れるし、器用だから店を任せていても安心できる」

「お前もちよつとは仕事しろよ。いつかは社長だろ。しっかりしないと従業員ついてこないぞ」

「だから言っただろ、コトヤンがいるから安心できるって。お前みたいな優秀な社員を破格で雇えるのはほんとラッキーだった」

「何言っただ。こんな仕事誰だってできるし、誰がやっても同じさ。優秀社員が必要な程の会社かよ」

馬鹿げたことのように言ってみたが、よく考えれば純貴の会社だった。

馬鹿にしたと誤解されてはないかと氷室は焦りながらジョッキに残った生ビールを一気に飲み干した。

「そつだよな。大した仕事じゃないよな」

純貴は自虐したように呟いた。

この話もまたこれ以上しては行けないとそれで終わった。

二人は暫く思い出話をしては学生時代の頃に戻っていく。  
若かりし頃の氷室。

まだ世間など知らず、若さゆえに好きなことができて、思うように何でも実現できると信じていたあの頃。

自分も認めるほど青二才だった。

情熱を持った自分を回顧しているとき、ふとなゆみのことを思い出す。

あの子はまだ20歳になったばかりだと言っていた。

好きなことに一生懸命になり、その目標のために前向きでひたすら頑張っている。

くじけないで笑顔を常に見せることができるのも、彼女の夢や希望がはじけてくよくよしている暇などないのだろう。

あの笑顔だけは光を浴びているような気にさせられる。

氷室はなゆみの笑顔を思い出しながら、空になったジョッキを見つめていた。

「もう一杯飲んでみようかな」

氷室はなんだかぐつと飲み干したい気分に乗られていた。

そして二杯目のビールを飲んだあとは、はじけたような息が喉の奥が突付かれたように出てきた。

純貴のおごりだということまで金を心配することもなく、すっかりほろ酔い気分には氷室はリラックスしていた。

会社では専務だが、昔からの友達という立場は変わらない。

女癖は悪いが、気前のいいところやあっさりとしたところは純貴

の長所であり、氷室もそういう部分は好きだった。

腹も満たされたとき、純貴に携帯電話がかかってくる。

それが潮時のサインとなり、純貴はこの後用事ができたと笑っていた。

それは浮気相手に違いなかった。

そんなことはどうでもいいと、氷室は何も聞かないで礼を言って別れた。

地下街から上に行こうとエスカレーターに乗って一階についたとき、また英語交じりの会話が聞こえてくる。

前方にはちょうど外へ出ようとしていた何人かのグループがドア付近に居て、そこになゆみも混じっていた。

あの大きなばんですぐに分かった。

まだこのビルにいるということは、あの後、英会話学校へ行って英語を勉強していたのだろう。

氷室は後ろを付けたわけではないが、駅へ向かう方向が同じだったのでなゆみの後ろを離れて歩いていった。

金髪のヒョロヒョロとしたどこかの国の外国人男性を囲んでその周りに男性が4人、なゆみをいれた女性が2人、合計7人が歩いている。

なゆみは一生懸命外国人に何かを話して、それに反応するように周りが大笑いしていた。

氷室の目からみると、なゆみは人を笑わせおどけた感じに見えた。もう一人の女性は年上なのか落ち着いている。

そして残りの4人の男性のノリもよく、なゆみはみんなと仲良くしていた。

それは男同士に見えたくらいだった。

その時、おもむろになゆみは一人の男性の側に寄って肩を並べて歩き出した。

なゆみより少し背が高いが、男としては低い方かもしれない。

メガネをかけていたので、真面目な秀才風な雰囲気がある。

どんな男なのだろうと観察している氷室の目が細まった。

なゆみはじゃれ付く子犬のように、その男と嬉しそうに話していた。

まるでそれは好きな男の子を前にして調子に乗ってはしゃいでいるようである。

男の方はまんざらでもなく、時々なゆみの頭を叩いたり突っ込みをいれている。

(ああいつのが斉藤のタイプなのか)

氷室は気づかれないようにできるだけその男の顔が分かるように



斜め側に寄っては工夫して近づくと。

幸いなゆみはその男に夢中なのか氷室が後ろを歩いていることなど気がつくこともなかった。

そして声が聞こえてきた。

「ジンジャも来てよ。そこ一杯安いチケットとか商品券売ってるんだ。見るだけでも面白いから、遊びに来て」

ジンジャ？ それがその男の名前なのだろうか。

なんとも神社みたいな響きだと、氷室は聞いていた。

なゆみは自分の働き先のことを教えている。やはりその男が好きなのだろう。

なかなか女性受けする優しさを添えたハンサムには間違いなかった。

しかし、なゆみは元気がいいが女性の色気がないためになんとかそれ以上の発展がないようにみえた。

ずっと友達のまま、そしてなゆみの片思い。

氷室には少なくともそう見えた。それともそうであって欲しかったのか。

なゆみのはじめのくらいに明るくジンジャと話をしている姿を見ているうち、氷室は知らずとぐつと体に力を入れていた。

はっとしてその力を解き放したとき、こそこそと隠れて観察している自分が情けなく、自然と立ち止まる。

暗い街の中、なゆみたちはどんどん前を歩いて遠くなっていった。

次の朝、氷室がいつものように店に出勤すると、やはりなゆみは誰よりも早く来ていた。

片手に本を持ちぶつぶつと何かを唱えているしぐさをしている。

氷室が近づくと、すぐに本を閉じこの日も元気に「おはようございます」と挨拶をした。もちろん笑顔も添えて。

「おはよー、早いね。それに朝から元気なこと」

氷室の言葉に特別返事はしなかったが、なゆみはそれしかできないからというようなはにかんだ照れ笑いになっていた。

なゆみの手に持っていた本をちらりと見る。

いちいち何かにつけて氷室は無意識になゆみを観察している。

「それ、英語の単語集だね」

「はい、少しでも単語を覚えたいいけないので持ち歩いてます」

「ふーん、大変だね」

何をどうこう言うつもりはなかったが、それが一番無難な受け答えだった。

「でも楽しいですから。今まで自分から勉強したいなんて思ったことなかったんです」

しかしなゆみは嬉しそうに目を輝かせて答える。何かに打ち込んでいる情熱が感じられた。

氷室はまた目を逸らしてしまった。

決してそれは不快に思ったのではなく、自分の昔の姿に似た部分を見つければ、見続けるのが嫌だった。

何も無い空っぽの心の中で黒い靄が発生して虚しさにさらに陰がついた気分だった。

朝のまだ誰も居ない静かな店の中でなゆみと二人つきり。

なゆみは静かにショーケースを拭いている。

そしてじっくりと並んだ商品を観察していた。  
前日は緊張で目に映っているだけでどんなものがあるかまで気が回らなかつたのだろう。

二日目は少し落ち着いているように見えた。  
それともジンジャと前夜楽しく会話したことが元気の源になっているのだろうか。

氷室はなゆみがジンジャと戯れる姿を思い出していた。

「あ、映画のチケットもあるんですね。安い。あの、ここにある商品は従業員も買っていいんでしょうか」

「えっ、ああ、もちろん買っていい。映画のチケットが欲しいのか」「いえ、今はいいんです。そのうち何か欲しくなったら購入させて頂きます」

なゆみは面白そうに色々と眺めていた。

氷室はなんだかほっとする気分になっていた。

そして棚の上にある箱を手にしようと伸ばしたときだった、それは意外に重くて、バランスを崩し落としてしまった。

派手な音が響き、なゆみは驚いて振り返る。

「大丈夫ですか」

中にはまっさらな伝票が一杯入っていた。

それが箱からいくつかが飛び出している。なゆみは傍によりこぼれた伝票を箱に入れる。

氷室も無様なところを見せたと動揺して慌てて伝票を拾っていた。そして氷室はなゆみの手に偶然に触れてしまった。はっとしたのは氷室の方だった。

「ごめん」

慌ててひっこめたが、なゆみは笑っていた。

「いえ、全然大丈夫です」

なゆみの方が落ち着いて、何もなかったように伝票を箱に全て戻した。

なゆみの手は指がほっそりと長くそして色も白く、まさに白魚のような手だった。

全体的に色気はないが、その手だけは美しいと氷室は感じた。

体制を整えて、氷室は主導権を握ろうと話した。

「指が長いけど、ピアノでも習っていたの？」

「えっ？ アハハハハ。いやだ、昨日ミナさんもね、背が高いけどバレーボールでもしてたのって質問されたんです。みなさん、色々想像して下さるけど、私、ピアノも習ったことないし、バレーボールの選手でもなかったです」

そういえば、なゆみは女性にしては背は高い方だった。

それで前日ジンジャと呼ばれた男が小さく見えた訳だとまたあの男のことを思い出してしまった。

気さくで、明るく、少年のようなまっすぐな潔さ。

真っ白いものをみているようだった。

氷室は鼻から息を吸い込む。

白い花を目の前にして匂いを嗅ぎたいと思うそんな衝動に駆られたからだった。

しかしなゆみからは何も匂わない。

もう少し柔らかな匂いがあったてもよさそうなのにとどこかがっかりした自分がいた。

自分でも何を期待しているのだろうかと少し自己嫌悪気味。

がやがやとした話し声が聞こえた後、ミナと紀子、そして普段昼過ぎに出勤する純貴もこの日は珍しく朝早く現れ、狭いシャッターの間を掻い潜るように入って来た。

なゆみは飼い主を待っていた犬のように、彼らに向かって元気に挨拶をする。

「おっ、早いね。そうそう、斉藤さん、これ制服。持って来たよ」「ありがとうございます」

なゆみは純貴から渡されたビニール袋に入った新しい制服を嬉しそうに見つめて、そしてミナと紀子と控え室へ入っていった。

そして着替えて出てきたとき、なゆみは照れくさそうにしていた。灰色がかった水色に両サイドに黒いラインが入ったようなワンピース。

腰に同じ色の紐がつきそれを前でリボン結びにするだけの簡単な制服だった。

そしてそれはなゆみにあまり似合ってなかった。

背が高いために、丈が短くなり、ミナや紀子にはロングでも、なゆみには中途半端なミニのようだった。

髪もボーイッシュで中途半端な丈のスカートとマッチしていない。自分でも似合わないと自覚しているのか、ぎこちなさそうに歩いている。

周りはサイズが小さかったかもなどと慰めているが、お世辞にも似合っているとは誰一人言わなかった。

笑顔は見せているが、何度も裾を引つ張り短いのを気にしているしぐさは、氷室にはおかしかった。

「斉藤、お前スカート似合わないな」

それをいつちやおしまいよとみんなは氷室に凍りついた視線を投げたが、なゆみははつきりといわれてふっきれたのか「はい、その通りです」と笑い飛ばしていた。

その行為はなゆみの株を上げた。

ミナと紀子は何かを確かめ合うかのように顔を見合わせ、それを好意的に受け入れる。

それがきっかけで二人はなゆみを受け入れ始めた。

そして氷室の否定的な言葉にも負けないなゆみの笑顔がその場を明るくし、その日はスタートした。

昼からはアルバイトの美穂が加わった。

美穂は純貴とこそそと秘密の会話を離れたところから視線を投げ掛けてやり取りしている。

氷室はうつとうつしいと思いつつも、表面上は何も知らぬふりをする。

ミナと紀子も薄々感じているのか、美穂の態度が鼻についている。本人を目の前にしては全く問題にしてないふりをしているが、時々二人が顔を合わせて文句を態度で表していた。

美穂の本業はコンパニオンであり、仕事がまちまちなので、予定がないときはここへ働きに来ていた。

コンパニオンというだけで、顔もスタイルもよくゴージャスな雰囲気オーラとなって現れている。

立つてるだけで華やかになるのは店にとっても宣伝になった。そう思っているのは採用した純貴だけかもしれないが。

だが、立ち仕事が多い中、美穂は常に座る仕事を優先にしていた。特に純貴が居るときは横柄になり、我がもの顔だった。

ミナと紀子は何も言わずひたすら我慢してはピリピリとした電気を溜め込んでいた。

何も知らないのはなゆみで、相変わらず元気よく自分の道まっしぐらで接客していた。

そんなとき、あるべきところにあるはずのファイルがなく、美穂はすぐに手に入れられない苛立ちで顔が引き攣る。

そこになゆみがそのファイルを持ってきたのはタイミングが悪かった。

「ちょっと、どうしてあなたがそれを持ってるの。新人の癖にまだこの仕事は早いわよ」

「すみません。ちょっと見よう見真似でやってしまいました」

素直になゆみは謝っていた。

それを鼻で馬鹿にするようにそのファイルを美穂はひったくる。

なゆみはバツが悪いような表情を一瞬みせたが、再度軽く頭を下げた。

「何も分からないもので、よかつたらまた注意してくださいね。美穂さんはきれいだし、仕事もできるからすぐく懂れちゃいます」

美穂はふんとしたものの、それ以上ねちねちなゆみに攻撃しなかった。

氷室はなゆみが長いものに上手く巻かれて行くイメージを頭に描きながらその様子を見ていた。

自分が過去に上司から注意を受けたとき、間違っていないと主張ばかりしてきたことと比べる。

実際氷室の方が合理的で正しかったが、会社では上司に従うのはルールだった。

なゆみの取った行動は氷室には脱帽だった。

なゆみを見れば見るほど、氷室は気になっていく。

そしてまたあの白い手を見たときは朝に触れたことを思い出す。

ぎゅっと握ったらどんな感触なんだろうかと男としての欲望がふと湧き起こった。



閉店まであと10分というときだった。

店の前に中の様子を不自然に覗き込むメガネを掛けた男が目につく。

ちょうど後ろ向きになっていたなゆみの姿を見つけたとたん、目の動きが止まった。

ジンジャァ！

氷室は心の中でその言葉を響き渡らせた。

なゆみが振り向き、目の前のジンジャァに目を丸くする。そしてはちきれんばかりの笑顔を一抔向けて近づいた。

「ジンジャァ、早速来てくれたんだ。今日はクラス取ってるの？」

「ああ、多分同じクラスだと思う。シヨーンのクラス」

「同じ、同じ。また一緒だね。坂井さんも来るの？」

「うん」

「そっか。今日も楽しい授業になるね」

「それじゃ先に行ってる。また後でな」

「わざわざ来てくれてありがとう」

なゆみは小さく遠慮がちに手を振っていた。

それを見ていたミナはそっと近寄って目ざとく「今の人誰？」と聞いている。

英会話学校で一緒にクラスをとってる人と簡単に説明しているが、なゆみの嬉しそうな顔は惚れているとばらしているようなものだった。

氷室は気にしないフリをしたものの、急に立ち上がりその勢いでトイレへと向かった。

なぜか暫くその場所から遠ざかりたかった。

閉店後、純貴が声を上げる。

「皆さん、今日もお疲れ様。斉藤さんも二日目なのに、すっかり慣れた感じでよく頑張りましたね」

なゆみは謙遜して首を横に振った。

「それで、明日の土曜日、仕事が終わったら斉藤さんの歓迎会も合わせてみんなで飲みに行こうと思います。隣のビルの支店で働いてる人も参加しますので、皆さんも是非参加して下さいね。もちろん会社のおごりです」

本店から少し離れたところに小さな支店があった。

そこは外に面しているので通行途中の客が多い。

電話で交流がある程度で、あまり顔を合わすことがなかったが、近い場所だけに面識はそれぞれあった。

氷室はその支店の主任が苦手だった。

自分より年を取り、はつきりとモノを喋らないこもったような話し方。小柄なおっさんで気持ちの悪さが引き立っている。

そんなのと一緒に飲むのかと遠慮したかったが、なゆみの歓迎会も含まれるので、酒が入った彼女がどうなるのか見てみたいなどと好奇心が膨らんだ。

「斉藤は酒飲めるのか」

氷室は率直に聞く。

「えっと、あの甘かったら飲めますが、できたらアルコールが入っ

てない方が好きですね」

「それってただのジューズじゃないか」

なゆみは氷室の突っ込みに子どもっぽく笑う。

こいつは根っからのガキだと認定書を作ってやりたくなかったが、それが素直さであり、氷室はそれ以上茶化す気持ち薄れてしまった。

そして皆が外に出ると、最後に店から出てきて、シャッターを外から完全に閉めて鍵を掛ける。

それが終わると疲れたなどと声が飛びながら歩き出す。

皆暫く同じ方向を歩いていたが、一番最初になゆみが「失礼します」と別れを告げた。

これから英会話学校へ行くのは誰もがわかっていた。

「サイトちゃん、それじゃ頑張つてね」

ミナがなゆみのことをサイトちゃんと親しげに呼んでいる。

紀子も、同じように笑顔を向けて手を振っていた。あれだけ素直なところを見せられたら誰も仲間はすれなんてできないのだろう。

なゆみはすっかりこの二人と溶け込んでいた。

あの美穂ですら、愛想良く「またね」と苛立ちを見せたことをすっかり忘れている。

そういえば氷室自身もすっかりなゆみのペースに嵌っていた自分に気がついた。

そしてこのとき考えていたのは、ジンジャ。

この名前がどうしても頭から離れない。

相手にされてないと思っていたが、店に姿を現したのはどういう意味だったのだろう。

ただの義理なのだろうか。それとも  
氷室はぼーっと歩いていた。

なゆみはグーっとなるお腹を押さえ、英会話学校へと向かう。

ジンジャがいると思うと嬉しさの方が強くて空腹にも耐えられた。足取りはせかさすほどに、動くエスカレーターの上でさえ自力で上っている。

アルバイト先も英会話学校も同じビルの中だが、地下から二階へと移動すると温度差を感じた。

同じ場所であるのに、地下は辛くて厳しい試練、二階はほっとする憩いの場ほどの差があった。

それでも、同じビルの中で同時に目的を果たせるのはとても恵まれているんだと思ひ込むようにしていた。

実はアルバイトの初日はとても辛くて、ここで8月末までやっていけるだろうかと奈落の底に落とされたような絶望感を抱いていた。

訳の分からないクーポン券の貸し出しのシステムや、数々の種類のチケットや金券、ひっきりなしにやってくるお客、そして何より、氷室が苦手だった。

初めて顔を見たとき、なゆみが抱いたインスピレーションは、短大時代にアルバイトしていた居酒屋で厳しくされた男性従業員を思い出し、その時点でパブプロフの犬のようにぐっつと胃が痛くなった。

同じような系統の人種。

きつちりと仕事を完璧にこなす分、人には厳しく容赦はしないタイプ。

不器用な自分には合わないことをよく知っている。

居酒屋でもかなり怒られ、感情をぶつけられた。何度もダメだしをくらいながら、必死で働き、幾度と辞めたいと思っただか知れない。

それでも夏休みにアメリカに旅行へ行くためにはどうしてもお金が必要だった。

だから歯を食いしばって働き、コツコツと貯めた思い出がある。目標があつたから乗り切れたことだった。

そしてもうあんな辛い思いをしたくないと思っていたが、やはりどこへ行ってもその手の人間に自分は会う定めなんだと諦めた。

今回もどうしても英会話のローンを払いきらなければならない。

あと4ヶ月、留学する前にこれだけは払いきってやる。

だから辞めるわけにはいかないとなゆみは覚悟した。

辛いときこそ笑顔で交わせ。

それこそ自分のポリシーとばかりに、苦しいときこそ口元を上げることを無理やりにでもする。

笑顔は自分のために意識してやっていたことだった。

薄暗い廊下を歩くと前方に明るさが引き立っている入り口がある。

側には英会話学校であると一目で分かる看板。

あそこにジンジャがいる。

手前で急に緊張して歩き方が慎重になった。

そして足に力を込めて中に一步踏み込む。

英会話学校は一步足を踏み入れるとホテルのロビーのような雰囲気

気があり、そして英語が飛び交う別世界。

受付で挨拶をして会員カードを見せ、その日の授業の出席を知らせる。

その後は待合室で授業までの時間を潰す。

憩いの場にふさわしく一度に十数人くらい座れるソファが設置され、壁が全体にガラス張りとなっていて窓際にはテレビも置かれ、そこからは常に洋画が流れている状態だった。

それを真剣に見ていたジンジャの頭が目に入った。

隣にはジンジャの親友の坂井もいた。

「ジンジャ！ 坂井さん！」

なゆみは元気に声を掛ける。

「よお、タフク」

そう言ったのはジンジャだった。

そして坂井は「キティ」と呼んだ。

基本的、なゆみはここではキティちゃんと呼ばれていた。

その理由はあの猫のキティちゃんが好きだからというたったそれだけのことだった。

先生からもキティの愛称で通じるほど、そのキティの溺愛ぶりは異常だった。

常にキティのグッズを身に着けていたので気がつけば自然とそうなったのだが、あんなに好きだったキティちゃんもこのときはどこにも見当たらなかった。

まだ誰もそのことには気がついてないようだった。

そしてジンジャは折角用意されたなゆみのニックネームを無視し

て『タフク』とまた違った名前と呼ぶ。

ジンジャとタフク。

これには関連している共通の意味があった。

二人だけにしか通じない呼び名はなゆみにとって秘密を共有しているくらいお互い特別な存在感を見出し出していた…… というよりそうでありたいと淡く願う。

クラスが始まるまでまだ10分くらいある。

なゆみはジンジャの傍に腰掛けた。

他にもレッスン待ちの生徒が好き勝手にうるうるしている。

知っている人にはなゆみは積極的に声をかけ挨拶していた。

なゆみは英会話学校ではちょっとした名の知れた存在であり、目立っていた。

「さつきは仕事場に来てくれてありがとう」

ジンジャに告げると坂井は慌てて首を突っ込む。

「なんだ、伊勢、聞いてないぞそんな話」

伊勢と呼ばれたのがジンジャのことだった。

くつつけると伊勢神社となる。

本当は伊勢達也という名前があるが、なゆみは伊勢といえば神社と勝手に付けたのだが、よく考えれば伊勢神宮のジングーの方だったが、付けてしまった以上、ジンジャで通すことにした。

そしてそれならと、伊勢でもう一つ有名な赤福もちをもじって、なゆみの頬がお多福っぽいと、お多福もちとジンジャはつけたのだが、それが省略されてタフクの部分だけが残ってお互いそう呼ぶよ



うになった。

ジンジャと親しくなったのも全ては坂井のお陰なのだが、そのことはすっかりなゆみの頭から消えていた。

最初なゆみは坂井と同じクラスが続き、親しくなって後から坂井の親友のジンジャが加わった。

なゆみはここでは顔が広いので色んな人と交流があるが、ジンジャに出会ってあつという間に淡い恋心を抱いてしまった。

そうなるとなゆみは益々素直に自分の気持ちをストレートにぶつける。

相手にどう思われていようとおかまいなしだった。

そしてもう一人なゆみに思いを寄せている男が傍にいるというのに、自分のことには鈍感まっしぐら。

それが坂井だということはジンジャは知っていたし、もちろん自分がなゆみに好意を抱かれているのも知っている。

なんとなく板ばさみ的な状況だった。

しかしジンジャはなゆみに対してどう思っているのか、はっきりと明確にしなかった。

「へえ、このビルの地下でアルバイトしてるのか」

「うん、坂井さんも来て下さいね。面白いところですよ」

「おっ、行く行く。それで働き出してどんな感じ？」

なゆみは暫く坂井と会話が弾む。

だが時々ジンジャにちらりと視線を向けていた。

「それが、ちょっと苦手な怖い上司が居て、気が抜けない感じかな。でも噂に聞くほど悪いイメージはなかった」

「おい、一体どんな噂が流れてるんだよ」

坂井はジンジャよりもお調子もので、なゆみへのリアクションは大げさに表現する。

このときも、漫才師の突っ込みのように歯切れよく質問する。

噂。

まだ働いて二日目だが、この日ミナと紀子からそれとなく耳打ちされたことがあった。

氷室が専務と仲のいい友達であり、気を許さない方がいいこと、そして氷室は極端に従業員と距離を保ち、態度が冷たいのが日常茶飯事であること、きついことを言われても気にしないことなど、なゆみは聞いたことを笑いながら伝えていた。

「なんか怖そうなとこだね。もしいじめられたりしたら俺に言えばよ。怒鳴ってやるから」

「やだ、坂井さん、そんなことできる訳ないよ。でもありがとう」

坂井は守ってやりたいとアピールしていたが、なゆみはノリのいい冗談だと受け取った。

ジンジャは静かにそのやり取りを見ていた。

なゆみの英語のレベルはかろうじて中級に毛が生えた程度のも  
だった。

まだたどたどしいが、それでもクラスでは積極的に話すのでかな  
り話せるレベルと思われる。

周りの人間の方が高度な単語を知って、そして名の知れた大学に  
通っている頭がいい学生が一杯でも、なゆみの積極さには敵わない。

なゆみの素直な性格はここでも誰からでも認められ、誰もそれが  
でしゃばつてるとは思わない。

みんなにかわいがられていた。

誰とでもすぐ打ち解けて、その人から言葉を引っ張るのはなゆみ  
の得意とする分野なのか、知らずと友達は増えていく。

その日クラスで初対面であっても、溶け込みやすいように雰囲気  
を作るので、なゆみが入ったクラスはいつも賑わいを見せていた。

だから、氷室のようなタイプを目にすると、自分が努力しても打  
ち解けないと理解しているのが、非常に緊張する。

この日、氷室が箱を落としたときも、実際のところ腹が立ってわ  
ざと落としたんじゃないだろうかとびくびくしていた。

すぐに中身を拾いについて、不意に氷室と手が触れても、なゆみ  
は中身を箱に戻すことで精一杯だった。

落ち着いていたどころではなく、早くことを終わらせたかっただ  
けだった。

指が長いことでピアノを習っているのかと聞かれても、明るく笑  
うことで氷室の不機嫌さを少しでも和らげたい気持ち先走ってい

た。

氷室の前では身がこわばる。

そしてミナ、紀子、専務が現れたときはほっとした。待ってましたとばかりについ力が入って元気に挨拶をしてしまった。

氷室は名前にも氷がつくように、なゆみにはどうしても冷たいイメージで固定してしまっている。

だからこそ自分のイメージに縛り付けられてたまるかという反抗する気持ちが高まって、益々笑顔になっていく。

スカートの制服が似合わないと言われても、すぐに受け入れて笑い飛ばしたのも氷室と仲良くやっていくには自分が柔軟になればいいと一人で解決策を考えていた。

それもあるので、氷室のこともミナや紀子が話した噂どおりの人とは鵜呑みにしなくなかった。

きつとどこかでうまくやっていける。そう信じていた。

そんなことを熱くジンジャと坂井の前で語っている自分がいることに気が付くと恥ずかしくなってしまう。

間を置いて妙にかしこまる態度をみせた。

「ごめん、つい力が入ってしまった。ご静聴ありがとうございました」

「お前は、変な奴だよな」

例えそれがネガティブな意味であっても、ジンジャに言われることで、褒められているように聞こえてなゆみは満面の笑みをみせていた。

「さあ、そろそろクラス行くぞ」  
坂井の一言で皆立ち上がった。

このとき今回も楽しいクラスになるんだとなゆみはそう思っていた。

クラスはなゆみの知っているいつものお馴染みのメンバーが集まった。

一クラスの定員は10名だが、この日はきつちりと詰まる。定員も多いが、その分授業時間も90分とたっぷりだった。

なゆみはジンジャと坂井に挟まれて小さなテーブル付きの椅子に腰掛けている。

それが輪のように教室で連なっていた。

この日、ジンジャの反対側には、なゆみとは全くタイプの違う乙女らしい女性が座っていた。

女性の目から見てもかわいらしく、しとやかだった。

ユカリとだけ名前が分かっていたが、誰とでも話すなゆみなのにその女性とだけは全く個人的に話すことができなかった。

避けられているような気さえした。

何回か同じクラスを取ったことがあっても、挨拶はするがどうしてもそれ以上親しくなれそうになかった。

なゆみはいつもの調子で楽しく授業を盛り上げる。

ユカリは客観的に一歩引いている様子だった。

そしてなゆみがジンジャをみたとき、ユカリと喋っているのを見て心臓がキュツと縮んでちくりと痛みを感じてしまう。

それを気にしないようにしていたが、余計に無理が入って子どもっぽくはしゃぐようになってしまった。

もうこの時点で隠れて自己嫌悪。

クラスが終わったとき、ジンジャは声を発することもなく目でユ

カリとコンタクトを取っていた。

それは前から親しくしている様子にも取れ、なゆみにばれないようにしているようだった。

そして先にユカリがクラスから出て行くが、彼女の口元が笑っているように見えた。

なゆみは喉からぐっとこみ上げるものを押し下げるように唾を飲み込む。

「お疲れさん」

ジンジャがなゆみに声を掛けた。

「今日も楽しかったね。今度はいつのクラス取ってるの？」

「今後の予定は未定かな」

「ジンジャ、また電話していいかな」

「うん、いいよ」

あっさりと許可を貰ったがなゆみはあまり嬉しくなかった。

そしてジンジャは先に教室から出て行った。

それがユカリを追いかけて行ったように見え、なゆみは一瞬ショックを感じて体が動かない。

「じゃ、帰るか」

坂井が筆記用具を鞆に直しこみ立ち上がり、それではつとしてなゆみも椅子から立ち上がって慌てて坂井の後を付いていく。

部屋を出たところでユカリが受付で次の予約をしているところを目にした。

用が済むとさっさと出て行ったが、ジンジャは受付付近でその様子を見ていたようだった。

胸騒ぎを感じたなゆみは、体が急に縛られてジンジャの側に近寄

れず落ち着こうと何度も荒く深呼吸をしていた。

その間、ジンジャが坂井と何か話している。

その後ジンジャはなゆみに視線を移した。

なゆみは無理に笑顔を作ってジンジャに近寄った。

「俺、今日用事あるから、先に帰るな。じゃーな、タフク」

「ジンジャ…… うん、またね」

必死に笑っても声は弱々しく暗い。

用事ってなんだろう。

ジンジャが先に一人だけ帰ることなど今までなかった。

なゆみは受付で次の予約を取ろうと順番に並んだ。その間、泣きそうな程に瞳は潤んでいた。

(ジンジャはユカリと付き合ってる。そしてこの後会うんだ)  
はつきりとそういう気がしていた。

予約のあと、後ろを見れば坂井が待っていた。

「それじゃ途中まで一緒に帰ろうか」

坂井は他の生徒や先生が寄ってこないように早々と先頭を歩きなゆみを外に連れ出す。

なゆみは黙って坂井の後をついて行くが、ビルのドアを開けたとたん、冷たい風が頬をなでると、一層口元が硬くなってしまった。

「どうした、急に元気がなくなったな」

「うん、お腹空いたから」

「そっか、じゃあ飯でも食べていくか？」

「えっ、でも遅いからいいよ」

「たまにはいいじゃん」

「でもこの時間に食べたなら太るもん。だけどありがと。坂井さんは



いつも優しいね」

そういわれると坂井はこれ以上強気に誘えなくなった。

「なあ、今度どこか遊びに行こうか」

「そだね。どこがいいかジンジャにも相談しなきゃね」

また坂井は自分の思うように話が進まないと言を一文字に結んだ。そんな様子も知らないままになゆみは自分勝手に歩いていた。

「あのさ、キティは猫というより、トラだね、しかも風船の……」

「えっ？　トラ？　風船？」

「うん、風船の寅さん」

「それをいうなら”ふうてんの寅さん”じゃないの？　でもなんで？」

「そうなんだけど、ほら、誰かがしつかりと掴んでないとどこへ飛んで行くか分からないって言うことさ。それに君は引き止めておく掴み所もないよ」

「やだ、今日の坂井さんなんか変」

「それを言うなら、君もだろ」

二人はお互い返答に困って暫く無言で歩いていた。

坂井は静かになゆみを見つめた。

目が合うと無理に話題をぶつけた。

「あと4ヶ月で留学だな。アメリカに行ったら気をつけるよ。ふらふらするんじゃないぞ」

「そんなこと分かってる。ありがと」

「だよな。さてと俺も就職活動頑張るか。そしてかつこいい社会人になるぜ」

「うん、坂井さんならきつとなれる。そして出世して大金持ち」

「ハハハハハ、そうならその時キティは俺のことどう思う？」

「うーん、きつとすごいなって素直に思うよ」

「そっか。じゃあいつか社長くらいになって有名になってたらどうする？」

「別にどうもしないよ。そのときは坂井さんきつと私のこと忘れてると思うし。私はそれでも構わないから」

「ハハハ、俺はそんなもんか」

自虐するような笑いが溢れる。

坂井はもうそれ以上何も言わなかった。

二人は駅でそれぞれの乗り場に向かうために別れ、なゆみが去った後も坂井はその後姿を暫く見ていた。

だがなゆみは一度も振り向きもせず人ごみに消えていった。

ジンジャがいたら必ず一度振り返るのを坂井は知っていただけに、やるせないため息を吐いて踵を返した。

自分のことで精一杯のなゆみは、坂井の気持ちなど気づくことなどなかった。

ジンジャがユカリと付き合ってる。

それしか考えられなかった。

坂井がこの日、なゆみに失恋したのと同様に、なゆみもジンジャに失恋だった。

それでも、ジンジャを思う気持ちはすぐには収まらない。

辛いときこそ笑わないとと意地を持っていても、このときは口元が緩むと泣き出しそうだった。

堪えに堪えて電車で揺られる。

家に帰ったとき、自分の部屋の机の引き出しから封印していたキ

ティのマスコットをまた取り出した。

「なんのために封印したんだろう。ねえ、キティちゃん。やっぱり私は無理はできない」

キティを身に着けなくなった理由、それは子どもっぽいところを排除したためだった。

少しでも大人びて女っぽくなりたい、そんな気持ちを込めて子どもっぽい要素を捨てたつもりだった。

だけど、なゆみの中身はなゆみのまま。

それなら無理をしなくてもいい。

自然に好きなものは好きでいいじゃないか。そういう開き直りが出てくる。

失恋しても、とことん好きな気持ちはもっててもいい。

ジンジャを思うのは私の自由。

そう自分を慰めながら、キティを両手で握り締め自分の部屋で泣きはらしてしまった。

翌日のこと。

どんなに大きく目を見開いても、腫れぼったい取って付けたようなまぶたが邪魔をして半開きになっている。赤い目を通して見た鏡に映った自分の姿。それは最悪だった。

なゆみは暫く絶句して自分と睨み合っていた。この日はすれ違う人にも見られるのが嫌でうつむき加減に出勤する。

このまぶたの腫れはすぐに引いてくれるだろうか。何度も気にして目をこすれば、益々赤く色をつけたようになっていった。

なゆみが店に着いたとき、すでに端のシャッターは半開きになっており明かりが漏れている。

氷室はいつもより早く着いていた。腰を屈めてぬーっとシャッターをくぐる。

「おはようございます」

氷室の後ろ姿が目に入ったが、顔を逸らしてすぐに控え室に入り着替えようとする。

「ああ、おはよう」

氷室が振り返り返ったとき、なゆみの控え室に入っていく後姿だけが見えた。

そして氷室もどこかぼーっとしている。

なゆみはさつと着替えて、朝の掃除に取り掛かった。  
ショーケースの表面をスプレー式のクリーナーを片手にせつせと  
覗き込むように掃除している。

できるだけいつものまぶたに戻るための時間稼ぎをして、それま  
では誰にも顔を見られたくないささやかな抵抗だった。

しかし、それも無駄に終わり、氷室が話しかけると顔を上げざる  
を得ない。

そして氷室はぎよっと、露骨になゆみの顔を見て驚いた。

「おいっ、お前その顔どうした。まるで別人だぞ」

「やっぱりまだ腫れてますか」

「腫れてるって、お前もしかして泣いたのか？」

「うーん、そのなんていうか、色々とありまして。気がついたらこ  
うなっていました。私もびっくりです」

「一体何があったんだ」

「だからその色々です。さて、仕事頑張ります」

必死にその話題を避けようとするなゆみに対し、氷室は知りたい  
とばかりに追求してしまう。

自分がなぜこの日いつもより早く出勤してしまったか、氷室もま  
たもやっとした感情を抱いて自然とそうなっていた。

少しでもなゆみと二人つきりで話したい。

そういう感情が知らずと湧いていた。

だから聞かずにはいられなかった、なゆみが一番話題にしたくな  
い話を。

「もしかして、昨日英会話学校でなんかトラブルでもあったんだろ。  
例えば好きな男に振られたとか」

回りくどく曖昧に聞くよりも、氷室は自分らしく憎まれ口を叩く

ようにストレートに言った。

だが氷室の言い方は馬鹿にした態度にも見えたかもしれない。

なゆみの掃除していた手が一瞬止まった。

鋭い洞察力。

触れられたくない羞恥心。

心臓がドクドクと不快に早く走り出す。逃れられないところに追いつめられた気分だった。

「あの、そうだったら泣くのは恥ずかしいことなんでしょうか」

なゆみは腫れぼった目をより一層重くして、どよんとした瞳を氷室に向けた。

開き直すことで、どうしようもない持っていくようなない気持ち  
が哀れんで見える。

それでいて、精一杯に氷室に抗議する態度だった。

氷室は正直たじろいだ。

これでは小学生のガキだと思いつきり自分のやってることが恥ず  
かしくなった。

これはまさに気になる女の子ほど自分の本心を隠していじめてし  
まう行為。

そしてはつとすると同時に、益々ど壺にはまった。

もう後には引けない。

「ガキだね。どうせ告白もしてないんだろ。勝手に相手に好きな奴  
がいると一人で思い込んで、そして自分は悲劇のヒロインになって  
泣いてしまっただけだろ。恋に恋する乙女ってどこだね」

自分の本心とは全く違った言葉が出ていた。

自分の方が大人げなかったと思いいながらももう後のまつり。

なゆみは何も言わなくなった。

頬がムスツと不満を募らせたように膨らんでいる。

氷室は自分で言っておきながら、暫くその様子を不安げに伺っていた。

なゆみは知らないが、氷室はジンジャの存在を知っている。

ジンジャがなゆみにはつきりと振ったとは思えない。

それでも慰めてやるうなどと優しい言葉など出てくる訳がなかった。

自分もなゆみに好意を抱いている。

たった短い期間で32歳のおっさんが、一回りも下の色気もないガキのような女の子に。

それに気がついたとき、まるで高校生にでも戻ったような少年になっっていた。

ずっと忘れていた情熱がぐつと心に点されると同時に感づかれるのが恥ずかしくてひねくれてしまう。

氷室はなゆみの出方を見ていた。

なゆみは上司だということを暫し忘れてしまうほど、暫く自分の感情をむき出しにして無言で訴える。

そして静かに口を開いた。

「氷室さんのような大人の方にはやはり私はまだまだ子どもに見えますもんね。自分でも分かっています」

すでに勝利を氷室に譲ったようになゆみはその言葉を受け入れた。そういう健気な態度を取るなゆみの方が氷室よりよっぽど大人に見えた。

氷室は胸が苦しくなる。そしてなゆみはどこまでも真つ直ぐで素直で、常にその場を乗り越えようと踏ん張る姿にまた目を逸らす。

今度はなゆみがその氷室の態度をそつとするように、何事もなくシヨーケースのガラスを磨きだした。

いつもより長くなゆみと二人つきりになったその時間は、二人の仲を深めるといふより遠ざけてしまった。

氷室は普段より口数少なく、その日を過ごす羽目となる。目だけはなゆみの姿を追っていた。



ミナと紀子が出勤した後はなゆみは明るさを取り戻し、目の腫れについても冗談っぽく交わしている。

あの少し姉御肌のミナでさえ気を使う様子を見せているところを見ると、女の子が目を腫らすくらい泣くというのはとてもデリケートなことなのだと思いは氷室は認識した。

美穂も午後から現れて、何かが違うと指摘はしてたが、別に理由まではしつこく聞いていなかった。

その頃は多少腫れも引いていたように思え、話題にするほどの事でもなかったのだろう。

純貴は美穂との交流に忙しく、なゆみのことなどことさら眼中になかった。

氷室だけが土足でデリケートな乙女心を踏みにじり、塩で傷口を揉んだ行為をして傷つけた。

不本意でありながら、それでいてなゆみのことに対してつい口が出る。

裏を返せば、自分が構って欲しい心理の表れ。

32のおっさんがすることかと、時々タイプを打つ指に力が知らずと入ってはキーボードを強く叩く。

かと思うと手元が突然止まりため息がでる。

何気ないようになゆみの様子を探りながら、氷室はデスクワークをこなすということを繰り返していた。

土曜日の閉店時間は夕方5時となっている。

いつもより二時間早めに終わる。

この日は、なゆみの歓迎会を含めた飲み会が用意されている。朝のあのようなことがあったあと、氷室はどんな顔して歓迎会に参加しろというのだろう。気が重くなっていた。

憎まれ口が似合う冷たい男で有名ではあるが、人に嫌われるなんて喜んでやっていることではない。

立ち直れない思いが自分の人格を無意識に否定していただけた。

そしてずっと忘れていたものを再び目にしたとき、氷室は苦しいほどに葛藤する。

そこには、情熱を再び持つことでまたどこかで傷つく挫折に怯えていた。

真っ白なほどに輝き、真っ直ぐに進むなゆみ。

それが氷室の心に入り込もうとしているが、ずっと心を支配していたひねくれは容易く真っ直ぐになれなかった。

なゆみが気になれば気になるほど、その気持ちを悟られることを隠す方へと向かう。

情けないと頭をつな垂れ、魂が抜けるほどのため息が漏れた。

一方でなゆみはその間にも氷室から極力遠ざかる。

側にいれば聞きたくないことを耳にする恐怖。

上司なので逆らえない圧迫感。

ひんやりとするような冷たい態度。

どれも苦手だった。

後先のことも考えずにすぐ突っ走るなゆみは冷静に一步引いて物事を見る大人な対応には敬意を表すが、それが見下すような棘のあ

る言い方には傷ついてしまう。

しかしそういう人間に出会うということは、試練として必要なのかもしれないと前向きに捉えている部分もあった。

だが自らそこへ進んで飛び込んでいけるほどなゆみはタフではなかった。

氷室が近づくと、なゆみは自分を守りたいがために気配を消そうとして息が止まった。

そんなとき、氷室となゆみの間でひらひらとチケットが落ちた。

咄嗟の反射神経で拾うおうとする二人、また手と手が触れる。

二人とも踏み込んではいけない領域に入り込んでしまったかのようには驚いて同時に手を引っ込める。

でも避けていると思われるのは嫌でまた二人は再びチケットを拾いにかかる。

それが今度は自分が拾うんだと主張するように引っ張り合いになっってしまった。

お互い無言で見つめたときの瞳は様子を探ろうともっと奥を覗き込んでいたようだった。

電話がかかったことで、氷室は手を離しその場を離れたが、どちらも何をやってるんだと、情けない思いが背中にこびりついて重苦しく猫背になっていた。

二人の背後には青白く光る火の玉がゆらゆらと縁起悪く漂っているようだった。

なゆみが生氣なく接客をしていると、そういうときに限って無茶なことをいう客に当たってしまった。

風貌も頭に髪がなくつるっぱげ、眉毛が太く目つきのするどい強

面のおじさんだった。

声も心なしかドスがかかっているように聞こえた。

「ねえちゃん、この間買った商品券、あれ駅前のデパートで使うことできないって言われたで。あんたやる、どこでも使えるって言ったのは」

なゆみは困ってしまった。客の顔も、売った事も、そんな説明をしたことも何も覚えてない。

まだ入って三日目ということもあり、本当に自分が売ったのだろうかという疑念も抱く。

「いつ購入されましたか」

自分じゃないかもしれない責任回避が働き、それを確かめる質問が先にでてしまった。

それが客を責めている生意気な態度に思われ、客の怒りが激しくなってきた。

「自分が売ったのも忘れてるのか。俺はすっかり覚えてるで、髪の毛の短い女はあんたしかここにはいないからな」

その言葉でなゆみは失敗したと思った。

客は自分の特徴をすっかり覚えていた。

それならばやはり自分が間違っただろう。慣れてないだけに勘違いして使えると言って売ってしまったのだ。

(どうしよう)

「おい、ねえちゃん、どうしてくれる？ そんないい加減な商売していいのか」

その客はどんとショーカーを拳で叩いた。

なゆみは震えあがる。

すると少し下がらなさいと優しく誘導するよつに、なゆみの両肩に手を置いたものがいた。

なゆみが振り返り見上げたとき、そこには氷室が立っていた。

「お客様、大変失礼しました。それではその購入された商品はどちらでお使いになられようとされましたか」

氷室は丁寧に腰を少し屈めて礼儀をわきまえている態度を見せていた。

客はデパートの名前を告げる。

「でしたらこちらと交換させて頂きますね。こちらでしたら、ちゃんとそのデパートで使えます。それとよろしければこれサービスで一枚多く差し上げますね。大変すみませんでした。まだ慣れない新人ですのでどうか許してやって下さい」

「まあ、そういうことやったら仕方ないな。まあこれから気をつけや、ねえちゃん」

氷室はまた優しくなゆみの背中に触れた。

なゆみははっとして慌ててペコリと頭を下げた。

うるさい客は機嫌よく去っていき、そして氷室も何も言わずに自分のデスクに戻った。

暫く放心状態でなゆみは突っ立ったままだった。

しかし我に返ったとき、慌てるように氷室の元へ行った。

「氷室さん、先ほどは申し訳ございませんでした。そして助けて頂いてありがとうございます」

深々と頭を下げるなゆみの顔も見ずに、氷室は淡々とデーターを打ち込んでいた。

そしてぼそりと伝える。

「あの人は何かといちゃもんを付けてくるんだ。それにこういう失敗はよくあることだ。だけど一度間違えれば、それに懲りて二度と

失敗することないだろ。これからはきつちりと確かめる癖がつく。勉強になっただろ」

「はい」

「もういい、気にするな。それ以上失敗にくよくよして次またミスされたら困るからな。さあ、俺の仕事の邪魔してる暇があったらさっさと働け」

「は、はい。すみません」

なゆみはショーケースの前に立つ。

一通りを見ていたミナと紀子が慰めるように近づいては気遣っていた。

なゆみは少し涙目になりながらも、一生懸命笑おうとしていた。

そしてもう一度後ろを振り返り、氷室を一瞥した。

冷血漢だと思っていたが、困ったときはちゃんと助けてくれたことにとても感謝していた。

それにしても、失礼なことを言ったり、時には助けってくれたり、氷室の極端な態度になゆみは戸惑っていた。

指先だけは器用にキーボードを打ちながら、氷室は考え事をして  
いる。

淡々と作業をしているように見えるが、心は落ち着いていなかった。

朝にデリカシーのないことをなゆみに言ってしまったばかりに、  
負い目を感じていたとは言え、こんな形で借りを返すようなとって  
つけたシチュエーションが気に食わない。

なゆみはすぐに自分の非を認めて詫びてきたが、それを逆手にと  
って恩着せがましくなっていたのだろうか。

本来ならばなゆみを傷つけたときに謝らねばならなかったものを、

それをしなかったことを非常に悔やんでいた。

時間が経てば経つほど、それは難しくなり、氷室はこのまま謝らないと確信がもてるほどだった。

そんな理不尽な自分と比べて、仕事では割り切って礼儀をわきまえるなゆみに恥ずかしかった。

本当は許せないと思っっているだろうに。

氷室はなゆみにどう接して良いのか戸惑っていた。

二人は工作中すれ違つと、どこかきこちない。

どちらも様子を探つて、相手の出方にびくびくしてしまう。

それをどちらも悟られるのを隠そうと表面的に演技をするが、さらにそれが奥深いことまで勘ぐらせる原因となり神経をすり減らせる。

閉店時間が近づく頃は二人とも、白髪になったような状態で燃え尽きているようだった。

「終わった」

シャッターが閉まつたとき、純貴が叫んだ。

これから飲みに行くぞと汽笛を鳴らしたみたいだった。

女性陣は控え室に入って着替えを始める。

そして氷室は、どしとだらしなく椅子に座りこんだ。

「どうした、コトヤン。なんか異常に疲れてそうだね」

「いや、そつでもないよ」

ここで疲れたなどと言ってしまえば、また控え室に筒抜けてなゆみの耳に入ってしまう。



なゆみに変な勘ぐりをされては困ると、氷室は首を左右に倒してコキツと音を鳴らせ、あたかも飲みに行く前の準備体操とでもいうようなフリをした。

「明日は休みだ。今日は思いっきり飲んでくれよ」

「純貴はそういうところは気前がいいな」

「一応愛される専務を目指してますからね」

機嫌のいい純貴の気持ちを損ねるのは避けたかったので口に出しては言わなかったが、一部の女性社員にはそりゃ愛されてるだろうと氷室は心の中で突っ込んでいた。

暫くして女性従業員が控え室から出てくると、氷室はすぐさまなゆみに視線を合わせていた。

なゆみの相変わらずの大きなリュックサックも当然視界に入る。

そしてそこにキティちゃんのマスコットがついていることに気がついた。

前日まではなかったはずだと氷室はそのマスコットを見ていた。

「さてと、それでは皆さん行きますか」

純貴が先頭に引率すると、美穂がそれとなく近づいて肩を並べて歩き出した。

その後ろを氷室が歩き、ミナと紀子がなゆみの相手をしながらついてくる。

少しだけ腫れてたような後がうつすらとわかったが、なゆみの目の腫れはその時ほとんど引いていた。

できるだけ前にいる氷室を見ないように、なゆみは視界を狭めて歩いている。

できることならさっさと帰りたい。

しかし歓迎会として開いてくれた厚意を踏みにじることはできなかった。

一同は目的地へとぞろぞろと地下街を真っ直ぐ突き進む。

すると前方で行きかう人の間からジンジャが歩いてくるのが目に入った。

はっとすると共に次の瞬間、なゆみは動かぬ証拠を突きつけられたかのような膨大なショックを受けてしまった。

隣にユカリが肩を並べて歩いていたからだった。

やはり自分の勘は当たっていた。

思わず、二人に見つからないようにこそそしてしまう。

別に自分は悪いことをしているわけではないのに、激しい動悸に見舞われかなり動揺してしまった。

たまたま右に曲がる通路に差し掛かり、ジンジャはなゆみの姿に気づくことなく右折していった。

そしてその時、氷室が振り返りなゆみを見ていた。氷室もまたジンジャの存在に気がつき、その隣にいる女性も当然どういう事態か理解していた。

朝になゆみに言った言葉の罪悪感が蘇ると、いてもたってもいられなくなった。

なゆみはジンジャが曲がったところで暫く立ち止まり二人の後姿をどんよりと見ていた。

ジンジャは笑ってユカリと話をしている。

楽しそうな二人の歩く姿は恋人達と認めざるを得ない。

ミナに「早く」と言われ、躊躇しながら無理やり足を一步動かし、顔を背けて歩き出した。

なゆみはとぼとぼと一番最後を一人で歩いていたが、気がつくとい氷室が隣に来てなゆみと歩調を合わせていた。

「どうした。腹でも痛いのか」

理由はもちろん分かっていたが、氷室はこのとき体の調子を気遣う言葉を静かに語る。

「いえ、何でもありません」

なゆみは何も話したくないと早足になり、氷室を避けようとする。また変なことを言われてこれ以上のダメージを受けたくなかった。氷室はそんななゆみの姿が痛々しく思えて、心配のあまりなゆみの肩に労わるように手を置いてしまった。

「そんなに無理するな」

「えっ？」

なゆみは突然氷室に触れられ驚くと同時に、氷室の顔を見上げた。氷室は慌てて手をなゆみの肩から離すと、誤魔化すようにまた憎

まれ口を叩いてしまった。

「いや、だから、お前は一人で持ち込み過ぎだ。そのバッグのようにな。もう少しお洒落できないのか。持ち物も色気ないし、子供っぽいキティちゃんまで付けてさ」

「ほっといて下さい」

やっぱり聞きたくないことを言われてしまったとなゆみはぶいつと横を向く。

「あーあ、本当のこと言われたらそりゃ耳が痛いよな。でもさ、なんか放つて置けなかつたんだよ。だからつまり、辛いときは我慢せずに泣いてもいいってことだ」

氷室は言うだけ言うと、すたすたとなゆみを置いて先に行ってしまった。

なゆみはまた訳がわからないと困惑する。

氷室が全てを理解した上で言った言葉と知る由もなかったが、ふと氷室が気遣って肩を触れたときの瞳が優しくかったように思えた。

なゆみは前を歩く氷室の後姿を首を傾げて見ていた。

予約を入れていた居酒屋の前に来ると、小柄なおじさんがにやけた顔で純貴に話しかけてた。

どうやらもう一人の主任だった。

そしてその周りに3人の女の子たちがいた。

ミナと紀子が親しげに話し出す。店は離れていても交流があるようだった。

「お疲れ様です」

ミナと紀子が小柄なおじさんに挨拶をした。

「ああ、お疲れさん。えーと、その子が新しく入って来た人かな」  
一斉になゆみに視線が集まる。

「初めまして、斉藤なゆみです。どうぞ宜しくお願いします」

「ああ、どうもどうも、川野です」

小柄なおっさんはにやけた笑いを浮かべて、人当たりよさそうな感じだった。

ときどき意味もない『へへへ』という笑いが入るが、氷室と比べたらなゆみには優しく聞こえた。

一同は奥のお座敷があるところへ案内された。

なゆみは遠慮がちに一番後ろをついていく。

5人ずつ向かい合わせに座るテーブル。皆順々に席についていくが、氷室の隣にだけはなりたくないという願いはなんとか通じ、氷室が一番端っこに座っていた。その前には純貴が座り、純貴の隣はもちろん美穂。氷室の隣は知らない女性が座っていた。

氷室と同じ列になゆみも座ったが、ちょうど5人の真ん中に位置して、隣の残りの二席はミナと紀子が座った。

向かいには川野が座り、あとは支店の残りの女の子二人が並んでいた。

知らない女性が左にいたが、氷室をブロックしてくれたのでいい人だなゆみはすっかり気を許していた。

すぐに自己紹介をしてその人は倉石千恵と名乗った。

おっとりとしているが優しいお姉さんというイメージだった。

メニューを渡され、なゆみは何を飲もうか迷った。

先ほど見たジンジャとユカリの姿が目には浮かぶ。

次のクラスの予定は分からないといいながら、ユカリと一緒に英

会話学校へ向かったということは、なゆみを排除したかったということなんだろう。

教室を出るときに見せたユカリが微笑していた笑顔は、なゆみに対する勝利宣言だったのかもしれない。

あれやこれやと考えていると、なゆみはわなわなと震えだした。

飲もう。思いつきり飲んでやる。

やけくそな気分が感情を支配する。

ミナに甘いお酒はどれかとたずねると、桂花陳酒はどうかと薦められた。

初めて聞く名前に、疑問符が飛び出たが、なゆみはそれを頼んだ。もうなんでもいい。

そして宴会は始まった。

この後お酒はなゆみをとんでもない事態へと招いていく。

飲み物が一人一人にいきわたったところで、なゆみは改めて紹介され、そして歓迎の意味を込めて乾杯と楽しく声が重なり合った。適当にみんなとグラスをはじく。

最後に氷室が残った。

躊躇しながらも形だけなゆみは氷室にグラスを向ける。

すると氷室は体を前のめりにしてグラスを強くぶつけ返してきた。

(嫌味か)

なゆみはそう思いつつ引きつった笑いをしながら、ぐっと一気に半分ほど飲んだ。

「おー、斉藤は飲みっぷりがいいね」

川野だった。

ニヤついた助平そんな笑顔を向けている。

なゆみは初対面なこともあって、愛想良く笑顔を返し、川野に合わそうとしていた。

それが気に食わないと、まるで「お前は黙ってる」と言いたげな目つきをして、氷室は川野に冷めた一瞥を投げかけた。

しかし、その間にも、なゆみは残りの半分を飲み干していた。

「おい、斉藤、酒はあまり飲めないんじゃないのか。その飲み方は悪酔いするぞ」

氷室にはなぜそうしたか分かっていた。

「これ、すごく甘くて全然お酒の味しませんでしたよ。喉が渴いでいたしおいしかったです」

「だからそういうのが危ないっていうんだ。甘い酒の方がアルコール度は高い」

なゆみは聞く耳持たずだった。

「まあいいじゃないか、コトヤン。斉藤さん、どんどん飲んでね。次何頼む？」

「おい、純貴、煽るな。コイツ、今日は……」  
そこまで氷室が言ったが、口をつぐんでしまった。

口は挟まなかったものの、隣で倉石千恵が何かを感じ取って氷室となゆみの様子を気に掛けていた。

料理が運ばれてきたとき、なゆみはついでに甘いお酒を注文する。飲み物はすぐになゆみの目の前に差し出される。

次のも飲みやすかった。

そしてあつという間に血液の巡りが急に活発になってきて、頭がよきによきと上に伸びてるような間隔を覚えてきた。

顔も火照ってくる。

なゆみの顔はすでに赤くトマトのようになっていた。

自分は酔ってるつもりはなかったが、どうもふらふらとして、体が浮いているような気分がする。

ミナに大丈夫かと声を掛けられ、テンションの高い声ではっきりと「はい」と返事をする。

それは氷室にはもう出来上がっている様子に取れた。

宴もたけなわ、一番年上でこういう酒の場に慣れてるところを見せたいおっさんの川野が、『無礼講、無礼講』と調子に乗って叫んでいる。

純貴と美穂は自分たちの世界をテーブルの端で作り、氷室は時々千恵から話を振られて適当に相手している。

後は好き放題に喋り捲っていた。



なゆみはすでに三杯のお酒を飲んでいた。

酒の経験は乏しいので、人生で一度にそれだけのお酒を飲んだのは生まれて初めてだった。

しかも下戸ときているから、必要以上に少量で酔う。

その顔の赤さは沸騰したような熱さが伴っているようだった。

べろべろに酔ってはいなかったが、氷室の目にはやばいように映る。

そしてお開きの時、なゆみが立ち上がって初めてそこで自分がふらついていることに気がついた。

誰かがなゆみを支えた。

「あっ、ありがとうございます」と顔を上げたときそこには氷室が立っていた。

抵抗しないでぼーっと氷室の顔を見るなゆみ。

大人しく自分に支えられている姿は正常じゃない状態だと氷室にはひしひしと伝わった。

「お前、家に帰れるのか」

「えっ？」

「仕方がねえな。タクシーで帰れ。乗り場まで送ってやるよ」

「あっ、どうもすみません」

なゆみは頭をかいて古臭い昔の落語家みたいになっていた。

そのやりとりはボケと突っ込みみたいで、周りは笑っていた。

皆は純貴にお礼を言う。

奢った方も奢られた方もそれぞれ満足にその宴会は楽しい気分にさせてくれ、余韻を残してお開きとなる。

氷室はなゆみのリュックサックを肩に掛け、もう一方のサイドで

なゆみの体を密着して支えていた。

早く歩けないなゆみは、のっそりと動く。

その間に他のみんなと完全にはぐれ、氷室と二人っきりになっていた。

「氷室さん、トイレ」

「馬鹿やろう、さっさと済ませて来い」

まだビルの中でトイレはすぐ目の前にあった。

氷室は腕を組み、方足を揺らしてイライラして待つ。

暫くしてなゆみが二ヘラ二ヘラとトイレの入り口に現れる。

だが案の定ふらついて倒れそうになっていた。

氷室は世話が焼けると、駆け寄って支える。

「しつかりしろ。お前らしくないぞ」

「何が私らしくないですか？ 氷室さんまだ私のこと何も知らないじゃないですか」

今度は絡んできた。

「お前、酒癖悪いな」

「いいも、悪いも、私だって、酔いたいときがあるんです」

「わかった、わかった、いいから黙れ。で、お前の家はどこなんだ」

「あっち」

「いい加減にしろ」

ビルの外に出て、氷室はタクシー乗り場を探す。

なゆみを支えている手に神経が集中していた。

その感触は柔らかく、そして温かさが伝わってくる。

意外にもその肩は華奢で、女っ気がないと言われつつ、触れてい

るときはやはり女の子そのものだった。

氷室は普段の冷めた目つきなどどこかに飛んで、心の中の思いが目から伝わっている。

暫くなゆみを正直な気持ちで見ている。

酔っ払ったのはきつとジンジャのせいだろうと氷室はなゆみの心の奥まで覗き込んでいく。

「そんなに好きだったのか」

ふと声に出ていた。

「え？ 何が？」

「なんでもないよ」

「氷室さん」

「ん？ なんだ？」

「気持ち悪い」

「げっ、お前、まさか…… おい、吐くなよ」

なゆみは口元を押さえていた。

咄嗟のことにトイレなど見つからない。

しかもこんな人通りのあるところで、吐かすこともできない。

氷室は慌てて、どこか人気の少ないところに連れて行こうと、焦ってその辺の路地に入り込む。

しかし場所が悪かった。

そこはきらびやかにたくさん看板がところどころで光を放ち、

そしてどの看板にもカタカナ、英語でホテルという字が入っていた。

「氷室さん…… うつぶっ」

「おい、待て我慢しろ」

氷室は咄嗟の判断で一番側にあったホテルの入り口へなゆみを連れて入っていった。

便座を上げたトイレの前になゆみを前かがみにさせ、氷室は顔を背け、そしてなゆみの背中をこすっていた。

悲惨な戻す音が聞こえると耳を塞ぎたくなつたが、慣れない酒を飲み自棄になつたところは同情して哀れみを誘う。

そうするとそんな姿のなゆみでもなんだか愛しいような感覚を覚える。

弱りきつて醜態を見せられると益々放つて置けなくなった。

氷室は何も言わず、適当にレバーを引いて、何度と流してやる。

吐くことは何も恥ずかしいことじゃないんだと、さらになゆみの背中をさする手に力が入つた。

胃の中が空っぽになれば、吐き気は止まる。

なゆみは三度戻した後、すっかり収まった。

次に氷室は洗面所に連れて行く。

「ほら、顔でも洗え」

なゆみはいわれるまま、水を出し、勢い付けて流れる蛇口の水をすくつて顔をジャブジャブ洗い出した。

終わった頃に氷室はタオルを差し出した。

そのタオルでなゆみは顔を拭く。

「どうだ、少しは楽になつたか」

「はい。どうもすみません。でもここどこですか」

「ホテルだ」

「ああ、そうですか…… えっ？」

なゆみはタオルを顔からはずし辺りを見回した。

清潔感溢れる空間。全体の色がマッチしたインテリア、そして何より部屋の真ん中にどでーんと大きなベッドが存在感を一番出していた。

固まって動けないなゆみに、ため息を漏らしながら氷室は言った。

「安心しろ、襲わん！ それに用が済めばすぐ出て行く」

「あ、あつ、そ、その」

なゆみは返事に困る。

言葉にならないし、何を言っているのかもわからない。

ただ氷室は疲れたと部屋の隅に設置してあった革張りの椅子に腰掛けた。

「あのな、俺だからよかつたけど、これが他の男だったらどうなつてたかくらい想像を働かせてこれから飲め」

「す、すみません」

「失恋してやけくそになっていたんだろ」

「……」

「隠さなくてもいいよ、大体のこと分かってるから。昨日お前の友達に顔を出したよな。あいつだろ」

なゆみは観念したように首を縦に振った。

「とにかく、落ち着くまでどっか座れ」

「はい」

なゆみはベッドの端に腰掛けた。しょぼんとしょげて縮こまる。そして重い口を開いた。

「今朝、氷室さんに言われたあの言葉、その通りです。私告白もしてないんですけど、彼に彼女がいることに気がついたんです。それで悲しくて昨日の夜はつい泣いてしまって、目が腫れました」

「そして、飲みに行く前にそいつが彼女と歩いているところを見て

しまった」

「えっ、どうして知ってるんですか」

「俺も奴の顔覚えてたんだよ。そして隣に女性がいたし、お前の態度見てたらずくにわかったんだよ」

「氷室さんって洞察力ありますね。いつもきついことって人を不快にさせますけど、本当のことで当たってるし」

「それって一応褒め言葉なのか。それとも迷惑行為ってことなのか」

「どっちも当てはまってるかも」

「おい、調子に乗るな」

「すみません」

「もういい、謝るな。俺もお前に謝らないとな。今朝、辛いときにきついこと言ってすまなかった」

言葉は謝罪だったが、態度はどこかまだ素直になれず、子供が恥ずかしさのあまりそっぽを向いてぼそぼそ謝るような感じだった。

「いえ、そんなこともういいです。やっぱり氷室さんは正しい。私ほんとに子供で、ただ恋に恋してただけだったのかも。お酒をやけくそで飲んだのも、悲劇のヒロインになりたかっただけなのかもしれない」

「もうよせ、どんな理由があるにしろ、それも人生の一部。悲劇のヒロインであるうが、喜劇の道化師であるうが、要は思いっきり心そのままに行動したくなるときがあるってことさ。お前はまだ二十歳だろ。なんでもできるし、なんでもありさ」

「氷室さん……私、氷室さんのこと誤解してました。すごい冷血漢だと思ってたし、それに私の中では一番苦手なタイプとと思ってました。だけどそれは私以上の人生を経験されてるから、物事に冷静になれるんですね」

「そっか、苦手なタイプか」

氷室はふっと笑ってしまった。

「いえ、今はその」  
「いいよ、無理しなくて。その誤解は誤解じゃない。俺はほんとにただの冷血漢さ」  
「でも困ったとき、助けてくれた。お客さんに怒られたときも、そして今だって」  
「仕方ないじゃないか、俺はお前の上司だ。義務だよ義務」  
「本当にそれだけだろうか。」  
氷室は自問する。

「氷室さんはどうしてあのお店で働いているんですか」  
「なんだよ急に」  
「だって、氷室さんはもつと上を目指せるっていうのか、あつ、あの仕事が悪いつていつてるんじゃないんです。その、なんていうのか、氷室さんとあの仕事はあまり合っていないってそう思ったから」  
「合っていない？」  
「ごめんなさい。生意気なこと言って。でもいつも寂しげな瞳でコンピュータ画面を見てるから、他にやりたいことあるんだろうなって勝手に思ってしまった」  
「いつ俺のこと見てたんだよ」  
「いえ、そのまたなんか言われるかとビクビクしてその……」  
「まあいい。でも一回り下の子にそんなこと言われるとは、思わなかったよ」  
「えっ、氷室さん32歳なんですか」  
「ああ、君の目から見たらおっさんだ」  
「いえ、すごく若く見えます。てっきり25歳くらいかと」  
「今更お世辞かい？」  
「そ、そんな」

その後会話がブツツリと切れ、静かになり二人は黙り込む。

空気までひんやりした気がした。  
なゆみも体が急激に冷えぶるつと身震いした。



「どうした、なんか寒そうだな。酔いが覚めてきたんだろう。アル  
コールが抜けるときはそんな感じだ」

「今日は本当にすみませんでした」

「いいよ。何度も謝るな。間違いを犯して学ぶこともある」

「氷室さんも失敗したことなんてあるんですか？」

「えっ？」

「だって、いつも冷静で、物事をしっかり見てるし、そして自分を  
見失わないで落ち着いている。なんだか完璧に思えて」

氷室はふーっと息を漏らすように嫌そうな表情で笑った。

「そこまで勘違いされると、苦笑いになる。俺はもうすでに自分を  
見失ってるよ。物事をしっかり見てる？ ただ冷めて馬鹿にしてる  
だけさ。そして人生も失敗だらけさ」

「氷室さんって自己評価低いんですね。そんなこと全然ないのに。  
どこか逃げるための口実作ってダメだって思い込もうとしてるみた  
い」

それは氷室の琴線に触れた。

ついムキになってしまう。本当のことをずけずけと言われるとこ  
うも耳が痛いことだとは思わなかった。

「もういい、黙れ。それとも俺がその口を塞いでやるうか」

氷室は勢いで立ち上がる。そしてなゆみに無言で近づき、肩を掴  
んでベッドに押し倒した。

なゆみが小さく「あっ」と声を漏らす。

そしてなゆみの顔に陰が覆い、氷室の顔の近さを物語っていた。

咄嗟のことに固まり声を出そうにも、震えが酷く口が思うように開かない。

氷室は虚ろな目をして押し倒したなゆみをじっと見ていた。

「ひ…… むろ…… さん」

声を絞り出し、なゆみは震えながら怯えた瞳で怖がっていることを伝える。

強く抑えていた手の力が弱まると、氷室は歯を食いしばって顔を背け、ベッドから離れた。

「いいか、男と二人っきりで密室に籠るということはこういうことだ。調子に乗って気を許すな。肝に命じとけ。帰るぞ」

「はい、すみません」

なゆみは確かに調子に乗ってべらべら話しすぎたと反省した。

ゆっくりとベッドから身を起こす。

そこへ氷室はなゆみのリュックサックを投げてやった。

「お前、馬鹿でかいの持ってるけど、その中にいつも何入れてるんだ」

しっかりと掴み、なゆみはぼそりと言う。

「英語の本と辞書とノート」

「それとたくさんの夢もだろ。お前はいつも一生懸命だもんな。俺と違って。お前が羨ましいよ」

捨て台詞を吐くように、氷室はさっさと部屋を後にする。

「氷室さん？」

なゆみはリュックを肩にかけ後を懸命についていった。

アクセサリーのキティちゃんもなゆみの心と同様に激しく揺れて

いた。

会計場で、氷室が財布を取り出して支払いをしようとしていた。なゆみは突然タックルを掛けて突き飛ばした。

氷室は「わぁ」と突然のことに驚いてバランスを崩しぐらつく。

「おい、何すんだ。お前は闘牛か」

「ここは私が払います。ご迷惑かけたのは私ですから」  
なゆみは慌ててリュックから財布を出そうとする。

「馬鹿、そんな大きな声でここで支払いのことで議論するな」

氷室はなゆみを無視して、支払いを続けた。釣りを受け取るときとさつさと、出口に向かった

「あつ氷室さん。待って下さい。氷室さんったら」

氷室は逃げるようにホテルから出て行く。そして外に出て、なゆみに「バカ！」と怒鳴った。

「えっ、なんでそんなに怒るんですか」

「俺の名前をあんなどころで何度も呼ぶな。名前がばれてしまっただろうが」

「えっ、でも会計場はついたてがあつたし、顔はみられませんでしたよ」

「あのな、お前、あそこがどういふところかわかって話しているのか？ お前、もしかして鈍感？」

「あつ、それよく言われます」

「ああ、やっぱり。だったらもういい」

氷室はスタスタと歩き出した。

「氷室さん、待って下さい。とにかく支払いは私が……」

「だからもういいって言ってるだろうが。俺の奢りだ」  
氷室はやけくそになっていた。

「あ、そんな、そしたら今度は私が払います」

「お前、またあそこへ俺と戻るつもりか？」

「えっ？　ち、違います。そういう意味じゃなくて。その、もし今度何か奢れることがあったらっていう意味です！」

二人の会話はちぐはぐしていたが、二人とも呆れて最後は顔を見合わせると笑うしかなかった。

それは一歩二人の距離が縮まったように思えた。

そしてホテル街を曲がって大通りにでたとき、偶然ジンジャと鉢合わせになってしまった。

「タフク」

「あつ、ジンジャァ！」

氷室は二人を見合わせ、何かまずいシチュエーションにならないかと急にヒヤツとした。

それが顔に表れて「あーあー」と言いたげに口を開けていた。

「お前、こんな時間にこんなところで何してんだ」

「えっ、ジンジャァも何してるの」

ジンジャァは氷室を一瞥した。

ジンジャァの眼鏡の奥の瞳に氷室の体はぐつと後ろに反れる。

そしてその奥の路地から明るく照らされた看板がジンジャァの目に入ると、今度はそれに焦点が移ってジンジャァは「はっ」と驚いたような顔に変わった。

氷室はすぐに気づく。

「何か誤解してるようだが、私たちはそのような関係じゃない」

だがそれが余計にマイナス効果となった。

「そのような関係ってなんだよ」

ジンジャァは意外にも氷室につっかかる。

「ジンジャァ、どうしたの。ジンジャァが心配するようなことなんてないから。この人、仕事場の上司の氷室さん」

氷室は紹介を受けて条件反射のように軽く首を一度振って会釈する。

「苦手だつて言つてた奴じゃないか。どうして、そんな奴と一緒にこんなところに」

ジンジャは驚きを隠せない。

「いや、だから、その君が誤解しているようなことは何も……」

氷室は誤解を解こうとしたが、何を言つても無駄に思えてきた。

それよりも巻き込まれるのがだんだん鬱陶しくなると共に、ジンジャにはあれこれなゆみを束縛するような資格がないと思うと急に腹が立つてきた。

なぜこんなガキに付き合わねばならぬと苛立つてしまいつもの癖がでると、冷めたきつい目つきに変わっていた。

「なんだ、今まで慕っていただけに、自分のものだと思つていたものが、他の男と一緒にいたくらいでプライドが許さないのか。自分のことは棚に上げて、彼女がお前を相手にしなくなつたら、独占欲が出てくるつてところか。彼女はお前の所有物じゃないぞ」

「氷室さん、なんてことを。そんなんじゃないんです。彼はただ心配してくれてるだけなんですつて。だつて友達だから」

「友達？ 笑わせるな。その友達が他の女と歩いているのを見て、やけくそになつて酒を飲んで悪酔いしたのはどこのどなたでしたっけ。お前たち何を中途半端なことやつてんだ。俺は巻き込まれるのはごめんだ。好きにやつてくれ。俺、もう帰るわ。じゃーな」

「ひ、氷室さん」

なゆみは氷室に自棄酒をしたことを暴露されてどうしていいのか途方にくれた。

まともにジンジャの顔すら見られない。

氷室は自分がしたことに罪の意識も感じず、いいたいことをジンジャに言えてせいせいしたと背筋を伸ばしてスタスタと夜の街に消えていった。

「なんだよ、あいつ。噂どおりの失礼な奴だな」

ジンジャが怒りを露にする。

なゆみはどうしていいか分からず、下を向いて黙っていた。

氷室がばらした自棄酒がどうジンジャに伝わったか気が気でならない。

勇気を出して顔を上げてジンジャの顔を見た。

ジンジャは呆れた眼差しをなゆみに向けた。

まだ気持ちは収まってないようだった。

「タフクもふらふらして酒なんか飲んでる場合じゃないぞ。これから留学だろ。それじゃ向こうへ行ってもやっていけないぞ」

このときのジンジャの言葉は苛立ち紛れのお説教のように聞こえ、なゆみに不快感を与えた。

「そんなことジンジャに言われる筋合いはないよ」

（元はと言えば、はっきりと彼女が居ると言わなかったからこうなつたんじゃない）

「不満が突如湧き上がる。」

何をあんなに自棄になって泣いて、酒を飲んで一人で空回りしていたのだろう。

なゆみは情けなくなり、振り切るように歩き出した。

「おい、待てよ。タフク、一体何を考えているんだ。いつものお前らしくないぞ」

「ジンジャ、今まで仲良くしてくれてありがとう。ジンジャは本当に優しくかった。一緒にいて楽しかったし、つい甘えちゃったね。」

私が英会話学校で一緒にいるせいで迷惑とかかけたこともあったん

だろうね」

「何を言ってるんだ。あのさ、タフク、一人でなんか勝手に話作って自分の世界に入り込んでるみたいだぞ」

なゆみははっとした。全くその通りだと思った。

「そっか、そうだったのか」

「だから一体どうしたんだ」

「そうだ、ジンジャの言うとおりだ。私夢見る夢子ちゃんでした」

「馬鹿野郎！ 何ふざけてるんだ。からかうのもいい加減にしろ。」

お前、酔ってるのか。もういいよ。話が噛み合わないから、また今度な」

ジンジャはむっとした気持ちとなゆみをその場に置き去りにして、早足で去っていった。

なゆみはジンジャの後姿を潤った目で見つめる。

ぐっとこみ上げる感情を必死で抑えようと拳に力を入れると、肩に掛けていたリュックについたキティちゃんも宙ぶらりんにぶら下がりが、ゆらゆら動いていた。

視力の良いなゆみなのに、街の灯りがにじんで溶け合っただけで見えていた。



日曜の朝、目覚ましがなり、なゆみは無理やりベッドから身を起す。

休みの日くらいゆっくり寝てもよさそうなのだが、日曜日はそれなりに自らやりたいことのある日だった。

しかし、今回はなんか気が進まない。

だるく眠たい目をしょぼしょぼとして、ベッドからもっそり出る。

前夜、何度もベッドで寝返りをうっては眠れなかった。

お陰で眠気が恐ろしく強くてこの日起きるのが一苦労だった。

このまままだ寝ていようかと根性がくじけそうになっていたが、英語のレッスンの予約を入れている。

それを無駄にはできなかった。

日曜日は英会話学校でほとんど過ごすというのがなゆみの日課だった。

普段なら楽しいことなのだが、前日のジンジャとのギクシャクがやる気を起こさせない。

大きな欠伸をして、ぼーっとする頭を何度も振ってみた。

氷室とジンジャを怒らせ、一体何が起こったんだろうと、前日のことを振り返りながらレッスンに向かう。

もしかやジンジャは来ているだろうか。

そんな淡い期待もあったが、会ったところでどうしていいかも分からず、謝ったところで、ジンジャが怒った理由がよくわからない。

ビクビクしながら、英会話学校の入り口をくぐった。

日曜日はまた違った顔ぶれがあり、平日に来れない人が集まる。なゆみは辺りを見回した。

いつも一緒になるはずのジンジャの姿はなかった。

もしかしたら午後から来るのかもしれないと淡く望みを持っていた。

会いたいのに出会うのが怖い。

来てくれるのを願ってるけど、来ないような気がする。

ジンジャのことを思うと、やる気が失せてすっかり意気消沈していた。

朝一番のレッスンを取った後、なゆみはいつもラウンジで暫く過ごす。

そこはリクエストを入れると好きな映画を流してくれるし、コンピューターも自由に使えて、ゲームもできる。

ボードゲームもあり、生徒たちが気軽に遊べるようになっていく。

レッスンのない先生が、必ず座っていて、気軽に話しかけることもでき、レッスンを取らなくても十分に英語が話せる空間が作られていた。

なゆみは日曜日はそれを十分に活用していた。

だがこの日は、気分が進まず、クラスが終わるとあっさりと帰ることにした。

先生が「もう帰るの?」と不思議がっている。

手を振ってバイバイと挨拶して、逃げるように学校を出て行った。

どこかでジンジャに会うことを恐れている。

考え事していると、次第に猫背になっていた。

迷いと不安と苛立ちが混ぜ合わさった心のもやもやは、脳をすっぽりと包み込み、ずしつと重くなる。

自然と頭は垂れて下を向いて歩いていった。

まるで背中に「弱った状態」とでも張り紙でも貼っているような分かりやすさ。

その態度が「隙あり」だったのかも知れない。

そんな時に見知らぬ人に声を掛けられた。

「あの、ちよつといいですか」

声のする方向を振り返ると、そこには学生っぽい男性と、外国人が立っていた。

なゆみはなんだろうと、立ち止まり二人を見つめる。

英語に興味を持っているために、隣の外国人が妙に気になった。

「学生さんですか？」

大人しそうなはにかんだ笑顔を見せながらも、物腰柔らかく様子を伺いながら積極的に質問してきた。

「いえ、その、短大卒業したところですが、これから留学する予定の者です」

「あつ、そうですね。どちらへ行かれるんですか」

「カリフォルニア」

「ああそうですね。実はこの彼もカリフォルニアから来た人なんですよ」

「えっ、そうなんですか」

共通の興味のある話題が出てくるとなゆみの好奇心の針が突然揺れた。

自分の興味あることに触れられると反応しやすい体質だった。

その男性は英語でなゆみと何を話しているか外国人に説明しだした。

話の筋が分かると目を大きく見開いて非常に嬉しそうに感嘆した。

なゆみに英語で話しかけると、なゆみも負けずと英語で返した。  
このときばかりは自分も話せるんだと無意識にアピールしていた。

「英語、うまいですね」

側で聞いていた男性は感心するとばかりになゆみを褒めた。

「いえ、あなた程では」

謙遜しているが、褒められてすっかりいい気になってしまう。  
そしてあっという間に疑うこともせず心全開していた。

「あっ、そうだ自己紹介まだでした。僕は柳瀬武と申します。こっ  
ちがジョン・キンドル」

自己紹介されて、なゆみもつい自分の名前を名乗ってしまった。  
そしてジョンとは握手を交わす。

「なゆみさんですか。かわいらしいお名前だ」  
すっかり二人のペースにのせられ、なゆみは去るタイミングを逃  
してしまふ。

それともそのように仕向けられたのだろうか。  
なゆみは蜘蛛の巣に引っかかったようにその場に粘りついていた。

「実はですね、今いろんな人にキリスト教のことについて布教をし  
ているところなんです。このジョンもわざわざアメリカから宣教師  
として来てるんですよ」

ジョンがにっこりとなゆみに笑顔を見せる。  
がっしりとした体格。ブルーの目に癖のついた金髪。

日本女性受けしそうなアメリカ人だった。

ジョンがなゆみと色々と話がしたいと英語で言い出した。

なゆみは英語だったので、何も考えず軽くOKと返事をしてしま  
う。

すると柳瀬は嬉しそうに「いいんですか。よかったね、ジョン」  
と言った。

なゆみはなんだか急に怖くなってきたが、もう後には引けなくな  
っていた。

「ジョンから、カリフォルニアのことについても聞かれるといいで  
すよ。ちょうど僕たちの事務所が向こうのあのビルにあるんです。

お茶も出しますし、どうぞ遠慮なく来てください」

ジョンも「プリーズ、プリーズ」と薦める。

ほんの少しの時間だけならと、そのときは軽い気持ちで受けてし  
まった。

そしてすぐに帰るつもりで二人の後をついていく。

だがそれは簡単に終わることは許されず、なゆみはこの後とんで  
もない世界へと連れられていくことになってしまった。

事務所と言われた場所に足を踏み入れると、中から女性スタッフが、喜びの声を大げさにあげて、なゆみに寄って来た。

「いらっしやい。ようこそ」  
大歓迎の嵐だった。

中は小さなテーブルと椅子がセットになって、いくつも部屋に並べられていた。

他にも誰かがすでに座って何かを真剣に話し込んでいる姿が目につく。

まるでセールスのトークを受けているような印象だった。

(ここは一体……)

なゆみはごくりと唾を飲み込んだ。

どうぞと奥のテーブルに手を差し出され、なゆみは言われるままに座る。

前に柳瀬とジヨンも一緒に座った。

一体何が始まるんだろうと警戒心を持っていたが、他愛無い世間話を笑顔で楽しそうに話すためになゆみもそれに合わせようとして笑顔を見せていると、知らずと雰囲気にも飲まれて行く。

心の中は不安定で、楽しむべきなのか、疑うべきなのか、どっちにも転びそうな位置にがたがた立っているような気分だった。

その時テーブルの上に紅茶とケーキが出され、まるで喫茶店だともしかして無理やりお金を取るうとするぼったくり商売にでもひっかかってしまったのかと血の気が引いた。

「さあ、遠慮なくどうぞ」

薦められても、とりあえずは断ったが、しつこいくらいに何度も「さあどうぞ、さあどうぞ、さあどうぞ」といわれると無理にでも折れさせられた。

なゆみの顔は引き攣りつつも、頭を軽くさげ、頂きますととりあえず紅茶に手をつけた。

一口飲んだところで勇気を出して質問する。

「あの、私は一体何を」

「何も緊張することないですよ。この人たちは皆いい人ばかりで、楽しいところなんですよ。宣教師もいるので英語を話したい人も気軽に遊びに来られたりします。なゆみさんもちようどいいじゃないですか。英語の勉強になって」

なゆみは「へっ」と軽く声を出すが、心の中は早く帰りたくてたまらない。

とりあえず適当に相手して帰るかとケーキにも手をつけた。

だがそれは思ったほど簡単な事ではなかった。

話は思いも寄らぬ方向へと進み、柳瀬は途切れることもなくどんどん話続ける。

それと比例して聞いているなゆみはどんどん衰弱していった。

柳瀬は話し方は柔らかかで優しかったが、決して終わらないセールストークで、宗教のことばかり話し出す。

そしてなゆみも入れと何度と誘う。

なゆみは宗教など全く興味がなかった。

だが時々横から英語でジョンが色々と話をしてくる。

その度に、理解できるとばかりに相槌をうっている、興味があ

るように思われていった。

まるで戦略のようで、なゆみはどんどんこの二人の思うままに言葉を引き出されていってしまう。

帰ると何度と意思表示しても、柳瀬は仏のような笑みを絶やさずに「もう二度と会えなくなるのは寂しいから、是非会員になってまた来て下さい」とそればかり言う。

「だからそれは家に帰ってからゆっくり考えて結論を出します」と言葉をにこらせても、逃げるとはなっから思っているのか決して席を立たせないようにどんどん話を浴びせる。

そして気がつけば窓から見える外はすっかり暗くなっていた。

どれだけの時間この人たちと過ごしていたんだとびっくりした。

このまま行けば、もう二度と家に戻れないんじゃないかとも思える。

それより何より、恐ろしく疲れた。

神経が磨り減って、思考能力が働かない。

なゆみは早く帰りたいがために会員になると申し出た。

「そうですか。それは嬉しいです。それじゃ入会金が2000円なんです」

金を取るといわれて、すぐくびっくりしたが、意思表示をしたために引つ込められなくなり、そして何より早く帰りたい。

なゆみは2000円をしぶしぶテーブルに置いた。

やっと開放される。

ジョンが駅まで送るとついてきた。

英語を話すのは自分の勉強のためにもなるので、別に断る理由もなく、一緒に肩を並べて歩いた。



そしてまた次の日曜日に会おうと約束をさせられて、やっと一人  
になれて家路に着いた。

なゆみはどこか心の隙間に入られて、何かとんでもないことをし  
でかしたのではと心配になった。

その晩、誰かに相談したくて、そして声を聞きたかったのはジン  
ジャだった。

なゆみはジンジャに電話をかける。

このままの気持ちでいると次会う時きつと気まづいままだと、勇  
気を振り絞り、ダイヤルをプッシュする指に力を込めた。

なゆみは携帯電話を持っていないので、好きなときにいつでもど  
こでも相手に電話をすることなどできない。

掛ける時はいつも自分の部屋からだった。

呼び出し音が鳴る間、自分の部屋をぐるりと見渡す。

キティちゃんのぬいぐるみと目があったとき、受話器からジンジ  
ヤの声が聞こえた。

「ジンジャ……」

「タフクか。なんだよ」

どこかよそよそしく、お互い探りを入れたような声。

「あのさ、その」

何をどういえばいいのかわからない。それでも何かを伝えようと  
必死になればなるほど、意味を成さない言葉の音だけが何度も繰り返し  
返される。

「用がないんだったら、切るぞ。俺、今日疲れてるんだ」

「こ、ごめん。今度会ったときに話す」

「結局は用があるんじゃないか。それなら今話せばいいだろ。そのために電話してきたんじゃないのか」

ジンジャがなんか冷たい。

「だって、ジンジャ疲れてるし、それに怒ってるみたいだし」

「怒ってなんてないよ」

「でも、なんかいつもと違うから」

「あのさ、タフク。お前が今考えることは留学のことだろ。それに集中しろよ。俺も就職活動に忙しいんだよ」

「そうだったね。ごめんね。別にこれといって用はなかった。ついちよっと話したかっただけなんだ。それじゃまたね」

「ああ、そうだな。それじゃな」

お互いの関係がねじれたまま電話が切れた。

ジンジャとこうなってしまったのも、自業自得だった。  
なんか悲しいながらもこれでよかったのかもしれない。  
なゆみはそう思い込もうとしていた。

距離を置いた方がきつと吹っ切れる。

全て自分で何もかも解決しようと思った。

そして結果的にそれは極限まで追い込まれていってしまうのだ  
た。

「おはようございます」

朝、店のシャッターの前でなゆみが出勤してきた氷室に挨拶をした。

土曜日に起こった出来事をあまり持ち込まないように、気まずさを打ち消そうと意識しすぎて、声はいつもより大きかったように思える。

氷室はそれに反比例してなゆみと目線も碌に合わせず小さく「おはよ」と返していた。

これもまたいつも通りを装いすぎて却って消極的になってしまっていた。

そしてシャッターを開け、二人は店の中に入り、控え室でタイムカードを押した。

なゆみは土曜日のことを持ち出すべきかと悩みながらロッカーの前に立つ。

氷室も何か言いたげにしたが、ロッカーからなゆみが制服を取り出すと、無言で出て行った。

土曜日の夜、ジンジャと鉢合わせして自分が去った後、二人はどうなったのだろうかと氷室は気にしていたが、なゆみの様子を見れば、泣き腫らした後もなし、そんなに悩んでる様子はなさそうだと勝手に判断する。

もしかしてうまく事が収まったんだらうか。そうならなかったらなんか癪だった。

結局はどうなったのか知りたくてたまらなくなってくる。

自分も、気持ちのはけ口のように初対面とはいえ、ジンジャに怒鳴ってしまったが、あれにはジンジャに対しての嫉妬も入っていたと認めていた。

32歳のおっさんが切れた姿は、このときになって恥ずかしく思う。

そして、事の成り行きだったが、なゆみとホテルに入って押し倒してしまったことも後悔の一つだった。

あの時、理性が負けていたらと思うと少し恐ろしくなる。

感情をぶつけるようにあんな形になっってしまったが、いざ実際なゆみをベッドに押し倒して、上から跨って覗き込むのは氷室自身ぞくっとする部分があった。

男としての本能が一瞬芽生えていた。

それをぐつと歯で噛み締めて我慢してただけだった。

ほんの紙一重だったのではと思うほど、あの時のことを考えると忸怩たる気持ちになる。

日曜日はそのことばかりもんと考えていた。

自分がこれだけ気にしているのに、なゆみが土曜日の事に対して言及してこないのもまた不自然のようであった。

一体何を考えているんだろうと氷室は余計に気になっていった。

控え室からなゆみが出てくると、色々と考えすぎてどこかぎこちなくなる。

何事もなかったように氷室は平常心を試みようとして、とにかくまは出方をみるために黙り込んでいた。

しかしチラチラなゆみを見てしまう。

一方でなゆみはあまりにも静か過ぎるこの状況が却って落ち着かず、時々チラチラと様子を見ている氷室がまだ怒ってるのではない

だろうか、不安になってきた。

やはりきつちりと謝るべきなのではと思えてくる。

結局はお互い深読みすぎ、余計ないらぬ気持ちまで取り込んで重力を何倍にも感じてしまった。

そしてとうとうそれに耐えられずお互い同時に名前を読んではしま  
う。

「あっ、なんでしょう」

「ん？ そっちこそなんだよ」

「えっ、その、あの、土曜日のことなんですけど。改めて、お詫び  
します。ご迷惑お掛けしてすみませんでした」

「もういいって言っただろ。忘れてたよそんなこと」

嘘発見器にかけられていたら、針は大きく揺さぶられたことだろ  
う。

「それで、その後あいつと誤解は解けたのか」

「誤解？ そんなの何もなかったです。ただ私が勝手に好きだった  
だけで、それで世界を作ってしまった、彼にはいい迷惑でした。ジ  
ンジャ、優しかったから私を傷つけたくなくて、彼女がいること私  
に言えなかっただけなんです」

「あのな、彼を美化するのはお前の勝手だが、そういうのが一番傷  
つけるんだぞ。男というのははつきりという方がいいんだ。中途半  
端な優しさ程、酷なものはないぞ。それにいいように思われたいと  
気持ちを曖昧にするのは卑怯者がすることさ」

「だからジンジャには関係ないことなんです。強いて言えば、被害  
者です。私が勝手に夢見てただけだから」

「ジンジャ、ジンジャってお前、宗教の神社みたいな響きだぞ。神  
道を崇拜してどっかの神社にでもお参りに行ってこい」

「あっ！」

なゆみは宗教というキーワードに酷く反応してしまった。

「なんだよ、急に叫んで」

「いえ、その、ちょっと宗教について思い出したことがあって」

「お前、変な宗教に引っかけたなんて言うなよ。最近この辺り、声掛けて会員を増やそうとしている宗教団体があるって聞いたから、気をつけるよ」

「えっ、それってどんなのですか」

「なんでもビデオを見せて、洗脳させるらしいよ。しっかりと感想を言わせて、どこが良かったかってしつこく聞くんだって。そういう事を何度も繰り返し返すと、それが素晴らしいものに思えてくるらしいから。最後には信じてしまっつて訳」

「こ、怖いですね」

「信じさせられるほど、歪む事ってないからな。特にお前みたいなタイプは力モだろな」

「ええっ」

なゆみは顔を青ざめる。

まさか会費を払ったところがそんなところだったらと思うと怖くなる。

「とにかくだ、ふらふらするなよ。お前は危なっかしいところあるから。それはこの間で充分理解した」

「は、はい」

なゆみは氷室にまでふらふらしているとわれショックだった。

ジンジャにも、そして坂井にもその前に言われている。

急に自信を失くし、肩を落とした。

それは一度に背後霊を沢山呼び寄せて、肩に取り憑かれたようだった。

「おい、斉藤？」

「はっ、はい」

元気ない声でなゆみが振り返ると、急にげっそりとした表情になっ  
っていた。

氷室がそれを見て異変を感じ何か言おうとしたが、その時他の従  
業員が出勤してきて水を差された。

その日、隣のビルの支店でアルバイト一人休みが出たので、なゆみが助っ人で行かされることになった。

新人で他の店の事も知るチャンスだと氷室が判断したのだが、なゆみが側に居ないのは正直寂しい思いが出てくる。

そんな気持ちを抱いてる中「はい、喜んで」となゆみは移動を明るく承諾すると、氷室と離れることが嬉しそうに聞こえた。

まだまだ自分は苦手とされているのがひしひしと伝わってくるようで、氷室は複雑な気持ちになりながら、それでもどうすることもできないとなゆみへの思いをできる限り閉じ込める。

「いいか、川野主任に気をつけて、あっ、いや、その言うことをよく聞いていつも通りに頑張ってください」

「はい」

氷室はこのとき送り出す饞として珍しく笑顔を見せていた。なゆみは、その笑顔に少しだけドキッとしてしまった。

支店は、本店と違ってとても小さなスペースを利用した場所だった。

六畳くらいだろうか。

その狭さにまず驚いた。

その分置ける商品も限られ、品数は少ない。

外に面してるために、まだこの季節少し足元が寒く感じる。

ショーケースが置いてあるところに立てば風を感じるときがあった。



「斉藤、よく来たな。それじゃ今日は頼むぞ」  
「はい。宜しくお願いします」

川野は常にニヤニヤとした笑みを浮かべている。  
そういう顔つきなんだろう。

まだよく知らないので、なゆみは深く考えることはなかった。

倉石千恵が、笑顔で迎えてくれたお陰で一瞬でリラックスできた。  
一度席を共にしてお酒を飲んでいるだけに、すんなりと溶け込む。  
千恵は穏やかで面倒見も良く丁寧に教えてくれる。

なゆみのことも、ミナが呼んでた名前を覚えていて「サイトちゃん」と呼ぶ。

ここで働くのはそんなに悪くないとなゆみはちょっと気分が楽になった。

小さな店舗だが、通行客が多いとすぐに人だかりになり、とても慌しくなる。

まだそんなに慣れたわけでもないのに、なゆみは格闘していた。  
そして少し焦って落ち着かないでいると、川野が言葉をかけてきた。

「斉藤、もう少し落ち着け。それから、商品が乱れたところは常に  
直す」

「はい。すみません」

そして暫くするとまた同じ事を言われた。

それだけではなかった。ことあることに、何でも言葉を挟んで注意してくる。

恐ろしくネチネチしていた。

これでは冷たい氷室の方がまだましだと思った。

あのにやけた顔の裏には、しつこいネチネチさが隠れていたとは、なんだか気分がめいる。

小さいおっさんなのに、存在は大きく鬱陶しい。

川野が休憩を取って出かけたときなゆみは千恵に耳打ちする。

「千恵ちゃんはずっと川野さんとここで働いてるけど、偉いね」

「えっ、そうかな。慣れてくるよ。サイトちゃんはまだ初めてだらびつくりだろうけど。実はさ、氷室さんと川野さんって仲が悪いんだよね。でも氷室さん専務の友達でしょ。だから川野さんは何も言えず我慢してるみたいだけどね。それでその分ここでネチネチとするわけ」

「そっかこの中でも色々あるんだね」

「そうそう、巻き込まれないのが一番だから、なんかあってもあまり気にしない方がいいよ」

千恵が一番安心感を与えるタイプだった。

なゆみは千恵のお陰で救われた思いだった。

そして電話が鳴り、なゆみが受話器を取った。

「トレードチケットセンターです」

「本店の氷室です。お疲れ様です」

「あっ、どうもお疲れ様です」

氷室とビジネスの会話とはいえ、声だけ聞くのは少しどつきりだった。

「どうだ、しつかりやってるか」

「は、はい。なんとか」

「そっか。それならいい。それだけだ」

「えっ、それだけのために電話ですか？」

「ああ、俺がいなければお前は羽を伸ばしそうだからな」

「そ、そんなことありません。川野さんにも思いつきり叱られてます」

「そっか、わかった。報告はまた後で聞く。じゃーな」

電話が切れると、千恵がくすつと笑い出した。

「今の氷室さんからでしょ。なんだか氷室さん、えらくサイトちゃんがお気に入りみたいね」

「えっ？ そんなことありません」

「そっかな。だって飲み会るとき、氷室さんなんだかサイトちゃんのことばかり見てたように思っただけ」

「気のせいです」

「安心して、そんなこと私誰にも言わないから」

「安心も何も、その、私が入り立てだから何かとイライラさせてるのかもしれない。私、それに氷室さんのこと苦手なんです……」

ふと語尾が弱くなったような気がした。

苦手？ その割には面と向かっていろんなこと言ったような言わなかったような、そして思いつきり世話になってるような、迷惑かけてるような、なゆみはなんだか分からなくなってきた。

あの冷たい態度の裏に時々優しい気遣いが見える。

氷室に慣れてきている自分を感じていた。

閉店時間、川野が客が来ないタイミングを狙ってテキパキとシャッターを閉める。

「斉藤、おつかれさん。まあなんとか頑張ってくれたな。いいぞもう向こうに戻っても」

「はい。どうもありがとうございました」

「なあ、こっちの方が働きやすかっただろう。これからこっちに来てもいいんだぞ」

川野は自分の方が氷室より主任に向いていると言いたげな態度だった。

その時、なゆみは氷室がいないのも寂しいかなとなんとなく思っていた。

千恵は、相手にするなと隠れて首を横に振って合図を送っては、早く戻れとあごを前に突き出しているのが視界に入る。

「それじゃ、どうもお疲れ様でした。お先に失礼します」

なゆみは千恵に手を振って勝手口から支店を出て行った。

「素直でかわいい子でしたね、川野さん」

千恵がそういうと、川野も「そうだな」と同意していた。

「斉藤がこっち来れるように今度手配してみるか」

川野はよほどなゆみが気に入った様子だった。

なゆみが急いで戻ると、すでにミナと紀子とその日以来いたアルバイトの女の子たちは着替えが終わり、シャッターをくぐって帰るところだった。

なゆみは「お疲れ様です」と頭を下げた。

「サイトちゃん、ごめんね、先帰るね」

ミナが言った。

「いえいえ、そんな、気を遣わないで下さい。それじゃまた明日」

「うん、じゃーね」

なゆみは皆に手を振ってから半開きのシャッターをくぐった。

顔を上げたとき、デスクの前で腕と足を組んで椅子に座って待っていた氷室とすぐに目が合った。

「お疲れ」

「お疲れ様です。すみません。すぐ着替えますので」

「いいよ、ゆっくりしてくれて。今日もこの後、英会話なんだろ」

「いえ、月曜日は休みなんです。今日はありません」

氷室は休みと聞いて何かを考えるような態度になっていた。

なゆみは慌てて控え室に入り、帰り支度をする。

できるだけ早く着替えようとして、ズボンを穿くときバランスを崩して「キヤー」と悲鳴を上げて倒れてしまった。

「おい、だから慌てるなっついていつてるだろ。怪我するなよ」

「はい、すみません」

ロッカーを閉める音がして、次にタイムカードに差し込んだときの音も響く。

そしてなゆみが出てくる。

「すみません。お待たせしました」

頭を深々と下げる。

「それじゃ、飯でも食いにいこうか」

「はい。……ん？ えっ？」

「英会話学校休みなんだから」

「はい、そうですけど、今なんて？」

「だから飯食いにいこうって」

「私とですか？」

「うん。土曜日の貸しもあるだろ」

「あっ、そうでした。はい。わかりました。いきましよう」

それでもなゆみは変なシチュエーションとばかりに戸惑っていた。

氷室と二人して歩く。

そういえば土曜日もそうだったと、あの時は体を支えられていたことを思い出し、あまりにも近くにいた事実を再認識してこのときになってことの重大さに気がつく。

氷室は背が高く、そして肩幅ががっちりとしてスーツの背広がとも形よく映えて見える。

改めて見れば大人の男という貫禄があった。

見かけはかっこいい男だった。

その隣に、色気も化粧つ気もない、髪の高い少年のような女がいると、どうも不釣合いに思える。

なゆみは急にもじもじしてしまった。

(何考えてるんだろう、私)

それを悟られるのが嫌で、無理に笑顔を作りなゆみは氷室に声を掛ける。

「あの、どこ行きましよう」

「そうだな、またホテルにでも行くか？」

「えっ、それはもう忘れて下さい」

「ハハハ、お前はからかいがある」

笑い声と笑顔のせいで氷室が急に丸くなったように見えた。

氷室の後をついて行くと飲食店が集まる繁華街に入っていた。その中でもひととき目立つお洒落な風格のトンカツ屋があった。氷室が「ここはどうだ」と提案する。

「あっ、トンカツですか。私大好きです。ここにしましょう」

素直に反応を返してくるなゆみはかわいかった。

氷室はふっと鼻から息が漏れ、顔が緩んでいた。

暖簾をくぐり、「いらっしやい」と声を浴び、席に案内された。

白いコックのような服装をした少し小太りのおじさんが寄って来る。

「よっ、氷室さん、お久しぶり。今日は弟さんをお連れですか」

「店長、これでも女なんですよ」

「あっ、ほんとだ、これは失礼だった」

なゆみは思いつきりの笑顔をわざと見せたが、自分でもおかしかった。

店長の言い方が古風で面白く、間違えられても腹も立たなかった。氷室はくくくと笑いを堪えている。

「氷室さん、弟がいるんですか？」

「ああ、ちよつと年離れてるんだ。弟ともここに来たことがあったからね。お前は兄弟がいるのか？」

「いえ、一人っ子です」

「そっか。そんな感じには見えなかった」

「それって、弟とかいるように見えて、しっかりしてるってことですか」

「いや、いつも兄弟げんかして負けてばかりの負け犬って感じ。弱い犬ほどよく吠えるっていうしな」

「なんですかその例え？」

区切りのいいようにお茶が運ばれ、そして注文をする。

熱いお茶をふーふーと冷ましながらなゆみはゆっくり飲んでいた。氷室はまた自然と口元が笑っている。

なゆみはなんだかリラックスして、軽く質問してみる。

「氷室さんはご両親と一緒に住んでるんですか？」

「いや、賃貸マンションに一人で住んでいるよ、もう32歳なもんで」

「別に年は関係ないかと。何かと氷室さんってひねくれてますよね」「最高の褒め言葉だ。ありがとう」

「だから…… いえ、もうやめときます。氷室さんには何を言っても敵いません」

「そうだな、俺は親の前でもこうなんだ。負けん気が強くてね、すぐに喧嘩しては自分が正しいんだって我を通してしている奴さ」

「でも氷室さんってもしかして寂しがりや？」

「どうしてだ？」

「だって、寂しがる人ほど、親に反抗するような気がする。十分な愛情を独り占めしたいために、感情をぶつけることでかまって欲しくなる心理ってやつかな」

「ふーん、二十歳の小娘が結構心理学者みたいなこと言っただな」

「当たってますか？」

「いや、はずれだ」

なゆみはガクツとうなだれた。



「だけど、なんか氷室さんの意外な面を見た感じがした。もっと怖い人だと思ってたから、こうやって話ができるなんて思わなかったです」

「ふん、今回はお前を利用しただけだ。腹へってたから。背に腹は変えられぬっていうだろ」

「そうですね」

最初会ったときは確かに苦手な人間だと思った。

そして冷たく怖いとさえ感じていたが、まだ出会って間もないのに、他の従業員の知らない氷室の意外な面を誰よりもたくさん見たように思える。

なゆみは最初に抱いたときの感情が薄れていくのを感じていた。

氷室は本当は冷血漢でもなんでもない、そんなフリをしてるだけの本当はもっと繊細な人なのではないだろうかと思えてくる。

なゆみは氷室と一緒にいて落ち着いた。

ジンジャとはまた違う感情。

ジンジャを前にすると太陽を求めて真っ直ぐ走り続けていた感じだったが、氷室の場合はどこか月明かりに照らされて、きれいだなってそれを見つめてゆっくり歩いている気分。

きついことを言われても、そんなに気にならなくなってきた。

それが自分のために発せられた選ばれた言葉のようにも思えたからだった。

(なぜこの人は今私の前にいるのだろう)

なゆみは、お茶を飲む氷室をじっと見ていた

「なんだ、じろじろ見て。俺の顔になんかついてるのか」

「はい。目と鼻と口が」

「眉毛もだろ。忘れるな」

「そうでした。すみません」

呆れるような冗談でさえ、こんな反応が返ってくるとは思わず、冗談を通じる人なのか通じない人なのか分からなくなる。

羽目をはずして騒ぐ自分にはどこかでそれを正してくれているようにもとれた。

氷室もまた自分のやっていることがこれでいいのか考えていた。

英会話学校が休みと聞いて、思いつきで食事に誘ってみたが、貸しがあるだの、腹が減ってるだのとこちゃこちゃ理由をつけたのは男らしくない。

本心は一緒に仕事ができなかったために側にいる時間が少なくて寂しかったからであった。

なゆみが言った『寂しがりや』は本当は当たっていた。

小学生に上がった頃、母を亡くし、父はそのあと再婚してそして弟ができた。

その後弟ばかりがかわいがられ、親の愛情に飢えていたのかも少しもない。

思春期は絵に描いたような反抗期。

そして誰にも頼らずに自分の力だけを信じて勉強も頑張ってきた

つもりだった。

自分は何でもできる、努力は報われるなどと思っていたが、自信過剰な奴に限って困難にぶつかるとあっさりと挫けてしまう。

結局は弱い人間。自分を否定し続けることしかできない。

それなのに、なゆみに出会ってから、それが間違っていると知り知らされる。

困難にぶつかっても当たり前のように素直に真っ直ぐ突き進む姿を見せられては、昔の自分の姿を思い出せといわれているようだった。

(俺はこいつが必要なのか)

氷室もまたなゆみをじっと見ていた。

「なんですか。私の顔にもなんかついてますか」

「いや、なんもついてない」

「えっ、それじゃのっぺらぼうじゃないですか」

「違う、すっぴんってことだ」

「あっ、そうでした。やっぱりこれって女捨ててますよね」

「そっか、充分かわいいと思うけど」

「えっ？」

ちょうどその時トンカツが運ばれてきた。

なゆみは呆然としていた。何かとっても聞きなれない言葉がこの冷たい氷室の口から出たような、それとも聞き間違いだっただのか。

なゆみはその言葉の意味に縛られた。

「どうした。早く食べよ」

「あつ、はい。いただきます」

なんだかよく分からずに、なゆみは黙々と食べた。

「うわぁ、うまい！ このトンカツ最高ですね」

「お前、なんかおっさんみたいだな」

「いやぁ、おっさんの氷室さんに言われるなんて」

「おいっ！」

二人は息の合ったコンビのように楽しくトンカツを食べていた。

食事が終わるときに、ウエイトレスが柚子シャーベットを持ってきた。

「これ、店長からのサービスです。なんかさっき失礼なことを言っただけで詫びてました」

なゆみは氷室の顔を見て笑っていた。

二人は礼を言う。

氷室は店の奥の方を覗き込み店長と目が合うと、手を上げていた。

「この店長と親しいんですか」

なゆみはシャーベットを口にいれ、冷たいと顔で表現しながら話す。

「ああ、まあな。昔仕事でこの店のインテリアやデザインを任されて設計したんだ」

「えっ、ここ氷室さんがデザインされたんですか」

なゆみは改めて辺りを見渡す。和とモダンなデザインが上手く調和されて、日本の和の色が渋みを出し歌舞伎のイメージが浮かび上がる。

その一方で洋風らしいデザインのテーブルや椅子がマッチしてい

る。

落ち着いた雰囲気でトンカツの値段の割りに高級感溢れる雰囲気が漂っていた。

アンデイ・ウォーホルを和風スタイルにしたような絵が飾られているのも斬新だった。

なゆみは神でもみるような目で氷室を見ていた。

氷室は大げさだと、ふっと鼻で笑う。

「作ったのは大工たちだ。俺は紙の上で頭を働かせただけだから、大したことはない」

「でもすごい。尊敬しちゃいます」

「それにもう昔の話だ。今は関係ない」

「えっ、どうして、こんなに才能あるのに、なんでそのお仕事辞めちゃったんですか」

「それもお前には関係ない。世の中夢だけで生きていけないってこともあるってことさ」

「夢だけで生きていけないかもしれないけど、夢を持たなければそれまた生きていけないと思う。夢があつたら諦めちゃだめです」

「お前は調子に乗ると、すぐに生意気な口利くよな」

「でも、これだけの氷室さんが作ったものを見せられたら、私、生意気な口もつと生意気になります。氷室さん、一体何から逃げるんですか？」

氷室の動きが止まり、なゆみをしっかりと見つめる。

光が届くことがないと思っていた暗い底で、ぱっとフラッシュを浴びせられたような驚いた顔をしていた。

気を取り直して、再びシャーベットを口に入れ、全て食べてしまつと、スプーンを投げるように入れ物に落とす。

「何からも逃げてなんてないよ」

「氷室さん、嘘つきなんですね。それに嘘をつくのが下手だ。ほんとは夢を追いかけたのに、失敗するのが怖いんだ」

「もついい加減にしろ。折角の食事がまずくなる」

「本当のことを言われたから、耳が痛いんですよ」

突然氷室はテーブルの請求書をひったくるように掴んで立ち上がり、そしてレジへと向かい、「釣りはいらぬ」と5000円札を置いて出て行った。

「あつ、氷室さん」

なゆみは店の中であたふたとして、店長に頭を下げて礼を言つと、慌てて後を追いかける。

氷室はなゆみなどいなかったように人ごみに紛れて繁華街をスタスタ歩いていた。

「氷室さん、待って下さい」

なゆみは走って追いつくと、後ろから氷室の腕を掴んだ。

そのとたん氷室は立ち止まったが暫く無言のまま動かなかった。

「氷室さんってば、私を置いて勝手に行かないで下さい。それにこは私が払う番でしょ。もう、一体何をそんなに怒るんですか。氷室さんだっていつも本当のこと私に言ってるじゃないですか。自分の時は逃げちゃうんですか。子供じゃあるまいし……」

氷室の拳にぎゅっと力が入ると同時に腕が硬くなる。

なゆみははっとして掴んでいた氷室の腕を咄嗟に離れた。

そして感情を抑えられないまま、氷室はなゆみに振り返った。

「そうだったな。奢ってもらう番だったな。それじゃもう一軒行こうか」

どこか意地悪とでもいうような投げやりな声のトーン。

このままではすまないと言いたげに、自分の力を見せ付けるように氷室はなゆみの腕を取り、無理やり引っ張って歩き出した。

「氷室さん、そんなに強く握られると痛いです。一体どこへ行くんですか」

なゆみは首輪を無理やり引っ張られるのを嫌がる犬のように体を反らして抵抗している。

氷室はそれでもなゆみの腕を離さなかった。

そして連れて行ったところは、ホテル街だった。

「さあ、入るぞ」

「ちよ、ちよっと待って下さい。氷室さん、こんなときに冗談はやめて下さい」

なゆみの心臓はバクバクとした。なんだかとても怖い。

しかし冗談でもないくらい氷室の冷たい目つきでこれが本気だと感じ取った。

力づくでホテルに入ろうとしている。

「どうした、お前も結局は逃げるのか」

「それとこれとは話が全然違うじゃないですか。一体どうしたんですか」

氷室は歯を食いしばり歪んだ表情を見せる。

まるで駄々をこねすぎて後に引けなくなった子供を見ているようだった。

なゆみは何かを悟るように悲しげな目を向けた。

「わかりました。入りましょう。それで氷室さんの気がすむのならなゆみは自らホテルの入り口に向かう。」

「斉藤…… お前」

氷室は突然目が覚めたように自分の罪を悔やむ。

(俺は一体何をやってるんだ)

そしてなゆみの腕を乱暴に握って引き戻す。

その反動でなゆみがバランスを崩して倒れ掛かると氷室はぎゅっと力強く抱きしめた。

「ごめん。ほんとにごめん」

「氷室さん……」

なゆみは氷室の心の奥深く潜む何かを感じてそのままじっと抱かれていた。



氷室が自分以上に子供で、感情をコントロールできないでいる。本当は素直になりたいのに、自ら殻に閉じこもって、自分自身を束縛して融通が利かなくなっている。

なゆみの母性本能がそれを感じ、どこか優しくしてあげたいそんな気持ちになっていた。

暫く氷室の思っままにさせていたが、ふと頭によぎったことがあった。

「氷室さん、あの、さっきのトンカツ代なんですけど、いくら払えばいいですか？」

「えっ？」

氷室は我に返って、なゆみを解き放した。

そして何事もなかったように歩き出す。

「氷室さん？ ちょっと待って下さい。だからあの、トンカツ代…

…」

「もういい、あれも奢りだ」

「そんな、それじゃ困ります。氷室さんってば」

なゆみは本当に鈍感なのか、それとも何事もなかったように気を遣ったのか、それは氷室ですら判断しかねたが、お陰で二人はまたいつも通りに自然と戻っていた。

なゆみをあの店に連れて行ってしまった。

氷室はなぜそうしたのか、自問自答する。

自分が築き上げたものをなゆみに見せたかったのか、なゆみに感化されてもう一度あの店で自分の当時の気持ちを見てみたかったのか、どっちにしてもなゆみの影響には間違いなかった。

一回りも違う子供っぽいなゆみによって、氷室は自分の中の何か

が変わりつつあるのを確実に感じていた。

「さつきはすまなかつたな」

それは氷室にとつて少し気まずく恥ずかしかつたが、精一杯の謝罪だった。

そして感情のままになゆみを抱きしめたことで気持ちが悪くなったのではと気になっていた。

「いえ、別に」

なゆみはいともあつさりとおつけらかんに返事した。

「でも俺、お前を抱きしめて……」

「ああ、ハグでしょ。私いつもやりますよ。アメリカ行ったとき、癖になつちやつて抵抗なくなりました」

「そ、そうか」

氷室はなゆみの鈍感さのレベルに改めて驚いた。

驚きで顔が引き攣る。

だが、却つて気が楽になり、ふっきれた笑いをなゆみに向けた。

そして目の前にコーヒーショップがあるのに気がつく。

氷室は何事もなかったように思おうとため息を一つ吐いた。

「お前、俺にコーヒー奢れ」

「あつ、はい！」

なゆみの元気な声が氷室の耳に心地よく届く。

(こいつはこつという奴なんだ。だから俺は……)

氷室は優しい瞳でなゆみを見つめていた。

二人は冗談を言い合いながらコーヒーショップへ入っていった。

それから一週間は何事もなく普通に過ぎていった。

なゆみは注意されることも少なくなり、要領が分かってコツも掴んで順調に事が運んでいつているようだった。

訳が分からなくて絶望を抱いていた初日が嘘のように、何も困ることはなく業務を一通りこなせるようになっていた。

よく考えれば何も難しい仕事ではなかった。

氷室とは挨拶をする程度の話しかしなかったが、なゆみは氷室が側にいることでどこか安心して働いてる気分を味わう。

怖いという部分はすっかり消えていた。

自分だけが知ってしまった氷室の本当の姿。

他の従業員がそれを知らないと思うと、どこかそれが優越感のよくな特別な感情が芽生えてくるようだった。

この頃になると氷室に対して親近感を覚えるところまで来ていた。まるでそれは飼いならされた犬みたいな感覚でもあり、少し慕いたくなくなってくる。

それが自分でも不思議で、なぜそう思うのか考えようとするのだが、そうするとまだ気を許すなどどこかで心が急激にストッパーを掛けてしまう現象が起こる。

これ以上深く考えないようにと心が自然と締め出したようだった。どこかでまだ心を開ききっていない。

そこにはジンジャへの気持ちはあったからかもしれない。

ただ一つ、最近よく笑うようになった氷室の笑顔を見るのはとても好きだとはつきり言えた。

仕事が終わればなゆみは英会話学校へと足を向けるが、今度は二階が試験の場と変わりつつあった。

ジンジャに会ったらどんな顔をしていいのかわからない。

そして出会ってしまったときはぎこちなくなる態度が目に見えて、想像するだけでも辛かった。

ジンジャと出会うことをどこか恐れている。

だからビクビクとしていつも英会話学校の入り口をくぐっていた。

だが不思議なことにジンジャも坂井もすっかり見なくなってしまった。

きつと昼間のレッスンを取ってるに違いない。自分がジンジャならきつと避ける道を選ぶだろう。

なゆみは何日も会わなくなったことで、そう思えてきた。

開き直りも入ってしまうと、なんだか急に学校の中が色あせて見える。

そして冷静に考えれば、いつかはここともお別れする日が来る。

そうなればジンジャとも会わなくなってしまうんだと物悲しい思いに捉われてしまった。

だけどそれまでここは学校だ。

学ぶところであり遊ぶところではない。

留学を控えている身なのだから一生懸命練習しなくてはと、なゆみは邪念を捨てようとジンジャのことを考えるのを止めるように心がけた。

そして日曜日のこと。

朝のレッスンを終え、例の宗教の事務所へと足を運ぶ。

するとジョンがビルの外の入り口でなゆみを待っていた。

なゆみの姿をみると、笑みを添えて英語で嬉しそうに語りかける。

なゆみにとってはまだ英語の授業の続きのように思えて、英語になると必要以上に調子に乗って受け答えしてしまう。

英語を話せる機会が日本では少ないので、ずっと英語漬けになれるのは歓迎すべきとさえ思っていた。

しかしそれが彼らの戦略であることに気づくことができなかった。事務所に入ると、やはり歓迎の嵐。

VIPのような扱いを受けて喜びを表現されると、気持ちがよくなる。

ホストに嵌る人たちがいると言うが、その気持ちが分かるような気がしていた。

やばいやばいと時々気を取り直す。

「なゆみさん。いらっしやい。よく戻ってきてくれました」

柳瀬が深々とお辞儀をして迎えてくれた。

ジョンも何か色を添えるように言っている。

なゆみは愛想笑いを返すと、また自分も戻ってきたことを喜んでいるように思われた。

「今日はですね、なゆみさんに取って置きの情報があるんですよ。

これを見てもらえば、私たちがいかにこれからどうすべきかわかるんです。是非見て下さい。30分程度ですから」

「えっ、ビデオ？」

氷室が言っていた話が頭によぎる。

そしてすぐに視聴室に案内された。

そこにはパーティションで区切られいくつもの小さなテレビが各小さなスペースに置かれている。

すでに誰かがテレビの前に座って真剣に観ていた。それを横目になゆみもその一つの小さなスペースに座らされ、ヘッドフォンをつけビデオを見せられた。

何も言えず、なゆみはなすがままに大人しくビデオを観てしまった。

内容は聖書に基づいていることだった。

人類は罪を常に犯している。

それを悔い改め、常に心をきれいにしていればやがて永遠の命を手に入れられるなどと語っている。

「うそ」と思わず呟いてしまった。

(氷室さん、私、ほんとに引っかけちゃったみたい)

そうして視聴が終わると、また柳瀬がなゆみをテーブルに案内して内容について聞いてきた。

「どこがよかったですか」

なゆみは返答に困ってしまった。

まさに氷室が言っていた通りになっている。

それでも柳瀬の仏のような笑顔と親切な態度を邪険にできない。

そしてジョンが英語で力入れて説明してくる。

なゆみは逃げられなくなっていった。適当に覚えていたことを言ってみた。

「そうですね。いいところに気がつかれました。その通りなんです。なゆみさんは普通の方と違って理解力があります。きっとこれは神のお導きですね」

どんどん先へ進んでいく。まるで神の国へ案内されるようだった。ビデオの内容のことが終わるとあとは雑談だった。ジョンがしき

りに話しかける。

「ジョンはなゆみさんのことすごく気に入ったんですって。ずっと忘れられないって言ってたんですよ」

柳瀬が説明する。

「そうですね。ありがとうございます」

形だけのお礼を言っても、この人たちは本気にとって、なゆみも喜んでいいると思ひ込む。

なゆみはどうしていいのか分からなくなってきた。

そして毎週日曜日はこの状態がずるずると続いていった。

季節は初夏を迎え、ゴールデンウィークも過ぎた頃だった。

紀子が結婚準備にとりかかるために辞めてしまい、新しくアルバイトが数名加わった。

入って来た女の子達は純貴好みで、容姿、スタイル共にいい。

一ヶ月過ぎると今度はなゆみが教える立場となっていた。

「たかが一ヶ月でえらっそうにするなよ」

氷室がすれ違いざまに言った。

なゆみは隠れて舌を出して威嚇する。

氷室はお見通しだと、クククと少しだけ肩を震わせて笑っていた。

そんな時、純貴がなゆみを呼んだ。

「斉藤さん、ちょっと」

なゆみはなんだろうと近寄る。

「えーと、川野主任のリクエストもあって、斉藤さんに隣のビルの支店で働いてもらうことになりました」

「えっ、移動ですか？」

なゆみも突然のことにびっくりしたが、氷室もまた寝耳に水だった。

思わず問いたです。

「専務、川野主任のリクエストってどういうことだ」

「あっちもアルバイトが辞めちゃったから、少し慣れた子をまわしてくれって言われたんだ。アルバイトは新しく入ったばかりだし、ベテランの敷川さんが辞めてしまっって、うちに残ってるベテランは上野原さんだけですよ。彼女には新人を教え込んでもらわないとい



けないので、うちから出せるのは斉藤さんしかいないんだ」

氷室は川野の勝手なリクエストにむっとしてしまった。

「はい、わかりました。いつから行けばいいですか」

「じゃあ、早速今から行ってくれませんか。こっちに置いてるタイムカードと荷物も一緒に持って行って下さい。これからずっと向こうって事になるので、こっちにはもう来なくてもいいですからね」

「はい。かしこまりました」

氷室は呆然としてしまった。

心の中は波立っていても、感情に表さないように必死で抑えている。

働く会社は一緒でも場所が違う。

距離的にすればそんなに遠くないのに、それなのにもう毎日顔を合わせられない。

氷室はどうすることもできず気持ちを隠すためにも自分の椅子にどしりと腰を下ろした。

コンピューター画面を睨みながら、業務を機械仕掛けのようになす。

なゆみもまた、一応笑顔で応えたものの、純貴がどこかへ行くとき口角はすぐに下がった。

「サイトちゃん、向こうにいったっちゃうのか。寂しくなるな」

ミナが側に寄ってきて残念がった。

「でも時々何かあるときは誘って下さいね」

「うん、絶対誘う」

なゆみは控え室に入って自分の荷物を持ち出した。なんだか急に

寂しさがこみ上げる。

氷室とこれから顔を合わさないのが信じられなかった。複雑なため息が大きく体から出て行く。

控え室からであると、氷室を真つ先に見たが、氷室は背中を向けたままで振り返ることもなく黙々と仕事をこなしている。

なゆみは振り切るように「いつてきます」と声を掛け、そして一礼すると本店を去っていった。

氷室は一層ふてくされ、キーボードを叩く力が強くなっていた。そして川野を恨んでいた。

そんなことも知らず川野はなゆみを歓迎する。

「おー、早速斉藤が来てくれたか」

川野のにやけた顔を見て、なゆみはそのうらの糸を引いたようなネチネチも一緒に見ていた。

「サイトちゃんが来てくれて嬉しい」

千恵はやっぱ優しく迎えてくれた。

「またお世話になります。どうぞ宜しくお願いします」

「はいはいはい、こっちこそ宜しく」

川野がなれなれしく肩に触れた。氷室が触れたときと違って悪寒が走った。

控え室はこれまた小さく、家のトイレの中に籠っているようだった。

そこにごちゃごちゃと色々なものが置いてあり、これからここで着替えて休憩するのかなと思うと、息苦しくなる。

そして自分のタイムカードを壁に掛けてあったラックに置いた。

もうあつちには戻れないんだと思うと、なんだか寂しかった。

8月末までの契約だが、あと約三ヶ月。

もう氷室とも会うことがないのだろうかと考えていた。

支店での仕事は、本店と比べて動き回る範囲が少なく、業務についてにはなんだか楽に思えた。

仕事に慣れて勝手がわかるようにもなったからかもしれない。

だが一つだけ何か物足りない。

緊張感？　なんか違う。

刺激？　これも違う。

トキメキ？　ま……　さか……

足りないものは何か分かってはいたけど、それをはっきりと口に出せなかった。

そして季節は早くも梅雨になる頃だった。

あつという間に月日が経っていく。

氷室とは移動以来、顔も合わすことがなくなった。

時々電話で氷室と話すことがあるが、仕事の連絡や商品の確認などビジネスの話題だけだった。

それでも氷室は「頑張ってるか」と遠慮がちに様子を聞いてくれた。

なゆみは「はい」としか答えを返せない。

その後電話を切れば、なぜかいつも虚しさが残る。

「斉藤、悪いが、この商品を本店に届けてくれないか」

川野に言付けを頼まれ、なゆみは久しぶりに本店に向かった。

ずっと見ないと違う場所に見えて不思議なものだった。

知らない人がまた増えている。

そしてそこで、氷室と話をしている新しいアルバイトを見てしまった。

あのポジションにはいつも自分がいたのにと思つたんだか胸がきゅんとしてしまった。

「お疲れ様です」

「サイトちゃん。久しぶり」

ミナが喜んでくれる。

あまりよく知らない新しいアルバイトの人たちはなゆみの存在など全く知らないとでもいう態度だった。

氷室をちらりと見ると、目が合った。

そして氷室はあごをしゃくるように挨拶をしてくれた。

なゆみはにつこりと微笑んだ。

言付かった商品をミナに渡すともう用は終わりだった。

すぐさま本店を後にする。

ほんの一瞬だけだったが氷室の顔を久しぶりに見られて心臓がドキドキとしていたことに気がつく。

知らずと制服の胸の辺りをぎゅっと掴んでいた。

「氷室さん？」

アルバイトの女の子に声を掛けられて、氷室ははっとした。

なゆみの後姿を目で追っていて意識ここにあらずの状態だった。

気を取り直すが、急にやる気を失うと何を話していたかすっかり忘れていた。

もう用はないと、デスクに戻り座り込む。

その直後に誰からも話しかけて欲しくないオーラを体から出していた。

仕事もする気なしだった。

しかしそんなときに限って用事が急に入り、氷室はかなり離れた支店に呼び出されてしまった。

「今日は残業か」

なゆみの顔を中途半端に見せられた後は氷室には堪えるものがあった。

その日、なゆみは仕事が終わるといつものように英会話学校へ向かった。

ジンジャを見なくなってから随分と経っていたため、もう会えないんだと決め付けていたので少しは気が楽になっていた。

授業が始まる前、ラウンジで一人ぼつと座っていると、頭をこつんと軽く叩かれた。

なゆみが振り返ったとき、そこにはジンジャが立っていた。

「よっ、タフク。久しぶりだな」

「ジンジャ！」

「お前仕事辞めたのか？ 時々見にいったけど居なかったぜ」

「えっ、来てくれてたの？」

「ああ、あいつはいたけど、失礼な奴だからタフクは居ますかなんて聞けなかった」

なゆみは勤務先が変わったことを告げたが、ジンジャが目の前にいるのが信じられなくて、驚いた顔のまま凍ったみたいになっていた。

「なんだ、場所が変わっただけか。それにしてもなんだよその顔。お化けでもみるような感じだぞ」

「えっ、いやだ。だって久しぶりなんだもん。びっくりしちゃった。ジンジャはこれから授業とってるの？」

「ん？ いや、今日は取ってない。タフクを探しに来たんだ」

「えっ」

「俺さ、就職内定もらったんだ」

「うわぁ、おめでとっ」

「ありがと。ずっと苦しかったよ。でもタフクにはちゃんといいたかったんだ。それと謝りたかった」

メガネを通してジンジャの大きな瞳が潤いを増したように見えた。後悔を告げているような罪悪感がその中に潜んでいるようだった。

「謝るって、別にジンジャは何もしてないよ」

「俺さ……」

その時、先生が授業が始まるぞとなゆみに声を掛け、ジンジャの言葉が遮られた。

「授業だったな。そしたらまた今度ゆっくりな。今日は会えただけでもよかったよ。ほら、遅れるぞ、早く行ってこいよ」

「…… うん」

なゆみはしぶしぶと、後にする。

なんだかとても複雑だった。

ジンジャは何を言いかけたのだろうか。

なゆみは教室に入る前に一度後ろを振り返った。

ジンジャはその場を動かさなゆみをずっと見ていたのが、すぐに目が合った。

そして優しく微笑んで手を振っている。

以前と変わらないやさしいジンジャがそこに居た。

「(キティ、何をしていますか)」

先生に突然当てられて、なゆみは体が飛び上がるほどはっとした。

一斉に視線を浴びて、皆と目が合うと気恥ずかしくてたまらない。苦笑いになりながら、たどたどしく疲れていたことを押し出して謝るが、先生は調子にのってわざといじめるように叱ってくる。

そのやり取りがクラスの笑いを誘っていたが、なゆみは素で困っていた。

その後プリントに沿った質問をされたが、授業を上の方で聞いていただけに内容がちんぷんかんぷんで何も応えられず、余計に焦ってどんどん失態に繋がってしまった。

隣の人が教えてくれたお陰でその場は凌げたが、その後も早く授業が終わらないかなとしきりに腕時計を眺めてしまった。

ジンジャに今晚電話しようかと思っていたが、帰れば夜遅くなるし、前回のようにならまた怒らせてしまったらと思うと電話をかける勇氣もしぼむ。

だけどやっぱりした方がいいのだろうか。

あれこれ迷いが生じているうちにどんどんぼーとした態度になっていたのだった。

久しぶりに会ったジンジャ。

変わらぬままにまた笑顔を向けてくれた。

いつも追いかけて、そして素直に「ジンジャが大好き」とまで恥ずかしくもなく普通に声に出して言っていた日々。

ジンジャに彼女が居ると知ってから、あの時が嘘のように突然仲



たがいになつてしまつて、いともあつさり縁が切れたような状態がずっと続いていた。

次第に諦めて、それを受け入れる気持ちになつていたところに、以前と変わらない様子でひよっこりと自分を探しに現れた。

嬉しかった反面、どこかもやもやつとしてしまふ。

なゆみもまた心に変化を生じている。

ジンジャと会わなくなつてから心の中に新たに根付いたものがあった。

しかしジンジャがまた現れたことで、不安定に心の中で何かが揺らいでしまふ。

クラスが終わると、なゆみはもたもたする暇もなく誰とも交わりたくなくて早々と学校を去つた。

外の空気でも吸つてすっきりしたかったが、ビルのドアを開ければ、湿気を含んだ空気がべたつと素肌にふれた。

不快感を抱くと、外に出ても益々自分の心の中に迷い込んだ気分になつて行く。

じわつと湿りこんだ空気に纏わりつかねれば気分は晴れるどころか同じように感化されていく。

駅に向かつて歩きながら何気なく空を見上げれば、ビルとビルの間から覗いている月が傘を被っているようにおぼろげに見えた。

ピントがずれたお月様。

何もかも中途半端だと、やるせない思いを抱きここでもボーっとしていた。

「明日は雨かな」

独り言を呟きながらその月をぼんやりと見つめてみると、突然黒っぽい大きな塊がにゅっと横に現れ肝を冷やすように驚いた。

「今、帰るか。遅いんだな」

「ひ、氷室さん。びつくりするじゃないですか。一体こんな時間に何をしてるんですか」

「仕事の帰りだけど。何か？」

「でももう9時過ぎてますよ」

「残業だ。支店周りとかたまにあるんだ」

本店でなゆみの姿をチラッと見た後、急に入った別の支店での仕事。

うつとうしくてやる気も何もなかったが、このときになって氷室は突然入った残業も悪くなかったと思った。

街明かりの光に微かに照らされたなゆみのシルエットを見つけたときは、久しぶりに身が軽くなったように夢中で走って追いかけてしまった。

だがそれを悟られないように、表面はクールを装っている。そんな氷室の気持ちも知らずになゆみは力なく形式的に答える。

「あつ、残業だったんですか。それはお疲れ様です……」

「なんだ、元気ないけど、またなんかあったのか」

「えっ、いえ、別に」

「嘘言えっ！ あつ、もしかしたらジンジャが現れたんだろ。最近本店で時々見かけたぞ。なんだかお前のこと探してた感じがした」  
なゆみから小さな吐息が漏れた。

「やっぱり、氷室さんは洞察力がありますね。その通りです。彼、

就職の内定を貰ったって報告に来ました。その後も何か話したそうにしてたんですけど、私の授業が始まって、それで彼は先に帰ってしまいました」

「ふーん、いつも煮え切らないね。で、お前はジンジャとどうしたいんだ？」

「えっ、別にそんな、どうしたいとかって言われても」

「好きなんじゃないかったのか」

氷室はさりげなくなゆみの心境を探る。

「だけど、ジンジャには彼女がいるし」

「お前、本当に彼の口から聞いて確かめたのか？ 自分でそう思い込んでるだけかもしれないじゃないか」

もしもの対応にも備えて違う角度からも伺ってみるが、氷室の唇が尖がって声の上擦っていた。

なゆみはじつと前を見据えて黙ってしまった。そして突然氷室を見つめる。

「なんだよ。急に」

「私、わからなくなりました」

「何が」

「だからほんとにジンジャのこと好きなのかなって。なんていうんだろう。恋してるとき、すごく楽しかったんです。今日はレッスンに来るかなとか、クラスで思いつきり一緒に笑ったとか、声を掛けてくれたとか、そんなちよっとしたことでもうきうきできることが嬉しかった。ジンジャはそれに合わせてくれて、てっきり特別な関係だっと思って思い込んでしまっただけで、そして益々気持ちはエスカレートしていった。でも……」

「でも？」

「少し距離ができたとき、ジンジャと学校で会わなくなったんです。ジンジャが避けてたのかどうか分かりませんが、私も8月末にはあの学校終えるんです。そうするともうジンジャに会える機会がなくなっちゃう。そして私はアメリカに一年留学するし、そしたらもうそれまでなんだって急に夢から覚めたような気持ちになりました」

「だから、何がいたいいんだ？」

「なんていうんだろうこういうの。英語にするとテンポラリーラブ……」

「テンポラリーラブ？」

「仮の恋っていう意味。そのときだけ盛り上がって、勝手に好きになつて、そして時期が来たら忘れていく。私も雰囲気になすごく酔っていたかも」

「面白いこというんだな。テンポラリーラブか。それって、本気の恋には繋がらないのか」

「本気の恋？ それだとトゥルーラブって訳すのかな」

「それは真実の恋って日本語の方がぴったりだね。本気の恋はアーネストラブ、またはシリアスラブの方がじっくりくるかな」

「氷室さん、もしかして英語得意？」

「得意というのか、多少はできる。これでも学生の頃は勉強頑張ったからね」

「それじゃ、今からもまたやり直せばいいのに…… あっ、ごめんなさい」

「つい、口が滑ってしまっただが、なゆみはいつか氷室がこれで気を悪くしたことを思い出し、慌ててしまう。」

「そうだな。そろそろやり直してもいい頃かもな。俺もお前の言葉

を借りるなら、今はテンポラリージョブだな。飯の仕事」

「氷室さん、なんか変なものでも食べた？」

なゆみは素直に受け答えする氷室にびっくりしてしまつた。

氷室の顔を瞬きしながら見つめると、暗闇の中でも薄っすらとした光を受けて氷室の瞳が黒くつややかに光っていた。

それはまるでやかな優しい目に見えた。

「はっ？　なんだよそれ。でも、変なものには出会ったかもしれない」

「ん？」

「ところで、なんの話してたっけ？」

「えっ、さあ？」

会話は一旦そこで途切れると、二人はおぼろげな月を同時に見上げていた。

傘を被った月は、とても曖昧ではつきりしない。氷室もまた自分のこの状況と重ね合わせている。

なゆみはすぐ隣にいても、それは思いが届かない限りとても遠い。一緒に肩を並べて歩いていても氷室はすつきりしなかった。

そして久しぶりに口を交わしたなゆみはまたジンジャのことで悩んでいる。

その姿を見れば、この湿気を含んだじめつとした嫌な空気が心にどンドン溜まっていくようだった。

心の中もじめじめ。

暫く続いた沈黙と迷いを生じているなゆみの気持ちの中に割り込もうと氷室はぼそつと呟く。

「9月から留学か。斉藤はアメリカでアメリカ人とテンポラリーラブをするのか」

「えっ。またテンポラリーラブの話ですか。そんなに気に入りました？ その言葉」

「いや、正直、そんなの嫌だなって思った。俺は惚れたら一直線でテンポラリーなんてありえないな。目の前から姿が消えてもはつきりと振られない限りずっと思いつけたい」

「だからそれはトゥルーラブなんですよ」

「別に英語にしくなくても日本人なら日本語で、本人に愛してるって言えばいいことなんじゃないか。こんな風にさ」

氷室はなゆみの前に立ちふさがり、真剣に目を見つめ、両肩に手を置いた。

「好きだ。愛してる」

本気が反映された声は甘くベルベットのよう滑らかさを帯び、その声がなゆみの耳に届くとそれは魔法の力を得てなゆみの動きを止めてしまった。

動いているのは心臓だけ。激しく膨れ上がるように収縮を繰り返す。

氷室の目は迷うことなくなゆみを捉えている。

それを見つめればなゆみは益々術にかかって氷室から目が離せなくなつた。

暫く見詰め合っていると、氷室は自分が仕掛けた雰囲気自ら飲まれていつてしまった。

なゆみの肩を掴んでいた手にぐっと力が入り、動かないなゆみにどンドン近づき、彼女の唇に自分の唇を重ねようとする。

そのまま行けば唇同士がくっつくという寸前、なゆみは氷室の胸を両手でどーんと突き飛ばした。

魔法は寸前でとけてしまい、なゆみは怒った瞳を氷室に向けた。

「もう、止めて下さい、からかうのは」

正気に戻ったのはなゆみだけではなかった。

氷室も我に返り、やっちまったと頭を抱えている。

なんとかかこの場を乗り切ろうと誤魔化すためにふっと粹がった笑いをしてしまった。

そしてまたガキのように意地悪く答えてしまう。

「悪かったな、からかうと面白くて。まあお前もまんざらでもな

かつたんだろ」

「いい加減にして下さい！ 氷室さん、そういうことするのよくないです。とくに私みたいにふらふらしているような女には刺激が強すぎます。それじゃ私ここで失礼します」

なゆみはちょうど青に変わった横断歩道に向かって走って去っていった。

氷室はその場でたたずむ。

そして青の信号が点滅して赤に変わると、また慌しく車が行きか

った。

向こう側にまだなゆみが歩いているのがかるうじて見えていた。追いかけることもできず、氷室は道路の反対側で相手にされない道端に転がる石ころのようだと思ってしまうた。

「あーあ本気だっただけについやっちゃまった。でもやっぱりあれじゃ伝わらないか。それに32のおっさんだしな」

その独り言も騒音でかき消されていた。

薄暗い夜空を碌に照らすこともできない街灯のように氷室はその場で暫く立っていた。

(氷室さんの馬鹿！)

どしどしと足に力をいれて闊歩する。

しかしある程度感情を出し切ったところで、また速度はゆっくりになった。

なゆみの心はただ苦しかった。

氷室の声が耳に届いたとき、自分が一瞬でも本気に受け止めてし



まったからだった。

それだけなゆみの心の中に氷室の存在が大きくなっていた。

あのままキスをされてもいいとまで思ったとき、ふとジンジャのことがよぎった。

それと同時に自分でも訳のわからない怒りが芽生えた。

ジンジャが好きだったはずなのに、氷室と接する機会が増えるとそっちに傾きかける。

まさにふらふらしている。

それが許せず、自分でも一体何をしているのか情けなくなる。

そしてその状況も期限付きときていたら、それこそまたテンポラリーラブという言葉に当てはまっていきそうだった。

自分が恋に恋して酔っている状態はもうごめんだった。

でもなぜか胸が詰まってすごく重苦しい。

口に出せない思いがそこに蓄積されているようだった。

次の日、梅雨にふさわしい雨となり、ザーザーと殴ったように雨が振ってるのが店の中からもよく見えた。

それもまたこの時の自分の心の中を見ているようだった。

雨はどんどん降り注ぐ。

店は外に面していたが、ビルの奥に引っ込んでいるため、雨が降っても濡れることはなく、行きかうお客にも雨の影響はなかった。

しかし、どんよりとした灰色の世界とべちゃつとした湿気が混ざって、そこに川野のネチネチさが加わるとかなり不快感は増した。

さらに追い討ちをかけるように、川野は何かとなゆみに触れてくる。

それも中途半端に幽霊が肩に手を乗せるような気持ち悪さだった。

一番嫌な触れ方は人差し指で背中にすーっと線を引かれることだった。

まるで中学にあがったばかりのとき、男子生徒がそろそろ女生徒がブラジャーをしているのか、セーラー服の上から後ろのフックを確かめようと触られたかのようにだった。

気持ち悪い。

それでも川野はニヤニヤした笑いを浮かべてへらへらとしては何も悪いと思っていない。

なゆみはただ耐えていた。

千恵が休憩を取っているとき、川野と二人つきりになるときがあるが、そのとき口癖のように言われる言葉があった。

「斉藤、ホテル行く」

冗談にも程があった。川野は妻と娘が二人居る。

それなのに何を言うのだと、冗談として交わしていたが、最近それが冗談に聞こえなくなってきた。

「嫌です」

「ありえませんが」

「奥さんとどうぞ」

そう言い返しても、あのにやけた顔つきでへへへと笑っただけで効果は全くなかった。

これってセクハラでは？ と思いつつも誰にも言えずなゆみは耐える。

耐えるしか道はなかった。

耐えるといえはもう一つ。

あの宗教のことだった。

留学を控えているので、アメリカに行ってしまうえばフェードアウトできるとばかりに、とにかく耐えることを決め込んだ。

相変わらず、次から次へとビデオを見せられる。

それが結構興味深い作りなので、娯楽としてみると知識を得られた気分になってくる。

元々聖書に書かれてあることを分かりやすく役者や絵を使って説明してるので「へー」と感心することもあった。

しかし、どうしても一歩踏み込んではいけないとブレーキを掛けているのでまだ真剣に信者にはなっていない。

もちろんなるつもりもことさらなかった。

それが相手にも伝わるのか、最近崇拜する信者にしようと大掛かりになってきたように思えた。

日曜日だけの参加が、いつの間にか平日、仕事が終わってからも来いといわれるようになり、英会話のレッスンを差し置いてあそこへ行く回数は増えていった。

夜参加すると、なんと夕食が出てくる。

これも無料で、食べたいとも言っていないのに無理やりに目の前に出される。

柳瀬もジョンも「この料理は本当に美味しい」と絶賛だった。

なゆみがどんなにいらないと断っても、沢山の信者が一同に大きなテーブルに集められ、その中に座らされると一人だけ食べない訳にはいかない。

なゆみは渋々と無理やり口に放り込むように食べてしまつたのだ。

もしかして、この料理に何か薬でも入って洗脳させようとしているのではないだろうかと本気で思うくらいだった。

だからどんなにお腹が空いていても美味しいと感じたことはない。

「なゆみさん、この料理本当に美味しいでしょう。皆わざわざ食べに来るくらいいつもここに集まるんですよ。僕もその一人で、今夜のメニューはなんだろうって思うことの方が多くなりました」

柳瀬がいつもの仏の笑みを添えながらなゆみに話しかける。そんな顔をされるとなゆみはいつも逃げ場を失う。

「はあ、そ、そうなんですか」

なゆみは笑顔を返して、とにかくこの後喋りたくないと思目の前の料理を無理やり口にいれた。

またそれが美味しいと思って食べているように思われるために、何をやっても彼らの思う壺に嵌っていった。

周りの人たちを見れば、すっかり信じきって何も疑っていない。

そしてその後はそんな信者達と交流会のようにゲームが始まった。

(怖いよー)

なゆみはこれもあと少しの我慢だと言い聞かせる。

アメリカに行ってしまう姿をくرامさせることができる。

これ以上の試練はもうないと思しながら、ひたすら耐えていた。

そしてこの後、更なる大試練が待っているようとは想像もつかなか

った。

もう、一人の手では解決できなくなる段階まで来ていた。

「そろそろ、合宿に参加されてはいかがでしょうか」

いつものようにビデオを見せられて、感想を述べるためにテープルについたそのときだった。

合宿の話が降って沸いた。

なゆみの担当、すなわちこの世界に導いた柳瀬がジョンとタツゲを組んでなゆみを信者にしようと試みていたが、なゆみが意外にもしぶとくて他の信者のようにならないのを見かね、その事務所の責任者がとうとう出てきた。

なゆみの前に座ってにっこりと微笑んでいる。

池上カスミ、推定26、7歳。物腰柔らかく、上品な身のこなし、そして気品溢れる服装と絶対に絶やさない聖母のような深い愛情こもった笑顔。

美しいイメージがつく形容詞の全てが当てはまるくらい、稀に見る真の美女だった。

なゆみも肌の色は白いとよく言われるが、池上カスミはそれ以上に透き通る雪のような白さを持ち、男はもちろんだが、女性のなゆみも思わず見とれてしまうほどの美しい人だった。

その姿で優しくそして笑みをたっぷり浮かべてなゆみに合宿の話を持ちかけた。

見かけの美しさに惑わされて、なゆみは一瞬「はい」と条件反射で言ってしまうそうになったが、合宿の言葉の意味が脳に伝わると、一度に目が覚めた。

「合宿ですか？」

「はい、なゆみさんもそろそろ、参加される時期に来たと思います。ちよつと来週の土日に行われます。是非参加を」

「いえ、あの、土曜日は仕事がありますし、休めません」

「でも、みなさん、合宿参加を優先されますよ。一日くらいお休みを取られてもいいんじゃないですか」

「取りたくないです」

「それじゃ土曜日はお仕事何時に終わられるんですか？」

「5時には終わりますが」

「じゃあ、6時から途中参加されるといいです。ここから電車で30分のところですし、仕事が終わっても合宿までの移動は問題ないかと。特別にということの手配させていただきます」

「えっ、でも、こ、困ります」

「なゆみさん、よくお考えになって下さいね。ここに参加されたと言つことは神さまが常に特別にご覧になってるんですよ。それを否定することはどういふことかお分かりですね。地獄に落ちるんですよ」

「えっ、そんな」

「それに、なゆみさんは9月から留学のご予定とか。それもね、私は賛成できません。できたら一緒にここで勉強すればいいんです。ここには宣教師も居ますし、いつでも英語だって話せます」

これにはなゆみは強く反発した。

ぎゅつと体に力が入り、息が突然荒々しくなるほど気持ちが悪れしてしまう。

「嫌です。留学は私の夢です。それを奪われるなんて絶対嫌です」  
突然激しく否定する。

池上カスミの眉が少しピクリと動いた。

しかしすぐに気を取り直して、美しい容姿に似合った完璧な笑顔をなゆみに向けた。

「なゆみさん、どうぞ落ち着いて下さい。何も恐れることはないんですよ。ここで学べば必ずいい風に事が運びます。今までビデオをご覧になって色々と学ばれたでしょ。それになゆみさんはいつも素晴らしい感想を述べられて、私も関心してるんですよ」

なゆみは恐ろしくなってきた、もう言葉が出ない、逃げたい。

(そうだもう来なければいいんだ)

「あの、今日はもう遅いのでまた今度ということですね。なゆみは逃げの体制に入った。」

しかし、池上はそれもお見通しなのか、なゆみが断れないようにもっていく。

「あら、そうですね。じゃあ明日必ずまた来てくださいね。ジョンも待ってますから」

「ジョン……」

なゆみは首をゆっくり動かしした。

隣にはジョンがにこつととして座っている。

英語で多少の会話ができるからと、ついべらべらとなゆみは自分の情報を喋ってしまった。

どこで働いてるか、店舗が入っているビルも知ってるし、店の名前も英語だから忘れてはいない。

逃げたところできつとジョンが柳瀬と一緒に店まで迎えに来るだろう。

なゆみは困り果てた。



池上カスミはなゆみが断りきれないと確信しているのか、余裕の態度でエレガントに席を立った。

「それじゃまた明日ね」

どんなに美人で美しい笑顔といえど、それはどこか寒気を感じ恐怖心を植えつけられるような微笑だった。

そしてジョンが何か話しかけてくる。

「（なゆみ、僕と同じように神を信じれば全てが上手くいくよ）」

ジョンはアメリカで、元不良のリーダーだったらしい。

髪はライオンの鬣のように長くして、自分を一杯連れて粹がってバイクを転がしていたと、昔の話をしてくれたことがあった。

そのときはそんなの信じられなかったが、当時の不良の写真を見せられるとその事実には驚いてしまった。

自分を戒めるためにジョンはその写真を持ち歩き、真迫るものを解き明かすとき人々にそれを見せている。

この宗教と出会って、罪を悔い改めて自分は生まれ変わったんだと、それからは真面目に性格も入れ替えて誠実な人間になったと、いかに信じることは素晴らしいことか身をもって証明している。

それがあるだけにジョンは自信をもってこの宗教を人に薦められるのである。

信じきっているアメリカ人にそれを英語で語られると、なゆみはどうしても強く自分の意見が言えなくなる。

ジョンもまた安らぎを与えるような笑顔をなゆみに向ける。

なゆみはたじたとしながらも、やはり笑顔で受け応える。

ジョンにはそれが二人の信頼だとして信じて止まない。

だからなゆみは益々邪険にすることができずどんどん引っ張られ

ていってしまったのだった。

そしてこの日も駅までジョンに送ってもらったこととなった。

「（なゆみ、明日も待ってるから。なゆみは日本で出会ったどの女の子よりも本当に素晴らしくて素敵だ。だから一緒に活動しよう）」  
というようなことをジョンは言ってるんだとなゆみは解釈した。

『嫌だ！』その一言が言えたらどんなにスカッとするだろう。

しかしジョンのなゆみを信じきっている態度を見せられると失礼な態度はとれないし、どうしてもいえない。

曖昧に返事をして、そしてその日は別れた。

次の日あそこに戻れば、きっと断りきれないでなゆみは合宿に申し込んでしまいそうだった。

行かなければ、自宅にも電話がかかってくるだろうし、店にも来るかもしれない。

どうしてこんなことになってしまったのだろうと、逃げ場所を失い、誰にも相談できずになゆみは困り果ててしまった。

ずっとそのことを考えて、不安な気持ちでいると、中々眠ることもできなかった。

疲労感もたつぷり味わい、一晩でげっそりしてしまう。

そして困ったこの状態で浮かんだ唯一の人物は氷室だった。

その次の日、なゆみは本店のシャッターの前で氷室を待っていた。誰よりも早く氷室が来るのは知っていたし、きっと二人つきりで話せる時間が少しでもあると思っていた。

藁にもすがりたい必死さと相当の覚悟を決めて、なゆみは今にも

溺れそうなくらいの水面に漂う気持ちで不安げに立っている。  
どうすればいいのか相談に乗ってもらおう。

氷室しか頼る人がいなかった。

氷室になら怒られようが罵られようが全てを話すことができる。

ところが、氷室が新しく入ったアルバイトと肩を並べて歩いてきた。  
た。

そうだった。

自分より後に入ったアルバイトのことを忘れていた。  
何も世話をするのはなゆみだけとは限らない。  
以前と全く同じようになると思う方が間違いだった。

「よお、斉藤じゃないか。どうした朝早く本店に来て」

「お、おはようございます。あの、その」

「なんだ、目が赤いけど、またなんかあったのか」

「いえ、その、今流行ってる映画のチケットがこっちにあったかな  
と思つて、出勤前に確かめようと思つてきました」

氷室は訝しげな表情をしながらシャッターを開ける。

そして先に中に入ると、その次に見知らぬアルバイトの女性がな  
ゆみをちらりと見てから後をついていった。

化粧は濃いのが、モデルのような風貌の美人タイプだった。

氷室と肩を並べて歩いてた姿はとてもゴージャスなカップルに見  
えた。

どこか気が引けたが、咄嗟に嘘をついたためになゆみも中に入っ  
て、とにかくチケットを見渡すふりをした。

「あつ、やっぱりこっちもなかったです。どうもすみませんでした。

それじゃ失礼します」

「おい、斉藤！」

氷室が呼び止めようとするが、なゆみはするりとシャッターをくぐって走って去っていった。

「なんだあいつ。なんか変だな」

「あの方、隣のビルの支店で働いてる人ですか？ すっぴんでしたね」

アルバイトの奈津子が馬鹿にしたように言う。

「いいんじゃないか。化粧を取って誰だかわからない素颜になるより、すっぴんでも、充分見られる顔の方が。あいつ化粧したら絶対今以上にきれいになるよ。君は化粧をとった顔、人にみせられるのかい？」

奈津子は言葉に詰まって言い返せなかった。

氷室に相談しようかとずっと考えて、そしてやっと勇気を持って会いにいったのに、思うように話せなかった。

そして隣にいた新しいアルバイトの奈津子と一緒に出勤してきたところを見てしまうと、弱り目に祟り目となって一層衰弱する。

時間が経つ度に今夜のことを考えるとどんどん気が滅入っていく一方だった。

「サイトちゃん、一体どうしたの。体の調子でも悪いの？」

千恵が心配する。

「えっ、うつん、大丈夫。ちょっと寝られなかっただけ」

「そう、それならいいんだけど。なんか困ったことがあったら遠慮なくいつてよ」

「なんだ、斉藤、寝てないのか。もしかして乱交パーティーでも参加

してたのか？」

また川野のセクハラまがいが始まった。

なゆみはもう否定する気力も残ってなかった。

「はい……」

「えっ、サイトちゃん！ どうしたの？ やっぱり今日はおかしい

よ

「うほっ！」

千恵はびっくりしてたが、川野は想像を膨らますくらい喜んで  
た。

そんなことどうでもいいと、なゆみは店の壁にかけてあった時計  
を虚ろな目で見ていた。

一時間、一時間と閉店時間の7時が刻々と迫ってくる。

追い詰められると妄想状態に突入するように、このときジョンが  
ここまで迎えに来るんじゃないかと、閉店時間がすぐそこまで迫っ  
たとき、店の前を誰かが通る度にどきっとしていた。

突然鳴り響いた電話の音ですらビクビクする。

千恵が受話器を取り話している。

そして受話器の下の部分を押さえてなゆみを呼んだ。

「サイトちゃん、氷室さんから電話」

「えっ」

なゆみは恐る恐る受話器を耳に当てた。

「お、お疲れ様です。斉藤です」

「お前、今朝何か俺に言おうとしてただろう。一体何があったんだ」  
「いえ、その何でもありません」  
「電話で言えないのなら、仕事終わったらそこで待ってる。俺がそ  
うち行くから。わかったな」  
電話はすぐに切れた。

なゆみは受話器をもったまま暫くぼーっとしていた。

そして涙腺が緩んで涙ぐんでしまう。

時計は7時を迎えた。

川野が勢いよくシャッターを閉める音が聞こえてきた。

なゆみはそれと同時になんだか力が抜けてへなへなとそこにあっ  
た椅子に腰掛けてしまった。

朝、店の前でなゆみが待っていた姿に氷室はドキッと胸が跳ね上がったが、奈津子も隣にいたためにいつも通りを装う。

その時、なゆみの顔を見れば、どこか青白くやつれている。そして赤い目。これは何かあったと直感ですぐにわかった。

咄嗟についた言い訳も嘘に違いない。

しかし側にいた奈津子が邪魔でなゆみに問い正せない。そうしているうちになゆみはあっさり去ってしまった。

そのことがあってから、氷室は一日気になって仕方がなかった。それとなく支店に電話をかけていたが、そのときに限って川野が取るものだから、なゆみに代わって欲しいなどと言えずにいた。適当にそれらしいビジネスの話をしていたが、何度も同じことが続くと次第に話のネタにもつきてしまった。

仕方がないと閉店間際を狙って再度掛けてみたのだった。

その頃になれば、川野はきっとシャッターを閉める準備に入っているから遠ざかる。電話から遠ざかる。

そうすればなゆみか千恵のどちらかと話せるチャンスがあると思っていた。

そしてその時電話をかければ千恵がちょうど出た。

千恵もまたなゆみがおかしいことを氷室に告げたこともあり、氷室はこれはただ事じゃないと確信した。

閉店後、女性従業員たちが着替えて出て来るのを氷室は椅子に座りながら足をゆすって待っていた。

何人かは控え室から出て行って先に帰っていったが、一人だけ中々出てこないのがいた。

奈津子だった。

氷室は時計を見てイライラしてしまった。

「おい、何してんだ。早くしてくれないか」

大きな声で言うと、奈津子は「すみませーん」と軽々しく謝っている。

出てくると、奈津子にはにっこりと笑っていた。

口紅の色が鮮やかになっているところを見ると化粧を直していたようだった。

「氷室さん、お待たせしました」

「何が待たせただ。遅いんだよ」

「じゃあ、お詫びに食事でも行きませんか」

どうやら奈津子は氷室に気があるようだった。

「ヤダ！」

子供っぽく素で嫌がった叫びが響いた。

「ええー、どうしてですか。いいじゃないですか」

甘ったれた声、一番きれいに見える角度を知っているのか、首を少し傾けてそそっている。

こういう女は氷室は嫌いだった。

しかし、うまく扱わないとややこしくなる。

一度断ってもまた何度と近寄ってこられそうな予感もしていた。



氷室は大きいため息をまず吐き出し、そして真剣な顔つきを見せた。

「あのな、俺は（お前みたいな）女には興味ないんだ。アレだよアレ。特に少年（っぽい斉藤）好きのアレ」

奈津子の顔が引き攣って歪んだ。

そして無言で歩きシャッターをくぐっていった。

氷室はクククと笑いを堪えるのに必死になる。

肝心なところは飛ばしたが、嘘は言っていないと自分の言い訳に満足だった。

しかし、こんなところで時間を食ってるわけにはいかないと、シヤッターの鍵を閉め早々と走って行った。

（早く斉藤に会わなければ。あいつ本当に待っているだろうか）  
気が気でたまらなかった。

千恵も川野も去った後、シャッターが閉まった店の前でなゆみは氷室を待っていた。

体を丸めたように下を向いている。

行き交う人々は必ずじろじろと見ていただけあって、不安と恐怖と疲労が混ざり合って弱りきっていたのが誰の目にも見えた。

氷室がビルの角を曲がったとき、なゆみのその姿がすぐに目に入るが、亡霊が立っているように見えたくらいで、一層何が起こったのか心配になった、

「悪い、待たせたな」

氷室は必死で走ってきたのか息が上がっている。

「氷室さん」

張り詰めていた神経がとつぜんプツリと切れたように、氷室の顔を見るなりなゆみは目に一杯涙を溜めだした。

「どうした、一体何があった」

なゆみは心から心配してくれている氷室の顔を見るだけで言葉がすぐにでてこない。

口だけがパクパクと動いていた。

「ほら、落ち着け。ちゃんと聞いてやるから、慌てるな」

氷室は安心させようと優しく微笑んだ。

普段きついクールな部分を持ち合わせているが、なゆみに時々見せる優しい顔。

このギャップが激しいほど氷室のいい所が浮き上がり、それがなゆみの胸に温かく届く。

そして一度息を大きく吸って、勢い付けて言葉を発した。

「私、ひっかかりましたっ！」

「何に？」

「宗教に」

「はっ？」

なゆみは氷室に怒鳴られると思いきや少しすくんで目を閉じた。しかし氷室は落ち着いて対処する。

「詳しく話してみる」

なゆみはかいつまんで説明する。

氷室は自分が知っている事柄と確認するように頷きながら聞いて

いた。

そしてどこから携帯電話を取り出し、誰かに掛けだした。

「もしもし、父さん？ 俺、この間教えてくれた宗教のことだけど、そう、その話。それで被害者はどうなった？ うん、うん、そつか。示談で解決したのか。それなら話は早い。またもう一人、被害者が出たよ。多分同じ宗教だと思う。うん。そしたら、父さんの名前借りてもいいかな。わかった。ありがとう。それじゃ、用はそれだけえつ、わかったよ、その話はまた今度ゆっくり聞くよ。とにかくありがとう」

なゆみはぼーんとその話を聞いていた。

「よし、話はずいた。さあ、今からそこへ乗り込むぞ」

「えつ、あのどうなってるんですか」

「ああ、おれの父は弁護士なんだ。あの宗教の話、父から聞いてさ、お前と同じように被害にあった奴が居て、父が依頼を受けたんだ。裁判沙汰になるのを宗教側が避けて、話し合いで解決したんだとさ。その被害者はおかしいって自分で気がついて弁護士立てたから抜かれたけど、抜けたいって思ってもコントロールする奴が強いとなかなか一人では解決できないものさ。とにかく俺に任せろ」

「氷室さん、本当にごめんなさい」

「ほんとに仕方ねえな、お前は。なんでもっと早く言わないんだよ。追い詰められるまで一人で悩みやがって。ほんとに目を離すと何をしでかすかわからないんだから。一生懸命なものいいけど、時にはしっかりと周りのことを見るよ。ほら、泣くな」

氷室はなゆみの頭を大きな手で包むようにくしゃつと撫ぜた。

なゆみはそれがとても嬉しくてすーっと不安だったものが抜けた気がした。

氷室を見上げるとそこには温かい柔らかな光を浴びた優しい目が

自分を見ていた。

宗教の事務所が入っているビルの前に来ると、ジョンが待っていた。

「あれが、ジョンだな」

氷室はなゆみの手をぎゅっと握ってつないだ。

なゆみはびつくりして氷室の顔を見ると、氷室は何も言うなと目で合図した。

「ハイ」

氷室はジョンに挨拶する。

ジョンはキョトンとしているが、氷室が流暢な英語を話し出すと、ジョンはだんだん眉間に皺が寄って不快な顔つきになっていった。

なゆみは氷室の英語に驚く。

こんなにも話せるとは思ってなかった。

びつくりして集中して聞いていなかったが、所々にフィアンセや近づくな、訴えるぞというようなことを言っているのが聞き取れた。そして事務所の中に入れば、責任者を呼べと一騒動起こした。

「一体あなたは何ですか。警察を呼びますよ」

池上カスミが普段見せたこともない嫌悪感を抱いた顔で氷室に話している。

「ああ、上等だ。呼べばいい。こっちはもう弁護士の手配をしている。氷室弁護士といえば、あんたもその名前を聞いたことがあるん

じゃないか」

池上の顔つきが一瞬で変わった。やばいともいうような危機感を感じている。

「いいか、氷室弁護士は俺の父だ。そしてここにいる、斉藤なゆみは俺のフィアンセだ。これ以上なゆみに近づくとまたお前たちを訴えてやる」

「ひ、氷室さん……」

なゆみは小さく呟く。氷室は余裕だという笑みをなゆみに見せて、安心させた。

池上は声を絞り出すようになゆみに問いかける。

「なゆみさん。本当にそれでいいのですか。折角築き上げたことを破壊してまで、その悪魔の言うことを鵜呑みにしてしまうのですか」「あなたはまだそんなことを」

氷室があきれ返る。

「だがそれよりもなゆみが切れた。氷室を悪魔呼ばわりされて黙っていられなくなった。」

今まで我慢していたことが爆発する。

「悪魔はあなたたちよ！ 純粋な人の気持ちを利用して信じ込ませて、そしてその人から夢や希望までも取り上げようとした。そんなことができるのが悪魔なんじゃないの。私は、こんなところ嫌です。あなたたちこそ、地獄に落ちるんじゃないんですか」

辺りはシーンと静まり返り、周りに居た人たちが禁句を聞いたように固まっていた。

池上は、怒りの目つきをなゆみにぶつける。

普段見せていた慈悲深い笑みはこのとき見せられないほど頭にきていたようだった。

そして自ら見切りをつけたといわんばかりに言い放つ。

「わかりました。なゆみさんは脱会ということですね。それではこれ以上お引止めいたしません。どうぞお引取り下さい」

「はい！ 今までもどうもお世話になりました。それではGod Bless you！」

なゆみは一応礼儀も見せて最後は、神のご加護をとという決まり文句を捨て台詞のように言った。

氷室と手をつないだまま、出口に向かい、そこに突っ立っていたジヨンも無視をして事務所を去った。

氷室が側でしっかりと支えてくれたからやっと勇気が出た。

もう何も罪悪感など感じることはなく、恨みたいなら恨んでくれと言いたいほどの宗教から手が切れる瞬間を実感していた。

そのまま暫く、氷室と手を繋いでビルが遠のくまで無言で歩く。

まだ先ほど抱いた興奮した感情が持続する。

力強くパワーアップしたように体の中から元気が漲るようだった。氷室がなゆみのために取ってくれた行動、危険を顧みずに助けてくれた。

婚約者のフリまでして。

それも興奮の一部だったかもしれない。

誰も後をつけてきてないと後ろを確認をすとなゆみは氷室にお礼を言った。

「氷室さん、本当にありがとうございます。氷室さんが居なかったら、私今頃どうなっていたか」

「もういいよ。きつと俺がお前を助ける筋書きが神様によって作られてたんだよ」

「私、何度氷室さんに助けられたんだろう。感謝しても感謝しきれない」

「だからもういいって言ってるだろ。それにお前だって俺を救ってるんだぞ」

「えっ？ 私が」

「ああ、ギブアンドテイクでいいじゃないか」

「そういえば、氷室さん、英語ペラペラ」

「あれくらいどってことない。いつか海外でも仕事したいって思ってたから、自然にそうなっただけだ」

なゆみはそれを聞いてどうしても口に出したい言葉が自然と出てきた。また機嫌を損ねて怒ってしまうかもしれない。それでもどうしても言いたかった。

「氷室さん、絶対夢を諦めないで下さい。氷室さんがもし過去に何かあって、その時結果的に挫折たとしても、きつとそれは必要な試練だったんじゃないでしょうか。うまくいえないけど、人生に無駄がないっていうのか、その失敗も含めてそれが夢への一步なんじゃないかなって」

「また生意気な口を利いて」

なゆみは怒られる覚悟を決めて体に入力を入れて縮こまった。

「ご、ごめんなさい。折角助けてもらったのに、恩を仇で返すみたいと言っちゃって」

だが氷室は穏やかな表情で、とても素直に受け入れた。

「いいよ、もう慣れた。それに俺も実はそう思い始めたんだ。お前に会ってから」

「えっ」

「俺、また頑張ってみようって思ってる。お前見てたら、そんな気になってくるんだよ。ありがとな」

「氷室さん」

「おっと、俺たちまだ手を繋いでたな。すまない」

「あっ、いえ、こちらこそ」

あまりにも自然に手を握ってたので、その手を離すのがなゆみは寂しくなる。

大きながっしりとした手はとても温かく、心地よかった。それに寄り添って歩いているととても心強かった。

そしてそっと二人の手は離れていく。

なゆみは暫く氷室の手の感触が忘れられなかった。

それは氷室も同じことだった。



殴りこみというほどではなかったが、一暴れに等しい出来事の後、少し燃え尽きたような気分で二人は無言で歩く。

なゆみを助けるためのパフォーマンスに過ぎなかったが、氷室が口に出したフィアンセという言葉と手を繋いだ行為がこのときになつて重く意味を成していた。

なゆみは急に氷室を意識しだしてしまう。

こつそりと氷室を見つめると氷室もまた視線を感じて振り向いて目が合ってしまった。

お互い何かを言わなければと思うと、言葉が出てこずにぎこちなくなってしまうた。

氷室はそんな気持ちを隠そうといつもの調子に戻ろうとする。

「とにかく終わったな。もう何も考えるな。今日は帰って風呂入って早く寝ろ。そしたら全て忘れるさ」

「はい。そうします。あの、氷室さん……」

「なんだよ。礼なら充分聞いた。もう言うなよ」

「でも本当に私、なんてお礼を言ったらいいのか」

「いいってことさ。結構楽しかったぜ。お前の婚約者のフリできたしな。あっ、そうだ俺、見たい番組があったんだ。そんじゃまたな」  
氷室はつい本音を言って、さっさと走って去って行ってしまった。

「氷室さん！」

なゆみは言いたいのと言えない気持ちを抱えて、暗闇の中、人と人との間にすーっと溶け込んでいく氷室の後姿を目に映していた。

氷室もまた二人つきりしていると苦しく、婚約者のフリをしたといつても、本心は好きな女を必死で守ろうとしたことには変わりなかった。

その高揚した気持ちのままなゆみと肩を並べて歩くと、本当に気が持たず制御不能になってしまいそうだった。

充分大人である年齢ながらも恋に操られて心はあどけない少年になったように、氷室はがむしゃらに走っていた。

(なんだよ俺、今頃青春か?)

ある程度走ったところで速度が徐々に落ち、やがて歩き出す。

そして歩けるところまで歩いてやろうとその日は電車に乗らずに自宅まで徒歩で帰っていった。

なんだかそんな自分がかわいく思えたのか、氷室は鼻で自分を笑ってしまった。

それからは二人はまた会う機会がなくなり、勤務時間内で時折電車で声を聞くだけとなってしまった。

宗教のことには一切触れずに、本当に何も起こらなかったかのように氷室は接する。

なゆみは感謝の気持ちを十分に述べられないまま、もどかしさを感じていたが、他にも別の理由が潜んでいそうにどこか落ち着かない。

仕事場が違うと用がない限りお互い滅多に会えないだけに、話すきっかけも全く皆無の状態が続いていく。

そんな時、なゆみは何かきっかけを作ればいいと、お礼の意味を込めて手作りクッキーを作って氷室に持って行こうと思ったが、いざそうしようと思っても、なんだか勇気が湧かずに渡しそびれてし

まった。

閉店後着替えを済ませて、いつものリュックを掴むと、キティのマスコットと目が合う。

『意気地なし、あげればいいのに、そんなこともできないの?』

なんだかそんな風に言われているように思ったが、それはキティの姿を借りた自分の声だった。

結局クッキーはリュックに入ったままとなり、それを肩に担いで、なゆみは英会話学校へ向かった。

ラウンジで知っている仲間が楽しそうに話している輪に入り、持つていても仕方がないとそこでクッキーを皆に差し出した。

「うお、キティ、すごいな」

「サンキュー」

「いっただけー」

それぞれ皆喜んで食べてくれた。

そこにジンジャが遅れて輪の中に入って来た。

「よっ、タフク」

「あっ、ジンジャ」

なゆみはそういえばあれからジンジャは何を言いたかったのか、うやむやになったままだと思いつ出した。

宗教に気を取られすぎてすっかりこのことを忘れていた。

「これタフクが作ったのか。俺もいただけー」

「あっ、そ、それは」

なゆみは思わず、『それは氷室のために作ったクッキー』と言い

そうになって、ジンジャには食べて欲しくなかった。

「ん？ どうした。心配するな。とても美味しいよ。ちゃんと猫の形もあるなんてお前らしいよな」

なゆみは複雑だった。

ジンジャは以前と全く変わらないようになゆみと接する。

ただどなゆみの心の中は何かが変化している。

ジンジャのことを決して嫌いになった訳じゃない。

ジンジャとは軽快なやり取りで楽しく会話が弾むし、ジンジャがちょっかいを出してきたらそれなりに喜んで相手するが、そのときの瞬間はノリもいいしとにかく楽しい。

でもそれがいつか終わりが来ると自分の中で決め付けてしまっていた。

『今は思いつきり楽しめ』と与えられたような状況。

昔は夢中でそれを追い求めていたけど、いつのまにか一歩下がって冷静に見られるようになっていた。

そしてレッススが終わった後、その日一緒だったクラスの皆と途中まで歩いていた。

ジンジャがなゆみと肩を並べ、皆より少し遅れた歩調で歩き出し、なゆみもそれに合わせた。

「タフク、なんか落ち着いてる感じがする。あんなにふらふらしてたのに」

「最後のあんなにふらふらしてたのには蛇足じゃー！」

「ハハハハ、タフクは弄られる性質なんだよ」

なゆみは怒ったフリをするが、口元はむずむずと笑い出していた。

「なあ、今度映画でもいかないか。あまり二人でどっか行くつてこ  
となかったな」

「えっ？ ジンジャと私が映画に？」

「嫌か？」

「ううん、もちろん嫌な訳ないじゃない」

「ちょうど見たい映画があるんだ。坂井と一緒に行っても面白くな  
いし、たまにはタフクでも誘えって思ってたさ」

「どうしてそこで、タフクでも誘えって言い方になるの。だけど私  
も見かけは男みたいなんだけど」

「そっか、気がつかなかったな。充分俺にはかわいく見えるけど」

「えっ？ い、いやだ、なんかジンジャらしくない」

「俺らしくないか。俺ってタフクからしたらどんな目で見られてる  
んだろう」

「どんなって、そりゃかつこよくて、優しくて、えっと、それから  
えっと……」

「なんだよそれ、褒められて嬉しいけどあんまり俺の中身とか分か  
ってないじゃないか」

なゆみはそういえばジンジャについてあまり多くを語れない。

「ほら、タフクの上司のなんていったっけ、あの冷血漢。アイツの  
ことならタフクはまだ知り合って間もなかった頃に一杯あれやこれ  
やって言ってたよな」

「それって悪口だったじゃない」

「でもその後、奴のことはどんな風に見える？」

「えっ、氷室さんのこと？ あの人は……」

なゆみは言いかけたが、その後は心の中で答えていた。

（冷静で、物事を一步下がって見られて、きつい言い方するけど、  
その人のために言葉選んでいつもの確で、それから冷たいけども困

ったときは力を貸してくれて、そして危険を冒してでも助けしてくれる。それから、ちよっと怖くみえるけど本当は隠れて優しく、頭もよくて、才能があつて、それからそれからとても頼れる）

なゆみは黙り込んでしまった。

「どうした。やっぱりまだ失礼な奴なのか」

「ううん、もう離れてしまつてあんまり会わないから、わかんないや」

誤魔化してしまつた。

「そっか、苦手だつていつてたから、離れられてよかつたな。実はさ、もう映画のチケット買ったんだ。タフクの店で。その氷室つて言う人が接客してくれたよ」

「えっ、氷室さんが……」

「そしたらアイツ、” 斉藤と行くのか ” なんて客の俺に聞くんだぜ。 ” もちろん ” つて答えただけだな」

「えっ？ 氷室さんと喋つたの？」

「ああ、相変わらず失礼な感じがしたよ。さて、映画いつ行く？ 今週の土曜日、仕事終わつてから行くこうか？」

「うん、オッケー」

その後、駅でジンジャと別れた。

そしてゆっくりと駅の階段を上る。

7月に入った夏の夜、もわつとした暑さが残る気温の中、湿気を沢山吸い取ってしまったたようになぜか足が重たく感じてしまった。

そしてその土曜日。

その日は珍しくなゆみはワンピースタイプのふわっとしたスカートをはいてきていた。

ショートカットでも女らしく見えるようにとカチューシャでアクセントをつけている。

さらにいつものリュックサックはどこにも見当たらない。

なゆみは基本、動きやすいということでジーンズやショートパンツが多い。

髪も短いのも、手入れが楽だからということであまり見掛けにはこだわってなかった。

それなのに、この日はあれこれ考えて気がついたら普段しないことをしていた。

ジンジャと二人つきりで出かけることなど考えたこともなかったし、まさか映画に誘われるとも思わなかった。

昔のなゆみならびっくりして飛び上がっていただろうが、このときは誘われてこういう時はどんな服をきたらいいのかそっちの方が気になっていた。

ジンジャは一体何を考えているのだろう。

そしてなゆみもどうしたいのかさっぱりわからなくなっている。

とにかく無難にスカートにしたのだが、久々の素足は足元がスースーしてくる。

さらに同じように自分の心にもスースーと隙間風が吹いているような気持ちだった。

川野が休憩を取って席を離れると、なゆみは千恵と二人で羽を伸ばしてリラックスマードに入っていた。

そこに電話が鳴ると、二人は一瞬にして緊張してしまう。

千恵が取ったが、話す内容から本店のミナだとわかると、また再びだらつとしていた。

「サイトちゃん、今日、この間辞めた紀子ちゃんが夕方からこっちに出てくるんだって、それでミナちゃんが、仕事終わったら皆でご飯食べに行こうって。ほら駅前のホテルの中にあるできたばかりのフレンチレストラン。ミナちゃん特別半額割引券持ってるんだって」

千恵がミナと喋ってる最中に知らせてくれた。

「あつ、う、ごめんなさい。今日予定が入ってるんです」  
手を顔の前で合わせてなゆみは申し訳ない顔をする。

「そっか急だもんね」

千恵は適当に会話をしてそして電話を切った。

「折角だから、仕事終わったら本店寄って、少しでも紀子ちゃんに顔を見せてあげてだって。次いつ会えるかわからないからね。それぐらいの時間だったらある？」

「うん。それなら大丈夫。だけど残念だな。あそこのレストラン、今話題になってるよね。高いけどすごく美味しいって雑誌なんかでも紹介されてるの良く見かける」

「うん。私もすごく気になってたレストランだった。一度行ってみたかったんだ。だけど、サイトちゃん、今日は珍しくかわいらしいスカートの服だったよね。一体どこに行くの？もしかしてデート？」

「えっ、いえ、その、友達と映画に」



「ふーん」

千恵はそれ以上聞かなかったが、怪しいとでも疑った目つきで笑っていた。

『デート』

この言葉の響きがなゆみには重たくのしかかる。

ジンジャとデート？

どこかでそれは違うんじゃないかとデートと言い切ることに違和感を感じてしまう。

しかしなゆみはデートの定義がよくわからないでいた。

仕事が終わわり、千恵と二人でなゆみは本店に向かう。

「最近さ、氷室さん丸くなったって聞くね。あの川野さんまでもそう言うくらいだからなんかかなり変わったみたい」

千恵はなゆみがそのことについてどう思ってるのか興味津々で聞いてくる。

「そ、そう？」

「サイトちゃんが来てから氷室さんなんか変わったように私も思う」

「気のせいじゃないですか」

「さあ、実際のところどうだろうね……」

千恵は何か知っているとでもいいたげにその後の話を濁した。  
なゆみはどこか苦笑いになっていた。

氷室が変わった。

それはなゆみが一番最初に気がついたことだった。

何か言えば、きつい言葉しか返ってこなかったし、気に障ること

があれば態度に出では力づくでもねじ伏せようとする無茶な人だった。

押し倒されたり、ホテルに無理やり連れて行かれたり、体を張ってそれはなゆみも体験している。

しかし、それが氷室の心の奥底と関係していて、決して本心からではなかったのは疾うに気がついていった。

そしてその殻がやっと破られて本来の氷室の姿が現れてきている。なゆみだけが知っていた氷室の本当の姿が他の皆も気がつき始めた。

どこか自分から何かを奪われるような感覚を感じてしまい、一抹の寂しさが出てくる。

何も自分の物でもないのに。

なゆみはその気持ちを振り払おうと突然頭を左右に振り出した。

「サイトちゃん、どうしたの？ 激しく頭なんか振っちゃって」

「えっ、いえ、その、虫が寄ってきて」

なゆみは何もないところで虫を追っ払うようなジェスチャーをして誤魔化していた。

本店のシャッターの前で紀子が待っていた。

「サイトちゃん。久しぶり。どうしたの、その格好。サイトちゃんじゃないみたい」

「えっ、そうですか。いや、でもお久しぶりです。折角来て下さったのに一緒に行けなくてごめんなさい」

「いいよいいよ、こうやって会えたし。そんな姿のサイトちゃん見られてなんかいいことが起こりそうな気がする」

紀子は同意を求めるように千恵の顔を見た。

千恵も笑いながら頷いていた。

「そ、そんなにびっくりですか？」

そのとき、ミナもシャッターをくぐって出てきた。

「ひゃー、サイトちゃんどうしたの、その格好。女の子してるじゃない」

「もう、そんなに驚かないで下さい。私だってスカートくらいもってますよ」

皆でがやがや喋っていると、美穂と奈津子とその他のアルバイト、そして純貴と最後に氷室もシャッターをくぐって出てきた。

「どうもお疲れ様です」

なゆみと千恵は条件反射で挨拶をする。

「おお、斉藤さん。なんか今日はいつもと違うね。すごくかわいいよ」

純貴は女性を評価することを忘れない。

氷室もなゆみの姿を見てはっとしたものの、普段おしゃべりしないなゆみがスカートをはいている意味を悟ると不機嫌な顔つきになってしまった。

「馬子にも衣装か」

氷室がぼそりと言ってシャッターを閉めて鍵を掛けた。

なゆみは氷室の姿を見てそわそわした。

あの宗教の一件以来、久しぶりに会ったというのに、何も話せない。

せめてなゆみの方でも向いて顔を合わせてくれればいいものを、氷室は見ようとせせざどこか避けていた。

「サイトちゃん、急いでるんだったらもういいよ。来てくれてあり

がとうね」

紀子が待ち合わせに遅れると思って気を遣ってくれて、なゆみはそれに流されてしまう。

「それじゃ、紀子ちゃんまた今度ゆっくり会おうね。それじゃみなさんお先に失礼します」

みんなそれぞれ挨拶をする中、氷室はほそつといった。

「映画楽しんでこいよ」

なゆみはどきつとした。

振り返って氷室を見ると氷室はすでに背中を見せて歩いていた。

皆にもう一度手を振ってなゆみは、振り切るように早足でその場を去った。

ジンジャとの待ち合わせは英会話学校のラウンジでだった。  
なゆみは一度、英会話学校の前で無意識にスカート裾を引っ張った。

そして緊張して入り口のドアをくぐると、受付の人も見張るようになゆみの服装に反応していた。

レッスンを取ってなかったので、受付の人に軽く会釈をしてラウンジに向かうと、ジンジャはソファに座ってそこにいた人たちと話をしているのが目に入った。

後ろを向いていたのでまだなゆみに気がついていない。

その輪の中にユカリが控えめに座り、ジンジャとも話している姿があった。

そのときなゆみの目には彼女はよそよそしく話しているように見えた。

なゆみはその様子を暫く黙って見ていると、後ろから声を掛けられた。

「よっ、キティちゃん、今日はなんかいつもと違うね」

クラスがよく一緒になる会社員のおじさんだった。

なゆみは恥ずかしげに挨拶しているとき、ジンジャが振り向く。

「タフク？　へえ、お前今日は別人だな」

「ほんと、キティちゃん、なんか女の子してる」

そういったのはユカリだった。

あまり話したことはなかったが、面識があるのでびっくりして声

を出さずにはいらなかったようだ。

「これからどっかいくのかい」

他の人も聞いてくる。

「今日は俺とデートなんだよな、タフク」

ジンジャの言葉が電気を食らったようになゆみの体を突き抜けて、その後金縛りにあったようになゆみは固まってしまった。

『デート』

ジンジャの口からそんな言葉がでてくるとは思いもよらなかった。

なゆみはどこかでその言葉を否定してたのにジンジャは肯定している。

しかもこんな大勢の前で、しかもユカリもいるのに。  
なゆみは口をあぐりと開けてジンジャを見つめてしまった。

「何照れてんだよ、キティちゃん！ 恥らってるなんてやっぱり女の子だったんだね」

周りから、冷やかしの声や笑い声が飛ぶ。

ユカリまでも楽しそうに笑っていた。

(一体どうなってるの?)

「それじゃタフク行くぞ」

ジンジャに腕を引っ張られてなゆみはバランスを崩しながら歩き出した。

とても和やかな雰囲気に含まれて、皆に明るく見送られたのでな

ゆみは愛想で手を振るが、自分でも他人事のように感じてきよとんとしていた。

「映画、7時からの上映だから先に軽くなんか食べておこうか」  
メガネの奥から優しいジンジャの瞳が覗く。

「う、うん。そ、そうしようか」

「どうした。なんか大人しいな。服装が違つと性格も変わるのか？」

「ち、違つ。あのさ、ユカリさんがいたよね」

「ああ、お嬢様っぽい女の子のこと？」

「あの人、ジンジャの彼女じゃないの？」

「はっ？ 何言つてんだ!？」

「だつて、ジンジャと親しかつたし……」

「そりゃ、クラスが一緒になれば話すし、出会えば無視はできないから挨拶くらいはするよ。でもそこまで親しかつたか、俺？」

「え????????」

「お前何考えてるんだ？」

なゆみはジンジャに頭を軽くこつかれた。

その反動で宇宙空間を遠く流れていくような気分になってしまった。

「おい、何突つ立つてんだよ。ほら行くぞ。とにかく先に腹ごしらえだ、もたもたしてたら上映時間に間に合わなくなるぞ」

「うん」

ジンジャは早足で歩き出すと、なゆみは一生懸命追いかけた。

時間があまりないので、簡単に済ませられるファーストフードを選び、がやがやとうるさい中でハンバーガーをかじりながら、なゆみは狐につままれたような表情をしていた。

「なんか、今日のタフクは変を通り越して何かが乗り移ってるみたいだ。大丈夫か？」

「ほんにゃ？」

ハンバーガーを頬張ってたときなので、変な声が出てしまった。

「いや、大丈夫じゃなさそうだ」

その言葉を聞いて、なゆみは飲み物を手に取り流し込むように慌てて飲み込んだ。

そしてまくし立てるように早口で喋りだす。

「もちろん大丈夫に決まってるでしょ。あのさ、前に、授業が終わった後、用事があるから先に帰るとか言った日覚えてる？」

ジンジャはその日のことを思い出す。

坂井に呼び止められて、なゆみと二人になりたいから先に帰ってくれと頼まれた日だった。

「おお、あのとき坂井と一緒に帰ったんだろ。なんかあったのか」

「別に何もなかったけど、坂井さんに”風船の寅さん”とか呼ばれたくらい」

「風船の寅さん？　なんだそれは」

「それはどうでもいいんだけど、ジンジャはあのときユカリさんと一緒にたったんじゃないの？」

「どうしてそうなるんだ。さっきもそうだけど、なんでその人がいちいち出てくるんだ？　あの後急いで一人で家に帰ったよ」

「でも次の日の夕方、ユカリさんと英会話学校一緒に行ったんじゃないかったっけ」

「ああ、歩いてたらそういえば彼女と偶然会った。でも、よく知っ



てるな。あの時、そのまま帰ろうとしたら、英会話学校寄って行かないんですかって言われて、その日、土曜日でイベントのパーティがあっただろ。それをあの人が教えてくれて、それならちょっと覗きに行こうって寄ったんだ。てつきりタフクがいるかと思った。そしたら帰り際に氷室って奴と変なところから出てくるし、びっくりした」

「えっ」

「あの時、俺も大人気なかったな。タフクは訳の分からないこと言うし、酒に酔ってたのかしらないけど、話が噛み合わなくて、しかも氷室とあんなところから出てくるから腹立つし、それで怒っちゃった。ごめん。それは謝りたかった」

なゆみは顔面蒼白になっていた。勘違いが明白になる。

「次の日、電話くれたときもさ、土曜日の日、家に帰ったら就職の採用不可って通知が来てて、そこ第一志望だったからそれで日曜日ずっと気分が晴れなくて、前日のこともあったしお前に八つ当たっちゃまった。ほんとにごめんな。それ以来、就職活動で焦って心の余裕はないし、タフクに合わせる顔もなかったから、英会話学校も遠ざかってしまったんだ。そしてやっと就職内定もらえたから落ち着いて、それでタフクにきつちりと話さなきゃって思ってた。だけどなかなか面と向かって言えなくて、それでとにかく二人つきりになりたくて今日映画に誘ったんだよ」

このとき全てが自分の思い込みから始まっていたことに、なゆみはかなりの衝撃を受けていた。

両手で半分まで食べかけたハンバーガーを持ったまま動かず、呆然とジンジャを見続ける。

ジンジャは何気なく腕時計に目をやった。

「おっと、ゆっくりもしてられないぞ。ちょっと急げ」

「あつ、はいっ」

その後は何が起こったか頭がこんがらがって、思考回路も停止状態のまま、なゆみは映画館へ向けてジンジャの後ろを走っていた。その時、先を走るジンジャはなゆみの手をしっかりと握っていた。

映画を観てる間、ストーリーもそつちのけで、なゆみは事の発端からこのときのことまで、順を追ってずっと考えていた。自分が勝手に想像して勘違いしてそこから氷室を巻き込んでしまった。

その結果、今のなゆみの心に入り込んできたものは。

映画の本編が終わり、クレジットが流れだす。

早々と席を立つ人がいる中、なゆみとジンジャは暫く席について、字だけが出てくるスクリーンを見ていた。

「結構面白かったかな。タフクはどうだった」

「うん、面白かった。あつそうだ。あとでチケット代返すね」

「いいよ、それくらい。俺が誘ったんだから。タフクはそういうところ律儀だよな」

「そっかな。それじゃご厚意に甘えてありがとう」

「なあ、今までさ、俺、タフクに自分の気持ち伝えてなかったよな。なんか坂井に気を遣って、言えなかったんだ」

ジンジャが気を遣っていたのは、坂井がなゆみを好きでいたのを直接本人から聞いてしまったからだった。

「坂井さん？」

「ああ、タフクと先に知り合ったのは坂井だったからな。ちょっと遠慮してたところあった」

なゆみは黙って聞いていた。

「でもある日坂井が俺に、自分の気持ちに素直になれ、遠慮するな  
って助言してきたよ。それにタフクはつかみ所なくふらふらしてる  
から、縄にくくっておけとかも」

「ふらふら？ 縄？」

「そう、目を離すとすぐにふらふらするだろ。それにもうすぐ留学  
だ。このまま縄付けないでアメリカに行っちまったら、お前帰って  
こなくなりそうだ……俺のところへ」  
「えっ」

なゆみは驚くまま首に力が入ってジンジャに振り向く。  
スクリーンからの光がジンジャの眼鏡に反射している。  
その奥には真剣に見つめる瞳がなゆみを捉えていた。

「待つてるよ。たった一年だろ」

「ジンジャ……」

辺りに人は残ってなかった。

ジンジャはそつとなゆみに近づく。

暗い映画館の中、映画のシーンさながらに、二人の頭のシルエッ  
トがくつついて一つになっている。

なゆみは目を開けたまま気を失っていたようになりながら、ジン  
ジャと唇を重ねていた。

それはなゆみのファーストキスだった。

その後のことはよく思い出せない。

なゆみはどうやって家に戻ってきたのかも分からないくらいだっ  
た。

片思いだと思っていたら両思いだったことも驚きだが、ジンジャ

にキスをされ、本来なら心がふわふわするほど嬉しいはずなのに、驚くばかりで、放心状態になっている。

ジンジャのことは好きだが、これでよかったと素直に喜んでいない。

どうしてもどうしても心に引つかかることがある。

なゆみはキティのぬいぐるみを抱きしめごろんとベッドの上に横になり、唇を押さえていた。

でも後戻りできそうになかった。

一方でその土曜日の夜、氷室は自宅で父親と電話で話をしていた。「えっ、明日？ もう予約取ってる？ そんな急に。分かってるよ。父さんのお陰で一人あの宗教から救えたから、それは感謝してるよ。えっ、その借りを返せて？ もう人の弱みに付け込みやがって。強引だな。わかったよ。行くよ！ 明日、行けばいいんだろ。だけど行くだけだからな。それ以上は何も期待すんなよ。わかったよ。それじゃ明日」

携帯電話を切り、ベッドの上に転がった。重いため息を出さずにはいられない。

肺に溜まっていた空気が全部出てきたように思えた。

父親と話せばいつも話題は同じことの繰り返し。

ずっと以前から言われていた事柄だった。

今回は借りがあるために氷室も言うことを聞かざるを得ない。

「あいつ、ジンジャと映画楽しんだんだろうか」

ジンジャが店にチケットを買いに来たとき、従業員の女子を端にどけてまで、氷室が自ら接客した。

ジンジャに言いたかったことが舌先まで触れていたのに、私情を仕事に持ち込んではいけないと必死で我慢していた。

『お前、斉藤のことが好きなのか？』

そう聞きたかった。

だが映画のチケットを二枚購入したことで、形を変えて言葉が出

た。

「斉藤と行くのか？」

ジンジャは、氷室の顔をじつとみて、ゆつくりと「もちろん」と答えたが、メガネを掛けていたせいか冷たい視線にとれ、さらにその顔はどこか挑戦じみて憎しみが込められていたように思えた。

ホテル街でなゆみと氷室を見てしまったことをまだ根にもってるような表情だった。

ジンジャがなゆみを映画に誘い、そしてなゆみは普段着ないような女の子らしい服装で出かけた。

氷室は年甲斐もなく胸が苦しかった。

負け惜しみのように自分の気持ちとは裏腹に『映画楽しんでこいよ』などと出たところは、やはり高校生のガキのすることだと、頭を左右に振って馬鹿な自分だと情けなくなっていた。

しかし、なりふり構わず感情が先走る。

32もなつて少年のようにはしゃいでしまえる自分がおかしい。

「テンポラリーラブ」

なゆみが作った造語だが、氷室はつぶやいた。

なゆみは8月末になれば仕事を辞め、そして9月から留学で日本からいなくなる。

その後もう会うこともなくなるのだろう。

氷室は壁に掛けてあったカレンダーを見ていた。

「もう二ヶ月切っちゃったか」

あまりにも短い期間に氷室は何もできないと諦め気味だった。

そして翌日は父親が強引にセツティングした見合いがある。

借りを作ったことで絶対に断れないと思ったのか、強硬手段で来られたことに立腹しつつも、自分の気を紛らわすにはいい機会なのかもしれないと、一度くらい体験してみるのもいいかと投げやりになるしかなかった。

32歳という年が急に気になりだしてしまっ。

「そろそろ身を固めるべきなんだろうか」

ベッドの上でごろっと寝返りをうち、頭を抱えながら氷室は結婚と言っものについて考えていた。

次の日の日曜日、なゆみはいつものように英会話学校へと出向いた。

ジンジャも同じクラスを取っている。

ラウンジでなゆみが先に座っているとジンジャがさりげなくすーっと隣に座ってきた。

「よっ、タフク！」

「ジンジャ……」

映画館でキスをされたことを思い出すと、なゆみはまともにジンジャの顔が見られなくなり、うつむき加減で「おはよう」と言った。ジンジャはなんとなく察知しているのか、くすつと笑いながらなゆみの頭を一度コツンと叩いて「おはよう」と返していた。

なゆみも恥ずかしげに顔を上げる。

ジンジャと知り合って間もない頃、心が熱くなるほどに好きになったときのあの笑顔がそこにあった。待ってるといってくれたジンジャ。

自分を好きでいてくれた。

こんなにも幸せなことはない。  
やっと思いが通じたんだと、なゆみはジンジャの顔を見て頷いた。  
ジンジャだけを見つめていこうとそう自分に言い聞かせているよ  
うだった。

クラスが終わった後、なゆみがもたもたしている間に皆さつさと  
教室から去っていき、そこでジンジャと二人きりになってしまう。  
なゆみはリュックに辞書や筆記用具をしまっていた。

ジンジャは誰も来ないことを確認して「タフク」と小さく呟く。  
なゆみは「んっ？」と顔を上げたとき、ジンジャはまたここでも  
キスをしてきた。

「ヤダ、ジンジャだったら、こんなところで  
なゆみは顔を赤くして恥ずかしがっていた。

「こつという所だからじゃないか」  
確かに誰かに見られるんじゃないかというハラハラ感と、いけな  
いことをしているドキドキ感は胸を熱くして心臓を高鳴らせた。  
なゆみはこれが付き合うことなのかと気恥ずかしくも実感してい  
た。

「さて、これからどこへ行く？ タフク行きたい所あるのか？ そ  
の前に腹減ったな。なんか食いに行こうか」

そこでなゆみはふと閃いた。

「ねえ、ジンジャ。就職決まったのに、お祝いしてなかったね」

「そんなのいいよ」

「だったらさ、今からおいしいもの食べに行かない？ 少し豪華に。  
もちろん私の奢り」

「おい、無理するな」

「あら、一応毎日働いて、それなりに給料は貰ってるよ。ずっと使



わずに貯めてたし、目標額余裕で超えそうなんだ。それに行つてみたいお店があるの。駅前のホテルに入っているフレンチレストランなんだ」

「そんな高そうなところ」

「だから、就職祝いって言ってるでしょ。ねえ、行こうよ」

なゆみはジンジャのシャツをひっぱった。

先ほどのキスが後を引いているのか、恥らって笑っている笑顔がかわいい。

ジンジャはこれが付き合ってるってことかとふと思つと、目が細まった。

「そうか。それなら行こうか」

「うん。決まり」

ホテルというだけで格式高いように感じるが、行ってみれば、ホテルの中は家族連れやカップルなど、なゆみたちと変わらない人たちが気軽に出入りしている。

ジンジャと手を繋ぎ、なゆみは吹き抜けの中のエスカレーターと一緒に上がる。

顔を見合わせて微笑んでる姿は、とても初々しいカップルに見えた。

なゆみはジンジャを引っ張ってレストランの前に連れてきた。

落ち着いた入り口、いかにも高級感溢れている。

ジンジャは入り口に出されたメニューを見た後、メガネの奥から目を丸くしながらなゆみの顔を見る。

なゆみは、大丈夫とばかりに無言で首を一度強く縦に振った。

そしてジンジャを引つ張って中に入ってしまった。

「俺たち、こんなカジユアルな格好で大丈夫なのか」

ジンジャは落ち着かないが、入ればウェイターが温かく迎えてくれたことでとりあえず一安心した。

二人は窓際に案内された。

メニューを見せられ、ジンジャはまた落ち着きをなくした。

「どうしたのジンジャ」

「だって、半端じゃないコースの値段」

「もう、心配しないで言って言ったでしょ。お金は持ってるし、クレジットカードもある。どう、これで安心？」

「おい、なんかその会話もこの店にそぐわないような。わかったわかった。じゃあメニューもタフクに任せる。選んでくれ」

「そつ、それでいいの。じゃあワインも頼もうか」

「タフクはワイン飲めるのか？」

「うん、二十歳になったから大丈夫だよ」

「なんか飲めるという意味が違うぞ」

二人は顔を見合わせて笑っていた。

ウェイターに注文を済ませた後、なゆみは辺りを見渡した。

「混みだして来たね。あの席以外、全部うまっちゃった」

店の一番奥の窓際の席だけ誰も座ってないために、白いテーブルクロスが目立って浮かび上がって見えた。

「あれは予約席だろ。結構人気なんだなここ。連れてきてくれてありがとうがとうな」

ジンジャの素直に喜んでくれる言葉が嬉しくて、なゆみも喜びを笑顔で表した。

そこへ、ソムリエが現れ、グラスと白ワインのボトルを運んできた。

こぼつとした丸さにすらつとした細長い足、透明でとても薄い厚さのワイングラスが目の前に置かれ、次に独特のコルクを抜く音が気持ちよくポンと聞こえると、なんだかわくわくするようだった。

トウトウトとワインが注がれる。

二人はそれをじつと見つめていた。

あまりワインを飲んだこともなく、なゆみができるだけ甘くて飲みやすいのを尋ねてこれを薦められた。

「それじゃ乾杯しようか」

なゆみが嬉しそうに言った。

二人はグラスを持ち「乾杯」と耳に心地よいグラスが重なる音を立てたときだった。

そこへ5人の客が店に案内され店の中を横ぎっていた。

二人は不意にそっちに目が行く。

そしてなゆみの心臓はいきなりまとまった血液が一度に送り込まれたほどドキツとした。

氷室がそこに居た。

なゆみとジンジャが氷室を見つめれば、視線は電波のように氷室に真つ直ぐ届き、氷室もすぐにキャッチしてそつちを見てしまった。氷室もまた、一瞬でなゆみがそこにいることを知ってしまう。そしてその前にはジンジャもいる。

二人がグラスを重ねている姿に驚きを隠せない。

しかし、はつとしてすぐに顔を背け、見なかったように奥の席へと向かっていった。

「タフク、あれ、氷室だろ」

「えっ、そ、そうかもね」

「そうかもねって、どうみても氷室だったじゃないか。なんであいつがこんなところに居るんだよ。あいつもなんかこつち見てびっくりしてたぞ。でも無視していきやがったけど」

「もういいじゃない。お互い知らないフリしてようよ。関係ないもん」

なゆみの体に力が入って、ぐつと何かを堪えているようだった。

「まあ、そうだけど。なんか俺、あいつ見てたら腹立つちゃうんだ」

「ジンジャ、もういいじゃない。さあ、もう一回最初からやり直そう、ほら」

さっきまで楽しくワインがグラスに入れられる過程を楽しんでいたのに、なゆみの心は急激に冷えたようだった。

やり直そうとグラスをもう一度重ねるが、軽かったワイングラスが重みを増して、ぶつかり合った音も軽やかさが抜けていた。

なゆみは一生懸命笑って、楽しい気持ちを取り戻そうとそのワイ

ンを口にした。

甘く飲みやすいワインを頼んだはずなのに、それはなゆみの口には合わなくて、どこかすっぱいきついアルコールの味が鼻と喉を締め付けた。

「じほっ」

なゆみはむせてしまう。

「おい、大丈夫か」

「ごめん、なんかびっくりだった」

それはワインの味だけじゃなく、目の前に起こっていることも言い表していた。

これは飲めない。自分には合わない味。

それでもなゆみはもう一度グラスに口をつけ、そして一口無理やり飲んだ。

ぐっとう喉が熱く締め付けられ、それは体の中へと流れていく。

まるで火が体の中に注がれて自分の中の何かが焼かれていくような感じがした。

氷室が座った席はなゆみは振り返らないと見えない。

だがジンジャからはよく見えた。

「氷室もしかして、あれ見合いじゃないのか」

「えっ？」

「氷室の隣には氷室に似たようなおじさんが座ってるから多分父親だろうな。その手前には女性が座ってその両隣は多分女性の両親だろう。ここからは後姿しかみえないけど、女性が着物着てるところみたらやっぱりあれは見合いだよ」

「ジンジャ、観察するのはやめなよ。みっともないよ」

「うん、そうだな。でもあいつ、なんか俺の顔見やがった。睨まれ

たよつな気がする」

「ジンジャがじろじろみてるからじゃないの。もう放っておこうよ」「そうだな。ごめんごめん。折角タフクとここで食事してるのに、すまなかつた。本当にごめん」

「ううん。もういいよ」

口でそういいながらも、ほんとうはなゆみも気になって振り返りそうになっていた。

前菜が運ばれてくる。

なゆみは料理に神経を集中させた。

よりによって、こんなときになゆみとジンジャの食事風景を見ながらの見合いとは氷室はとことん運の悪さを呪つた。

それが不機嫌となり知らずと顔に表れてしまう。

テーブルの下で父親に足を蹴られなければ、自分でも気がついてなかつた。

「どうも、すみません。息子はかなり緊張しているようでした」

氷室の父親は懸命にその場の雰囲気をよくしようとしていた。

「いえいえ、こちらこそ、急にお呼びしてしまって申し訳ございませんでした。コトヤ君とは一度お会いしたくて、ずっとその機会を願っていました。本当にお越し頂きありがとうございます」

見合いの相手の父親が気遣つて話し出す。

布袋様のようにずっしりとして貫禄があつた。

「コトヤ君は一級建築士の資格をお持ちだそうで、その噂はかねがねから聞いておりました。うちも小さいながら建築関係の会社を経営しております。今はどうしてそちら方面のお仕事をなされてないのですか？」

「今は、充電期間として少し休んでおりました。これからまた復帰しようかと思っっているところですよ」

「ああ、そうですね。それは素晴らしい」

氷室は何が素晴らしいんだと、反発したくなりながらも顔はにこやかに笑っていた。

「コトヤ、こちらは私が昔からお世話になってる方で、コトヤも子供的时候会ったことあるんだぞ」

氷室はそんなこと知るかとか心の中では叫んでいた。

でもやっぱり笑顔は忘れない。

「コトヤさん、とても立派になられましたね。頭脳明晰とお伺いしてるし、そしてとてもハンサムでいらっしやる」

今度は相手の母親が参加してきた。どこかの旅館の女将のようなキリツとしたしっかり者の雰囲気があった。

「いえ、それほど」

「まあご謙遜なされて、オホホホホ」

だいこん役者かというくらい、その笑いは不自然で芝居臭かった。

真ん中にいる女性は下を向いて恥ずかしそうにしながら、時々ちらちらと氷室を見ていた。

消極的でいつまでも白馬の王子様を待っているようなお嬢様という感じだった。

また父親がテーブルの下で足をこついた。どうやら女性に話しかけると指示を出している。

氷室は一度喉をコホンとならして、作り笑顔をつけて話しかけた。

「えっと、お名前は…… なんてしたっけ？」

今度は足を踏まれた。

氷室は父親に恨むぞとちらりと視線を向けた。

「すみません。息子は緊張しきって記憶にまで障害が…… 幸江さんでしたね」

父親はしつかりしろと氷室に視線を向けて対抗した。

「幸江さんのご趣味は？」

とりあえず氷室は無難な質問を投げかけた。

「はい、あの、お茶とお花を少々。コトヤさんのご趣味はなんですか」

答え方もあまりにも型にはまりきってつまらなく、氷室は大きな欠伸をしてしまった。

例のごとく父親の足攻撃が始まる。

まだ開き足りない口を無理やり閉じて歯を食いしばると、目じりから涙が出てきた。

結構欠伸をかみ殺すのも苦しかった。

だがほんのすぐ向こうにいるなゆみを見ればもつと苦しい。

「あつ、すみません。昨晚ちょっと考え事していると寝られなかったもので」

幸江を通り越して向こう側に居るなゆみの後姿に焦点を合わせていた。

「ほんとにすみません。いい年なのに、全く自覚がありませんで父親がフォローして、足攻撃を受けてもなゆみの後姿から目が離せなかった。



ジンジャとここに来てると言うことは、理由はなんであれ、あの二人は上手くいったということだろう。

氷室は胸の痛みをずきずきと感じながら、落ち着かない気持ちを沈めるために目の前のグラスを手にとって水を一気に飲みしてしまった。

まるで自棄酒のような飲み方だった。

しかし緊張している姿と取られたのか幸江の両親は温かい目で氷室を見ているようだった。

だが、氷室はまだ飲み足りないと、父親のグラスにまで手をかけて飲んでしまった。

「コトヤ！」

父親はまた足を蹴ると、その弾みで水が変なところに入り氷室はブーと水を噴出してしまった。

これには前に座っていたものは仰け反った。

氷室は咳き込み、父親は慌ててナプキンを持って右往左往している。

「どうもすみません。コトヤ、お前はなんてことを。いい年こいて恥ずかしい」

まるで幼児が食事中上手く食べられないで親に叱られているようだった。32歳にしては情けない一面だった。

「いや、氷室さん、いいんですよ。緊張すると何をするかかわらないもんです。私も妻と初めてあったときは同じような失敗してました。アハハハハハ」

「嫌ですわ、お父さんたら」

(こいつら何のろけてんだ)

氷室は咳き込みながら、苦しんでいるんだと見せかけて気に入らない表情をそこに織り交ぜて呆れていた。

そして幸江と目が合う。

それでも幸江は恥ずかしそうにしては氷室を熱く見ていた。

氷室は長い食事になりそうだとぞっとする。

どうしてあの席に自分が座っていないのだろうと瞳に寂しさを宿らせて氷室はなゆみの後姿をまた見つめた。

その時再び父親に足を蹴られてしまう。

自分でなんとか繕えと催促されるように目配せまでしている。

氷室はとにかく幸江をみて嫌々笑ってみた。

幸江は益々照れ下を向いて恥らっていた。

(そうやってずっと下を見ててくれ)

氷室は目から光線でも飛ばしてやっつけた気分ですら幸江をみていた。

(ビーム！)

好き放題に頭の中で想像して乗り切ろうとしていた。

しかし手まで動いているとは気がつかず、ウルトラマンのように手を相手に向けてきめ技ポーズを作っていたとは自分でもびっくりだった。

父親もこれには呆れてしまい、いきなり頭をどついた。

「いてっ」

「すみません。もう本当にお恥ずかしい」

「いやー、コトヤ君は面白い人なんですね。リラックスさせようとしてわざとおどけてくれて。これは中々楽しいもんです」

幸江の父親は寛大だった。

氷室は勝手に好きに思ってくれと開き直ってしまった。

どうせこんな見合いには全く興味はない。

氷室の父親は、益々苛立ちテーブルの下で何度も足を蹴っていた。

「タフク、何してんだ」

なゆみは皿に添えられていたケツパーをフォークでつついていたが、つるつと逃げられて、それを追いかけるように何度も刺していた。

しかしその裏にはどこからともなく湧き上がるもやもやと戦っているような気分だった。

「へへへ、食べ方がわからないや」

「でも、やっぱりおいしいな。なあ、タフクは料理できるのか」

「うん、多少できるよ。ずっと鍵っ子だったし、日曜、祝日も両親は仕事だったからさ、小学生のときから食べることは自分でやってた。見よう見まねで一度食べたものは自分で想像して作ったりする」

「へえ、じゃあ、こういうのも作れるか」

「うーん、材料さえ手に入れば、よく似たものは作れるかも。だけど普段こういうのスーパーに売ってないから作るうにも作れないかも」

「でも、料理は得意ってことか。いいじゃん、それ」

「えっ?」

「いや、タフクはおっちょこちょいなところがあるから、料理なんてできないと思ってた」

「いやだ、そんな風に思ってたの? ジンジャは私のこと一体どう思ってるの?」

「明るくて、楽しくて、おしゃべりで、面白くて、気配りができて、素直で素朴でかわいくて……」

なゆみは恥ずかしげに照れていた。

「そして、突っ走りすぎて、ドジで、鈍感で、ふらふらして、時々迷子になって、何するか分からないときもある」

「ちょっと、酷い」

「そうかな、これって、タフクのいいところも悪いところもどっちも知ってるってことだよ。そうじゃなかったら俺タフクのこと好きにならなかった」

「ジンジャ……」

そしてメインディッシュが静かに二人の前に運ばれてきた。

氷室のテーブルもコース料理を食べながら、氷室と幸江を中心とした会話が語られていた。

「コトヤさんの好きな食べ物は何ですか」

「トンカツ」

なゆみも好きだと言っていたもの。

これが一番最初に浮かんだ。

単語一つしか返さないの、幸江は次の会話に困っていた。

幸江の父親がなんとか助け舟を出そうとした。

「コトヤ君はどんな女性のタイプが好きかね」

「そうですね、明るくて、楽しくて、おしゃべりで、面白くて、気配りができて、素直で素朴でかわいい子です」

「まあそれはうちの幸江にぴったりですわ。オホホホホホ」

幸江はにこっと氷室に微笑んだ。

（全然違うじゃないか。その子はあそこにいるんだよ！）

「コトヤくんは幸江のことを気遣ってそのようなことをおっしゃって下さったんですね」

幸江の父親の言葉など聴く耳持たずだった。

やはりなゆみを見ていた。

つまらない会話はその席に座ってる限り終わることはなかった。だらだらと時間が流れていく。

どれだけの時間が経ったかも分からなかったが、コースはデザートを残すだけとなっていた。

もうすぐ開放されると思っていた時、なゆみ達が席から立ち上がった。

氷室は当然それを目で追った。

そしてジンジャと目が合う。

バチツと音がなるくらいお互いの視線がぶつかり合った。

なゆみは後ろを振り向かず、むしろ見てはいけないときこちなくそこを去って行く。

ジンジャは見せ付けるようになゆみの手を握っていた。

思わず氷室は感情を抑えきれずテーブルを叩いて立ち上がったしまう。

「コトヤ！ 突然どうしたんだ」

氷室ははっとして、なんとかにこつとすると「すみません。ちょっとお手洗いに」と言っただけ席を離れた。

「いや、どうもすみません。息子はとても緊張するとちょっとアレでして」

氷室の父親はひたすら汗を拭きながら謝っていた。

会計でなゆみが勘定を払っている。

その後ろを目立たないように氷室がコソコソと歩いて外に出て行った。

なゆみは気がついていない。

レストランの外で待つていたジンジャも目に入ったが、無視を決め込んでそのまま素知らぬ顔で素通りする。  
しかしジンジャは呼び止めた。

「氷室さん、でしたね」

声を掛けられ立ち止まり、余計なことをしやがってと顔を歪めた  
が、振り返ったときは背筋を伸ばして上から目線で受け答えした。

「えっと、君は確かジンジャ君だね」

「伊勢達也です」

「伊勢君、俺になんの用だ」

「いえ、別に用はないんですけど、挨拶だけしておこうと思った  
だけです」

「そっか。わざわざありがとう」

「いえ。今日はお見合いですか」

「君には関係ないことだ」

「そうですね、とにかくいい結果になるといいですね。それから、俺達付き合い始めました。あの時、散々意味も分からない失礼なことを言われましたけど、俺、ずっと前からタフクが好きでした。ただ、身辺に色々あって、なかなか行動に移せなかっただけでした。でももうこれからは本当に俺の所有物となりましたから。それだけいいはかったんです」

「そっか、あの時はすまなかったな。よく状況がわからなくて、イライラして言ってしまった」

「本当にそれだけですか」

「どういう意味かね」

二人は暫し無言で睨みあっていた。

「ジンジャ、お待たせ」

なゆみが店から出てくると、目の前に氷室が居ることに驚いてリユックを落としてしまった。

一緒についていたキティのマスコットも跳ね上がっていた。

「よお、斉藤。なんだこんなおしゃれな店に来るときもその鞆か」  
なゆみは慌ててリユックを拾い、ペコリと挨拶を兼ねた礼をする。  
ジンジャはなゆみの肩を優しく包み込んで行こうと意思表示した。  
それが氷室に嫉妬をけしかけた。

「伊勢君、所有物になったからといって斉藤に支払いさせるんだな」  
「何っ！」

「ジンジャ、止めて。氷室さん、今日はジンジャの就職のお祝いで私が誘ったんです。そんな言い方やめて下さい。まるで意地悪なガキ大将みたい。それじゃ失礼します。行こうジンジャ」

なゆみはジンジャと手を繋ぎ、引張っていった。

氷室はまたやってしまったと、自己嫌悪に陥る。好きな女性を取られて腹いせ紛れに暴言を吐いてしまった。

さらになゆみが握っている手を見て、いつか自分が握っていたことを思い出し、やるせなくなってしまう。

「ジンジャ、ごめんね。折角のおいしい食事だったのに」

「何言ってるんだ。謝るのは俺の方だ。俺が奴にちよっかい出してしまったから。でも、なんか少しひっかかることがあったんだ」

「どうしたの？」

「あいつ、なんだか……」

「何？」

「いや、なんでもない。それより、本当にありがとう。すごくおいしかったよ。今度は俺が美味しいところ連れて行ってやる」



「うん、ジンジャが就職してからでいいよ」

「それじゃタフクはアメリカじゃないか」

「だから、それまで一杯貯めておいてね。帰ってきたら毎日連れてって」

「毎日は無理だろ」

ジンジャはなゆみの冗談で落ち着いていく。

しかし氷室のことがまだ頭から離れない。

ジンジャが言いたかったことは、どこかで氷室はなゆみに好意をもっているんじゃないかと感じていたことだった。それはチケットを買ったときに会話を交わして感じたジンジャの勘のようなものだった。

気のせいだと思いながら、ジンジャはなゆみの手を強く握ってしまった。

「ジンジャ、痛い」

「タフクの手は柔らかいからつい思いつきり握りたくなった」

なゆみはにこっとしていたが、その裏でなゆみもまた氷室のことが気にかかり、宗教から助けしてくれたことを思い出してしまった。

危険を顧みずに自分のためだけに必死で立ち向かってくれた。

手を繋いで、フィアンセのフリまでしてくれて。

人の前では本心隠してひねくれて憎まれ口をすぐに叩いて素直じゃないけど、いつだって困ったときは力になってくれて、時折見せる優しい心遣いと笑顔。

そんなことを考えていると、なゆみはぐつと体に力が入ってしまった。

なゆみもまたジンジャの手を強く握り返してしまう。

「おい、仕返しかな？」

なゆみはただ笑っていた。  
笑うことでしか自分の感情を誤魔化せなかった。

食事をした後、なゆみとジンジャは手を繋いで、ショッピングエリアや街の中を歩き回ってデートの続きを楽しんでいた。

お互い口には出さなかったものの、心の隅に氷室のことがそれぞれ気にかかってどこか話が弾まない。

「歩いてばかりじゃちょっと疲れちゃったな。どっか座ろうか」

ジンジャがなゆみを気遣っているのか、覗き込みがちに見た目が心配の色を醸し出していた。

ビルとビルの間、木々も植えられて、オブジェなどがところどころにアートとして置かれている計算された憩いの空間に入り込む。

そこに設置されていたベンチがちょうど空いており、ジンジャとなゆみは腰掛けた。

夏の暑い日ざしは側に植えられた木で遮られていたが、木陰でも充分に暑く感じたのは気温のせいだけじゃなく、やかましいセミの声が夏真っ盛りと盛り上げていたからかもしれない。

ジンジャがベンチの背にもたれて、空を見つめながら独り言のように呟いた。

「あーあ、もっと早くタフクとこうしていたかった」

「どうしたの急に？」

「ん？ なんかさ、タフクがもうすぐ居なくなるの寂しいなって思っただけさ」

「ジンジャ、無理しなくていいんだよ。一年ってやっぱり長いしさ……」

「何言ってるんだよ。俺は待つって言っただろ。俺を信用しろよ」

「ジンジャ……」

「なあ、初めて会ったときのこと覚えてるか」

「うん。もちろん」

「ラウンジで坂井がタフクのこと俺に紹介したんだっけ。あのとき、タフクは元気だったよな。俺の名前が伊勢っていうだけで、いきなり”ジンジャだ！”なんて言うんだから」

「そしてジンジャが、それを言うなら伊勢神宮の”ジングー”だろって突っ込んでくれたんだよね。それからすぐに仲良くなったんだっけ」

「そうそう、なんかノリがよくて、俺も赤福もち、お多福もちそしてタフクってとんとん拍子に名前つけちゃった」

「そしてその日、クラスで私とジンジャがペアになってそのままのノリで積極的に発言したから授業も益々盛り上がり上がったよね」

「ああ、あんな馬鹿騒ぎしたクラスなんて始めてだったし、タフクとも初めて会った気がしなかったからどんどん調子に乗っちゃった。それにタフクの笑顔がすごくかわいくてさ。釣られて俺も笑ったよ」  
「そんな風に思っていてくれてたんだ。なんか恥ずかしい。でもあの時、私もジンジャの笑顔がすごく素敵でドキッてしちゃったんだ。それから私追い掛け回しちゃったね。恥ずかしくもなく”好き好き”とか軽く言っちゃったりもした」

「俺のことは見てくれてるって思ったら、男としてなんか嬉しかった。けどある日、タフクは入ったばかりのデイブに付きまとってた時期があっただろ」

「えっ、イギリスから来た先生のこと？ 付きまとってた風に見えてたなんて、ただ英語話したかっただけなんだけど」

「デイブも日本に慣れてなかったからタフクに頼っていた感じだったんだ。俺を放ってさ、二人っきりで話し込んでさ、その時だよ、初めてヤキモチ妬いたの」

「えっ？ 嘘」

「ほ・ん・と。でもさ、自分の気持ちに気がついててもあの時は何もできなかった。ただ、タフクがずっと俺のこと見ててくれるといいなって思うしかできなかった」  
「ジンジャ」

「だけど、タフクがアルバイト始めた頃からギクシャクしてしまっただよな。氷室が突然降って沸いてくるしさ、なんかタイミング悪かったんだ。俺も不安定な時期だったからどうしようもなかったし、あの時タフクが俺のこと嫌っちゃったと思った」

「あの時、私の方が嫌われたって思った」

「だからほんとにあの時俺が悪かったんだって」

「違う。ジンジャは何も悪くないよ。悪いのは私だった。私勘違いしてたこと一杯あったもん」

なゆみは恥ずかしすぎてその勘違いもジンジャにうまく説明できない。もしもじと下を向いていた。

「もう済んでしまったことだし、どっちが悪いかだなんてどうでもいいよ。ただその時期にタフクが……」

そこまで言いかけたが、ジンジャはその先を言うのを躊躇った。その時期に氷室がなゆみに急接近していることを薄々感じ取っていたために、なゆみが氷室のことをどう思っているのか聞こうか聞くまいか暫し逡巡してしまう。

「私が何？」

「いや、なんでもない」

結局聞かないことにした。

聞いたところで不安材料になっても嫌だった。

それよりもジンジャはなゆみを繋ぎとめておきたいと手を伸ばしてなゆみの肩を抱き寄せた。

なゆみは「あっ」と声を漏らし、ぐいっと引き寄せられるままにジンジャの肩に体を持たせかける。

「暑いけどさ、ちょっと我慢しろ」

そう言って、ジンジャは空いているもう片方の手を使い、なゆみのあごを指先で下から持ち上げた。

大胆にも覆いかぶさるようになゆみにキスをする。

なゆみは頭の中が真っ白で何も考えられず、体は硬直しジンジャにされるがままになっていた。

なゆみには息が止まるくらいの衝撃的な長いキスに感じた。

「さて、体が熱くなったところであそこに行こうか」

「えっ？ ど、どこへ？」

「カキ氷食べに」

ジンジャは笑っていた。そしてすくっと立つと、なゆみに手を差し伸べた。

なゆみはその手をとると、恐ろしい速さで引っぱりあげられ、よろっとしてジンジャに倒れ掛かってしまう。

ジンジャはつかさずぎゅっとなゆみを抱きしめた。

「ほら、釣れた！」

「ジンジャ、一体どうしたの？」

「お前はすぐにふらふらする癖があるからな。俺の意思表示さ。しっかり捕まえたってこと」

なゆみは突然のジンジャの大胆さに戸惑ってしまった。

まるで手綱を付けられた動物のように無理に繋ぎとめられている気分だった。

縄に括り付けるとは言われたが、自分はそんなにふらふらしてい

るんだらうか。

勘違いして泣き腫らし、自棄酒食らって酔っ払い、声を掛けられて宗教に引っかけかり、考えたらその通りだったと簡単に納得してしまっ。

そしてその全てのことに氷室が関わっていることにも気がつく。ジンジャとくつついたこのとき、なゆみは本当にこれでいいのかと心揺れ動いている自分を感じていた。

ジンジャがここまで自分を好きでいてくれた事に気がつけば気がつくほど、心は苦しくなっていく。

「ほら、もたもたするな」

ジンジャに手を繋がれて引っ張られると、なゆみは足をもつれさせながら歩いていった。

自分は一体どうしたいのかまだ答えが見つからずに迷っているような歩き方だった。

その日は夕方まで一緒に過ごし、月曜日は英会話学校が休みなので、火曜日の仕事が終わった後にラウンジで会う約束をしてから駅でジンジャと別れた。

なゆみは電車の中でドア側に立ち、窓に映りこんだ自分を見ては無意識に唇を押さえてしまった。

唇だけが熱を帯びていたような気がした。

月曜日の朝、なゆみはシャッターの前で千恵と一緒に主任の川野を待っていた。

「もうすぐ開店の時間なのに、川野さん遅いね」

千恵がなゆみと顔を合わせ、腕時計を見て時間を気にしていた。

「どうしよう、千恵ちゃん。本店に行つて報告してきた方がいいかな。私、行つて来る」

なゆみが向かおうとくるっと向きを変えて走り出したとき、歩いていた通行人にどーんと思いつきりぶつかってしまった。

「す、すみません」

猪のような突進だったのでなゆみはバランスを崩し、それを抱きしめるように受け止められていた。

「相変わらず、周りをしつかり見てないな、お前は」

なゆみが顔を上げればそこには氷室が立っていた。

一瞬の時間が止まったようになゆみは固まってしまふ。

「ひ、氷室さん！」

慌てて体制を整え、ぴよんと跳ねるように後ろに下がった。

「お前は海老か」

「海老でもなんでもいいですけど、開店時間がもうすぐなのに川野さんが来られないんです」

「ああ、川野はクビだ」

これには千恵も驚きなゆみと一緒にになって「えー」と声を上げていた。



通行人が何事かと振り返る。

「と、いうのは冗談。親戚に不幸があつたみたいで、今日は休みだ」  
悪びれもせずしれっとした顔で氷室は言った。

二人は声を上げて驚いたためにそれを聞いても何も言えず、力尽きたように言葉を失っていた。

氷室は予備の鍵でシャッターを開けると、なゆみたちは急いで中に入り、そして着替えをさっさと済ませて開店の準備に慌てた。

「川野主任がいないので、今日は俺がここを担当する」

なゆみはこの日一日ずっと氷室と一緒に心が騒ぎだした。  
自然と口が硬く閉じ黙り込んでしまう。

「本店は大丈夫なんですか？」  
千恵が心配する。

「あつちには専務がいる。俺がいなくても大丈夫だ。でもここは責任者が居ないと危なつかしいのが一名いるだけにな……」

氷室はちらりとなゆみを見る。

それでもなゆみは何も答えなかった。

寧ろ目を逸らし避けてしまう。

「氷室さん、サイトちゃんは仕事ちゃんとやっていますよ。接客が上手いんです。サイトちゃん目当てに何度も通ってくる人だっているんですから。サイトちゃんもてるんですよ」

「もてる？」

「ええ、あの川野さんですら、サイトちゃんにつきまといっぱいなんですよ」

「千恵ちゃん、それはいいって」

なゆみは渋った顔を千恵に向け、首を横に振って黙っていて欲しいと懇願した。

「なんだ、川野主任と何かあるのか」

「いい機会だから、言った方がいいよ、サイトちゃん。結構困ってるんですよ」

「ううん、そんなに困ってるって程でも、あの人ああいう人だから、それに悪気ないみたいだし」

「一体何の話をしてるんだ。斉藤、言え」

氷室は苛立つて命令口調になってしまった。

それでもなゆみは何も話そうとせず「なんでもないですから」と手を向けてひらひらと振った。

お客が来たので、なゆみは逃げるように氷室から離れて接客しました。

一人来ると、次々にやってきて、話をする雰囲気はなくなり、三人はそれぞれの仕事をこなす。

氷室は話が中途半端に終わってしまい、不完全燃焼な気分の不機嫌な顔つきになりながら、支店のコンピューターを弄っていた。そして時々なゆみの姿をちらちらと見ていた。

狭苦しい店内は、慌しくなると氷室とすぐにぶつかるほどに近づいてしまう。

なゆみはできるだけ離れようとするが、却って意識をしてしまつて、近づく回数が多くなっていく気がした。

氷室もなゆみが避けてる態度を痛恨に感じている。

前日レストランの前で自分がジンジャに馬鹿なことを口走り、なゆみがそれをまだ怒っていると思っていた。

千恵は何も言わなかったが、冷静に二人を静かに見ていた。

千恵はあの飲み会があつてから薄々感じていた。

氷室がなゆみに好意を持ち、そして何かと意識していることを。

なゆみが酔つ払つたときにタクシーまで送るといふ言葉を聞いたときは決定的だと思つた。

氷室は会社の女性には決して面倒をみようなどという事はしない。あの飲み会の後、女性陣は固まって帰つてそれらしい話をしたが、ミナと美穂以外全て辞めてしまつたし、なゆみも支店に移されて氷室から離れてしまつたので、そういう話を一緒にするのは誰も居なくなつてしまつた。

しかし二人をこの狭い空間で見ってしまうと思つている気持ちを隠そうとする切なさが見えてくるようだった。

傍から見ていて分かる感覚。

千恵もまた気がつかないフリをしながら二人の様子を気に掛けていた。

氷室はコンピューターを遠目に見ながら前日の見合いの後のことを考えていた。

ジンジャに皮肉を言ったところで、結局は自分の愚かさをさらけ出し、そしてなゆみは目の前でジンジャと手を繋いで去つていった。慙愧せんきにたえない思いだけが残つた。

あの後、席に戻つても氷室は自分の思うようにいかないことにイライラして、まるで高校生のガキのようにふてくされた態度を露骨に見せていた。

父親に足を何度と蹴られて、後で見れば青あざになっているほどで、どれほど蹴られたんだと見合いでの自分の態度の最悪さを再確

認した。

そして何より、あの見合いの目的は幸江の父親の跡取り探しであり、氷室が全ての条件を持ち合わせ、娘と結婚させると都合がいいと言わんばかりのものだった。

幸江は一人娘で大人しく、お嬢様のように育てられて上品な感じがするが、なんとも面白みに欠けてつまらない。

あんな人形と一緒にいることなど氷室は耐えられなかった。

だが仕事は魅力的だった。

結婚すれば時期社長も夢ではないほどに、会社ごと自分の物になる。

すでに土台が出来上がっている状態だと、何でもやりやすくなる。人に使われずに、自分が指示を出し、自分に従わせる権力。

それがすんなりと手に入る。

しかし、そんなことのために他の事を犠牲にするなんて氷室にはできなかった。

簡単に手に入る方法があっても、一からコツコツと自分で築きあげていく。

それが例え失敗しようが、それでも自分の力でやってみたい。

(そんな気持ちに徐々になれたのも、お前がいたからなんだよ)

そつと物寂しげになゆみの後姿を見ていた。

「ヘイ、シヨーン！」

なゆみがいきなり声をあげ、そして英語で話し出した。

何事かと氷室と千恵が目を見張る。

なゆみの英会話の先生が店を横切ったのでなゆみが咄嗟に声を掛けたのだった。

名前は横文字のシヨーンだが、見かけはアジア系であり外国人にみえない。

背も低く、英語を話さなければ日本人として間違えられそうな風貌だった。

シヨーンはなゆみに会えて嬉しいのか色んな質問をしていた。

氷室は鼻でふんとくだらないと言いたげにそれを見ていたが、なゆみが他の男と例え英語で会話をしてもどこか落ち着かない。

シヨーンが親しさを超えた慣れなれしさでなゆみと接してる態度はなお更気に食わなかった。

「氷室さん、そろそろお昼の休憩にどうぞ」

千恵が気を遣って横でそつと囁いた。

「いや、俺は後でいい。倉石さん先にどうぞ」

「私は今この伝票をまとめてしまいたいし…… サイトちゃん。よかったですらお昼先にとつて」

「えっ、は、はい。わかりました」

シヨーンにも何か伝えている。ちょうどいいタイミングだとシヨーンはなゆみに昼休みの間付き合っつてと言っていた。

「それじゃお先にお昼取らせて頂きます」

なゆみは氷室に一礼すると、やはりあの例の大きなリュックをもつて小走りにシヨーンの元へ駆けていく。

マスコットのキティも跳ねていた。

「サイトちゃん、外国人にもモテちゃってますね。男ってああいう明るくて素直な女の子に弱いんでしょうか？」

千恵はそれとなく氷室はどうだと聞いているようだった。

「さあ、どうだろうな」

氷室は誤魔化したつもりだったが、自分も実はそうだとふと笑いが口の端から漏れていた。

自分が笑っていると気がつく、急に気難しい顔つきをして咄嗟に話を変えた。

「ところで、川野主任の話だけど、あれどういうことだ」

「ああ、あれは、川野主任、サイトちゃんがからかい易いのか知らないんですけど、結構ペタペタ触ったり、すぐに厭らしいこと言ってます」

「えっ、セクハラか？ 例えばどんなことだ」

「えっ、私が口にするのも抵抗あるんですけど、その、ホテルに行こうとか、あとそういう類の話を色々します」

千恵は口から同じ事を言うのも嫌だといわんばかりに語尾がどんどん小さくなった。

氷室は自分のことのように腹を立ててしまう。

「なぜアイツは誰にも相談しないんだ」

「サイトちゃんはなんでも一人で持ち込みすぎちゃうところありますもんね。人に迷惑をかけたくないって気を遣いすぎるといいうのか、良いように言えば、自分が頑張れば解決できるって何事にも前向きなんです」

「あいつの場合度が過ぎるんだよ。くそ真面目というのかそれでいて人に対して一生懸命になりすぎて前が見えないときがある。自分が極限まで困らないと気がつきやしない。最悪の場合勝手に解釈して暴走してしまいやがる」

「よくサイトちゃんのことわかってますね」

「えっ？ いや、なんか俺も色々迷惑かけられた方だからな」

氷室は力説していたと少し焦ったのか、急に自分の仕事をしだし

た。

しかし、目の前にあった紙を握っただけでその先は何をすればいいのか迷っていた。

それを気遣うように千恵は独り言のように呟く。

「でもサイトちゃんのそういう一生懸命なところ、私好きだな。彼女見てたらすごく元気が出るし、仕事も楽しくなっちゃうから不思議。だけど、サイトちゃんもうすぐいなくなるんですね。なんか寂しいな」

千恵は氷室にちらりと目をやった。

氷室も同じ気持ちなのか何も言わずに寂しげな目つきでどこを見ているともわからないところに視線を浮遊させていた。

客が来たので千恵は接客に向かい、氷室をそっとしておいた。

(斉藤がいなくなる)

またカレンダーを見つめる。

刻々と迫る期限に、氷室は知らぬ間に下唇を噛んでいた。

どうすることもできない状況に、悔しさをにじませているようだった。

「お先でした」

なゆみが休憩から戻ってくる。

その後すぐに千恵が休憩に出かけていなくなると、店はあつという間に暗澹たる空間へ変貌した。

氷室と一時間も二人つきりになることで空気は重たくなり、静けさは圧迫感をもたらす。

その空間だけ重力が増してしまつたかのようになゆみの動きは益々ぎこちなく、極力氷室を見ないようにしようとするが、狭い場所で動きを制限するのは無理があつた。

気がつけば錆切つたブリキのようにギーギーと音が鳴りそうなほどに不自然に動いている。

（なぜこんなにも氷室さんのことを意識してしまうのだろうか）

できるだけ離れていようとなゆみはショーケースに密着するようになつていったが、ちょうど客が遠のき何もすることがないと狭い店の中は真空パックにされたようで逃げ場がなかった。

氷室もまたなゆみのぎこちない態度がひしひしと伝わり、店の一番奥のデスクの側で腰掛けて、どうすべきかと頬に手を当て机に肘をついていた。

時々なゆみを見ては後ろを向いてるのをいいことに、声を出さずに「好きだ！」と口パクして叫んでみてみたが、虚しだけだった。折角徐々に二人きりになれてもこれじゃダメだと、何もできない自分に失望し背中を丸めていた。



そんな時「キュルキュルキュル」っと腹の虫が大きく鳴った。それは氷室ではなくなゆみの方から聞こえた。

「おいつ、今のお前か」

氷室がなゆみを問いただすと、なゆみの肩がびくつと動いた

「なんで昼飯くつたお前が食う前の俺よりも腹空かしてるんだ？」

なゆみはゆっくり振り向いて笑いで誤魔化そうとする。

「えっ、いえ、その、へへへへ」

「何がへへへだ。お前あの外国人と何してたんだ？」

なゆみは情けない笑顔を作り、また何か言われるのを覚悟しながら話す。

「実は、シヨーンに引つ張られて床屋に連れて行かれたんです」

「床屋？ 何しに？」

「日本語が話せないから、私に通訳になってくれて、それで髪を切る間ずっと彼の側にいました」

「それで飯食う暇がなかったって訳か」

「はい」

「お前、どこまでお人よしなんだよ。折角の休憩だろうが。しかも昼飯食べないと腹が空くことくらいわかってるだろ」

「でも、シヨーン、いつも自分の思い通りの髪型にならないから困ってたし、それに私も英語の勉強になるし、一食くらい抜いても平気です」

氷室は呆れた顔を露骨に見せた。

そしてまたなゆみの腹の虫が鳴り、なゆみはお腹を押さえて恥ずかしげに顔を逸らしていた。

「どうすんだよ、夜までまだ長いぞ」

「大丈夫です。仕事に集中したらこれくらい忘れます」

「お前は無理をしてまでなんとかしようとするからな。そして無茶をしては勝手に思い込んで暴走する」

「無理なんてしてません。氷室さんには関係のないことです」

なゆみは抵抗しつつも本当のことを言われて気に入らずにむつとした口調になっていた。

「なんだよ、急に怒って。もしかしてまだ根にもってるのか」

「なんのことですか」

「昨日、伊勢君を怒らせてしまったからね」

「えっ、あ、ジンジャ……。そ、そんなこと関係ありません。それよりも氷室さんはご自身のことをご心配なさったらどうですか。昨日のあれはお見合いだったんでしょ。そしてその返事で今はやきもきでしょうし……」

なゆみはどの口からこんなこと言ってるのだろうと、最後の部分が口ごもってしまった。

「誰が心配だあんなもん。あれは無理やり父親にあそこに座らされたんだ。父に借りがあったから断れなかっただけだ」

「借り？ もしかしてそれって、あの時宗教から私を助けるために電話で名前を借りるとか言ってたことですか？」

なゆみは恐る恐る聞いていた。

「んん、まあそういうことになるかな」

「ご、ごめんなさい。私のせいで」

「いや、別にお前を責めてる訳ではない。いつかはこうなるとはわかってた。ずっと前から見合いしろって言われてたから」

「でも、これがきっかけでいい具合に働くといいですよ。そして私も少しは気が楽に……（なるの？、えっ？）」

なゆみはその後黙り込んだ。氷室のお見合いが上手く行くと思うとなんだか胸がざわめく。

「ばかやろう。勝手にくつつけるな。だけどお前達はくつついたみたいだな。結局はお前の騒ぎはなんだったんだ？」

「えっ、あれは、やっぱり私の勘違いでした。勝手に思い込んで一人で騒いでました」

「ふーん。雨降って地固まるでいいんじゃないか。でもお前はアメリカに留学だろ。その間どうすんだよ」

「ジンジャは待つてくれるって言ってくれました」

「よかつたじゃないか。テンポラリーラブじゃなくて」

「えっ？」

「だけど1年は長いな。その間に伊勢君が浮気したらどうすんだ。帰つて来たら新しい女がいたりして」

このときの氷室は自分でも意地悪だと思えるほど、目が細まって言い方もいやらしかった。

そしてそうであつて欲しいと望んでる気持ちが入っていたのか、不気味にニヘラニヘラと笑っていた。

なゆみは下を向いてじつと黙り続けていた。中々それに対して応えられない。

その沈黙は氷室に罪悪感を植えつけ、さすがに廉恥心が湧いた。

「ごめん、ちよつと意地悪になつてしまった。俺の癖だ、許せ。伊勢君はお前のご絶対待ってるよ。心配するな」

「違うんです。私がもし他の人を好きになつてしまったらどう思つたら何も言えなくて」

「はっ？ どうした斉藤。一途なお前がそんなこというなんて。まさか他に気になる奴がいるとか」

「えっ？」

なゆみはドキツとしてしまった。氷室の顔をじつとみてしまう。

「それがさっきのションとか言うんじゃないだろうな。倉石さんから聞いたぞ。お前、結構もてるんだってな」

「いえ、滅相もない、そんなことありません」

「でもまだ二十歳だし、真剣な恋なんて考えられないのかもな」

「そんな。年なんて関係ないと思います。愛するって言う気持ちは年取らないとわからないんですか？」

なゆみはなんだかムキになってしまった。

「いや、そんなことはないけど、年取ってから愛だの恋だのってかなり慎重になりすぎて、寧ろ難しいもんだ。年取ってから恋に落ちるって冒険なんだぞ。だから若いうちは一杯経験積んでおいた方がいいっていう例えだ」

「それって氷室さんの経験談ですか？」

「えっ、なんで俺の経験談なんだよ。おいつ、お客さんだぞ」

氷室もまたドキツとしていた。客が来たことで話が中断して助かったと思つたほどだった。

確かに32歳にもなつて20歳の女の子に夢中になるほどの恋をするのは、氷室には冒険以上の戦いだった。

自分で言っておきながら、なゆみに経験談と指摘されて目の前で起こっているだけに心臓がバクバクしていた。胸を押さえて焦つて背をむける。

なゆみはアメリカに一年留学し、その長さも待てると言つほどの彼氏もできた。

氷室はなゆみに隠れてため息を吐く。

本当にどうしようもない恋だと自分で自覚している。

一人店内の隅で背中に暗い影を背負つてセンチメンタルになって

いた。

「氷室さん！ 氷室さんてば」

なゆみが呼んでいる。

自分の世界に入り込んでいた氷室は我に返ってあたふたしだした。

「な、なんだ！」

「手伝って下さい」

振り返れば急にお客が増えていた。

氷室は急いでショーウィンドウの前に立ち、なゆみの隣に立って接客をじだした。

客が続く限り氷室はなゆみの側にいられた。  
忙しいのも悪くなかった。

千恵が戻って来ると次は氷室の休憩時間となった。

店からすつと去っていく姿がなゆみの目に映ると、その間息抜きができるばかりに、ほっとして肩の力を抜いた。

「どうしたの、サイトちゃん。お疲れ？」

「うん、どうも氷室さんと一緒にいると気を遣っちゃって苦しいの」

「ふーん、それって気になるからじゃないの？」

「やだ、千恵ちゃんがそんな事いうなんて。そんなの絶対ありえない。だって氷室さんすぐにきついこというんだもん」

なゆみは誤魔化す台詞をいいつつも、それが自分の耳にも嘘に聞こえ、すぐ後味の悪さで顔を曇らせた。

千恵はそんななゆみを見るのがもどかしい。

「サイトちゃんは真っ直ぐで人には素直なのに、自分の気持ちには素直じゃないね。もっとよく周りのことを見ないと本当に大変なことになっちゃうよ」

千恵の言葉はなゆみの心に深く浸透する。

その言葉の意味は自分の心の中で化学反応をもたらすように無性に騒ぎ立った。

そして空腹感がこのときとても気持ち悪くなり、胸の中まで込み上がる。

何もかも混ざり合い、この状況が苦しくて仕方がない。

それを必死に誤魔化してなゆみは笑顔を作って無理に抵抗する。

「私、ちゃんと見てますよ。大丈夫です」

千恵はその笑顔は偽りだと分かっていたが、なゆみが自分で気がつかない限り何を言っても無駄だと諦め、そして自分の仕事をしました。

なゆみもまた黙々と仕事をこなすが、氷室が側にいなくても胸が苦しい限り心は休まらなかった。

氷室が休憩から戻ってくると、一度店の前を通過した。

戻ってきたかと思うと、いきなり立ち止まり、さらに喉をゴホンと鳴らしてから落ち着かなさそうに入ってきた。

なゆみも千恵も何をしているんだろうと疑問符を頭に乘せながら「お帰りなさい」ととりあえず迎える。

すると氷室は二人の前に白いお洒落な模様が入った箱をぶつきらぼくに差し出した。

「控え室で二人で食べ」

千恵がその箱を手にしたが、すぐに何が入っているかわかり二人はびっくりして氷室を見つめる。

「氷室さん、これ有名な店のケーキじゃないですか」

千恵が言った。

「ああ、美味しそうだったから、お前達に買ってきた。ここは俺が見てやるから、早く食べ」

「氷室さん……」

なゆみがつぶやいた。

なゆみにはなぜ氷室がケーキを買ってきたのか分かっていた。

「何もたまたましてるんだ。早く食わないと腐るぞ。つべこべ言わずに食べ！」

それはもう脅迫状態だった。

「あつ、はい。どうもありがとうございます。サイトちゃん、折角だから頂こう」

「あ、ありがとうございます」

なゆみは深くお辞儀をしたが、氷室は照れ隠しのようにそっぽを向いていた。

二人は狭い控え室に入り、箱をそつと開けて中を覗き込んだ。

そこには色とりどりでデザインが洗練されたケーキが二つ入っていた。

「うわあ、なんて美味しそうなケーキ」

なゆみはびっくりしていた。

「サイトちゃん、ここのケーキ、高いんだよ。知ってた？」

なゆみは首をぶんぶん横に振っていた。

「でも氷室さん、なんでケーキなんか買ってきたんだろうね」

千恵は小さく囁いた。

なゆみは「さあ？」と曖昧に返事したが、なゆみのケーキを見つめる目が何かを思っ潤っている。

千恵はなんとなく二人にしかわからないやり取りがあるんだろうと気がついて、優しく微笑んでいた。



氷室が買ってきたケーキ。

どんな風到店に入ってこのケーキを選んだのだろう。

なゆみはじつとそのケーキを見つめていた。

食べるのが惜しいくらいそのケーキの姿は美しく、記念品としてずつと残しておきたいくらいだった。

表面はクールに装いながらも、恥ずかしそうにケーキを買っている氷室の姿が目につかぶ。

二人はそのケーキを堪能した。

そしてなゆみの目はコップに水をぎりぎり注いだ表面のように今にも溢れそうな涙が溜まっている。

それは美味しいから感激したのもあるが、氷室が昼ごはんを食べ損ねた自分のために買ってきてくれたことであるのを充分理解していたからだった。

ケーキの程よい甘さは、氷室のなゆみに対する優しさのようで舌の上でとろっとする。

二人は食べ終わると、氷室に深々と頭を下げ礼を言った。

「もういいよ。さあ、それより最後まで仕事頑張ってくれよ」

氷室は奥のデスクから受話器を取り、本店に電話をかけた。

なゆみはこっそりとその後ろ姿を見つめていた。

半袖の少しブルーがかったシャツを着た氷室。

相変わらず肩幅が広くがちりちりとしている背中が男らしい。

なゆみは男の人をそんな風に見つめたことなどないだけに、そう感じることで胸がドキドキしていた。

ケーキを食べたお陰で一気に血糖値は上がり、なゆみの空腹は紛れ、さらにぎこちなさも取り払われていた。

あんな美味しいケーキを食べたのは生まれて初めてと思えるほどまだ感動が持続する。

そこには氷室の気遣いがしつかり含まれていて、それがうまみ成分を出していたのかもしれないし、甘さが氷室の優しさと重なっていつまでも舌先に残っていたからかもしれない。

氷室の温かい気持ち体が浸透していくようで、それは体をふわふわさせ、なゆみはどこかぼーっとしてしまう。

そして手に持っていた商品を落としてしまい、それを追いかけて拾って頭を上げたとき、壁際で出っ張っていた棚に頭をぶつけてしまった。

大きな音がお寺の鐘のように響く。

「痛！」

なゆみは星が出るほどに衝撃を感じくらくらしていた。

「お前何やってんだ？」

氷室が一部始終を見てたのかケタケタと笑っている。

「大丈夫？ サイトちゃん」

千恵も心配しながらも笑っていた。

なゆみも頭を抑えながら、自分の失態におかしくなって一緒に笑ってしまったが、痛さはすぐには消えない。

前屈みになって顔を歪めながら必死にその痛さを我慢していた。

すると氷室はなゆみに近づく。

「相変わらず、なんか抜けてるなお前は。ほら、痛い痛い飛んでいけ！」

氷室がからかうようになゆみの頭をなぜなぜしだした。

それが不思議なほどに本当にすーっと痛みが消えてゆく。氷室の大きな手はいつのときもなゆみを救ってくれる。

なゆみはその氷室の手が好きだなとぼーっと考えていた。

酔っ払って吐いたときに背中を擦ってくれた手、泣くなと頭をくしゃっとして慰めてくれた手、全てを任せると自分の手を握ってくれた手、そしてこのときも痛みを和らげようと撫でてくれている。

(氷室さんのあの大きな手にどれほど助けられただろう)

ふとそう思ったとき、急に胸が熱くなる。

だけどそれを一生懸命沈めようとぐっぐと堪えていた。

色んな気持ちがあが差しながらとうとう閉店時間を迎えこの日は終わりとなった。

氷室は客が入ってこないようにシャッターを素早く閉めていた。

「お疲れさん」

氷室が二人に向かって声を掛けた。

なゆみはなんだかこのときになってこの日が終わるのがもったいないように感じてしまう。

そして控え室に入ると仕事の一つ残っているのに気がついた。

「あっ、まだ洗い物してなかった。すみません。すぐ洗ってきます。」

千恵ちゃん先に着替えてて」

湯のみとケーキを食べたときに使ったお皿をまだ洗っていないかった。後で洗いに行こうと思っていたのをばたばたとお客が続いてなゆみはすっかり忘れていた。

「サイトちゃん、明日でいいよ」

千恵が気を使う。

「でもちゃんと今日中に洗っておきたい。これは私の仕事だから。遣り残したまま終えたくない」

責任感が強いなゆみのこだわりだった。

「わかった。俺が待つてやるから、倉石さんは着替えて先に帰れ。そしたら斉藤も気兼ねしなくてすむ」

千恵はにこりと笑って、控え室へ入った。

自分が居なくなればこの二人は一緒に居られる。

そう思うとさっさと着替えていた。

「すみません。5分で済ませてきます」

なゆみは食器と洗剤が入った洗い桶を持って超特急で走っていった。

「斉藤、慌てるな！ 転ぶぞ」

氷室が心配して声を掛けると、千恵はお似合いだとくすくすと笑っていた。

邪魔者は去るべしとさっさと控え室から出て、氷室に挨拶をして帰っていった。

店の左横にビルの中へ入る小さな入り口がある。

そこを入ってすぐ左側に地下に降りる階段があり、それを下ったすぐ側にビルで働いている人が自由に使える給湯室があった。

ビルの中でも目立たず、中に入り込んだ場所なため、普段一般客は来ない。だがそこはビルの死角でもあり、人が来ない分、どこかの店の人とはったりかち合ったりすると、少しドキツとするくらい怖いときがある。

なゆみは誰にも会いたくないと、必死で洗う。

すると人の気配を感じ、足音が近づいてくるように感じた。

相手に自分が先にここで洗い物をしていることをそれとなく伝える。

「すみません。今使ってます。すぐ終わりますから」

なゆみは声だけ一応掛けておいた。

それならかち合っても驚きは少ない。

するとなゆみの手元が突然影を帯びたように暗くなった気がした。後ろに人が立っている気配も感じる。

気の短い待てない人が、早く終われと催促しているのかと思ったが、ちょうど終わったところだったのでなゆみは笑顔で振り返った。

「すみません。もう終わり……」

言葉が途中で途切れる程になゆみははっとして血の気が一瞬で引いた。

そこにはサングラスとマスクをかけた怪しげな男が果物ナイフを持って立っていた。

ヒヤツと背筋が凍りつき、なゆみは恐ろしさのあまり声が咄嗟に出ない。

頭の中もパニックになり、目の前の出来事をちゃんと見ているのに信じられないと目が見開きききっている。

男がナイフを持った手を伸ばしてじりじりと迫ってくると、なゆみもまた同じ距離を保つように後ろに下がっていく。

給湯室のような狭い場所はあるという間に逃げ場を失い、なゆみは壁においやられてしまった。

もう後ろへは下がれない。後は男が距離を縮めるだけとなった。

背中を押し上げるように壁にへばりついたなゆみは極度の緊張感で足ががくがくと震えだした。

「大人しくしろ」

マスクの下から籠った声と共に、性的に興奮したはあはあとした息遣いが聞こえる。

そこにナイフを振るように見せつけ、男は自分の欲望が満たされて酔いふけり、この時を楽しむようにへへへと狂った笑い声を漏らしていた。

その男は小柄だが、ナイフという武器を印象つけると、いかにも強いんだと見せ付ける。

なゆみは絶体絶命だった。

だが唾を飲み込み、なんとか声を出そうと喉を湿らせた。

「あいつ5分で帰るとかいいながらも10分経ってるけど、大丈夫

夫だろうか。もしかしたらほんとにこけてたりして。そんでもって足挫いて歩けなくなってるのかも」

氷室は想像を膨らまし、あたかもありえるとばかりに心配になると、いても立つてもいられずに様子を見に行った。

地下へ向かう階段のその途中で、喧嘩でもしているような大きな声我突然耳に入ってきて来る。

「ちょっと何するのよ。あんななんか、あんななんか。このおー！」

なゆみの叫ぶ声だった。

だがそれは金切り声に近く、悲痛さと必死さが交わり、異常事態が起こってる何ものでもなかった。

氷室は一瞬で何かが起こっていると察知する。

「斉藤！」

階段を下りる足が早まり、最後は何段も飛ばしてジャンプしていた。

その時、給湯室から出てくる男とすれ違ったが、その男はすばやく走って去ってゆく。

一瞬はつとしたが、なゆみが心配で氷室は給湯室に駆け込んだ。

「どうした。斉藤。何があったんだ」

中を見れば、壁に背をもたせかけて震える足でなゆみは立っていた。

色の白いなゆみの肌は白さを通り過ぎて真っ青になっている。氷室を見たたん力が抜けて床にへたり込んでいった。

「おい、斉藤。大丈夫か」

氷室はかがんでなゆみの体を支える。  
氷室も心配から血の気が引いていたのか顔を青ざめ、沈痛な面持ちでなゆみを見つめた。

「氷室さん…… 私、私」

そう呟くととなゆみは氷室に抱きついて泣き出してしまった。

「斉藤、一体何があつた」

氷室はなゆみの顔を覗き込む。

なゆみは一度大きく息を吸い込み、顔を氷室から離して涙を手で無造作に拭った。

ふと気がつけば、なゆみの左の手から少し血が滲んだ線が親指の付け根に刻まれているのを氷室は見つけ、目を見張った。

「その怪我、まさか、さっきの男にお前襲われたのか」

「襲われかけたけど、何もされてない」

「とにかく、店に戻ろう。立てるか？」

氷室はなゆみを支えて立たそうとした。

なゆみは自分で立てると、自ら立ち上がり、気丈にも洗い物を忘れずに洗い桶をしっかりと手にした。

氷室はなゆみの肩を抱いてやり、ゆっくりと階段を上っていく。

店に戻り、なゆみを椅子に座らせて、氷室は常備していた救急箱を取り出して絆創膏を怪我したところに貼ってやった。

そしてビルの管理責任者に電話を掛けて変質者が出たことを一応報告しておいた。

「すまないな、俺、犯人とすれ違ったのに捕まえることできなかった」

「ううん、大丈夫です。私思いつきり蹴り入れましたから」



「えっ？」

「私、許せなかったんです。こんなところで変質者に襲われて怪我して留学できなくなったらどうしようって思ったら、急に怒りが爆発して、戦いました。私がものすごい形相で男の両手首を掴んだので男は少し怯んで、その時ついでに腹部を足蹴りしちゃいました。ついでに噛んでやろうかと思っただけですけど、ちょうどその時氷室さんの声が聞こえたから、あの男慌てて逃げていきました」

なゆみは淡々と語っていた。

「お前…… なんと無茶な」

「なんとなくあの人、川野さんに見えちゃって、そしたら今までの鬱憤を晴らしたくなって、遠慮なく蹴れました」

こんなときにまで冗談を言おうとするなゆみの健気なさが氷室の感情を爆発させた。

氷室はなゆみをなりふり構わず思いつきり抱きしめた。

「バカヤロー！ だから無理をするなって言ってるだろ。お前はどうしてそんなに無茶をするんだ。もし、取り返しのつかないことになつてたらどうするんだ。かすり傷ですんだからよかつたけど、お前にもし何かあったら、俺、俺、気が狂ってしまつよ」  
思わず本音が漏れていた。

「氷室さん、氷室さーん、あーん、怖かつたよ」

なゆみはおんおんと氷室に抱きしめられながら素直に泣いた。  
ずっと突っ張っていた頑張りがこのときふにやっと折れ曲がって、誰かにすがり付いて甘えたくてどうしようもなかった。

氷室の胸はとても厚くがっしりと大きくて、その胸で思いつきり泣けるのがとても心地よかった。

氷室は力強くそれを受け止めるように両腕にしっかりとなゆみを

抱きかかえている。

なゆみは安心感を体全体で感じていた。  
しかしこんな時にもなゆみのお腹の虫が「キュルルル」と突然  
鳴ってしまった。

「あつ、お腹空いた」

泣き声交じりに小さく笑いも添えられて咳く。  
氷室もふつと息が漏れた笑いをしていた。

「どんなときもやっぱりお前らしい。ほら、早く服替えて来い。  
飯食いに行こう」

「はい」

なゆみは素直に言うことを聞いた。

控え室に入り、ロッカーを開ける。

扉の部分についた鏡をみながら、涙を拭った。

まだ氷室の胸の感触の余韻を体で感じている顔が同時にそこに映  
っていた。

「何か食べたいものあるか」

控え室の向こう側で氷室の声が聞こえる。

「トンカツ」

「またあそこに行きたいのか」

「はい」

なゆみは今は氷室の事しか考えられなかった。

そして氷室がデザインしたものをもう一度見てみたかった。  
氷室と一緒に。

そうすれば嫌なことも忘れてきつと元気になれる。

なゆみはそこが自分のパワースポットのように思っていた。

トンカツの店に入れば、あの店長が嬉しそうに声を掛けてきた。

「おっ、いつしかの少年のようなお姉さん。またいらっしやい」

「おい、まだ言うか。ちよつと失礼だろ」

氷室がキツと睨みを利かした目つきを返した。

「いやいや、これはかたじけなかったでござる。しかし女にしておくのはもつたないくらい、美少年になれる顔立ちだ」

「あの、それって褒め言葉なんでしょうか？」

なゆみは店長の例えがよくわからない。

「この人はちよつと変わってるんだ。感性が人と違うというのか拘りが強いというのか、この店のデザインを決めるときも大変だったんだ。何度も口を挟まれてやり直したった」

「だから、氷室さんにしか頼めなかったんじゃないですか。氷室さんは妥協することなく私の意見を取り入れて何度もやり直しをしてくれた。感謝してますよ。お陰でこの店も繁盛ですから」

「確かに俺もやりがいがあった。けど上司が上から圧力かけて、あの時は大変だったんだぞ。予算のこともあったから、いくらなんでも注文が細かすぎるって。会社がもう少しで断るところだったんだぞ。それを俺が必死に抵抗してギリギリの予算でやり進めたんだから」

「ほんとに氷室さんはいい仕事をしてくれた。感謝仕るでござす」  
「あんた一体どこの国の人間だ」

店長はアハハと笑って厨房に入っていった。

なゆみは氷室の服を引っ張って囁いた。

「あの人きつと他の星から来た人なんですよ」

「そうかもな」

二人はテーブルに向かい合わせになつて座つた。

なゆみは店の中を隅々まで観察し、氷室がどのような顔をしてデザインしたのだろうと、一つ一つじっくりと見ていた。

お客は家族連れ、恋人、友達などそれぞれ各テーブルで食事をしている。

あの人たちはどんな風にこの店のことを思っているのだろう。

ここにいる氷室が作ったと知つたら絶対感動するに違いないと自分だけが知っているその事実优越感を織り交せて笑っていた。

その側で氷室は優しい眼差しを向けながら、自分の作り出したものを懸命に見ているなゆみに見とれていた。

ウエイトレスが気を使うようにそつとお茶をテーブルに置き、邪魔をするのが悪いとばかりに注文を遠慮がちに尋ねていた。

「少しは落ち着いたか」

氷室が尋ねる。

「はい。もう大丈夫です。ここに来たらすごく元気ができました」

「無理するなよ」

言葉少なかったが、氷室の声がいつもより優しく、なゆみは大きな安堵感を与えられたような気がした。

あんなに苦手だと思ったのに、氷室を知れば知るほど苦手どころか心の中で氷室への思いが膨れ上がっていく。

一人っ子で鍵っ子でもあったなゆみは共働きの両親にも放つたらかきにされて育ってきた。

それは別に嫌ではなかったが、何でも一人で考えて自由気ままな毎日を送っては人に頼るといふことなど考えたこともなかった。

だけどいい子ぶっていつも一人で解決しようとする癖がついてしまったように思う。

前向きな印象も与える反面、自分のことに関しては融通の利かない曲げられない性格でもあった。

だが、氷室を前にしていると、道を正されているようで、大きな包容力で包まれている気分になる。

それがとても心地いいとばかりに、なゆみは氷室に心から湧き出る笑みを浮かべていた。

その笑顔につられるようにして、氷室も照れたように笑っている。かつて高校生だったとき、クラスの女の子から優しくしてもらって、戸惑いながらもありがとうとお礼を言って、痒くもないのに持つていきようなない思いを誤魔化すために頭を掻き毟っているような気持ちだった。

言葉がなくても二人は落ち着きを払っている。

なゆみは氷室を見つめニコツと笑って少し甘えた声を出した。

「私も氷室さんにいつかキッチンデザインして欲しいな。私だけの使いやすいキッチン」

「例えば、どんな感じ？」

「私、背が高いから、シンクも高めにするの。色は明るくて楽しくなりそうなカラフルな感じで、収納箇所が一杯あって、玩具箱をひっくりかえしたようなおとぎの国みたいに作って欲しい」

「まるで子供のおままごとみたいなキッチンだな」

「うん、そういうのがいい。大人になっても夢を忘れないようなもの」

なゆみは隣の椅子に置いていたリュックにぶら下がってるキティちゃんを手を取った。

「キティちゃんが好きなのか？」

「うん、大好き。きつとおばあちゃんになっても大好きだと思う。私はずっと変わらずにこのままだから」

「初めて会ったとき、リュックにそれ付いてなかったよな」

「すごい。ちゃんと見てたんだ。あの時私、背伸びしようとしてた大人の女性になりたいって思って、子供っぽいものを封印してたんだ。でも好きなものってやっぱり無理やり遠ざけちゃいけないって思った。好きななら正直に好きって私は嘘偽りなく言いたい」

なゆみは真剣に氷室の顔を見ていた。

本人は気づいてないがその瞳の奥には口にはできない真実が映っている。

氷室の本心もまたその瞳に吸い寄せられるように、心の扉が大きく開く。

そして気持ちを言うには今しかないと勇気が腹の底から突然湧き上がった。

「なあ、斉藤……」

だが、無情にも熱々揚げたてのトンカツがやってきた。

なゆみもタイミングが悪かった。

昼食を抜いて腹が減りすぎて食欲には勝てず、トンカツに視線が向いて笑顔で見えていた。

氷室の開いた心の扉に、ひゅーっと風が吹き込んで勝手にバタンと閉められてしまった。

(くそお、トンカツに負けた……)

「氷室さん、今なんか言いかけました？」

「いや、その、トンカツはカツ（勝つ）だけあって強いなと」

「どうしたんですか？ トンカツのジョークですか？ すみません、笑えませんでした」

「俺もだよ……でも負けて泣けてくる」

「氷室さん、トンカツと何の勝負してるんですか？」

「いや、なんでもない。とにかく食おう」

「はい。頂きまーす」

なゆみはわくわくした顔つきをしていた。

それとは対照的に氷室はトンカツを睨んでいた。

なゆみは熱々を箸でつまんで、ハフツと口に入れる。

自家製の手作り衣がさくつとしていてただでなく、肉のうまみをもっと引き立たせたような味わいが口いっぱいに広がり、極限状態の空腹ではこの世で一番おいしいものを食べている気分になっていた。

「このトンカツ本当に美味しい。衣からして味が違う。お肉も柔らかい」

なゆみは美味しそうに食べていた。

「あの店長のシークレットレシピなのさ。この揚げ方ができるのもあの人だけだろうし」

「さすが他の星から来た人ですよ。地球では中々食べられない絶品の美味しさ」

氷室はなゆみの例えに笑っていた。

素直に笑ったのは久しぶりかもしれないというくらい、なゆみを目の前にして穏やかな気持ちになっていた。

冷めた目つきで物事をなめてたように見えていた毎日。

それなのになゆみと出会ってから、彼女の行動に一つ一つ好奇心が湧きあがった。

人を好きになるという感情も素直に認めて、高校生に戻ったようになりふり構わず突っ走る行動を起こしてしまう。

それがいつの間にか楽しくて、そして失いたくないものに変わりつつある。



(しかし彼女はもうすぐ俺の前からいなくなる)  
ふと手に持っていた箸の動きが止まった。

「どうしたんですか、氷室さん。考え事ですか？」

「いや、なんでもない。ただ……」

「ただ？ あっ、わかった」

「えっ？」

「大丈夫です。安心して下さい」

「な、何を？」

氷室は考えていることがばれたのだろうかとドキマギしてしまっ  
た。

「だから、支払いでしょ。ここは私のおごりです。前回、訳も分か  
らず氷室さんが支払ってしまいましたから」

「お前な…… ほんとにアレだな」

「アレ？ なんですか、ソレ？」

「いや、なんでもない」

氷室は下を向いてクククと笑い出した。

なゆみは首を傾げたが、氷室のいたずらっぽい笑い方がかわいく  
て優しい眼差しで見つめていた。

「氷室さん、ほんとに変わりましたね」

「もう苦手なタイプじゃないと嬉しいんだがね」

「そんな、苦手どころか……」

なゆみはその後の言葉を続けられなかった。

誤魔化すようにトンカツを慌てて頬張っていた。

結局は割り勘ということになり、なゆみはいつになったら借りを

返せるのか、店を出た後しつこく氷室に付きまとった。

繁華街で絡むように氷室の前に立ちふさがり、後ろ向きに歩いていると、でこぼこしたところで足をすくわれてぐねってしまった。

氷室は咄嗟になゆみの腰に手を回して体を抱きこむように支える。

「お前はしつこいってんだ。そのうち怪我するぞ」

氷室はなゆみを引き寄せて抱き寄せた状態でじっと目を見つめた。

それは子供にお仕置きするように「めっ」と睨んでいるつもりだったが、知らない人から見ると恋人を抱擁しているように見えたかもしれない。

すぐに手は離されたので、なゆみは、冗談のように受け取り自身もふざけて対応した。

それについては二人は別に意識しているわけでもなく、機嫌よく戯れているだけに過ぎなかった。

しかし第三者の目からみると誤解するには十分なものだった。

「キティ」

突然聞こえてきた自分の英会話学校で呼ばれているニックネーム。なゆみは条件反射で振り返る。

「あつ、坂井さん」

「何してるんだこんなところで」

「えっ、その、ご飯食べて今から帰るところです。坂井さんすごく久しぶり。元気そうでよかった」

「何が元気そうでよかっただよ。こんなところ伊勢に見られたらどうするんだ。あいつ悲しむぞ」

「えっ、ちょっと待って、誤解です。この人は仕事でお世話になっている人なの。今日は色々あったからつい」

なゆみは意気消沈してうつむくと、氷室は黙ってられなくなった。

「君はもしかして伊勢君の友達かい？」

坂井は氷室に黙って視線を向ける。

「これは完全な誤解だ。斉藤と俺は何も関係ない。全くの仕事上の上司と部下だ。だが、言いたければいつてくれてもいい。別にやましいことは何もないし、伊勢君が何を思うと俺には関係ない」

「氷室さん……」

なゆみは強気の氷室の発言に少し戸惑う。

どこかでジンジャに誤解されることを恐れている気持ちが少なからずもあった。

自分は何をしているんだとこのとき初めて気がついた。

坂井は強張った表情で黙っていたが、元々告げ口などできる男ではない。

何か言いたげになゆみに振り返るが、どこか葛藤をしている。

ふいに首をうなだれ下を向いたとき、罪意識を持っているようにも見えた。

そして覚悟を決めたように体に力が入ると、坂井はなゆみに近づいて真剣な目を向けた。

「キティ、あんな、俺、お前のこと好きだったんだ。伊勢よりも先に仲良くなったのに、キティは後から出会った伊勢を好きになってしまった。伊勢もお前のこと好きになってたのは俺気がついていたんだ。でも俺、伊勢に自分がキティのこと好きだって先に教えちゃった。伊勢のことだからきつと遠慮するって分かってたから。だから伊勢は俺に気を遣ってずっとキティに気持ち伝えられなくて我慢してたんだ。そのことだけ忘れなくてやってくれ」

なゆみは坂井の告白に驚いて呆然と立ち、以前ジンジャが言っていた言葉を思い出していた。

『自分の気持ちに気がついていてもあの時は何もできなかった。ただ、タフクがずっと俺のこと見ててくれるといいなって思うしかできなかった』

ジンジャはなゆみが好きになったときから同じ気持ちでいてくれた。

それなのになゆみは勝手に誤解してふらふらと馬鹿なことばかりしていた。

そしてこのときもジンジャのことを忘れて氷室と一緒にいたことに罪悪感が芽生えてうねり立つ。

自分がすっかりしてないばかりにいるんな人を心配させて巻き込んでしまう。

なゆみは無性に自分が許せなくなっていた。

坂井は言いたいことを言って、これで用はないと氷室に一礼をしてその場から去った。

二人は暫く黙ってその場に立って坂井の去っていく後姿をみていたが、氷室が何か言わなくてはいけないとばかりに口を開く。

「斉藤、なんかもてるな。そっか伊勢君は友達のことを気遣ってお前の気持ちにすぐ答えることができなかったんだな。ということはかなり昔から両思いだったってことだ。ほんとに一人で取り越し苦労だったな」

夏の夜だというのになゆみはどこか震えている。

暫く黙っていたが、何かを決断したようにぐっと体に力を入れて

氷室に笑顔を見せた。

「私、ここで失礼します。今日は、いえ、今日もまたご迷惑掛けてすみませんでした」

「そんなの慣れっこさ。気にすんな」

「氷室さん……」

「なんだ？」

「私、氷室さんに会えてとてもよかったです。氷室さんが苦手だなんて言った事、本当にごめんなさい。氷室さんは尊敬できるほどの素晴らしい方です。どうか夢に向かって建築のお仕事続けて下さい。今までありがとうございます」

「なんだよ、改まって。これで終わりみたいなの……（えっ）」

「それじゃおやすみなさい」

なゆみは走って行ってしまった。

最後に語った言葉はまるではじめをつけるように、氷室ともう交流を持たないと宣言されているように聞こえた。

氷室はただ一人ぽつんと取り残されていつまでもそこに立っていた。

振り出しにもどったところか、いきなりのゲームオーバーだった。

「俺は一体何をしたかったんだろうか」

舌打ちをしては行き交う人に紛れてとぼとぼと歩きだした。

その晩、氷室は電気もつけずに暗い部屋の中で床の上に座りベッドを背にして考え込んでいた。

好きな気持ち膨れあがって、なゆみのことを考えて心そのままに動いても、自分がどうしたいかわからない限り何も発展はなかった。

なゆみが襲われて心配して抱いてしまったあの時、なゆみもそれに応えていたはずだった。

トンカツ屋で好きなものは好きと主張したときのあのなゆみの瞳は確かに氷室を見ていたはずだった。

「もつと自分が踏み込んでいたら流れが変わったのだろうか」

氷室はぐつと歯を噛み締めてしまう。

氷室自身最初からどうしようもないと思いついては何もしてこなかったことに気がついてしまった。

そして坂井の言葉でなゆみはジンジャの存在を強く感じて行ってしまうた。

これ以上氷室と関わりたくないとはっきり意思表示して

氷室はおもむろに携帯電話を取り出して父親に電話した。

「父さん、あの話その後どうなってる？」

何度も父親に蹴られた自分の足の痣の具合から、かなり悪い印象を与えてしまったのだと思ってだったが、意外にも相手は何も感じておらず、氷室のことをべた褒めしていたと父親から聞くと、好都

合の結婚相手だと思われていると氷室は自覚した。

それが滑稽に思え、電話越しに氷室はあざ笑ってしまった。

「そっか、幸江さんも気にしてなかったか」

「気にするどころか、コトヤをかなり気に入ってたそうさ。どうだ真剣に考えてみないか？ お前ももういい年だろ。条件もいいし、幸江さんも美しい方と来てる。申し分ないと思うぞ」

「そうだな。少し考えてみるか。幸江さんの電話番号教えてくれ。電話掛けてみる」

氷室はメモを取った後、電話を切った。

自分でも何を血迷っているんだと承知の上だったが、これしかないのを忘れる手立てはないと思っていた。

幸江はその点、年齢も26歳ときている。それくらいなら自分の年にも合うだろうと、氷室は幸江に電話を掛けた。

行動を起こすなら早い方がいい。

勢いだけで、心は全くついていってなかったが、困惑した状態で幸江の家に電話が繋がったとき、もう後には引けないと覚悟した。

気乗りしないのに無理やり自分を窮地に追い込みそして成り行きに任せてみる。

氷室は目をきつく瞑り、歯を食いしばる。

そして薄い空気の中、必死に大きく息を吸い込んでから声を出した。

「もしもし、氷室と申しますが……」

「えっ、コトヤさん？」

幸江の声が聞こえた。なゆみへの気持ちを絶つ瞬間だった。

「昨日はお会いできてよかったです」

無難な挨拶をする。

そこにはもちろん感情など備わっていない。

全ては口先だけのやりとり。

しかしそれですら氷室は必死だった。

会話は暫く続いた。

このときも部屋の中は暗いままだった。

話が尽きて電話口で沈黙が続いたとき、まるで合図だと言われているように氷室はとうとう口に出した。

「この先お互いのことを知るためにも俺とお付き合い願えませんか？」

幸江は少し驚いていたのか、少し間を置いて「はい、宜しくお願いたします」と遠慮がちに答えていた。

間があったとき、そのまま断る理由を考えていてくれたらいいと願っていたが、承諾の返事が聞こえると、やはりそう来たかと思っただ通りの展開に益々後に引けなくなつたと無性に可笑しく思えてしまった。

ここまで自分を追い込むことが罰ゲームとでもいうくらい、氷室は好んで自分を痛めつける。

その後電話を切ると、持っていた携帯電話を放り投げていた。

暫く床の上で足を手で抱きかかえて長いこと静かに座り続けた。

氷室が幸江と付き合いだし、そしてなゆみはジンジャだけを見つめる。

なゆみの方もジンジャー一筋に関係は順調に進んでいく。



ジンジャはずっと我慢してた気持ちを解放するように、なゆみに積極的に気持ちをぶつけ、それはどんどん二人の距離を縮めていったが、どっちかというジンジャがどんどん入り込もうとしているようにも取れた。

手を繋げばジンジャはなゆみを側に置くように力強く引つ張る。

二人つきりになればキスを求め、「好きだ」と甘い言葉も平気で耳元で囁くようになった。

なゆみは慣れてないために、ジンジャの大胆な行動に時々ついていけなくなりそうだったが、必死にジンジャに合わせようとする姿勢が却ってジンジャの思う壺となり、益々かわいいとジンジャのなゆみを抱擁する手に力が入った。

なゆみは恥ずかしげに照れてはジンジャのされるがままになっていた。

ずっと憧れていた人に好かれているんだと思うと、なゆみ自身どこか満足感を得たような気持ちが芽生えてくる。

こんな調子で、氷室もなゆみもお互いそれぞれの道を歩み始め、そして仕事場が違うので会う機会も全くなく、7月はあっという間に過ぎていった。

そして8月もお盆を過ぎた頃になり、なゆみが働く日数も残り少なくなっていた。

9月はもうすぐというときだったが、暑さだけはまだまだ続く。店内は冷房があるのでまだましだったが、外に面して開けっ放しの状態のために、ショーケースの辺りに立つと湿気の含んだ暑さをもわっと感じる。

なゆみはその暑さにもめげずに、さわやかな笑顔で接客を試みる。

しかし客がいなくなると、つい顔が歪んで「暑い」と手で風を仰いでいた。

でもそれもあとわずかの辛抱だと思つと、ぐぐつと体の中から力が漲つて自然とニタニタと笑つていた。

「サイトちゃん、来月はとうとうアメリカだね」

千恵がしみじみと言つた。

「斉藤、準備はできてるのか」

川野がにやけながら聞いてくる。

「はい、全ては整つてます。あとは出発日を待つだけです」

「そっか、是非その前に斉藤の送別会しなくちゃな」

川野がそれを言い出したのにはなゆみは驚いた。

セクハラ、ネチネチと良い思ひはなかったが、それなりに川野はなゆみをかわいがつていたみたいだった。

ただ方法が厭らしかつただけで、結局はこの気持ち悪いおっさんも最後の最後でなゆみは憎めないと思つた。

給湯室でナイフを振りかざして襲つてきた、川野によく似た変質者よりは、実行に移さないだけよほどましだった。

そんな奴と比べられていることは本人には知る由もないだろうが、なゆみは川野の気遣いに素直に嬉しいと笑顔で答えていた。

あの変質者といえは、今度はこのビルの女子トイレで同じ事をしととうとう捕まったと噂で聞いた。

あの話は皆が不安になつてはいけなないのでなゆみは誰にも話してない。

そして氷室の提案で、各支店に持ち運び防犯ブザーを常備するよ

うになった。

食器洗い、または人があまりこないようなトイレに行くときはそれを持って防犯対策とした。

氷室とはトンカツを一緒に食べたのを最後に、碌に会話もしていない。

勤務地は近いが、会う機会は全くなかった。

それともお互い会わないようにしていたかもしれない。

たまに電話で声は聞くが、型に嵌ったビジネス会話で「お疲れ様です」と言つて、あとは川野に繋ぐくらいの会話しかなかった。

またそれがわざとらしいほどよそよそしかったりもする。

このままさようならを言つてお別れだと二人は思っていた。

川野が休憩で席をはずしたとき、千恵は様子を見計らつて話しかけてきた。

「サイトちゃん。ミナちゃんが小耳に挟んだらしいんだけど、氷室さんお見合いして今付き合ってる人がいるみたいだつて言つてたよ」「そうなんだ。それはよかつたですね」

なゆみは無理に笑つて話を合わそうとしていた。

「本当にそれでいいと思う?」

「どうして?」

「ううん、ただなんとなく聞いてみただけ。あつ、いらっしやいませ」

ちょうど客がやってくると千恵は接客をしだした。

なゆみは店の真ん中で一人立ち考え事をしてしまう。

あんなに見合いを嫌がつて無理やりだったといつていたのに、氷室は付き合いだした。

本当に嫌ならば、氷室は断じて断るのはなゆみも想像できる。付き合ひ始めたということは、氷室は真剣に結婚を考えているということだった。

それがどこか寂しく、胸がきゅっと締め付けられる。胸をつい押さえてしまったが、一時の気の迷いだと首を横に振って気合を入れた。

あれだけ助けてもらって、優しくしてもらえば誰しも気にならなはずがない。

いつか言っていた氷室の言葉 『義務』

なゆみはいい上司に恵まれたんだと思ひ込もうとしていた。

閉店時間が近づいた頃、おしとやかな女性がおどおどと店の前を覗き込んでいるのをなゆみは気がついた。

接客しようと思ひ彼女の顔を見て笑顔で近づくと、その女性は礼儀正しく一礼をした。

「あの、こちらに氷室コトヤさんはいらしゃいますか？」

なゆみは一瞬で気づく。

この人があの時の見合い相手、そして氷室の彼女であり、いずれ婚約者になる人。

なぜか急に心臓の動きが早まったように思えた。

なゆみは暫く口を聞けないでいると、幸江は「あのー？」と不思議そうに再度話しかけてきた。

なゆみははつとして、慌てて笑顔を添えて丁寧に相手をした。

「氷室でしたら、隣のビルの本館で働いております。あの角を左に曲がってそのまま真っ直ぐ行かれると別のビルがありまして、その

地下一階です。なんなら電話で来られたことを先にお知らせしましょうか」

「いえ、結構です。今日はたまたまこちらに寄ったのでコトヤさんの様子をちらっと見に来ただけでした。直接伺いますのでお気になさらないで下さい」

幸江はお礼を言うと、なゆみが説明した道順を辿って行った。

初めて見た氷室の彼女は、おしとやかな女らしさを持ち合わせた大人の女性だった。

川野はいい女だったと千恵と話している。

それはなゆみも思うほど本当に氷室とお似合いだった。

暫くまたぼーっとしてしまう。

そしてガラガラガラとシャッターの閉まる音が聞こえたとき、これでこの日の仕事は終わったと目が覚めたように気がついた。

仕事の後は英会話学校でジンジャと待ち合わせをしている。

レッスンチケットはすでに使い果たしたので、そこは待ち合わせするだけの場となってしまう。

そこに行くとちゃんとジンジャがラウンジでなゆみを待っている。

(そう、私にはジンジャが待っていてくれている)

なゆみは笑顔でジンジャの所に行った。

「腹減っただろ。飯食いに行こうか」

「うん」

ジンジャと手を繋ぎ、デート気分を味わう。

それはそれで楽しかった。

女の子なら、恋をすればその人と手を繋いでどこかへ出かけたい、デートしたいとか夢を見ると思う。

それが現実のモノとなったとき、どこかしら幸せな気分を味わうのは当たり前のことじゃないだろうか。

二人でご飯食べたり、街の中を一緒に歩いたり、買い物したり、そしてキス。それが至福の時。

でも付き合っていてこういうことなんだろうか。

なゆみはふと疑問に思った。

食事の後、小物ショップやゲームセンターなど寄って二人で暫しの時を過ごしていた。

何も考えず歩いていると、目の前にはホテルのサインが多数あるところに来てしまった。

なゆみははっとして少しドギマギしてしまう。

付き合っていて、他に意味があるんじゃないだろうか。

好きだから自然の成り行きの先のこと……

（私の場合ジンジャと一年間会えなくなる。ジンジャだって男。付き合っている女を抱きたいと思うのは自然であり、もうすぐその彼女が一年もいなくなると分かっていたらやっぱり）

なゆみはうつむき加減でホテルがある周辺を歩いていた。

ジンジャは強くなゆみの手を握った。

なゆみはドキツとしてジンジャを見つめると、ジンジャはメガネの奥から優しい瞳で笑いかけていた。

自分の考えていることがバレたのだろうか。

なゆみは恥ずかしげに笑顔を返した。

「タフクはほんとに嘘がつけない奴だな。なんでも顔に表れる。まあそこがかわいいんだけどな」

「ジンジャ……」

「安心しろ、ここに来たのは偶然だ。ここがこんな風になってるって俺も知らなかったよ」

ジンジャからストレートに自分の思ったことこの回答をされると、余計に気恥ずかしくなってしまう。

その時ジンジャが立ち止まったので、なゆみはジンジャの顔を見上げた。

ジンジャは前方をじっと見つめている。

それにつられてなゆみも見るが、その瞬間ドクツと心臓が痛みを帯びた動き方をした。

氷室と幸江が自分達の方へと向かって歩いてきていた。

なゆみは咄嗟にジンジャの手を引っ張るように力強く自分に引き寄せた。

倒れないようにジンジャにしがみついて、その場を乗り切ろうとしているようだった。

ジンジャはその力の入れ具合が異常に強かったのでなゆみの顔を覗き込んだ。

我を忘れるくらいに驚ききったなゆみの表情に引っかかるものを感じてしまう。

氷室を見れば同じように驚いているが、彼の瞳が水面のように黒く潤って彼の心の中を映し出しているように見えた。

それはやるせない思いを隠しきれないそんな瞳をしていた。

そしてその瞳はなゆみを捉えているのをジンジャは見逃さなかった。

この時なゆみと氷室にしたらお互いそれぞれの道を歩むと決めてから久しぶりの再会であり、不意にお互いの恋人を連れて出会うのは反則みたいなもののように、お互い出会ってしまったことで動揺している。

心の準備も何もなく、ただ本心の部分が自分の意思とは裏腹に突然向き出てきたようになっていた。

「あれ、あの女の子は」

幸江が気がついて一礼をしてきた。

なゆみもジンジャも一緒になって軽く礼をする。

「よお、お二人さんじゃないか。偶然だな」

「氷室さん、ご無沙汰しております」

ジンジャが礼儀正しく答えた。

なゆみはすっかり言葉を失い、黙ってやり場のない憂愁な瞳で氷室を見ていた。

「まさかこんなところで君達に会うとはな。一体ここで何してるんだ」

「別に何も、ただ歩いてるだけです。氷室さんこそ何をなさってるんですか」

ジンジャが答えた。



「いや、この先にお洒落なバーがあるので、今からそこへいくところさ。近道と思っただけど、この辺はいつの間にか怪しげな通りになっっていたよ」

周りのホテルの看板を見回して、参ったとばかりに手櫛を入れるように髪を一撫でしていた。

そしてなゆみを見つめてしまう。

なゆみは自分の気持ちを咄嗟に押さえ込むようにジンジャの腕を掴んで一層寄り添った。

氷室は「邪魔して悪かった」と言いたげに口の端を片方上げた笑いを見せていた。

「コトヤさん、邪魔をするのは失礼ですわ。行きましょう」

「そうだな。それじゃお二人さん失礼するよ」

氷室と幸江は去っていく。

なゆみはぼーっと二人を目で追った。

氷室と幸江は大人のカップルらしく落ち着いて、このときもお似合いだと思わずにはいられなかった。

二人の様子を見せ付けられて、なゆみの心は悲傷したようになっていた。

側にジンジャがいるというのに悲しい気持ちはどこからともなく湧いてきてどうしても心は落ち着かない。

そのもやもやをなんとしても吹き飛ばしたいとなゆみは突然覚悟を決めた。

「タフク、帰ろうか……」

ジンジャが最後まで言い終わらないうちになゆみが叫んだ。

「ジンジャ、あそこ行こう」

なゆみが人差し指を向けたその先には、ホテルとかかれた建物があつた。

「おい、どうした」

「ジンジャ、私もうすぐアメリカに行つちやうんだよ。一年も会えないんだよ。その前にやつぱり、あの……」

「タフク、そりゃ俺も男だ。それくらいの欲望はある。だけど、今のタフクは俺と寝たいんじゃないの、他の理由があつてそんなこと言つてるんじゃないのか」

「えっ」

「タフクが無茶をするときは大概理由があるんだよ」

「無茶なんてしてない。私はただジンジャと……」

「本当にそうかい？　もしかして氷室さんが関係しているんじゃないのか」

先ほど抱いた疑念がジンジャの口からストレートに出てしまった。ジンジャはそれでもまだ半信半疑だった。

「そ、そんなことない」

ジンジャはしばらくじつとなゆみの目を見ていた。

そして真剣な目つきをつきつけた。

なゆみは心の中を見られたくない、同じようにジンジャを見つめ返したが、その瞳は無理にジンジャを見ているだけだった。

「分かった。それなら行こう」

ジンジャはなゆみの手を引いてホテルへと向かった。

なゆみは自分から言っておいて、体がこわばつたが、もう後には引けない。

それにもうどうにでもなれと、勢いだけでジンジャと寝ることを決心した。

なゆみがラブホテルに来るのは二回目だった。  
一回は氷室と成り行き上ああなってしまうたが、何もなかった。  
しかし今回はそういうわけにはいかない。

部屋に入つて、辺りを見回すと、やはりここも大きなベッドが存在感を表していた。

なゆみは急に怖くなってきた。

初めてだから恥じらいもあり少しもじもじする。

ジンジャは何も言わずにメガネをはずし、側にあつたテーブルの上に静かに置いた。

眼鏡を掛けてないジンジャはまた別の表情を持っているようだった。  
た。

そしてゆつくりとなゆみに近づく。

「ほんとにいいのか？」

恐ろしさも見え隠れする緊張のあまり、なゆみからはもう疾うに声は出なくなり、それを誤魔化そうと必死で首を一度縦に振った。

(でも本当にこれでいいのだろうか)

このときになつて急に怖気づく。

初めての体験だからそう思うのも仕方なかった。

しかしジンジャは迷うことなく行動に移した。

なゆみの頬を手の甲を向けてすーっと一撫でする。

それがなゆみをぞくつとさせた。

次に唇を重ねてくる。

最初はゆつくりと何度も合わせていたただけだが、ジンジャは次第に吸い付くように激しく唇を動かす。

なゆみはそれに一生懸命応えようとするが、ジンジャの唇の動きについていけずぎこちない。

ジンジャは一度動きを止めて、なゆみを見つめた。

「初めてなのか？」

なゆみはコクツと首を頷く。

ジンジャはなゆみの体を腕の中に入れ込み、ぎゅっと抱きしめた。今度は耳元で息を吹きかけるように優しくキスをした。

なゆみの体の力が抜けていくと同時にドキドキとして体が熱されていく。

そして徐々にベッドに追いやられてなゆみはすっと落ちるようにベッドの端に座わらされた。

ジンジャはなゆみをしつかりと見つめ、そして自分のシャツを荒々しく脱いでそれを無造作に床に放り投げた。

上半身裸で、迫ってくるジンジャはいつものジンジャのイメージとは程遠く、野生の部分が押し出されている。

ジンジャがなゆみの肩に手をおくと、そのまま後ろに倒した。

そしてなゆみの顔を上からじっと眺めて覆いかぶさり、また唇にキスをした。

そこから首筋へと下に向かっていったときなゆみは小さく「あ」と声を漏らす。

ジーンズの内側に入れていたTシャツの裾が引つ張られ、それが上の方へと捲くり上がった。

ブラジャーが見えたとき、ジンジャはなゆみの背中の下へ手を忍ばせた。

なゆみは震えが生じたが、目を硬く瞑ってジンジャにされるがままになっていった。

氷室と幸江は店のドアに掲げられた本日休業のサインを目の前にして顔を合わせていた。

「幸江さん、すみません。休みとは気がつきませんでした」

「いいんですよ。突然私が立ち寄ってしまったてそれにお付き合いさせたのが悪いんです」

「よかつたら、コーヒーでもいかがですか」

氷室が示した先にはアンティークショップのような古臭い喫茶店があり、この辺で唯一入れる店だった。

年季が入った重たい扉を開けると、そこに設置されていたベルが喧しく鳴り響く。

足を踏み入れれば、中は全く客がないガラ空きの寥々とした店だった。

コーヒーの香りが漂っているが、鼻孔に芳しきというよりくたびれた香りに感じたのは、古びれた店のせいなのか、それとも氷室のそのときの気分を表していたのだろうか、店の中に入ったとき氷室は空虚感にさいなまれた。

二人は窓際のテーブルに座る。

すぐにその店のマスターが水を運んでくるが、氷室はメニューも確認せずただ「コーヒー」と一言発した。

幸江もそれに合わせて同じものを頼んだ。

もう閉店の時間も近づいているのか、客は氷室たち以外誰も入って来る気配がなかった。

静かなところで二人で交わす言葉も少なく、氷室は辺りを見回し

て誤魔化した。

もし目の前になゆみがいれば、きっと彼女を見つめ彼女のおしゃべりに永遠と付き合っつてはこの二人だけの空間を自分たちだけの場所として楽しめたのにと氷室は空想していた。

だがなゆみはジンジャとその時間を過ごしている。

虚しさは益々心の中に広がった。

氷室はカウンターの端に飾ってあった恋人同士を形どった陶器の置物に気がつくくと、寂寥の目で暫くじつと見つめていた。

「やはりインテリアが気になりますか」

幸江は沈黙が居心地悪く氷室の興味のあることを尋ねてみた。

だが氷室は一言、「そうですね」と答えるだけでそれ以上話を進めようとはしなかった。

また沈黙が流れると、氷室はコップを手にして水を一口含みその場を凌ぐ。

それは十分に幸江を悄然とした顔つきにしてみました。

しかし、それを隠そうとして幸江は何か話そうと試みる。

そしてなゆみのことを持ち出した。

「先ほど出会った女の子ですけど、あの方にコトヤさんのお店の行き方を教えてもらったんです。明るくて笑顔がとてもかわいい子ですよね」

「ああ、そうですね。でもアイツは結構おちよこちよいで無鉄砲なところがあるんですよ。髪も短いから少年と間違われたり、女としての魅力にはかけますが、確かに笑顔はかわいいです」

なゆみのことを語っているとき、彼女の顔も一緒に浮かび、それ

を見つめているように氷室の目が生き生きとしていた。

その表情を幸江は静かに見ていた。

そこへコーヒーが運ばれてくる。

氷室は何もいれずにカップを持ってコーヒーをすぐ口にした。

とにかく間が不自然にならないように、コーヒーを飲むことで自然な沈黙になることを願ってるみたいだった。

幸江は砂糖とミルクを入れながらスプーンでかき回し、またなゆみについて質問しだした。

「あの方のどんなところが無鉄砲なんですか。見た感じ従順そうでした。しっかりしてるような印象でしたが」

氷室はカップを持ちながら、クスツと突然思い出し笑いをして自分の世界に入り込んでしまった。

どこを見ているのかも分からない視線を漂わせて暫く氷室が黙っている、幸江は疎外感を感じ、目の前の自分の存在を否定されたような気になってしまった。

そしてその話の続きを催促してしまう。

「コトヤさん、そんなに面白い話なんですか？」

「えっ、いやその……」

氷室は幸江の前では話せる訳がなかった。

なゆみが酔っ払って吐きそうになって一緒にラブホテルに入ってしまったこと、そしてその後の支払いで揉めた事、一緒にトンカツを食べながら偉そうなことを言われて自分が暴走してしまったこと、宗教に引っかけたこと、フィアンセのふりして助けたこと、変質者に蹴りを入れて戦ったことなど氷室の胸に全てしまっておきたかった。

それらを改めて思い出せば、色とりどりでかけがえのない楽しい思い出と思わずにはいられない。

なゆみの表情豊かな顔も一緒に浮かんでくる。

「すみません。なんか色々ありすぎてまとまりません」

氷室はにこやかに答えていた。

「コトヤさんはその方については楽しそうに語られるんですね」

ここに居ない女性の話に笑顔を見せる氷室を見るのは辛いと、幸江は氷室から視線をそらした。

寂しさも押し掛かって重くなったように幸江の長い睫毛が下を向く。

「えっ、そ、そうですか？」

慌てたように氷室はカップを口元に持っていく。そしてコーヒーの減りが急に早くなった。

静かなアンティーク色がたつぷりしみこんだ喫茶店は、あまりにももの悲しく、幸江が抱いたしらけた雰囲気さらに引き立てていた。

話も弾まず、氷室は幸江には気を遣うがそれ以上の踏み込んだ楽しさは伝わってこない。

「コトヤさん、どうして私と付き合いおうと思われたんですか？」

そっとカップを持って、幸江は静かにコーヒーを飲んだ。

それはとても落ち着いていた。それとも冷静を装っていただけなのかもしれない。

「それは、幸江さんは申し分のない女性ですし、お断りする理由がまず見当たりません」



「私のことが気に入ったとは先におっしやって下さらないのですね」  
「いえ、もちろんそれは……」

「どうぞご無理なさらないで下さい。まだ知り合ったばかりですし、私もその点は心得ております」

幸江は上品な微笑を氷室に向けた。

氷室は本当にこれでなゆみを忘れることができるのだろうかと、その笑顔を見ながら、無理に微笑んでいた。

二人は暫くそこで過ごした後、喫茶店を出てまた来た道に戻っていく。

他の道を選んでもよかったが、幸江が気にしてないとばかりに先に歩いてしまった。

幸江にしてみたら女としての魅力を見て欲しいために、わざとホテル街という場所で氷室の気をそろうとアピールしていたのかもしれない。

(俺はいつかこの女を抱くときがあるのだろうか)

性欲は満たされても心はずっと満たされないままだろうと氷室は隠れてため息をついていた。

こんなことを考えても仕方がないとただ無言で歩く。

そしてその時、ホテルからなゆみとジンジャが出てくるところをちよつと見てしまった。

氷室は咄嗟に幸江の腕をとり、見つからないように道の端に引き寄せ、建物の物陰に身を隠す。

幸江は驚き、氷室の顔を見るが、そのとき眉をしかめ齒を食いしばっていた表情を見逃さなかった。

氷室は物陰からなゆみたちを静かに見ていた。

なゆみは下を向き、おぼつかない足取りで歩いている。

それを庇うようにジンジャが肩に手を回して労わっていた。

なゆみはジンジャを見つめて、手で目の辺りに触れている様子からして涙ぐんでいるようにも見えた。

しかしそこには笑顔も含まれている。

なゆみとジンジャは親密に、体を密着させてお互いを気遣いながら歩く。

当人同士にしかわからない世界でありながら、氷室が二人の結ばれた事実を知るには充分過ぎる光景だった。

一瞬目を逸らしたくなかったが、無理に二人を凝視してしまう。

目の前の事実を目に焼き付けるべきだと身に沁みこませているようだった。

これで完全に諦められる。

二人が遠くへ行ったところで、氷室は幸江と一緒にだったことを思い出した。

「す、すみません。見てみないフリをした方があの子達のためだと思ひまして」

「いいんですよ。気になさらないで下さい」

幸江は気を遣っていたが、喫茶店での会話、そしてこのときに見せた氷室の辛そうな表情で、氷室がなゆみを好きでいたということに気づいてしまい複雑な思いを抱いていた。

氷室はその後無言のまま幸江と肩を並べて歩く。

「コトヤさん。私タクシーで帰ります。今日はどうもありがとうございました」

「いえ、何もできないで申し訳ありませんでした。それじゃまた連

絡します」

「ええ、楽しみに待っています。あのー、コトヤさん……」

「はい？」

「いつか私のこと気に入ってもらえるように私も努力します。まずはコトヤさんが正直になんでも私に話して下さい。私いつでも受け止める覚悟はできてますので。一人であまり抱え込まないようになさって下さいね」

「幸江さん……」

幸江はタクシーを拾い、氷室に一礼をすると落ち着いた笑顔を見せてすーっと乗り込んで行ってしまった。

氷室は大きなため息を一つ吐いて、のろのろと歩き出す。

「これが俺の定められた運命なのか？」

そして幸江の存在も無視できなくなっていく。

心の中に湧き上がるイライラを取り除こうと偶然落ちていた空き缶を見つけれ力強く蹴っていた。

その音は虚しくカランコロンと遠くへ転がり去っていった。

一方、ホテルから出てきたなゆみたちは、お互いを大切に思い、身を寄り添って歩いている。

駅に来たときになゆみはジンジャに向かって必死で自分の気持ち伝えるようにした。

「ジンジャ、私、不器用でごめんね。その……うまくいかなくて何言っただ。全てを含めてそれがタフクなんだ。だから気にするな。お前はそのままで充分だよ。何も恥ずかしがることなんてないよ。それよりも俺が傷つけてないかが心配なくらいだ。大丈夫か？」

「うん、ジンジャが私のこと大切にしてくれたからもちろん大丈夫。でもなんかジンジャに迷惑かけて……」

「だからもういいってば。あれはあれでいいんだよ。本当にありがとうな。俺は自分に満足だよ。タフクを好きになってよかった」

「ジンジャ、ありがとう」

「それじゃ。またな」

「うん。またね」

なゆみはジンジャと駅で別れるが、最後までジンジャの姿を見ていた。

ジンジャは一度振り返り、大きく手を振った。

そしてすっきりとした笑顔を見せる。

なゆみもまたそれに精一杯応えて、手を大きく振っていた。

ジンジャの優しさを体全体で感じていた。

8月もとうとう終わりに近づき、なゆみはしみじみしてしまふ。店の壁に掛けてあったカレンダーを見つめ、大きく赤で丸をつけた8月31日感慨深く見ている。

川野が特別に付けた印で、その日に「斉藤最後の日」と小さく記してある。

その日で辞めるという意味だが、地球最後の日のような滅亡の縁起悪い響きも無きにも非ず。

しかし、気にかけていてくれるという点では、そんな印でさえ有難く思えた。

それが次の日のことであり、四ヶ月という短い期間で大して働いたとはいえないが、いざここを辞めるとなると寂しさが生じてくる。

大半は仲良くなった人たちと別れるのが辛い気持ちだった。

ミナや千恵は年上だったが、それすら感じさせないほどに本当になゆみとは仲良くなったもんだった。

川野は相変わらず、厭らしいことを口走るが、おっさん独特の楽しみでもあり、それはなゆみをかわいがっている愛情表現の一種であつたと解釈してあげることにした。

普通の人なら即セクハラで訴えられる可能性もあるだけに、もしかしたらなゆみだけにこんなことをしていたのかもしれない。

よほど気に入られたのか、それともなめられていたのか、川野に似た変質者も蹴ったことで鬱憤をはらしたこともあり、なゆみはそれ以上深く考えるのはやめた。

そして氷室。

一番お世話になった人でもあり、ここで働いていて一番忘れがた

い人となった。

氷室と別れるのがどこか辛い気もするが、海を越えたアメリカに一年もいけばきっと忘れられる。

いつの日か思い出して、そういうこともあったなと後で懐かしむ日がくると、なゆみはその頃の自分を想像しては気持ちだけ未来にタイムスリップさせているようだった。

休憩時間に、なゆみは手帳を持って本館へ足を運んだ。

「お疲れ様です」

「あつ、サイトちゃん。どうしたの」

ミナが笑顔で寄って来てくれた。

なゆみは手帳を差し出し、住所を書いてと催促する。

「向こうから絵葉書だすからね」

そういうと、ミナは喜んで自分の住所を書き込む。

氷室はその間例のごとくコンピューターに向かってデータを入力して打ち込んでいた。

なゆみが来ているとわかっているのに愛想すら持ち合わせてない。仕事が忙しいフリをしてはカチャカチャとキーボードを叩く手を一層早くした。

その態度は、初めてなゆみが働いた日に出会った氷室に戻ったみたいだった。

ミナが書き終わると、なゆみは力を込めて手帳を握り締め、勇気を出して氷室の側に立った。

「お疲れ様です。お仕事すみません。あのここに住所書いてもらえませんか」

氷室はキーボードを叩いていた手を止め、なゆみに視線を向けた。冷静を装っても瞳は深くなゆみを捉えていた。

その瞳の奥にジンジャとホテルから出て寄り添っていた姿も同時

に思い出してはその映像も再生してしまう。  
なゆみがとても遠くに行ってしまったと悲しく思いながらも無理に微笑んだ。

「明日が最後の日だったな」

そう呟きながら、手帳を受け取り住所を書き始めた。

氷室の字は男性の字とは思えないほど達筆だった。

建築の細かなデザインをする人は字にも同じようにきっちりと設計された形が宿るのかもしれない。

そしてその字を見れば、氷室のしつかりとした真面目な人柄が浮かんでくるようだった。

あの大きな手からこんな繊細な美しい字を書く氷室になゆみは暫し見とれてしまった。

書き終わった後、氷室はその手帳を返す。

「その住所、テンポラリーだぞ」

「テンポラリー……」

どこか耳に響く言葉、かつて自分も使ったことを思い出す。

「氷室さん、引越しされるんですか？」

「いつかはそうなるだろうな」

その言葉の裏に結婚という意味があることをなゆみは感じ取った。  
あのお見合いしたきれいな女性と上手く行っていると想像する。

「それじゃ向こうについたらすぐに絵葉書出します」

氷室は小さくふつと笑った。

その後はもう何も話すことはない、再び忙しく手を動かし始めた。

なゆみはこれまでお世話になったお礼を言うためにももう少し話をしたかった。

それよりも氷室がもっとなゆみと話をしてくれるところどこかで期待をしていた。

だが氷室は自ら話すことを拒否したような態度を見せ、なゆみはそれ以上その場にいられなくなってしまった。

お礼は最後の日に言えばいい。

なゆみは仕方なくお辞儀をしてその場を去った。

なゆみが側を離れたとき、慌しく動いていた氷室の手元がぱたと止まり、氷室は暫く動かず目を閉じていた。

ぐつと何かを必死に堪えているようでもあったが、落ち着いたのかまた忙しく手元が動き出しているのはキーボードを叩く音が強まった。

コンピューター画面を見つめるそのときの氷室の瞳は寂寥に溢れていた。

なゆみはもう一度ミナに手を振って、そして本店の店全体を見回した。

初めてここで働いた日。

最初はやっていけるか不安だった。

そして冷血漢だと思っていた氷室。

それは時が経つ度に見る目が変わり、尊敬の念を抱くほどにまじななった。

このときはもっと深く口では言い表せない気持ちが確実に存在しているとなゆみは素直に認めてしまった。

なゆみは氷室をもう一度見つめる。

ここで働いて四ヶ月、一番自分の中に入り込み、忘れがたき出来事に必ず関係している人。



ここでの時間イコール氷室との出会いと位置づけができるように、なゆみにもそれは大切な思い出となっていた。

テンポラリー。

その後に必ず終わりがあって、別の事柄が正式にスタートする。それまではまさに仮の状態で、ひと時の時間。

新たな序章がまた始まる。

なゆみも氷室も。

本当にこれで終わり。

なゆみはまた次へ進もうと背筋を伸ばして歩き出す。でも「氷室さん……」となぜか小さく呟いていた。

最後の日は平日のために、なゆみの送別会はその週の土曜日には  
らされた。

気持ちだけでいいと何度も断つたのに、そうはいかない、最後だ  
からと川野だけでなく純貴にも是非と勧められた。

(そっか、その日が本当のお別れなんだ)  
なゆみは有難く受け入れる。

出勤最後の日は、普段と同じ様に終えた。

シャッターが閉まった後、川野が「お疲れさん」とにやけた顔を  
一層緩ませて、へへへと笑いながら言った。

千恵も一つため息をついて「終わっちゃったね」と寂しそうに呟  
く。

「本当に色々とお世話になりました」  
なゆみはふか深く頭を下げて挨拶した。

たった四ヶ月の出来事なのに、もう何年も一緒だったような気分  
だった。

終わりよければ全てよし。とても楽しい日々だったと、終わって  
からじわじわと溢れてくる。

本当は辛いことも嫌なことも一杯あったのに、それすら忘れてし  
まえるほど終わったという清清しさだけでこのときの気持ちは充実  
していた。

そしてタイムカードをレコーダーに入れ込む。

カチツという音ですら、胸に響いて、嗚呼という声が小さく漏れ

ていた。

服を着替え、今度は制服を畳む。

(記念に欲しいと言ったら怒られるだろうか)

氷室に似合っていないとストレートに言われた制服も、もう二度と着られないと思えばなんだか愛着が湧いてくる。

ミナが記念として制服を着ている姿の時に、川野と千恵も一緒に混ざって写真を取ってくれたことがあったが、あの時はなんで川野と一緒に写らなければならぬんだと思っていた。

しかしその写真も時間が経ってから見ればやっぱり懐かしいと思う事だろう。

「サイトちゃん、そしたら土曜日にまたね」

「その日が斉藤との本当の別れになるんだな」

千恵と川野がしみじみと言い出す。

「でもまた一年後にアメリカから戻ってきたらここへ寄ります。そのときまでここに居て下さいよ」

二人は笑っていた。

千恵と川野に別れの挨拶をして、なゆみは制服を持って本店に急いだ。

専務である純貴に仕事が終わったら挨拶をしたいと予め知らせていたので、待っていてくれていたはずだった。

だからこそ早く行かなければならない。

しかし慌てすぎて、なゆみはしっかりとこけてしまった。

「げー、やっちゃった。もう恥ずかしい」

ずべつと勢いよく転んで、周りの注目も浴びた。たまたまショー

トパンツだったのが災いしてすっかりと膝小僧をすりむいて血が滲んでいた。

仕方がないとむくつと立ち上がり、周りの人の反応をついでにちらりと見るとやはり見られていた。

その恥ずかしさを抱えながら、逃げるように足を引きずってまた走った。

「ここでまたこけたらびっくりだな」と思って走ってたなら、ほんとは躓いて一瞬ヒヤツとしたが、なんとか持ちこたえてよろけていた。どこまでも抜けているとなゆみが情けない思いを抱いていたとき、リュックについていたキティもよろけるように揺れていた。

本店の端のシャッターが少し空いたまままだ光が灯っている。そこをくぐると、純貴と氷室が談笑をしている姿が見えた。

「お疲れ様です。遅くなってすみません」

「おっ、斉藤さん。お疲れ様。今までありがとうね。ほんと寂しくなるな。なあコトヤン」

「まあな」

氷室はそれが精一杯の言葉だった。

心の中では寂しさで一杯なのに表には正直に出せず、そして不自然にならないように装っている。

なゆみは純貴にお礼を言って制服を返す。その時氷室がなゆみの足を見てびっくりしていた。

「おい、お前、こけたのか。血が出てるぞ」

「はい、ちよつと最後にやっしまいました。かすり傷です」

なゆみは恥ずかしさをごまかすために笑っていた。

だが氷室は笑えなかった。

早く来ようとして無理して走ってきたのが目に浮かんだ。  
最後まで一生懸命なその姿勢は初めて見たときから変わっていない。  
い。

氷室はその姿を見られなくなるのが寂しいと改めて思ってしまった。

「お前ここに座れ、消毒した方がいいぞ。ばい菌入って病気になって留学できないようになったらどうする」

「えっ？ そんな大げさな」

「斉藤さん、コトヤンに手当てしてもらいな。そのままの格好で帰ったら、なんか恥ずかしいしさ」

純貴の言葉でなゆみは自分の膝小僧を見つめると、血が垂れかかっているのに気がつく。

「そしたら、俺は先に帰るね。コトヤン、あと宜しくね。それから斉藤さんもまた土曜日だね」

「はっ、はい。本当にお世話になりました」

純貴はシャッターをくぐって去っていった。

なゆみはまた氷室と二人つきりになって少しドキドキと落ち着かない。  
ない。

「ほら、突っ立ってないで、ここに座れ」

しかしもうこれで最後だと思つと、素直に言うことを聞いた。

氷室がいつも座っている椅子。

そこになゆみが腰掛けると、氷室はしゃがんで救急箱から持ち出した消毒薬を遠慮なく振りかけた。

「痛い」

「我慢しろ」

「本当にすみません。最後の最後まで迷惑掛けっぱなしで……」

氷室は黙っていた。

黙々と手当てをする。

足にガーゼを当ててその上からテープでとめると、最後に「終わりだ」とぱんと怪我した膝小僧を叩いていた。

「痛い」

それでも氷室は何も言わず、救急箱を整理して、それを棚の上に戻していた。

なゆみも話す話題も思いつかず暫く膝小僧を見つめていた。

「さあ、帰るぞ」

「あつ、はい」

氷室も口数少なく顔を合わせようとしない態度はどこかよそよそしく、なゆみのことをもう過去の人でも言うべき扱いをしているようだった。

なゆみは少し悲しくなり、思わず後ろから抱きつきたくなる衝動に駆られてしまった。

そんなこともできるわけもなく氷室の後をなゆみは黙ってついていく。

店から出たとき、氷室はシャッターを閉め鍵を掛けた。

その時、なゆみはその大きな広い背中をじっと見ては、偉大な人だったと再び感謝の気持ちに湧き上がる。

「氷室さん、今まで本当にありがとうございました。氷室さんには本当に感謝してます」

「いいよ。こっちこそ楽しかったよ。お前みたいな奴はそう滅多に出会うこともないもんね」

氷室の本心だった。

(恋するほどに夢中になれたくらいだ。そうそう現れるもんじゃない)

「氷室さんだって、私が滅多に出会うような方じゃないです。氷室さんのことずっと忘れません」

「そっか」

氷室は光栄とばかりに笑みを口元に浮かべたが、目はかすかな悲しみを帯びていた。

なゆみはおもむろに右手を出した。

氷室は「ん？」と思っていると、なゆみが催促する。

「握手ですよ、握手。最後をお願いします」

「ああ、わかったよ」

氷室はなゆみの手をぎゅっと握った。

そう、これが彼女の手の感触だったといつか繋いだときのことか蘇る。

なゆみも氷室の大きな手を最後の記念にとしっかりと握っていた。

この手が好きだからどうしても触れたかった。

「それじゃここで失礼します」

「どこか行くのか？」

駅まで一緒に帰れるとどこか期待をしていたので、なゆみがここで離れていくことに氷室は寂しさを強く感じてしまった。

「ええ、英会話学校にちょっと挨拶に」

「そっか、伊勢君が来てるんだな」  
なゆみはにっこりと微笑み、踵を返して去っていった。

歩いていると少し膝小僧がずきずきして熱を帯びているのを感じていた。

しかしそれは氷室が手当てをしてくれたせいだと、その痛さですら氷室を感じさせてくれると思った。

そして氷室は最後までなゆみの後ろ姿を静かに見ていた。



そして土曜日、なゆみの送別会の日。

仕事が終わる頃を見計らってなゆみはもう一度店に戻ってきた。

手土産に、お茶のセットとお菓子も忘れず、支店、本店と二つ分用意していた。

先に本店に持っていき、ミナに渡す。

その時、ちらりと氷室の姿を見たが、氷室はこのときもやっぱり振り向いてはくれなかった。

氷室なら話のきっかけとして「膝小僧は治ったか」くらいは聞いてくれるんじゃないかなゆみはどこかで期待をしていた。

足の怪我は大したこともなく、カサブタになってる状態だが、氷室が手当てをしてくれただけに、そのことについて声を掛けてこないのは少し寂しかった。

ジーンズを穿いてたから隠れてすっかり忘れてしまったのかも知れないが、仕事を辞めてから唯一この傷が氷室を思い出すものとなっていたので家では見る度に氷室を感じていた。

仕事を辞めた者にはもう上司という役目も課せられず、構う義務感が終了したということなんだろうか。

氷室がとても遠い存在のように思えてしまった。

これが氷室との別れ。

なゆみはそう思うことで納得しようとした。

「じゃあ、ミナちゃん、私あっちで待つてるね」

なゆみは最後まで氷室のことが気になりながらも本店を出て行く。だが、氷室がなゆみの送別会に来てくれるとはまだ聞いていない。氷室には予定が入っているかもしれない。

もしそうだとしたら、本当にこれで最後のお別れになってしまう。

やはりここで一言声を掛けようと体に力が入りながらも、氷室があの態度でいる以上、なゆみは近寄ることもできずに歯がゆい思いで本店を去っていった。

その時、なゆみが去っていく姿をもどかしくなりながら氷室はしっかりと目で追っていた。

今更話をしたところでどうにもなるわけでもなく、このまま顔を会わせない方がいいと自ら無視を決め込んだ訳だが、その裏で自分自身もそれ以上に辛い思いをするのが嫌で逃げているだけに過ぎなかった。

この時点でなゆみの姿を見ること自体辛くなっている。

氷室は刻々と迫るなゆみとの別れに気持ちを処理できず、どんどん心閉ざすことで自分を持ちこたえようとしていた。

支店では、なゆみの代わりに新しい女の子が本店から移動していた。

どうやら社長が面接をしたらしい。純貴が選ぶようなタイプではなかった。

なゆみとはまたタイプが違うが、真面目そうでしたっけりした感じだった。

まだ入ったばかりで慣れてないのか戸惑っている部分もあり、少しおどおどしているところも見受けられる。

もしかしたら川野のネチネチにやられているのかもしれない。

失敗すれば何度も同じ事を注意される。最初は結構びっくりすることだろう。

自分もそうされた身だったが、一緒にいれば慣れてくることもあ

る。

直接アドバイスはできないけど、頑張っで欲しいとなゆみは笑顔を見せてその新しいアルバイトの女の子と挨拶を交わした。

もしや川野がセクハラしてないか気になったが、それはこの人が対処することであつて、もうなゆみが口出すことはできなかった。そのときはきつと千恵が助けてくれるだろう。

千恵はおっとりとしているが、物事をきつちりと見つめていつも状況を瞬時に把握するタイプであり、何かあると必ず声を掛けてくれる。

千恵と一緒に居れば例え川野が側にいてもきつと大丈夫な気がした。

そしてその川野をちらりと見れば、相変わらずにやけた顔をしている。

そつえば注意を受けたことはあつたが怒つたところは一度も見ることがなかった。

しつこくて苛つくこともあるが、それはビジネスが絡んでいることであつて、本当は人当たりのいいおっさんなのかもしれない。

ただスケベだが……

店を辞めたこのときだから思うのかもしれないが、川野もいい人だつたとなゆみは最後にいい評価をつけていた。

店の外から中を覗いたとき、自分があの制服を着てあそこで働いていたんだと客観的に見られた。

(本当にもう終わってしまったんだ)

なゆみはすっかり巣立つたような気分になりながら、皆が働いている様子を笑顔で見つめていた。

送別会は歓迎会をしてもらった時と同じ店で予約を入れていた。新しい人もなゆみとあまり面識がないながらも、折角だから一緒に来てくれた。

どうせ送るのならたくさんの人に送ってもらおう方がいいだろうと川野が言い出した。

川野は最後の最後で、生暖かなゆみの肩に触れた。

これももう最後だと思つと、なゆみは楽しく笑つて最後のサービスだと我慢するが、凶に乗られてしまう。

「斉藤、飲んだ後は、ホテル行こ」

（げっ、このおっさん、最後まで言うか）

なゆみはそれでも嫌と断りつつ一生懸命笑おうと努力する。

最後だ。最後だ。

おまじないのように呟いていた。

居酒屋の前で待っていると、本店で働いている人が固まってこっちに向かってやってくるのが見えた。

そこに一番背が高い人が居たことでなゆみはほつとした。

氷室も一緒に来てくれた。

あともう少し氷室と一緒にいられる。

今回は氷室の隣に座りたいとなゆみはつい願ってしまった。

「よっ、斉藤さん。今夜は主役だからね。また一杯飲んでね」  
純貴が声を掛けてきた。側には愛想良く笑った美穂もいる。

この二人もまだそれなりの関係が続けているようだった。

そこには他になゆみとはあまり面識のない本店のアルバイトが二人いたが、その中に奈津子の姿はなかった。

なゆみより後に入りながら先に辞めていったらしい。

入れ替わりも激しく長続きしない職場で、なゆみもまた四ヶ月しか働かなかつたのにも関わらずこうやって宴会の席を用意してもらえるのは感謝すべきことだった。

やはりここでも最後までこの会社にお世話になったという気持ちで一杯になった。

最後だからご厚意に甘えて楽しもう。

但し、なゆみは前回でお酒はもう懲りていたのでこの日は一滴も飲むつもりはなかった。

前回と同じ奥のお座敷に案内される。

純貴と美穂と氷室は前回と全く同じ場所に座った。

なゆみは氷室の隣に行こうか躊躇してしまふ。

本当はさりげなく座りたい。

どうしようかと迷っていると新しく入った女の子が何も知らずに座ってしまった。

なゆみは仕方なくその女の子の隣に座り、横には千恵とミナが続いて座った。

結局なゆみは前回と同じような位置に座る羽目になり、目の前には川野がやっぱりいた。

川野はニヤニヤとした顔つきでなゆみを見ながら、しよっぱなから「無礼講、無礼講」と言っただけで一人で盛り上がっていた。

飲み物がそれぞれに運ばれたとき、純貴がなゆみに労いの言葉を言っただけを取ると、一同はグラスを持って乾杯する。

なゆみは一人一人とグラスを重ね、そして最後に氷室にも積極的に自らグラスをぶつけた。

しかし氷室の反応は鈍い。

どうでもいいことのように氷室はなゆみとグラスを重ねた後、生

ビールを一気に飲みだした。

「おっ、コトヤン、今日はすごい飲みっぷりだね。最初から飛ばすじゃないか」

「ああ、喉が渴いていたからな」

氷室はすぐに二杯目を頼んだ。

なんだかどこかで見たシチュエーションだなゆみも声をかける。

「氷室さん、悪酔いしないで下さいよ。いつかの私みたいに」

自分で言ってしまったって、後から恥ずかしさがこみ上げて「あつ」と口を押さえた。

皆に笑われてしまった。

それにしても氷室の様子は変だった。

氷室の周りだけ柵で囲んだように誰も入り込めないままに、氷室は一人で飲み続ける。

体の大きな人はアルコールに強いイメージがあるが、だからといって酔わないとは限らない。

許容範囲を超える量を飲めば誰でも酔ってしまうはずだ。

その量は自分で分かっているとは思いが、それを無視するように氷室はガブガブと流し込んでるように見える。

それは手当たり次第に飲みまくり、酒を味わいながら楽しんでいる飲み方ではなかった。

なゆみは気になって何度も氷室に視線を合わせたが、氷室は完全に無視してなゆみが気にかけていても気にする素振りもなかった。

歓迎会で飲んだときと全く立場が逆になってしまっている。

なゆみが側で心配した態度を取っていると、千恵もまたチラチラと二人の様子を見ていた。

なゆみはウーロン茶しか飲まなかったが、それはそれで面白みに掛けると川野に言われる。

「斉藤、なんで飲まないんだ？ 前はあんなに飲んで面白かったのに。最後なんだからもっと飲んだらどうだ？」

「私をまた酔わせたいんですか。もうお酒は懲り懲りです」

そういいながら、あの時氷室とホテルに入って介抱してもらったことを思い出す。

それもまたなゆみには忘れられない思い出だと、このとき懐かしく感じてしまう。

そしてまた氷室を見たとき、氷室はもうどれだけ飲んだか分からないほど、どこか目が据わってグデンと体が鉛のような塊と化していた。

それでもやめることなくまだ飲み続けている。

（氷室さん、どうしたの？ なんかおかしい。あの人が自分を見失ったように飲むなんて）

なゆみは氷室が壊れてしまわないか不安になってきた。

お酒が入ると笑い声も多くなり、なゆみを楽しく見送ろうと皆が気を遣って送別会を盛り上げていた。

面識がない人ともなゆみは過去の失敗談など交えて楽しく盛り上がる。

そんな一人一人の顔をなゆみは見ながら、心から湧き上がる感謝の気持ちを述べていく。

最後まで本当によくしてもらったこと、そして楽しかったことを言っていると、なんだか目頭が熱くなってきた。

「サイトちゃん、アメリカ行っても頑張つてよ」

「あまり無理しちゃだめだよ」

ミナと千恵が声を掛けてくれる。

残りの皆も合わせて心温まるような言葉を言ってくれた。

だが氷室だけは、テーブルの端で顔を伏せるようにグデングデンになっていた。

「おい、コトヤン。大丈夫か」

純貴が心配する。

「ああ、大丈夫だ。これくらいなんともない」

だがるれつが回ってない。

千恵はなんとなくわかったような顔になり、言い出した。

「今回は氷室さんが酔っ払ったので、サイトちゃんが氷室さんをタクシーまで送って行って下さい。そしたらおあいこでなんか気持ちよく終われるでしょ」

酒も入っているせいで皆もノリがよくいいアイデアだとはやし立てた。



このときこそ氷室の役に立てることもあり、なゆみもすっかり乗せられて「わかりました」とそのノリに応じてガッツポーズをとった。

氷室はそんな話が進んでるとも分からずに、正体が無くなるほど酔いつぶれていた。

最後に皆と一人一人居酒屋の店の前で挨拶をする。

「いつまでも友達だからね」

ミナが別れるのが名残惜しそうに言った。

「向こうからも時々連絡頂戴ね」

千恵も優しい笑顔で別れを惜しんでくれた。

「斉藤、アメリカ人にレイプされんなよ」

川野らしい締めくくりの言葉だった。

なゆみはここでも最後だと、体に力を入れて耐えた。

「はい気をつけます。川野さんもどうかお元気で」

なゆみは棒読みだった。

さすがに周りも引いていたが、川野だけはニヤついて空気が読めていないようだった。

「斉藤さん、元気だな。それじゃコトヤンのこと頼んだよ」

「はい。専務も社長にどうぞ宜しくお伝え下さい。本当にありがとうございました」

本当にこれで皆とお別れだった。

皆が去って行った後、なゆみは一度大きく息を吐いて、そして壁に背をもたれて立っている氷室を見つめる。

「それじゃ氷室さん。行きますよ。歩けますか」

氷室の手を取って引つ張ろうとすると彼の足がふらつき前屈みに倒れてきた。

それを必死になゆみは体で受け止める。

「お、重い」

「斉藤」

「はい、なんですか？」

「トイレ」

「早く行って来て下さい」

氷室はふらつきながらトイレへと向かう。

これも同じシチュエーションだと、なゆみは苦笑いになった。まさか次、吐くってことはないだろうかと心配になってきた。

トイレから戻ってきた氷室を担ぐように片手を自分の肩にまわして歩く。

背中にはあのリュック。

そしてキティのマスコットも付いて、それは相変わらず揺れていた。

氷室は顔をうなだれ気味になり、前髪が目を覆い隠していた。

「氷室さん、吐き気はないですか？」

「ん？ それはない。ただいい気分だ。なんか斉藤が側にいるような感じがする」

「ちょっと、私、ちゃんと側にいますよ。大丈夫ですか？」

ゆっくりゆっくりと歩き、そしてタクシー乗り場に来たときはなゆみはぜいぜいと疲れていた。

「すみません。この人乗せて欲しいんですけど」

タクシーの運転手に声を掛けると、おじさんはあまりいい顔をし

なかった。

「いや、酔っ払いを一人乗せるのは困るんだよね。目的地に着いたときおろして、路上で寝てしまふこともあるからね。最近そういうの多くて轢かれて死んじゃうケース多発してるし」

なゆみはぞーっとした氷室がそんなことになったら恐ろしい。

「それじゃ私も一緒に乗ります」

「それならいいよ」

なゆみは氷室を必死にタクシーの後部座席に詰めてそして自分も乗り込む。

「お客さん、どちらまで？」

「氷室さん、氷室さん、おうちどこですか」

「あっち」

なゆみは仕返しされている気分になった。

「あー、行き先が分からなければ発車できませんよ」

「あっ、ちよっと待って下さい」

なゆみはリュックから手帳を取り出し、氷室の住所を探し出した。

「ここ、ここをお願いします」

その住所を見せると、タクシーのおじさんはすぐに理解して車を発車させた。

なゆみは、酔いつぶれている氷室をじっと見つめる。

（こんな氷室さん見たことない。いつだってしっかりと冷静な人だったのに）

最後の日にこんな氷室の姿を見せられて、なゆみはどうしようもなく胸が突かれるように切なくなっていた。

そのとき車が左に大きく曲がると、その反動で氷室もなゆみにも

たれかかってきた。

重かったがなゆみは嫌がることなく氷室を受け入れ、体を密着させる。

それでは足りないばかりになゆみも自ら氷室の方へ首を傾け、さらに氷室の左手を両手で包み込んで目を閉じた。

その様子をタクシーの運転手はルームミラーを通じてちらりと一瞥し、そしてタクシーを目的地まで走らせた。

20分ほど走ったところでタクシーは止まり、ブレーキがかかったと同時に体が振動してなゆみは目を開けた。

「お客さん、あそこに見えるあのマンションがそうですわ」

「あ、はいっ」

なゆみはお金を払い、氷室を引っ張り出す。

「氷室さん、お願い、立って」

「う、うーん」

氷室は朦朧とした中でなゆみにつかまりながらふらふらと立った。

タクシーはすぐに去って行き、なゆみは氷室を支えながら目の前のマンションを眺めていた。

5階建てのこじんまりとした建物だが、まだ見かけは新しい。

この辺りはごちゃごちゃとした雰囲気があり、家や建物が密集している。

道のずっと先には大通りが横切っているのか車が行き交っているのが見え、最寄の駅からも近い感じがした。

「ここに氷室さんは住んでるんだ」

氷室の部屋はどんな風なんだろうと、なゆみは自分にもたれかかっている氷室の顔をちらりと見つめる。

「氷室さん、勝手にあがつちやいますけど、散らかっていても気にしませんから安心して下さいね」

男の人の部屋など想像もつかないまま、とにかく運ばなければとなゆみは渾身の力を振り絞った。

9月に入ったばかりとはいえ、まだ夜は湿気が多く蒸し暑い。

氷室はなゆみには重すぎて真っ直ぐ歩こうにもヨタヨタしてしまう。

ものすごい重労働をしている気分になりながら必死で進んでいた。

「氷室さん、何階ですか？」

「ん？ 適当に……」

「適当にってそんなことできないでしょう」

なゆみはよろよろとマンションの中に入っていく。

マンションの入り口のドアを開けて入り込むだけでも一苦労だった。

入り口近くの壁に郵便受けが並んでいて、そこに氷室の名前をみつけた。

301となっている。三階に違いないと、エレベーターに乗り込む。

氷室はほとんど酔って寝ているような状態の中、時々寝ぼけるのか「斉藤」と名前を呟いた。

「はいはい」

なゆみはなだめるように返事をして、適当に相手していた。

三階について、氷室の部屋のドアの前まで来た。

「氷室さん、着きましたよ。鍵はどこですか」

「カギ？」

氷室はズボンのポケットあたりを触りだす。

「ここに入ってるんですね」

なゆみは手を突っ込んでごそごそすると、氷室がくすぐつたいとばかりに「ハハハハハ」と笑い出した。

「もう、氷室さん！　しつかりして下さい。どうしてこんなことに鍵がいくつかキーホルダーにくっついて出てきた。

その中から家の鍵らしいものを選ぶ。

「きつとこれだな」

なゆみはそれを使って部屋のドアを開けた。

「氷室さん、帰ってきましたよ。おうちですよ」

玄関は狭く、氷室を抱えて重なって入るのは窮屈であり、部屋に足を踏み入れれば、湿気が籠った部屋の暑さがもわつと体を包み込んで不快感が漂った。

「暑い」

氷室がシャツのボタンに手をかける。

「ハイハイちよつと待って下さい。その前に靴を脱ぎましょうね」

リュックを玄関にどさつと置いて、氷室を壁にもたせかけたまま、なゆみはしゃがんでなんとか靴を脱がせた。

そして引きずるように廊下を真っ直ぐ抜ける。

途中に小さなキッチンとユニットバスがあり、目の前のすりガラス張りのドアをあけると八畳くらいの部屋があった。

「えっと、電気のスイッチはどこだ」

薄暗い部屋。その辺の壁を触ってスイッチを探しパチツとつける。明るくなつてバーンと目に飛び込んできたその部屋になゆみは氷室を抱えたまま暫し呆然する。

そこは小さなアートの空間だった。

全体の色は落ち着いたアースカラーで統一され、ベッドもホテルのメイドが整えたように完璧な姿。

氷室の几帳面さが現れている。

壁側には小さな棚があり整理整頓されて物が並べられている。

棚の一番上にはお洒落なオブジェがついたブックエンドと本が置かれていたが、それは計算されたインテリアのように見えた。

フローリングの床には大きなおしゃれなラグ、そして小さなかわいらしいテーブルもインテリア雑誌の写真に使えそうなくらいに見栄え良く添えられている。

液晶テレビも存在感を出していた。

そして設計を描くような角度が自由に換えられるデスクが部屋の隅にあった。

まるでモデルハウスのような完璧な部屋としか言えない。

なゆみが感心して突っ立っていると氷室は隣で「んんー、暑い」とうなりだした。

「あつ、はいはい。えっと、エアコンのリモコンはどこだ」

氷室をベッドにひとまずごろっと置いて、なゆみはテーブルの上に目をやった。

そこにはテレビ用ともう一つ小さなりモコンが置いてあった。

「これだな」

ボタンを押すとピツと音が鳴り、バルコニーに続く窓の上の壁に設置されていたエアコンが動き出した。

これで一安心とばかり、氷室を見ると、氷室は自分でシャツのボタンを全開にして胸からお腹に掛けて丸見え状態になっている。

なゆみはドキツとしたが、氷室が酔いつぶれて寝てることをいいことにしっかりと見てしまった。

意外と筋肉質で腹筋が割れている立派な体つきにホーと感心していた。

中途半端な服の着方にどうせなら全部脱がせてしまえと、なゆみは氷室のシャツをぬがせてしまった。

「氷室さん、酔いつぶれて女と密室に二人っきりになっても危ないですよ。私だったからよかったものの」

なゆみは仕返しのつもりだった。

「ん？ そっか好きにしてくれ」

なゆみはつい笑ってしまった。

しかしすぐにその笑いが消え、氷室を寂しげな瞳で見つめる。

エアコンが効きすぎて寒くなっではいけないと最後の仕上げに足元まで布団をめぐっていつでも自分で被れる状態にしてやった。

「氷室さん、それじゃ帰ります」

なゆみは最後に氷室の顔をよく見ようと近づいたとき小さく「斉藤」と声をかけられた。

「はい、なんですか」

なゆみはよく聞こえるようにと耳を近づけ更に接近する。

「……側にいてくれ」

そして氷室はなゆみをいきなり羽交い絞めにするように抱きしめた。

なゆみは上半身裸の氷室の胸の中に引きずり込まれてしまった。



「ひ、氷室さん、ちよっ、ちよっ」と

氷室は抱き枕を抱くようになゆみを包み込む。

そこには離したくない欲望と酔ってながらも愛しいものを慈しむ氷室の気持ちが表れ、たくましく筋肉質な腕でありながら甘くやさしい感情が抱擁に込められていた。

その証拠になゆみの足は最初じたばたするが、氷室の熱い抱擁に簡単に陶酔してしまい、足のばたつきはすぐに収まって、それとは逆に心臓がドキドキと騒がしく打ちだしていた。

そしてもつと氷室の素肌を直に感じたいと自ら体を摺り寄せ一緒にベッドで寝転がった。

なゆみの体全体が氷室と密着する。

「今だけ、今だけだから」

そういい聞かして、氷室の裸の胸の中で目を閉じた。しーんと静まり返る部屋の中で、氷室の鼓動が聞こえてくる。

暫くその音に耳を澄ませ、氷室のことだけを考える。

厚くて温かいその胸になゆみは抱かれながら、氷室と過ごした日々を一つ一つ思い出していた。

酔いつぶれて本人はどこまで覚えているかわからないが、なゆみは大胆にもそつと氷室の胸にキスを試してみた。

そこにはこれまでのお礼とそして自分の本当の気持ちを含ませて、愛しいものに唇で触れることが最上級の行為とでも言つかのよう思いを込めていた。

お別れを口にしてさようならと思っていただけに、最後で氷室に抱きしめられてなゆみは満足だった。

いつしか部屋は涼しくなり、氷室の熱が次第に心地よくなっていく。

いつまでもいつまでもずっとこうしていたいとなゆみは思ってしまった。

氷室もまた同じような気持ちでいたのかうわごとのように呟く。

「斉藤、行…… くな。頼むから、側に居て…… くれ」

どこまで本気なのか、なゆみには氷室のうわごとの真意は分からなかったが、それでももう充分満足だった。

なゆみが閉店間際に本店に寄ったとき、氷室は声を掛けるどころか、振り向くことすらできずじまいだった。

傷つくの恐れ、これ以上の悲しみを抱えたくないと逃げる選択をしてしまった。

どうすることもできない思いを抱えたまま、嵐が過ぎ去るのをなす術もなくただ恐怖心だけ抱いてじっと耐えているような気持ちだった。

これでもう最後。

なゆみとはもう会うこともないんだと思えば思うほどどん底に落ちてしまう。

それこそなゆみが言っていたテンポラリーラブだと、期間限定の暫しの仮の恋の終わりを氷室は迎える準備をしていた。

それにはもう一言も口を交わさないほうがいい。

終わりは早い方がいいに決まってる。

そして最後は飲んで飲んで飲みまくって、何もかも忘れる。

だから氷室は一人無言で飲み続けた。

深く海に沈みこみ、もうそこから出てこないつもりで飲んでいた。普段酒に溺れない氷室が酒に溺れてしまったのは、また挫折して諦める道を選んでいたからだだった。

まさかその酔ったことで、こうやってなゆみを抱いているとは皮肉なもんだった。

本人は果たしてどこまで意識があるのかといえば、起きたときに分かることだろう。

氷室は安心したかのようになゆみを抱えたまますっかり寝入ってしまった。

鼾が聞こえると、なゆみを抱いていた腕が緩む。

なゆみはそれが合図のように思えて、そっと氷室の胸から離れ、布団をかけてやった。

「氷室さん、それじゃ失礼します。今まで本当にありがとうございました」

氷室の寝顔を寂しげな表情でなゆみは見ていた。

氷室はなゆみを抱きしめていたことも知らずに無防備の姿で眠りこけている。

そんな姿を見つめながら、なゆみは言いたい気持ちも本人に告げられず、その代わりにじわっと涙がこみ上げた。

それを止めようとして最後に飛びつきりの笑顔を氷室に向けるが、無理に笑っても涙は頬を伝っていた。

これ以上側に居れば大泣きしてしまう。

なゆみは振り切るようにそこを立ち去り、最後に部屋の電気を消して、玄関に向かった。

そこに置いていたリュックを手を取ったとき、ふとキティのマス

コットが目に入った。

一時は封印していたものだったが、自分らしさのままでいいじゃないかとシンボルのようにつけていたキティのマスコット。

何かある度に一緒に揺られて自分と共に過ごしてきたものだった。

暫くキティを見つめて考える。

自分が氷室と別れても、このキティだけは氷室と過ごして欲しいと、リュックからキティのマスコットをはずし、なゆみはそれを下駄箱の上に置いていた鍵の隣に並べた。

そして静かにドアを開けて出て行く。

オートロックのドアはカチャリと音を立て閉まり、なゆみはもう氷室の部屋へ戻れなくなった。

それと同時にさっきまで我慢していた涙が一度に溢れ出す。

それを拭いながら早足でそこを去ってエレベーターに乗り込み、マンションの外に出たとき、建物を振り返りもせず、全ての思いを断ち切るように大通りの方に向かって走り去っていった。

夜のひっそりとした見知らぬ場所は、なゆみの悲しみなど知らぬという感じでただ静けさが漂っていた。

なゆみは自分の行くべき道だけを探すように、大通りでどっちに行けば帰れるのかキョロキョロする。

そして怖がることなく思った道を背筋を伸ばして進んでいく。

やがて駅が見えたとき、涙も乾きこれでよかったとぐっとお腹に力を込めていた。

朝になり氷室は眠りから覚め、ずつつけっぱなしになっていたエアコンのせいで部屋が冷え切っているのか少し寒さを感じ体をぶるっと震わした。

まだ完全に機能しない脳が重たいとばかりに、手で頭を押さえながらむくりと起き上がる。

起き上がったとたん、頭がガンガンと痛み出し、顔をしかめていた。

歪んだ顔つきで辺りを見回し、初めて自分が家に戻ってきていることに気がついた。

「あれ、俺、いつの間にか帰ってきたんだ」

暫くぼーっとそのままの姿勢でいると、脳の靄が少しずつ晴れ出したかのようになり、ところどころの記憶が戻ってきた。

頭が痛い原因が酒の飲みすぎであり、そしてなぜそんな無茶な飲み方してしまったのか考えたとき思わず声に出さずにはいられなかった。

「斉藤……」

吐息が漏れるように呟いた。

一人闇雲に飲んでいた酒。

なゆみと話すこともせず、別れの言葉もあいさつもなくそして何もかも終わってしまった。

「The End」

エンド

氷室は映画の終わりを告げる最後のシーンのように呟いた。

「くそっ」

自ら全てを放棄したとはいえ、二日酔いも影響してこの上ない最悪の気分だった。

そしてベッドから起き上がり、狭い廊下へ出て、小さなキッチンに添えつけていた棚の中からグラスを取り出し、勢いよく蛇口から水を出す。

それをグラスに注いで、ぐっと飲み干した。

そのグラスをシンクに置いて、玄関の方を見れば、白いものがぼわっと小さく点のように目に入ってきた。

なんだろうと下駄箱の上を見て、そこにキティちゃんのマスコットを見つけたとされた。

それを掴み暫く呆然と見つめては、込みあがる感情が爆発し力の限りそれを握り締めた。

「斉藤が俺をここまで連れてきたのか」

氷室は押さえ切れない思いを歯で噛み砕くように食いしぼる。

どうすることもできない思いは行き先を見失って体の中で固まっていく。

まるでそれは石のように、重くいつまでも苦しくのしかかっていた。

その日の昼すぎ、父親から電話が入った。

「コトヤ、いい加減に返事したらどうだ。見合いをして付き合うというのはもう結婚を前提としてしていることだ。幸江さんも26歳だし、焦るところもあるだろう。きつと早くその言葉を聞きたいと思ってるぞ。いつまでも待たせるのは失礼だ。すぐにプロポーズしなさい」

氷室は言葉の意味を深く考えていなかった。

父親がまたうるさく小言を言っているくらいにしか捉えていない。結婚という事自体軽々しく思えてきた。

そして自分がこのときやるせない思いでいる。

自棄になった勢いで、自分でも馬鹿なことを口走っていると思いつながら答えていた。

「そうだな。でも俺、婚約指輪買うほどのまとまった金なんてないや」

「おっ、結婚を意識しているってことなんだな。わかったそれくらいお金、私が出してやろう。幸江さんに親から貰ったなんて言わなければわからないさ。お前が拘るのなら、出世払いで後で返してくれてもいい」

「分かった。今度俺の銀行口座にでも振り込んでおいてくれ」  
電話を切った後、氷室は益々生気が抜けたようになっていた。

「俺、本当に結婚しちまうのか」

まるで他人事のように思っていた。  
だがこのときの氷室には正常な判断などできる訳がなかった。

なゆみが去ってしまった後、何もやる気はなく、それならば将来を約束された安易な道を辿った方が楽に思えてきた。

勢いで結婚して、幸江の父親の会社を手に入れて適当に人生を過ごすのも一つの手かもしれないとそんなことまで考えだしていた。  
リストラにあって落ち込んでいたとき、純貴に勧められて簡単に就職したように。

困難にぶち当たればいつも逃げ道を探してしまう。

また同じ道を辿っていく自分が本当の自分に思えてしまった。

「所詮俺は弱い人間さ」

氷室はキティのマスコットをこのときずっと握り締めていた。

次の日の月曜日、氷室は出勤してもどんよりとして口数は少なく、仕事も投げ出したいように荒っぽくキーボードを叩いていた。

時々従業員の女の子が話しかけるが、全く無愛想に対応し、口をきかなければ良かったと皆を後悔させるほどに態度が悪い。

睨みを利かした目で見つめられれば、怒ってると思えず誰もが逃げだしたくなる。

用事があるときは腫れ物に触るようにどの従業員も、神経を尖らせて氷室に接し、触らぬ神に祟りなしという雰囲気だった。

よっぽどのがなければ近寄りたくない、女の子達はできるだけ距離を置いて避けていた。

氷室は黙々とデスクで仕事をこなすが、常にため息ばかり吐いては、その周りがどんどん曇っていきそうだった。

純貴が見るに見かね、熱い茶を入れた湯飲みを氷室のデスクに置いた。

「おい、コトヤン、なんか疲れてる？　少しは息抜きでもしたらどうだ。なんかピリピリしすぎて周りの者が怯えてるぞ」

「えっ、それは大げさだろ」

全く自分が何をしているのか自覚を持たず、純貴が呆れる眼差しを向けて首を横に振ったのを見てやっと気がつく始末だった。

どうしたものかと自分を落ち着かせるために、純貴を入れてくれたお茶に氷室は口をつける。

「もしかしたら、斉藤さんが辞めたことが関係してるのか？」

純貴にストレートに言われ、氷室は思わずお茶を吹いてしまって



は、誤魔化そうとアチアチと熱くて飲めなかったことにしていた。  
結構わざとらしい。

「馬鹿いえ、そんなことじゃないよ」

氷室が言いくいことを言うときは常に口先が尖る。

「じゃあなんだよ」

はつきりしると純貴の声が少し苛立っていた。

氷室は少し小声になりながら、尤もらしい理由を適当に言って話をはぐらかそうとする。

「見合い相手のことさ。父親が早く結婚の意志を伝えろってうるさくてさ、それで本当に俺結婚してしまうのかなって思ってな」

これも氷室には悩むところでもあったので全くの嘘ではなかった。

「なんだ、そんなことか」

「そんなことって、よく軽々しく言えるな」

「コトヤンも32だろ。いい加減結婚しちまえよ。大したことないぜ」

「おい、純貴」

「結婚したって、気に入ったのが出てきたらバレずに手を出せばいいこと」

「純貴、お前いつか罰当たるぞ。しかもこんなところで話題にする話か」

氷室は周りを見渡す。

従業員は接客で忙しそうにしていたので、二人の話には気にも留めてなかった。

「まあそのときはそのときや」

どこまでもあっけらかんとしている純貴には氷室はお手上げだっ

た。

「でもさ、コトヤンだっていつかそうなるかもな」

「俺はそんな風には……」

「おい、だってお見合いだろ。元々好きじゃない女と結婚のためだけに一生を共にするなんてつまんないじゃないか。いつか心から惚れた女が出てきたら、お前も奇麗事なんて言つてられないぜ」

氷室は黙り込んだ。

一体なんのために結婚するのだろうかと疑念が湧き上がる。

（俺はただ斉藤を忘れようと自分を窮地に追いやってるだけなのか。それとも目先の安泰にすがってしまいたいのか。どんな理由を並べたところで、結局俺は幸江と結婚することを選んでしまうのか）

ここまで来てしまつと断る理由も見当たらず、氷室の心は麻痺してしまった。

ズブーっとお茶を飲む。

「純貴、このお茶結構美味だな。どこの茶だ」

「ああ、それ、斉藤さんがもってきてくれた茶だ」

「……」

氷室はその後、無言でお茶を飲み干した。それはまるでなゆみへの思いを飲み込んでしまつようだった。

そして一日また一日と過ぎていく。

明るく輝いていた太陽は軌道を外れて違つ星へと旅立った。

光を一杯浴びずにいる氷室は、折角やる気になつてた夢を追いかける気持ちも、すっかり色褪せてしまい、また振り出しに戻っていた。

なゆみが居ないと元気も出てこない。

そんなときはなゆみが持ってきたお茶を何度も飲んでしまっただった。

「あー、上野原さん、斉藤はいつアメリカ出発なんだ。もう行っちゃったのか」

側を通ったミナに声を掛けていた。

「いえ、今週の土曜日ですよ。確か夕方4時のフライトだったかな。仕事がなかったら見送りに行っただんですけどね」

「そっか明後日か」

それまではまだ日本にいる。

氷室は無性に会いたくなってきた。

しかし実家の住所も電話番号も分からない。

それをミナに聞きたくとも勇気が出ず、ミナが側を通る度に行動に移そうか迷っている、傍から見れば拳動不審になっては益々距離を置かれてしまった。

ミナは自分が何かして気に障ることでもしたかと思うと、氷室から遠ざかり、氷室は益々聞き辛くなっていった。

出発の前日も、氷室は勇気を振り絞ってミナからなゆみの電話番号を聞き出そうと何度も接近を試みるが、そういうときに限って夕イミングが合わず、客が押し寄せたり、ミナは他の従業員に呼ばれたり、ことごとく氷室は取り残されてただ突っ立っているだけとなっていた。

そうなると折角湧いた勇気も萎んでしまいやっぱり失敗してしまっただ。

そして土曜日の朝。

氷室はとうとうなゆみの出発の日が来たと、益々不貞腐れてどんよりとしていた。

仕事は落ち着かず、足はがたがたと揺れ、やばい薬の効き目が切れたように禁断症状らしきものを抱えているようだった。

何度も時計の針を見て、4時のフライトかと心の中で呟く。

昼休み、氷室はあまりの落ち着きのなさにビルの中をうろつき回っていた。

その時なゆみが通っていた英会話学校を思い出し、なゆみの面影を求めてふらりとその周辺を立ち寄った。

二階のビルの角に位置し、昼間ということもあり人気も少なく入り口は静かにひっそりとしている。

覗こうにも不審者と思われるので、場所を確認しただけでその場を去ろうと踵を返した。

そこでジンジャとぼったり出くわしてしまい、氷室は思わず叫んでいた。

「伊勢君！ こんなところで何をしているんだ」

「氷室さんこそ」

「今日は斉藤の出発日じゃなかったのか。どうして見送りにいかないんだ。一年も会えなくなるんだぞ」

「ああ、もういいんですよ」

あまりにも軽々しい態度に氷室はカチンとくる。

「どづいうことだ」

「タフクが来なくていいって言ったから。それに俺たち、友達に戻ったんです」

「それって別れたってことなのか」

「うーん、なんていうんだろう。結果的にはそうなりますけど、お互い話し合って納得した上で決めたことなんです」

「それはいつの話だ。いつ別れたんだ」

まさかの話に氷室は詳しく聞きたいと問い詰める。

「ずっと前に氷室さんが女性と歩いていて、そのときに偶然出会ったでしょ。あの帰りです」

「ちょっと、待った。お前、それって斉藤を弄んだってことか」  
氷室の顔が強張り、ジンジャを見据える。

「ちょっと待って下さい。何も弄んだりしてません」

「じゃあなんであの時ホテルに入ったんだ。お前達が出てくるころを俺は見たぞ」

「えっ、ああ、あれですか。でも氷室さんどこで見てたんですか？」

「あれ……だと」

氷室の怒りは頂点に達した。

握り締めた拳がぶるぶると震える。

「氷室さん、ちょっと待って下さい。まるで殴りかかってきそうだから落ち着いて下さい。こうなったのも氷室さんのせいなんですよ。殴りたいのは俺の方なんですから。それに俺たちホテルには入りませんが一線は越えてません」

「えっ？」

一瞬で氷室の震えが止まった。

「あの時、タフクが氷室さんの姿を見て急に態度がおかしくなりました。なぜか暴走して自棄になって自らホテルに行こうって俺を誘いました。あれは何か理由があって無茶な行動に走っただけです。彼女はそんなこと望んでもいなかっただけです。俺はそれに気づきました。だから彼女の言う通りに中に入ったんです。彼女は極限まで

追い込まれないと自分が何をしでかしているか気がつかない。それは氷室さんもよくご存知じゃないでしょうか？」

氷室もそれには同意だった。

小さく声が漏れるように「ああ」と答えていた。

「だから俺が気づかせたんですよ。タフクの本当の気持ちはなんなのか」

氷室の意識は飛んで放心したように立っていた。

あの日、なゆみはジンジャとホテルに入り、勢いだけで事を起こしていた。

ジンジャにキスをされ、腕の中でぎゅっと抱きしめられた後、ベッドの上に押し倒された。

そしてジンジャのなすがままに身を委ねていたはずだった。

それは自分で決心したことであり、後には引けないと自らそう思い込んでいた。

Tシャツが上に捲くれ上がり、ジンジャがブラジャーを外そうとしたとき、どうしてもそれ以上できずに震えを生じ、ずっと突っ走っていた気持ちが突然遮断されてしまった。

それと同時に心の中の真の気持ちがつるつと剥けるように表れた。

「ジンジャ、やめて」

自分がしでかしている事の大きな間違いに気がつくのと、なゆみは両手で顔を覆って泣き出してしまった。

ジンジャの手はそこで止まる。

「ごめん、ジンジャ、やっぱり私できない。私、このままじゃジンジャも傷つけてしまう」

ジンジャはなゆみのTシャツの位置を戻して、起き上がる。

「ほら、起き上がれるか」

ジンジャが労わるようになゆみの体を起こした。

なゆみは泣きながらベッドの端に腰掛けると、ジンジャも寄り添って座り、なゆみの頭を撫でてやった。

「ほら、泣かなくていいんだよ。もう分かったよ。タフクが無理をしていることくらい。そして原因が氷室だったことも。奴が気になるんだろ。俺もそれは前から気にしていたことだったよ。だけどそうじゃないって自分でも否定しているところがあつたんだ」

「ジンジャ」

「荒っぽかったけど、これくらいしないとお前は絶対に自分の気持ちに正直にならないからな。俺は試したんだよ。タフクが本当に好きなのは誰かってね」

「えっ」

「俺ではタフクを繋ぎとめることはできない。一年待つとか行つたけど、俺にはお前を繋ぎとめておけないってわかつたよ」

「ジンジャ、ごめん」

「何も謝ることはないさ。タフクと出会ってからはずっとレッスン受けるのが楽しみだったし、タフクと話してたらすごく元気が出たし、いつもタフクのこと考えてたよ。またそれが心の中がふわふわして気持ちよかつた。何が悪いって俺が一番悪いんだ。タフクの気持ち分かつていたのに、すぐに行動しなかつたんだから」

なゆみはその背景に坂井の言ったことを思い出していた。

「ジンジャ、私も楽しかった。ジンジャに構って欲しくて追いかけた自分にも満足で、恋をするって幸せだなんて思ってた。ジンジャは私にとっても大切なものを与えてくれた」

二人は顔を見合わせてお互いを思いながら笑顔を見せた。

ジンジャは落ち着いた優しい眼差しをなゆみに見せて呟く。

「俺たち、恋をすることを楽しんでたんだろうな」

「恋をすることを楽しむか…… うん、確かにそれはあったと思う。ジンジャに恋をして私ほんと楽しかった」

「俺たちまた友達に戻ろう。タフクも俺なんか縛られないで、アメリカでもっと自由にしていよ。タフクは自分の思うように飛び回って来い。俺はいつも明るく元気なタフクが好きだったんだよ。そうじゃないとタフクじゃない。俺が縛り付けてたらダメにしてしまいそうだ」

「ジンジャ…… ありがとう」

二人は暫く英会話学校での思い出話をして、楽しかった日々を語り合っていた。

これで終わりじゃなく、それぞれの出発の日としてお互いを見送ろうとしていた。

なゆみとジンジャが寄り添ってホテルから出てきたとき、二人はただお互いを思いやって歩いていただけだった。

別れた後、気まづくなりそうなのを必死でそうじゃないと、お互い納得しようとしていた。

最後まで好きだった気持ち大切にしたいくて、お互い傷つけたくなくてあの時二人はかけがえのない思い出を一緒に分かち合ったと言い聞かせて別れていた。

氷室は色んな感情を胸に抱いていると、渦巻いていた心の中の思いが一気に溢れ出しジンジャの言葉が潤んで耳に届いていた。



「氷室さん、タフクのことどう思ってます？ タフクにはしっかりと見守って大きく支えてくれるような人じゃないといけないんです。そして時には厳しいことも遠慮なく言えて、正しい道に導いてくれるような人。そうじゃないとタフクはいつまでもふらふらしたまままで、危なっかしいこと一杯やってしまいそうだ。それができるのは俺じゃなかったってことなんです」

ジンジャは氷室の目を見て言葉の裏の意味を読み取れと訴える。そのとき、眼鏡がきらりと光を反射したように見えた。氷室はジンジャの目をしっかりと見据えた。

「伊勢君、用事を思い出したので失礼するよ」  
氷室は腕時計を思い固まったような瞳で覗き込み、一目散に走り出した。

ジンジャはその姿を見て自分の役割を果たしたようにふっと息を漏らし、一緒に肩の力も抜けた。

そしてぐつと背筋を伸ばして英会話学校へと足を向ける。まだ完全になゆみへの思いはふっきれた訳ではない。

思い出が詰まった場所に一人残されれば、彼女のことを否が応でも思い出してしまう。

それでもなゆみを好きでいた気持ちは、彼女のために応援してやりたいという気持ちに変わっていく。

まるで風船の紐を自ら放してしまうことで、大空に飛ばしてどこまで高く上っていくのか見てみたいというような気持ちだった。

それでもこのときはかっこつけてキザな役回りを演じ、そんな自

分に酔うことで乗り切ろうとしていた。

明るく別れるのも楽しい恋の経験の一つになればいい。

まだまだ沢山の恋がこれからできるとばかりにジンジャは眼鏡を抑えながら二枚目俳優を気取って微笑みを口元に浮かべていた。

氷室はエスカレーターを駆け下り、ドアを突き破るようにビルの外に出て、大通りへと駆け出した。

一刻の時間も無駄にはできないと焦る気持ちでタクシーを探す。

無我夢中に走って空車のタクシーを見つけたときは、手でタクシーのボンネットを押さえ込むように捕まえた。

息をはあはあさせながら、必死の形相で「空港まで大至急」と叫んだ。

タクシーは氷室を乗せてすつと走り出す。

(間に合ってくれ)

緊張感がぐつと体の中を駆け巡り、逃したくないチャンスに氷室は邁進する。

胸がドキドキと高鳴っていた。

それは何かに向かって掴もうと希望に燃えていた昔の気持ちによく似ていた。

情熱に燃えて、腹の底から湧き起こってくるやる気。

久々に感じたこの気持ちは本来の自分の姿を想起させる。

(なんと少しでも斉藤に会わなければ)

思いつきり叫びだしそうに、氷室の心臓がフル回転に動くとき熱い血潮が体全体にいきわたって激しく高揚した。

運良くタクシーは渋滞などにも巻き込まれずに順調に走る。

幾度も腕時計を見つめ、時間との勝負に氷室は間に合ってくれと心の中で何度も呟く。

そしてなゆみに会った時を想像して、どのように何を言うべきか頭の中で筋道を立てる。

必ず会えると信じて、氷室は突き進んでいた。空港に着いた時は2時半を過ぎたころだった。

(間に合う!)

氷室はタクシーを降りて、国際線のフロアー目指して全速力で走り、なゆみの姿を求めて探し回った。

「斉藤、どのエアラインだ。カリフォルニアというのはサンフランシスコ行きなのかそれともロスアンジェルス行きなのかどっちなんだ」

空港内は土曜日なこともあり人が多く混雑している。

その間をもどかしそうに避けながら進む。

目は鋭く、なゆみの姿だけを求めていた。

髪型が短い人を見る度、ドキッとしては近づくと人違いだと分かる。と露骨に苛つく。

氷室はどうしてもなゆみを探し出せないでいた。

詳しいことを何も知らずに、どこのエアラインかも分からず氷室は焦りだした。

そして携帯電話を取り出して電話を掛けた。

「純貴か」

「おっ、コトヤン。どうした？ 休憩時間とっくに過ぎてるぞ」

「すまん。今日はもう早退させてもらっ」

「何があつたんだ」

「悠長に喋ってる暇はないんだ。上野原さんを出してくれ。早く」  
純貴は訳が分からずにミナを呼んだ。

「もしもし、お電話変わりました。上野原です」

「ああ、斉藤、斉藤の乗る飛行機はなんだ。あいつはまずどこへ行くんだ」

「えっ？ えーと」

ミナは咄嗟に質問されてすぐに思い出せなかった。

氷室は焦る気持ちの中、体を震わせてミナの言葉を待った。

「あつ、確か、ユナイテッドのロス行きだったかと」

「わかった。ありがとう」

氷室は電話をすぐに切り、ユナイテッド航空のカウンターめがけて一目散に走る。

会えると期待が高まる中、カウンターに来てみれば目の前の光景を信じられないとばかりに落胆してしまった。

そこにはなゆみの姿どころか、ガラガラに空いて乗客すらほとんどいない。

全てのチェックインを済まして一仕事終わったスタッフがのんびりとしている姿が目映った。

「アイツ、もうチェックインしてしまったのか」

そしてロスアンジェルズ行きの飛行機の時間をチェックして氷室は啞然としてしまった。

時間変更がされ、出発時間が3時20分となっている。

その隣にはオンボードと表示され、すでに搭乗は始まっていた。

「そんな」

チケットを持たないものは搭乗口など行けるはずがない。

ましてや国際線。

セキュリティの厳しいところで中に入れてくれと頼むわけにもいかない。

なす術もなく、氷室は空港内で迷子にでもなったように一人だけ取り残された気分を味わい震えを生じた。

先ほどの胸高鳴った興奮もすっかり凍りつき、谷底に落とされたような絶望感を味わう。

空いている椅子にふらふらと座り、首をうなだれて暫くそこで動かずじっとする。

なぜもつと早く素直になれなかったのか、一言勇気を出して聞けばそれでよかったはずだった。

それなのに簡単に諦めて酒に溺れることで方をつけようとした自分に腹を立てては、何もかも上手く行かず見放されたように思えて立ち直れないほどに沈み込んでいく。

「くそっ」

氷室は膝をぎゅっと裂くように掴んでいた。

近づけなくとも、まだこの同じ場所になゆみがいると思うと、なかなか空港を去る気にはなれなかった。

そして飛行機の出発時刻が過ぎてしまっても氷室はまだ座り続けていた。

もしかしたら飛行機の突然のキャンセルもありえるかと密かに期待をしてみたが、飛行機に問題があることを考える方が恐ろしかった。

氷室はようやく立ち上がる。

なゆみが飛行機に乗って飛び立ってしまった以上、もう無事に向こうに着いてくれることを願うしかなかった。

氷室は揺ら揺らとふらつきながら歩き出し、陽炎のように消えてしまってもおかしくないくらいに自分の存在価値を否定する。あれだけの思いが一瞬のうちに消え去り、諦めるほかに道は残されず、重たい足を引きずるように、氷室は空港を後にした。

「何もかも終わってしまった」

その夜、氷室はベッドの上に横になり、キティのマスコットを目の前に垂らして見ていた。

振り子のように揺らして、その揺れ具合をひたすら見つめている。「あいつのリユックではいつもこうやって揺れていた」

なゆみの姿が目に見えかぶと苦しさでキティをぎゅっと握り締めてしまった。

自分が逃げてきたことへの結果がこれなんだと自分を責めまくる。だったらもう仕方がないと、氷室は受け入れることでもがく気持ちを抑えなくなった。

これ以上苦しむのが辛すぎて、この思いから逃れたくて仕方がなかった。

そしてベッドから立ち上がり、キティのマスコットを、物入れの引き出しの中にしまいこんだ。

もうなゆみのことを考えないように、時が経てばこの思いもどこかへ飛んでいくことを願っていた。

氷室は走って汗を掻いた体を洗い流したいとシャワーを浴びようと裸になり、狭いユニットバスに入って、熱いお湯を出す。

頭から熱いよくシャワーを浴びては顔を上げた。

そのまま暫く熱いお湯をいつまでも顔で受けている。

かつてなゆみに言った言葉を思い出していた。

『ガキだね。どうせ告白もしてないんだろ。勝手に相手に好きなのがいたら一人で思い込んで、そして自分は悲劇のヒロインになって泣いてしまっただけだろ』

このとき自分の言った言葉が、胸を貫いた。

(そっくりそのまま自分に返ってくるとはな)

氷室は暫くお湯から顔を逸らすことができなかった。

日はまた昇ると言うが、これは『また明日があるさ』という意味よりも、辛い状況に置かれていてもそれがお構いなしに物事は勝手に進んでいくという、無常さの意味の方が氷室にはしっくりきた。

もがいても苦しんでも、それはお構いなしに毎日がやってくる。それならば何をやっても同じ日々が繰り返されると思えて、希望など持てなくなっていた。

氷室の心は空洞のように大きな穴が開いてそれが埋まることはなく、深淵しきつた落ち込みは全てにおいて不承不承な気持ちを抱かせた。

断る理由も作れずに幸江とはまだ中途半端な付き合いを続け、ただ食事を一緒にするという形式だけのデートを繰り返す。

一人になるよりは身代わりを側において気を紛らわせたいという、身勝手な理由だけで幸江を利用していただけだった。

自分でもずるいとは思っていたが、幸江もまた氷室が誘えば決して断ることなくついてくるために、それはずるすると続いてしまっていた。

父親はその様子を知ると、早くプロポーズしろと何度もせかす。婚約指輪を買うために援助してくれたお金は、氷室の口座にとっくに振り込まれていた。

氷室は時折、ジュエリーショップのショーウィンドーを眺め、ひととき煌々くダイヤモンドの輝きの中に何の意味があるのだろうと、それを美しいとも思わずに見ていた。

気乗りしない結婚も、純責が言うようにしてしまえば大したこと



はないのだろうか。

このダイヤモンドを送れば真意に触れずに全てはその光に騙されて、事が上手く運ぶ気がしていた。

幸江との結婚で得られるものは氷室には地位を約束された大きなものであり、それを手にしてしまえば、あとは適当に結婚生活ができるのかもしれない。

幸江が作るものを食べ、身の回りの世話もしてもらえる。

そして性欲を満たすだけのセックスもできて、そのうち子供ができたならばそれはそれなりに賑やかとなっていく。

自分は仕事さえしっかりとして収入を得れば、家庭の事は幸江がきつちりとやってくれそうな気がした。

幸江は見かけは悪くないし、大人しいときている。

自分の意のままに操れて、後ろからついてくるタイプであり、それは尚更氷室には都合が良いと思える要素だった。

欲しいものを手にして、それだけの妻が漏れなく付いてくるのなら上等というものだ。

ジュエリーショップのダイヤモンドを見つめながら、結婚とはそういうもののような気がしていた。

しかしそこに幸せを味わうという自分の感情は何一つ含まれていないことを氷室は見逃していた。

「そろそろ俺も潮時か」

氷室の足は自然とレールを引いた道の上に乗ろうとしていた。

やはり次の日は来てまた日は昇る。

毎朝が来る度に氷室は憂鬱な思いを抱いて起き上がる。

いい加減そういうのも飽きてきてしまった。

誰かが後押しを強くすれば、氷室は本気で幸江にプロポーズしようなどころまで来ているようだった。

そしてなゆみがアメリカに行つてから三週間とちよつと過ぎた頃、氷室が仕事から帰つてポストを覗くとそこになゆみからエアメールが届いているのを見つけた。

それを手にしてすぐに読むが、氷室はその内容に頭を碎かれるように打撃を受けてしまう。

なゆみは氷室と違って毎日を楽しんでた。

氷室が苦しんでいるのも知らず、なゆみは日本の暮らしを忘れるほどにアメリカで元気に飛び跳ねている。

全く住む世界が違つてしまった。

氷室は忘却のごとく、過去の人物にされたような寂しさを感じ、益々心を痛めてしまう。

氷室はその絵葉書きを何度も読んでいた。

Dear 氷室さん、お元気ですか。

私は、元気で頑張ってます。

待つてましたというくらい、ここについてからはじけまくりです。つい羽目を外しがちですが、それだけ毎日楽しいってことです。

ほんと最高！

停留場でバスを待つたりしてるとすぐに声を掛けられて毎日生の英語も学べます。

また電話番号とかも手渡されたり、時々モテたりもしてるんですよ（笑）

すけべな人にはもちろん気をつけてますので安心して下さい。

寝るのも惜しいくらい、本当に楽しい日々です。氷室さんも夢を

諦めないで下さいね。

斉藤

「ふざけやがって、なんだよこの葉書きは。俺の気持ちも知らないで。なんか腹が立ってきた。しかし、夢を諦めないで下さいか。俺の夢って一体なんなんだろうな」

氷室はその絵葉書をじっーと眺めて、ふっと息を漏らした。

これからどうすればいいのか、考えている。

こうなってしまった以上何をすべきか、優先することはなんなのか、葉書きを穴が開くほど見つめながら氷室は考えていた。

そして目覚めたように決意を突然決めて、幸江に勢いつけて電話した。

「幸江さん、今から会えませんか。大事な話をしたいんです」

氷室はぐつと腹に力を入れた。

その夜、幸江を名の知れたホテルのロビーに呼び寄せた。

氷室が着いたとき、すでに幸江は待っていた。

「すみません、お待たせして」

氷室は真剣な表情を幸江に向けた。

ホテルの吹き抜けのゆったりとした空間を楽しめるようにと作られたカフェエリアで、二人はコーヒーを囲んでお互いを見詰め合った。

氷室がどのように話そうか、下を向いては言うタイミングを見計らっている。

幸江は何も言わずにずっと氷室の出方を待っていた。  
氷室は覚悟を決めた。

「幸江さん！」

背筋を伸ばして、彼女の名前を呼び、真面目な顔つきで一語一語誠実さを込めて幸江に話した。

幸江は落ち着きを払い、氷室の言葉に耳を傾け、氷室が話し終わるまで聞いていた。

少し間を空けた後、その言葉をいつ言われても準備ができていたように静かに「はい。わかりました」と呟いた。

そして同意した表情を氷室に返して優しく微笑を向けた。

氷室の言葉を素直に聞きいれ受け取った。

幸江は自分の言葉少なく、ただ自分の気持ちを表すように背筋を伸ばして、しっかりと氷室を見つめていた。

氷室の方がなんだか面映く下を向く。

「幸江さん、今度幸江さんのご両親にもきつちりとご挨拶に伺います。私の口から報告させて頂きます」

「はい」

幸江は氷室に全てを任した。

氷室も緊張で顔が強張っていたが、少しほっとした表情になって「ありがとう」と幸江に伝える。

これが自分の決めたことだと納得して、氷室はカップを手にしてコーヒーをゆっくりと飲みだした。

幸江も合わせるようにコーヒーを飲み、そして二人は談笑をして和やかな雰囲気になっていた。

幸江もまだ実感がわかないままだったが、氷室から目を離そうとしなかった。

じつくりと見据えて、凜としていた。

氷室は、幸江とこんな風に話したことがなかったと、幸江の真の部分をも初めて見たように思えた。

そのときの氷室の目には幸江はすっかりとした聡明な女性として映っていた。

氷室も何もかも受け入れた。

それらは自分が自ら判断して決めてしまったこと。

これからは後には引けない。

もう全てを忘れて、この先のことに集中する。

これから始まることだけに。

氷室の決意は固かった。

そして仕事場でも、氷室はけじめをつける。

「コトヤン、今なんていったんだい」

氷室は純貴に辞表を渡した。

「俺、今月一杯で仕事辞めさせてもらっよ」

氷室は純貴に説明する。

自分の決意。

それに向かって自分が進んでいること。

全て手はずが整ってこれから実行すること。

洗いざらい話していた。

「そっか、やっと覚悟を決めたのか。それじゃ笑顔で見送るしかないじゃないか。まあ頑張れよ」

「うん、今まで本当にありがとうな。お前のお陰で色々助かったよ」

「何を言ってるんだ。コトヤンの幸せ願ってるよ。結婚式には絶対呼んでくれよ」

「まだそれについての具体的なことは何も決まっていけないけど、でもそのときは是非来てくれ」

二人は笑顔を交し合った。

「ところで純貴、お前もそろそろ落ち着いた方がいいんじゃないか。いつか取り返しの付かないことになるぞ」

「実はなもうすでになってたりするんだよ。今、妻と子供は実家に帰ってるんだ」

「おいっ、どうすんだよ」

「謝りにいくしかないじゃないか。許してもらえるかわからないけど。俺が言えた義理じゃないが、コトヤンはいい家庭作ってくれよ。やはりなんやかんやといつても結婚したらやっぱり女房には一番の情が湧くぞ」

純貴の言葉は他人事のように軽々しく聞こえたが、彼が不意に目を伏せたとき、思いつめたやつれた部分が表れた。

口では軽く言っても、本心は真摯に受け止めて相当神経が磨り減ってるのかもしれないと氷室は察知した。

何も言わずに純貴の肩に手を置くと、純貴は呆けた笑みを浮かべる。

それが反面教師のように見え、自分はそんなことにはならないと氷室もまた哀れみの笑みを返した。

## 8 (後書き)

次で最終話となります。

一方なゆみは、アメリカの大地に根を下ろすような勢いで、憧れの異文化に順応していた。

場所や習慣が変わると、過去など振り返ってる暇はないように、常に突き進んでいる。

なゆみの気持ちに合わせるかのように、南カリフォルニアは11月に入っても、その太陽の眩しさは衰えることはなく、からっとした清しい青空が広がる。

青い空を見ていると気分も晴れてくるように気持ちがいい。

毎日がウキウキするほど楽しくて、力が漲っては出会う全ての人と楽しくおしゃべりをする。

そのため必然的になゆみの周りはどこに行っても賑やかになり、沢山の色々な国の友達にも恵まれた。

大学のキャンパスはただ広いというより、一つの街を形成しているくらいの大きさで、至る所に様々な生徒が散らばっていた。

その中に紛れていると、自分も勉強しているんだと気分が高揚し、この場所にいるだけで嬉しくなっていた。

目が合えば、見知らぬ人とでもハイと声を掛け合うことも、なゆみにはたまらなく気分がいい。

これがアメリカなんだと、満足していたのだが、ふと寄り添っている恋人達を見てしまうと、なんだか寂しい気持ちが表示れるときがあった。

そういうときはここに氷室がいたらどんなに楽しいだろうとつい思ってしまう。



ジンジャと別れて、それから気がついたのは、自分が心底氷室に心を奪われているということだった。

困ったときに必ず手を差し伸べてくれた、懐の大きな存在。自分がふらふらしていると、必ず大きな手でしっかりと支えてくれた。

それが安心感が芽生えて心地よく、そのまま甘えてしまいたいと心とろけてしまう。

いつも守ってくれて、それは騎士のようで、遅しくかつこい。氷室の存在の大きさを離れてから心に沁み入るように感じていた。

しかし、もう別々の道を歩いてしまった。

氷室もきつと幸江と結婚をすることだろう。

なゆみは決して戻ることのない日々を振り返らないように、カリフォルニアの太陽を体一杯に受けた。

「頑張らなくっちゃ」

青い空に手を思いつきり掲げて体を伸ばしていた。

積極的ななゆみはここでも物怖じしない。

バイタリテイ溢れる行動力で、思うように突き進んでいた。

だが、それが必ずしもいいことばかりではなく、時々厄介ことも運んでできてしまう。

なゆみは疑うことなく、誰にでも気軽にしゃべってしまうので、変な奴が付きまとうという問題も引き寄せていた。

それでも対処の仕方を知らずに、ここでは英語の勉強だといいうに考えるために、つい相手してしまうという危機感のなさ。

気がついたときは手遅れだった。

その日の授業が終わった後、テーブルと椅子が沢山置かれた生徒達の憩いの空間とでもいうべきパーティオと呼ばれる建物の間に位置する中庭で、なゆみは友達と適当に会話をして楽しんでた。

いろんな国の人が溢れては、国籍関係なく皆気軽に話を交わしている。

教科書を片手に宿題を一緒にするもの、冗談を交わして笑いあっているもの、まだ英語に慣れてないものはたどどしく懸命に会話を進めている姿も見受けられた。

習慣や文化は違うが、目的は英語を学ぶというだけで、親近感を抱いては、国を超えて皆このひと時を大いにエンジョイしていた。

なゆみもその中に混じって大声で笑っている。

しかしそこにアイツが来てしまった。

一度バス停で声を掛けられて、喋っただけでもう友達気取りをされて、それから何度も顔を合わす羽目になった人物。

別の大学の生徒なのに、なゆみが通う大学へまでも現れるようになってしまった。

見かけはもっさりとして、日本でいうとオタクのように何かに拘っている風貌。

決してかっこいいとはお世辞にも言えない白人だった。

アメリカで全く地元の女性に相手にされてないのか、なゆみが屈託のない笑顔を見せたばかりに、懐いてしまった。

なゆみの影響で日本人女性にすっかり興味をもってしまって、日本人女性ばかりに声をかけるものだから、ここのキャンパスでも気持ち悪いと敬遠されて要注意人物と皆が噂しあう。

皆は露骨に嫌な顔をするために、そいつはそれ以上近寄らないが、なゆみの場合だけは違った。

一番仲のいい友達だと勘違いしている。

「なゆみ、ほらまた来たよアイツ」

仲良くなった日本人の友達、聡子が知らせる。

「あつ、ほんとだ。マークだ。聡子、どうしよう」

「なゆみがはつきり嫌だつて意思表示しないからだよ」

自分は巻き込まれたくない、マークが近づくと聡子はすっくと逃げた。

しかしなゆみは逃げられないで、その場に立ち竦む。

「ハイイ、ナユミ」

マークが笑みを添えてなゆみの側にやってきた。

「（マーク、ここで何してるの？）」

「（なゆみに会いに来た）」

「（でもここはマークの学校じゃないでしょ）」

「（君に会いに来ちゃだめなのかい？ 僕達は友達だろ？）」

ストレートにイエス、ノーの質問をされると、ノーとはなゆみは言えなかった。

またずるずると言えずに適当に相手することになりそうだった。

そしてどンドン、深みにはまって行く。

なゆみはこんなとき氷室がいてくれたらと強く願ってしまった。

そしたら氷室の背中後ろに隠れて、守ってもらえるのにと想像する。

何かあるとどうしても氷室を思い出さずにはいられない。

なゆみはやっぱりここでも自分で解決しようと、無理をして頑張ろうとする。

またこの日も英語を話すためだとマークと付き合う覚悟を決めて、我慢を決め込んだ。

すると視界が大きな塊に急に遮られ、まるで目の前に熊が立っているように思えた。

その背中が大きく、どこかで見たような見覚えがあった。

「（申し訳ないが、君、なゆみに付きまとわないでくれるか）」  
聞き覚えのある声が耳に入る。

（この人誰？）

なゆみはそつと回り込んで前の人物を見た。そして息が止まるほど驚いた。

「ひ、ひ、ひ、ひ……」

「おい、俺はヒヒか」

「氷室さん！　なんで、どうして、ここに居るの？」

「居ちや悪いか」

「そ、そんな、だってここカリフォルニアだよ」

「だから、それがどうした？」

なゆみはもう何がなんだか分からず、ただ取りとめもなく涙が零れ落ちた。

そしてなりふり構わず、沢山の人が居るのも忘れて氷室に無我夢中で抱きついた。

「おいおい、まあ嬉しいけどな」

氷室も力を込めて抱きしめ返す。

ずっとそうしたかった思いが凝縮されて、しっかりとなゆみを自分の腕の中に深く包み込んでいた。

もちろん氷室も満面の笑みを浮かべている。

ハートが一杯飛び交うような甘い空間が出来上がり、そこだけほんわかとした優しい色となって、二人は誰の目からも恋人同士に見

えていた。

それに当てられたのかマークは気まずい思いを抱いて自然にどこかへと消えていた。

なゆみはしっかりと抱きしめて満足した後、顔を上げた。

氷室が優しく微笑んで、なゆみを澄んだ黒い瞳で愛しく見つめて  
いる。

「嘘みたい。氷室さんがここにいるなんて」

「バカヤロウ、あんな葉書き送られたら、黙っていられるか。何がモテて電話番号渡されただ。またこうやってトラブルに巻き込まれやがって」

「氷室さん……」

「それになんだあの隠れたメッセージは。俺にここに来いとお前が誘ったんだろっが」

氷室はなゆみから貰った絵葉書を取り出して見せた。

「俺にはすぐわかったよ。ほらこここの部分」

葉書きにかかれたメッセージの最初の文字だけ縦に読むと『私待つ  
停ます寝』となりすなわち、『私待っていますね』というメッセ  
ージが浮かび上がってきた。

「あっ、バレた？」

「何がバレただ」

氷室はなゆみの頭をこっぴいていた。

二人は暫く見詰め合い、自分達の世界の中で思いを確かめ合っ  
ていた。

氷室はなゆみからのメッセージの意味を受け取ると、すぐに幸江  
に電話して自分には思い人が居ることを正直に話した。

幸江は以前から薄々感じていたために、取り乱すことなくそれを  
素直に受け止めた。

氷室に好きな人が居るならば仕方ないことであり、そしてそんな他の女を思っているような男など自分の方から断りたくなっていた。

そこまでして氷室と結婚する意味がないと、幸江もプライドというものがあつた。

落ち着きを払い、自分の方が立場が上だということを見せ付けるためにも、氷室の断りにも動じずに威厳を持って接していた。

氷室はその後で、幸江の両親に謝りに行き、全てのけじめをつけていた。

自分の父親のお世話になつた人々だから邪険にはできないでいた。

父親に叱られるかと思つたが、意外とあっさりと「そっか、残念だつた」としか返つてこず、まずは一安心だつた。

その後に金を返せと催促されたが、それについてはもう少し待つてくれとはぐらかす。

そのお金があつたから、氷室はこうしてアメリカに来ることができたのだつた。

帰つたらどやされるだろうが、なゆみと会うことと引き換えても怒られるくらいなんともなかつた。

その次に氷室は純責に何もかも話し、仕事も一から出直すつもりだと伝え理解を得た。

なゆみとの将来をしっかりと考えたい。

とにかくじつとしているよりはなゆみに直接会つて話をしたい。

いずれは結婚のことも視野にいれて、なゆみを自分のものにする決意も固く、それだけで葉書きに書かれた住所を頼りに本当にやってきてしまつた。

自分でも無謀だと分かつていても、もう諦めたくはなかつた。

どんなときでも夢を持ち続けてそれに向かつて掴み取りたいと、

なゆみの葉書きで再び情熱が湧き起こった。

氷室には常にそんな気持ちにさせてくれるなゆみが必要だった。年なんて関係ない。とにかく行動あるのみ。

氷室は自分の心のままにここまでやってきてしまったのだった。

周りがやけにうるさく何か言っている。皆ノリで冷やかしていた。なゆみは開き直って自慢するように、氷室に更にくっついた。

カリフォルニアの青い空の下、取り囲む陽気な人々、そして側に愛する人。

なゆみからは幸せ一杯の笑顔がこぼれる。

氷室は、それをすくうようにそっとなゆみの頬に触れた。

冷やかしにもめげずに二人の世界を作ると周りは好きにしろと次第に興味をなくしていった。

静かになったところで二人もようやく落ち着きだした。

そこでなゆみは氷室のあの大きな手をそっと繋ぐと、氷室を引っ張る。

そして二人だけになりたいと、キャンパス内を一緒に歩きだした。

芝生が広がった学生達が集う広場に来たとき、なゆみと氷室も木陰の中に入って腰を下ろして寄り添った。

「ここがよく分かったね」

「斉藤の滞在している家に行ったら、家の人がこの学校のことを教えてくれたよ。そして来てみたら、変な男と一緒にいて、なんか困ってたし、またかって本気でびっくりした。ほんとにふらふらしてるな」

「ふらふらしてるつもりはないんだけど、なんかいつも変なのを引き寄せちゃう」

「そしたら俺もその変なものってことなのか」

「うん。そうなのかな」

「おい、調子に乗るな」

なゆみは氷室に怒られると、それが氷室らしいと舌を出しておどけて笑っていた。

氷室はおもむろにズボンのポケットからキティちゃんのマスコットを取り出した。

「あっ、それは」

「そうだお前が置いていったものだ。いいか、これからお前が変なことをする度にコイツを叩いてやる。こんな風にな」

氷室は指でキティをはじく。キティは何も言わずゆらゆらと振り子のように揺れていた。

なゆみは唾然とそれを見ていた。

「いいか、コイツは人質だ。お前がちゃんとしなければ、コイツは痛い思いをするんだぞ」

「やだ氷室さん。それって脅し？」

「どうなんだ。キティちゃんが俺にいじめられてそれでいいのか？」

「もちろんヤダ」

しかしなゆみはプーっと噴出していた。

「だったら必ず俺のところに戻って来い。戻ってこなかったらコイツがどうなっても知らないからな」

なゆみは我慢できずにお腹を抱えて笑い出した。

「何がおかしい」

「だって、そんな子供じみたことを真顔で言うんだもん」

「俺は本気だぞ」

「氷室さん、その子大切にしておいて下さいね」

「ああ、もちろんだ」

キティちゃんはなゆみの目の前でゆらゆら揺れていた。そしてなゆみはそっとキティにキスをする。



「今私の気持ちをその子に預けました。だから氷室さんも私の気持ち大切に持っていて下さい」

「分かった。それじゃ俺の気持ちも今くれてやる」

「えっ？」

氷室はなゆみに近づき、唇を優しく重ねた。なゆみは静かに目を閉じた。

氷室の唇が柔らかくてなゆみはつい自分の唇で氷室の下唇を挟んでしまう。

「おいつ、大胆だな」

「だって大好きなんだもん。氷室さんが」

なゆみは氷室の腕を両手で抱きかかえるように組んでぴったりと体を密着させていた。

なゆみが積極的に思いをぶつけてくるのはカリフォルニアの気候のせいかもしれないと、氷室は青い空を眩しそうに目を細めて眺めた。

確かに美しい真つ青な空を眺めていると心を開放させるくらいの力を感じる。

風も一緒に受けて気持ちがいいと自然と顔も綻んだ。

目の前では自由に学生達が各々の時間を過ごしている。

フリスビーをする者、寝転がってる者、本を読んでいる者、そして氷室やなゆみたちのように恋人同士がいちゃついてキスをしている者、誰も他人の行動など気に留めず、今ある人生のひと時を楽しんでいるように見えた。

氷室はつぶやく。

「ハッピーエバーアフター」

「うん、いつまでも幸せにすることだよ。おとぎ話のハッピーエンドの決まり文句。めでたしめでたし」

「ああ、そうだな、なゆみ」

氷室はいつの間にか「なゆみ」と呼んでいた。

そして彼女の頬を大きな手で包み込み、おとぎ話の最後のシーンにふさわしいように王子様になりきってもう一度なゆみに甘い濃厚なキスをしていた。

H a p p i l y   E v e r   A f t e r  
T h e   E n d

## 9 (後書き)

最後までお読み頂きましてありがとうございます。ありがとうございました。  
楽しく読んで頂けたら幸いです。

この後の続編もあるのですが

それは自サイトに置いてあります。

続編はここでは転載しませんので

興味のある方はそちらにお越し下さいませ。

(自サイトのアドレスは作者ページにあります)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2220x/>

---

テンポラリーラブ

2011年11月7日23時55分発行